



学位論文題目 Title	日本における中国新時期小説の翻訳とその展開 —形づくられた中国の文化的イメージ—
氏名 Author	孫, 若聖
専攻分野 Degree	博士 (学術)
学位授与の日付 Date of Degree	2016-03-25
公開日 Date of Publication	2018-03-25
資源タイプ Resource Type	Thesis or Dissertation / 学位論文
報告番号 Report Number	甲第6555号
権利 Rights	
JaLDOI	
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/D1006555

※当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

Create Date: 2018-06-18

博士論文

日本における中国新時期小説の翻訳とその展開
—形づくられた中国の文化的イメージ—

平成 28 年 1 月 7 日

神戸大学大学院国際文化学研究科

孫若聖

博士論文

日本における中国新時期小説の翻訳とその展開

—形づくられた中国の文化的イメージ—

審査委員：藤濤文子 教授

湯淺英男 教授

濱田麻矢 准教授

平成 28 年 1 月

神戸大学大学院国際文化学研究科

孫若聖

日本における中国新時期小説の翻訳とその展開

—形づくられた中国の文化的イメージ—

謝 辞

本論文の作成にあたり、終始丁寧かつ熱心なご指導をくださった、指導教員・神戸大学国際文化学研究科言語コミュニケーションコース藤濤文子教授に深く感謝の意を申し上げます。多くの貴重なご助言をくださった同コースの先生方に感謝します。また、本研究にご教示を与えてくれた学内外の諸先生方、学友たちに感謝します

留学生活を支えてくれた両親孫傑、鄭芸に深く感謝します。そしていつも暖かく励ましてくれた親友たちにも感謝の意を表します。

凡例

- ①頻出語である起点テキスト (Source-Text) は本論で「ST」、目標テキスト (Target-Text) は本論で「TT」と略した。
- ②本論における外国人の日本語訳名は、著書の日本語訳がある場合はその表記に従い、ない場合は筆者による訳である。また、翻訳研究の研究者名は藤濤 (2013) 『翻訳研究のキーワード』での訳名に従う。
- ③本論における日本語以外のテキストの和訳は、注がない限りすべて筆者による訳である。

論文目録

第1章 序章	8
1.1 問題意識	8
1.2 研究対象	9
1.3 研究目的	13
1.4 研究の枠組みと研究方法	13
1.5 論文構成と各章概要	16
第2章 新時期小説の概観および海外における受容に関する先行研究	19
2.1 新時期小説の概念規定及び主な思潮	19
2.1.1 「新時期」の由来	19
2.1.2 新時期文学の時期区分	20
2.1.3 新時期小説の主な思潮	22
2.2 新時期小説の海外における受容状況	25
第3章 日本における新時期文学の翻訳の全体像と翻訳によって構築された中国の文化的イメージの3つの次元	28
3.1 新時期小説の日本における翻訳状況	28
3.2 黎明期における新時期小説の翻訳状況	28
3.2.1 1986年までの訳本の数量と出版形態	29
3.2.2 1986年までの新時期小説の訳者状況	37
3.3 1987年－1995年の新時期小説翻訳状況	43
3.3.1 新時期小説翻訳の黄金期	43
3.3.2 黄金期の出現の理由	49
3.4 新時期小説翻訳により構築した中国の文化的イメージの3つの次元	51
3.4.1 日常生活における中国民衆の精神状態	51

3.4.2	中国民衆と共産党イデオロギーとの関係	52
3.4.3	作品自体の文学的価値	53
3.5	まとめ	55
第4章 方法としての中国文学—新時期小説翻訳誌『季刊 中国現代小説』		57
4.1	『季刊』に関する情報	57
4.2	『季刊』創刊の目的と竹内好との関係	59
4.2.1	読書会の成立と竹内好との関係	61
4.2.2	同人の中国文学観と竹内好との関係	63
4.3	「方法としての中国文学」と中国の文化的イメージとの関係	64
4.3.1	文学を政治イデオロギー批判の道具にしない	65
4.3.2	小説を通じて中国人の生活と思想を知らせる	70
4.3.3	中国人の精神力を伝える	73
4.4	『季刊』が長期にわたり維持できた理由	75
4.4.1	文字処理技術の革新と翻訳事業の発展	75
4.4.2	出版社の協力	78
4.4.3	中国作家の著作権への対応	80
4.5	まとめ	81
第5章 1つの作品における文学的価値の二重性—井口晃による『赤い高粱一族』の翻訳と批評		84
5.1	莫言文学の日本における翻訳状況	85
5.2	井口の批評風格及び中国文学観	89
5.2.1	常套的な枠組みを超えることを重視する中国文学観	89
5.2.2	直接性がある批評風格	91
5.3	井口の莫言認識の変化	92

5.4	井口晃の『赤い高粱一族』批評に対する分析	94
5.4.1	日本社会の主流的詩学に離反するハンセン病者差別	94
5.4.2	井口の理想的文学像に反する「下品な表現」と「たわいない民族意識」	96
5.4.3	井口批評に対する日中両国研究界の態度	100
5.4.4	「ハンセン病者差別」に対する批評の問題点	104
5.4.4.1	文学作品の創作に対する2重の制限	104
5.4.4.2	無意識的に「病気の社会的意味」を運用	106
5.5	ST中心の翻訳方式	107
5.5.1	STにおける異質性の保持	107
5.5.1.1	特定の意味がある語彙または短文の異質性	107
5.5.1.2	日本社会の主流的詩学に合致しない部分の異質性	109
5.5.2	流暢な文体	110
5.6	井口の翻訳に対する読者の反応	113
5.6.1	読者の反応の測定方法	113
5.6.2	『赤い高粱』の読者反応	114
5.6.3	キーワード一覧表からみる読者の感想	115
5.6.4	コメントからみる読者の訳文及び解説に対する評価	120
5.7	まとめ	124
第6章 藤井省三の莫言論と大江健三郎—1990年代における藤井による莫言像の構築		
6.1	1989年の政治事件による藤井の中国文学研究上の転換	126
6.2	「文学者」、「農民」、「受難者」、「抵抗者」——藤井の作り上げた四位一体の莫言像	131
6.2.1	主要な構成要素: 優秀な作家	132
6.2.2	副構成要素①: 農民	134
6.2.3	副構成要素②: 受難者	135

6.2.4	副構成要素③: 抵抗者	137
6.2.5	強調された「受難」と「抵抗」	139
6.3	藤井の作り上げた莫言像の大江健三郎による受容	142
6.3.1	大江の莫言像に対する受け止め	143
6.3.2	大江の莫言文学に対する評価	145
6.3.3	莫言の政治姿勢への大江の関心	146
6.3.4	国際文学圏における大江の莫言推薦	150
6.4	まとめ	151
第7章	日本で編纂された中国文学史にみる新時期小説	152
7.1	新時期小説の記述を含む文学史の概観	152
7.2	中国文学通史における新時期小説の語り方	156
7.3	20世紀中国文学史における新時期小説の語り方	157
7.3.1	20世紀中国文学とは何か	157
7.3.2	新時期小説の材料と説明の対照	160
7.4	同時代文学における新時期小説の語り方	171
7.5	文学史で言及される新時期小説の翻訳状況	174
7.6	まとめ	177
第8章	おわりに	179
	参考文献	183
付録	日本における中国新時期小説のTTリスト	193

第1章 序章

1.1 問題意識

馬場は『戦後日本人の中国像』（2010）と『現代日本人の中国像』（2014）において、戦後の日本民衆の目に映る中国像は主に日本の中国研究者たちによって作り上げられたものであると主張した。馬場の著作で定義される中国研究者は、加々美光行、中嶋嶺雄、矢吹晋など中国の政治・経済・少数民族生存状況に関心をもつ地域研究者が中心であることがみてとれる（2014: 59、98 を参照）。

日中国交正常化以後、「記事の論調を見ても、中国の現状に対する批判的トーンの記事が非常に目つき、同情・共感・支持といった論調は著しく減退していく」。つまり日本の地域研究者たちは「中国の現状と前途に対し悲観的な展望をしていたと言えよう」（ibid: 58-88）。対して、日本民衆の対中友好の姿勢は少なくとも1989年までは大きな衝撃を受けなかった。日本内閣府による「外交に関する世論調査」では、1988年に「中国に親しみをもつ」と答えた回答者は70%を占めた。このデータは当時一般の日本人の対中親近感が非常に高かったことの証明になるだろう。

日中国交正常化から天安門事件を経て天皇訪中に至るまでの日本人の対中姿勢について、地域研究者が中国に冷ややかな態度を見せる一方、庶民は中国に親近感を持つ、という構造的な乖離が何故生じたのかが本研究の問題意識の始点となる。

馬場は中国研究者を中国経済・政治・軍事を研究する地域研究者として狭く扱った¹。彼自身も「国交正常化以後中国論は中国研究者（さらに限定すれば）の中国を対象とする地域研究者の専有物」になったという憂慮を示した（ibid: 97-99）。しかしながら、園田（2014: 7）が指摘したように、「日本の対中イメージは、旅行・ビジネスなどの移動をとまなう人的接触や、相手国からやってくるモノや情報・日用品や（映画やアニメ、文学、歌などの）

¹ 馬場の研究は雑誌に掲載された、研究者の中国論に対する質的研究であるゆえ、もし中国文芸学者の論説も加えれば、雑誌の閲覧量と分析の作業量がきわめて膨大になってしまう。これはおそらく馬場が地域研究者のみを対象とした理由であろう。

文化コンテンツ、食品やパンダなど、一によっても影響を受ける」。つまり日本人の対中イメージは、地域研究者によるばかりではなく、物的流通・人的移動・情報交流によっても重層的なものに作り上げられることがわかる。このうち、「由来一国の文学はその国民性情の反映である」（水野 1932: 2）がゆえに、中国新時期小説の翻訳と受容はそのイメージの一翼を担うであろう。

Venuti(1998: 67-68)は文学翻訳と起点社会の文化的アイデンティティ (cultural identities) との関係を決のように論じた。「翻訳は外国文化の確定的なステレオタイプを創造すると同時に、目標文化社会の問題に奉仕しそうな価値観・議論・対立を除外する。このプロセスにおいて翻訳は、特定の民族、人種、国家に対して尊重または不名誉を結びつけ、異文化に対して敬意を表したり、または自民族中心主義、人種差別、愛国主義による嫌悪を表したりする。長期にわたって翻訳は外交の文化的基礎を作ることを通して、国家間の同盟・対抗・ヘゲモニーなどの地縁政治関係に影響を与える」。ヴェヌーティはここで文化的アイデンティティの定義を説明していないが、以上の指摘からみて、受容側社会における起点社会の文化的イメージとして受け止めることができるだろう。

ヴェヌーティの文学翻訳と起点社会の文化的イメージとの関係に関する論述は、日中両国の間にも適用できると考えられる。中国に興味をもつ日本人は地域研究者の中国論に関心をもつと同時に、文学翻訳者たちの作り上げた中国の文化的イメージにも注目することになるだろう。1980年代の日本人の中国観は政治・経済面からの影響を受けると同時に、文化面からの影響も受けていると考えられる。本研究では、日本で中国新時期小説がどのように翻訳され、紹介されたのかを調査し、これらの新時期小説の翻訳がどのような中国の文化的イメージを構築したのかについて明らかにしていきたい。

1.2 研究対象

本研究は翻訳の受容によって構築された中国の文化的イメージを考察するため、日本に

における中国新時期小説の翻訳を研究対象とする。1976年文革終結後、壊滅に瀕した中国の同時代文学は発展期を迎えた。査（2006: 3）によると、「20世紀80年代は当代中国の歴史における短くて脆弱でありながら、かなり異質的な、心を打たれるロマンチックな時代である」。「文革の旧時期に告別し、新時期を迎えよう」という歴史観からの影響を受け、中国では1976年から勃興した同時代文学を「新時期文学」と称した。本研究では小説を中心に扱うため、「新時期小説」という呼び方を使用する²。「五・四」時期につき、20世紀中国文学の繁栄のもう1つの頂点に至った80年代に、新時期小説が数多く産出された。調べたところ、これらの小説のうち少なくとも659篇以上は日本人訳者によって日本語に翻訳され、中国の文化的イメージを構築した。

新時期小説の翻訳を研究対象にする理由は以下3つある。

第一の理由は新時期小説の現代中国を知るための社会資料性である。日本有数の新時期小説研究者近藤（1997: 8）は次のように述べた。

1986年の秋、上海で中国当代文学国際討論会という催しが開かれました。…（中略）…主催者であり代表的な作家でもある王蒙が、ある外国人の発言者に向かって、こういう質問をしました。

「あなたがたは中国の小説を文学として読んでいるのですか。それとも社会学の資料として読んでいるのですか」

近藤はこの問題に真正面から回答しなかったが、専門的文学教育を受けた日本人学者にとって、初期の新時期小説に文学性がどれくらい含まれているかは疑わしいだろう。新時期小説は文学が死滅した文革の後に発生し、中国現代文学のリアリズム伝統への復帰を企

² ただし、現在の中国文学研究界では「新時期文学」のかわりに「80年代文学」を使用しその時期の文学事象を指す傾向がみられる。両者それぞれの定義と使い分けに関して楊慶祥「如何理解「80年代文学」」程光炜編（2009）『文学史的多重面孔：八十年代文学事件再討論』を参照

みながら、世界文学の主流的な審美概念と創作手法に追いつこうとする、一時期における独特の文学現象の総称である。これらの文学現象は当時中国人の生活と思想に基づいたものであった。特に1985年以前の新时期小説の殆どはリアリズムの創作手法に対する同時代の中国社会の各面に対する描写に基づく作品であるがゆえ、作品にふくまれる社会資料的性格が濃厚である。

松井（1984: 154）によると、中国で「精神汚染」として批判を受けた現代派または現代主義は、実は「欧米に今世紀出現し、すでに今では歴史的な事象と化したさまざまな流派を一括するよう」なものである。つまり当時中国文壇で斬新だと考えられた文学概念は日本の文学者にとってすでにありふれたものになっていた。中国の文学者と文学理念上にこのような巨大な隔たりがある日本人訳者が新时期小説と出会う場合、作品の文学性より社会性あるいは文化人類学的意味での風俗性に関心を持つことが想像できるだろう。このような視点で新时期小説を考察すると、新时期小説に対する批評が中国の社会・政治の文脈から離れなくなり、文学作品を必ず中国社会のどこかの事実と直接に結びつけることになる。中国のイメージは、中国社会の中の様々な事実を重層的に積み重ねて構築されるものである。どの事実を選んで文学を通じて浮き彫りにするか、どの事実を隠蔽するかが、中国の文化的イメージの構築に影響を与えるだろう。また1980年代中期以降、新时期小説には一部の革新的な作品が現れるものの、社会学資料として使える作品はまだ少なくないのである。

第二の理由は、新时期小説の異質性である。1985年以降、一部の新时期小説の創作理念と創作手法が一新した。それらの作品の形式および表現が日本人読者にとって馴染むと期待されたが、作品に根ざした精神的内核は中国各地で長い間受け継がれてきた伝統的文化にあることがうかがえる。それゆえ、それらの作品は日本人読者にとってかなり異質なものである。Berman（1985/ 2000）によると、翻訳は「異質に対する追求」(The Trails of Foreign) である。「異質」であるからこそ訳者が解釈・説明の空間を持つことができ、その説明の仕

方によって、読者が様々な中国の文化的イメージを連想することになる。極端な場合、同じ文学作品の異なる説明によって、読者は正反対のイメージを想像する場合があります。新時期小説は、こうした「異質」の素材を日本社会に提供できる。このような素材を扱う場合、日本の記者たちが「異質」のどの方面を追求したのか、また「異質」をどのように読者に説明したのかは、彼らの構築しようとする中国の文化的イメージと深く関わらう。

第三の理由は、新時期小説の存在時期と翻訳時期の同時代性である。新時期小説の存在時期は主に 1976 年から 1990 年までのため、ちょうど 1980 年代の日本人の中国認識にとって 1 つの新しい影響要素になる。Vogel & Yuan & Tanaka (2002) によると、1980 年代の日中両国間関係は「黄金の時代」、「蜜月期」であった。その時期に日中両国の資本/物/人的移動が次第に活発化するにつれて、日本国内では中国の新時期文学作品に興味を持つ読者群が存在したと推定できる。出版社もある程度、中国文学の翻訳出版に期待を寄せ、この期間に、新時期小説が大量に翻訳された。一方、1989 年に北京で政治事件が発生した後、日本政府は公式の場で控えめな態度を示したが、民間の対中友好の基礎は大幅に崩れてしまった。その後 1992 年に天皇皇后の訪中によってやや回復してきた。新時期小説の翻訳と受容は主に 1980 年代から 1990 年代中前期までの日中両国関係の変動期で行われた。

このように、新時期小説には「社会資料性」、「異質性」、「同時代性」などの特質が備わっており、その翻訳が日本における中国の文化的イメージの構築に重要な役割を果たしたであろうことが予想できるため、本研究では研究対象を新時期小説に設定する。

また、本研究でいう新時期小説の目標テキスト TT とは、日本人によって翻訳され、日本の出版社または組織によって公開刊行され、ISBN コード乃至 ISSN コードを有する、という 3 つの条件をいずれも満たすものに限定する。それゆえ、中国からの輸出 TT (例えば中華人民共和国政府傘下の唯一の紙媒体日本語雑誌『人民中国』) または日本で未公開出版の雑誌 (例えば大阪外国語大学を拠点とする『啞啞』、民間人の同人誌『螺旋』など) に掲載

された新時期小説の TT は分析対象から除外する。

1.3 研究目的

本研究は日本での新時期小説の翻訳状況を明らかにすると同時に、翻訳が構築した中国の文化的イメージを考察する翻訳研究である。本研究では以下 3 つの研究目的を設定する。

第 1 の目的は、新時期小説の TT を整理することである。

新時期小説に含まれる中国同時代小説の日本語 TT リストはすでにいくつか存在する。本研究は、これらの先行研究に基づき TT の一覧表を作り上げることにする。新時期小説のうちどのような作品が翻訳されたのか、誰によって翻訳されたのか、どのような形態で出版されたのかを解明する。

第 2 の目的は、日本における新時期小説の翻訳はどのような中国の文化的イメージを構築したか、このイメージはどのように構成されているかを解明することである。

第 3 の目的は、具体例を取り上げ、新時期小説の翻訳が中国の文化的イメージを構築したプロセスを明らかにすることである。そして、このような具体例において読者がどのように翻訳の作ったイメージを受け止めたかを明らかにすることである。

1.4 研究の枠組みと研究方法

翻訳による文化的イメージは、単に TT のみで構築されるわけではない。翻訳者による前書きや後書きや研究論文、あるいは文学史など、文学翻訳を取り巻く多くの要素も文化的イメージ構築に関わる。そうした要素との関係を考慮するには、これらを別々の分離した要素の寄せ集めとしてより、ひとつのシステムとして考えたほうが納得しやすいだろう (cf. Even-Zohar 1979: 288)。

翻訳研究においてこうしたシステムの研究パラダイムを提起したのはルフェーブルである。Lefevere (1982 /2000: 235) によると、文学とは「文化や社会環境内にはめ込まれた 1

つのシステムである。これは人為的なシステムであり、客体（テキスト）、そしてテキストを書く人・編集者・流通者・読者から構成されるものである」。そしてこの文学システムは、「常に協賛者（patronage）、詩学、文学作品に使用する言語面」という3つの要素からの影響を受けるものだとされ、さらにこの「協賛者」には、「イデオロギー」、翻訳者の生活を保障する「経済」、そして翻訳者の社会的「地位」という3種類があるとする。

T.Hermans(1985: 10)はルフェーブルのパラダイムの特徴を以下のように評価した。

文学を複雑かつダイナミックなシステムと見なす観点を持つ。理論モデルと実践のケーススタディとの持続的な相互作用があると認める。記述的、TT志向、機能的かつシステムのなアプローチにそって文学翻訳を研究する。規範及び翻訳の産出と受容を制限する要素に興味を持つ。翻訳の受容における翻訳とほかのテキスト形式との関係に興味を持つ。異なる文学での相互行為における翻訳の位置と役割を重視する。

本研究では、このルフェーブルの理論を研究の枠組みとして参照しつつ、新時期文学の翻訳受容状況を「新時期文学の翻訳システム」の形で考える（ただし、システムを強調する場合以外は簡略語で「翻訳」を使用する）。このシステムには主に新時期文学のTT、TTにともなう生産物、それらのTTとTTにともなう生産物の生産者及び関連者という、3つの構成要素からなっていると考える。第一の「TT」とは、テキストそのものであり、STと比較分析する。第二の「TTにともなう生産物」とは、ジュネット(1987/2001:11)のいう「パラテキスト(paratexte)である。パラテキストとは、「戦略的な場、テキストのより正しい受容とより妥当な読みのために大衆に働きかける特権的な場」(ibid:12)であり、「テキストにある種の囲いを、そして時には公式もしくは非公式のある注釈を与える」(1982/1995: 18)ものである。本研究では特に訳者の意図をより反映すると思われる「前書き・後書き」、「傍注・脚注・後注」、「ST及びTTに関する論文・文学批評・文学史（とりわけ訳者が書いたものを重視）」、「訳者へのインタビュー」という、4種類のパラテキストに分析の

力点を置く。第三の「生産者及び関連者」とは、具体的には翻訳者、協賛者、研究者、文学史編纂者など、テキストの生産や流通などを通して、意識的あるいは無意識的に中国の文化的イメージ構築に関与する人々のことである。このうち本研究では訳者を中心に考察する。

新時期文学の翻訳がいかに関文化的イメージを構築するかを解明するための研究方法については、以下の4つの段階を追って行うこととする。

まず、新時期小説翻訳の特徴と傾向を総体的に把握するため、新時期小説の翻訳リストを作成する必要がある。このリストを作成するため、できる限り多くのTTおよびTT情報を収集する。具体的には藤井省三が監修した『中国文学研究文献要覧 近現代文学 1978～2008』（日外アソシエーツ、2010）と日本中国当代文学研究会が編纂した『中国新時期文学邦訳一覧（増補・改訂版）』（2007）、及び他のルート³を参考にしながら、2014年12月までに日本で公開刊行された新時期小説のTTリストを作成する。本研究は、訳本の存在を確認するために、現物が手に入らない訳文については日本国立国会図書館のオンラインサーチ（<http://iss.ndl.go.jp/>）とNII学術情報ナビゲータのうちの「日本の論文をさがす」（<http://ci.nii.ac.jp/>）と「大学図書館の本をさがす」（<http://ci.nii.ac.jp/books/?l=ja>）で検索する。TTリストに含まれる情報は、STとTTの作品タイトル、原作者と訳者、日本における出版社と出版年である。

次に、こうして収集したTTについては、その全訳文テキストを分析対象とすることはできないものの、その前書きや後書きのほぼ全てに目を通して考察対象とする。この作業を通して、日本の翻訳者たちが総体的にどの次元からどういう価値判断で中国の文化的イメージを構築しようとしているかを考察する。

³主に新時期小説の一部のTTを整理する作業を行い、公開するウェブページを参考する。例えば、『季刊 中国現代小説』の全目録：<http://www.mmjp.or.jp/sososha/novels.html>。近藤直子個人の整理成果：<http://www.k2.dion.ne.jp/~kondo-n/siryou1.htm> など

こうしてイメージ構築の全体像を解明した後、新時期文学の翻訳によって中国の文化的イメージがいかに構築されたかを、個別事例を取り上げて詳しく分析する。1つ目のケースでは、最大規模の新時期小説の翻訳雑誌に着目して、訳後記、編集後記、新聞記事などを通してこの雑誌の翻訳目的と目的を達成する方法を調べる。後2つのケースでは、新時期小説の代表的な一作家の単行本を取り上げ、STとTTの対照研究及び論文、訳後記、訳者へのインタビューなどに対する考察を通して、訳者の意図によって同一作家の作家像及びこの作家の作品により構築した中国の文化的イメージの提示方法にどのような差異があるのかを確認する。

最後に、文化的イメージの構築のうえで非常に重要なパラテキストとしての、新時期小説の内容を含む、日本人が編纂した文学史を考察し、編纂者によって新時期小説のどの部分が強調され、どの部分が隠蔽されたかを調べる。そして、そのような強調と隠蔽が文化的イメージの構築にどのような影響を与えるかを調査する。

1.5 論文構成と各章概要

本研究は7章からなる。第1章は本研究の性質・目的・方法に関する説明である。

第2章では新時期小説を1976年ごろから1980年代末（作家によって1990年中段）までの中国大陸での小説の集合名詞と定義したうえで、傷痕文学から新写実主義までの新時期小説におけるそれぞれの思潮の由来と特徴を紹介する。また新時期小説の海外における受容の2冊の先行研究を検討する。先行研究には日本における新時期小説の翻訳状況にさほど注目していないため、本研究は先行研究の補足として行う価値があると確認できる。

続いて第3章では日本における新時期小説の全体的な翻訳状況に対する考察を通じ、日本における新時期小説の翻訳は1970年代末期から1986までの黎明期、1987年から1995年までの黄金期に分けることができると確認した。黎明期には訳本の大部分が短編小説の選集であり、訳者の職業が多種多様であった。対して黄金期には訳本の出版形態が多種多様

になり、訳者の職業が中国文学の専門家に収斂した、という新時期小説の翻訳の傾向と特徴を説明する。また、ほぼ全てのTTの前書きと後書きに目を通して分析することによって、翻訳者が言及する観点を、「日常生活における中国民衆の精神状態」、「中国民衆と共産党イデオロギーとの関係」、「作品自体の文学的価値」という3つの次元に分けてまとめる。翻訳により構成する中国の文化的イメージをこの3つの次元かなら成るものとする。

この3つの次元に基づき、後の3つの章において次元ごとにそれぞれ1つの典型例を取り上げ、翻訳によっていかに中国の文化的イメージが構築されたかを説明する。

「日常生活における中国民衆の精神状態」に関して、第4章では東京都立大学中国文学研究科出身の研究者による中国文学の翻訳専門誌『季刊中国現代小説』の創刊と維持を検討する。竹内好の「方法としてのアジア」という研究思想を受け継ぐ同人たちが、中国同時代文学を資源として日本人の精神生活を豊かにする目的で『季刊』を創刊したことを明らかにする。具体的には、彼らは文学を政治イデオロギー批判の道具にしない、小説を通じて中国人の生活と思想を知らせる、中国人の精神力の伝える、という3つの指導的思想のもとで、新時期小説のTTおよび訳後記を通して中国人の日常生活における知恵、美德、エネルギーなどを伝えようとしたことを示す。

「作品自体の文学的価値」に関して、第5章では井口晃の莫言批評を取り上げる。長期にわたり新時期小説に関心を持ってきた井口は莫言の『紅い高粱一族』の翻訳にあたり、後書きにおいて「障害者差別」、「下品な表現」、「たわいない民族主義」を猛烈に批判した一方、STに秘められた生のエネルギーを日本人読者に伝える「忠実」なTTを産出した形で、文学的価値の二重性を作り出した。

「中国民衆と共産党イデオロギーとの関係」に関して、第6章では藤井省三による莫言の作家像の構築を取り上げる。藤井は、中国の暗部を描写する莫言の一連の小説を翻訳し、莫言作品の文学水準を肯定しながら、「優秀な作家」、「農民」、「受難者」、「抵抗者」という四位一体の莫言像を通して、共産党統治下の一般民衆（農民）および知識人の受難を日本

人読者に伝えている。藤井の作ったこの莫言像は大江健三郎に共感をもって受け入れられ、大江の莫言受容に大いに影響を及ぼすことになった側面にも触れる。

第7章では翻訳文学システムにおける文学史がいかに対象国の文化的イメージの構築に寄与したかを考察する。文学史は特に教材として使用されることが多く、読者に規範としての知識を焼き付けるため、文化的イメージの構築への影響力は大きいと考えられる。新时期小説の内容を含む文学史のうち、前野直彬と研究会は主に文学自体の発展の流れにそって諸文学事象を説明する。藤井は文学史の編纂と彼の中国同時代文学の研究を連動させ、鄭義と莫言の文学史における地位を強調することによって同時代文学史を中国知識人の共産党イデオロギーへの抵抗史としてリライトする。萩野脩二は自分の詩学体験によって、作品中心の文学史を構築する特徴がみられる。このように、構築しようとする文化的イメージに違いがあることを示し、文学史編纂者の関与を浮き彫りにする。

第8章では、本研究の結論と今後の展望を述べる。

第2章 新時期小説の概観および海外における受容に関する先行研究

新時期小説の日本における翻訳状況を考察する前に、まず新時期小説の概念を明確に規定し、主な思潮を紹介しておきたい。そして、新時期小説の海外における受容の先行研究にふれたい。

2.1 新時期小説の概念規定及び主な思潮

新時期小説は、文革終結後の中国大陸での小説の集合名詞として使用される用語であるが、時間的な区分は中国文学研究界で未だ定説に至っていないとは言えない。本研究は新時期小説そのものの概念規定を深く研究するものではない。したがって新時期小説の概念に関して、既存の研究成果を参考にすることに留める。

2.1.1 「新時期」の由来

許(2000: 7)は、中国80年代の知識パラダイムの特徴は中国の諸問題を中国/西側、伝統/現代などの二元対立の枠組みに入れて分析することであると指摘する。「新時期」という名詞の登場もこのような二元対立のパラダイムから生じる。1976年に文革の指導者「四人組」が逮捕され、1978年8月に北京で行われた中国共産党第11次代表大会では文化大革命の終息、つまり「旧時期の終結」が宣言された。文革の嵐に十年間ほど翻弄された当時の人々の強烈な「新時期」に対する渴望と共感に応じて、来るべき80年代は「新時期」として人為的に構築されて、人々に歴史想像の「常識」として受け止められた(賀2010: 14)。社会政治情勢に密接する文学界も、のちに文革以後の文学作品を「新時期文学」と命名した⁴。1979年10月、周揚⁵は全国第四回文芸者代表大会において、『継往开来，繁荣社会主义新时期的文学』(『前人の事業を受け継ぎ、将来の発展に道を開け、社会主义新時期の文学を繁

⁴ 「新時期文学」の初出に関しては岩佐(2005: 34-41)を参照

⁵ 周揚は当時中国作家協会副主席を務めると同時に、中国共産党中央宣伝部副部長でもある。この政治背景に注意しておきたい。

栄させよ』) というテーマの講演を行い、「新時期文学」を中国文学における専門用語として定着させた (洪 2007: 185)。中国の公式の論文データベース CNKI(China National Knowledge Infrastructure)で「新時期文学」をキーワードとして検索すると、1978-2014 年間の学誌で掲載された論文及び修士と博士の学位論文を含める各種研究は 1,000,000 件以上に達している。中国国家図書館の館蔵検索システムで書名に「新時期文学」を含む著書が 600 冊以上あると確認した。新時期文学の終点がいつまでであるかをめぐってまだ様々な議論があるものの、以上のデータからみて新時期文学という用語の中国文学研究界における定着度の高さがうかがえるだろう⁶。本研究での「新時期小説」は、「新時期文学」のうち小説ジャンルの文学作品を指す。

一方、日本の研究者たちは最初から文革の歴史コンテクストに身を置いたことがないため、中国の文学者より「新時期」に内包された進歩的史観を冷静に観察できる。その理由で「新時期文学」という名称を受け入れる学者もいれば、ほかの言い方を使用する学者もいる。前者の例として、「新時期小説」を題名に含む何冊かの研究書が出版された⁷。このうち、辻康悟&吉田富夫 (1987: 1) は「〈新時期文学〉という場合の〈新時期〉とは、1976 年秋の「四人組」逮捕＝文化大革命終息以降を指します… (中略) …中国の文学者たちがかなり早くからある種の期待と抱負をこの表現に託していた」と新時期の中身を説明した。後者の例として、藤井省三は一連の文学史と文学批評の著書で「新時期文学」という用語の使用を回避した。

2.1.2 新時期文学の時期区分

文革終結後の 1976 年から 1979 年までの一部の小説は啓蒙理念や、一般人の生活への関

⁶ ただし、近年来中国文学研究界では「新時期文学」という概念に対する質疑もみられる。例えば許子東 (2011: 227) によると、「1989 年以降、人々は新時期文学がそんなに「新」ではなさそうに気が付き、1949 年以降の文学、特にイデオロギーと文化生産の体制において一貫性が高い。次第に「新時期文学」という概念の文壇・学界での使用率が減少してくる。」

⁷ 中国研究所編(1987)『中国新時期文学の 10 年』、萩野脩二(1995)『中国“新時期文学”論考』などを参照。

心など、新時期小説前期の「人道と啓蒙」という中心的な価値観を含むため、これらの小説（主に「傷痕小説」）が新時期小説の起点であるというのが研究界でのコンセンサスである。新時期小説の終焉に関して、学界では主に2つの説がある。1つは、新時期小説は80年代小説の同義語である。例えば、楊（2009: 4）によると、学术界は80年代の中国大陸における文学を「新時期文学」または「80年代文学」と命名した。多くの文学史著書でこの2つの概念は互いに置き換えができる。賀（2010: 14）も「新時期」と「80年代」は時期範疇からみて相当重なっていると述べた。もう1つの説は、新時期小説は今まで続いているとするものである。例えば陶東風は2008年に『中国新時期文学30年』を編集し、これまでの中国大陸の全ての文学作品、文学現象を新時期文学のカテゴリーに帰結した。この2つの説は新時期小説の終結点に関して異論があるものの、80年代の中国小説は90年代のそれと根本的に異なっているという認識において共通点がある⁸。

文学の発展は確かに連綿として進展しているが、歴史の研究対象としての文学には時期区分が必要であろう。時期の区分は、一時期の文学現象にみられる鮮明かつ重要な特徴によって決められるものである。以上の先行研究をふまえて、筆者は新時期小説の時期範疇は1976年ごろから、90年代以前に規定する。根拠は以下の3点ある。

まず、80年代前半と後半の中国小説が追求した中心的な目標は、それぞれ「啓蒙」と「純文学」(belles-letters)に帰結できる。これに対して、90年代以降、中国における大量消費社会の形成につれて、文学作品の中心的な目標は、いかに読者の注意を引くかということになった。このような文学作品の創作目的の変化によって、80年代の小説とそれ以降の文学作品とでは重要な方面（創作方法、内的価値観）において異なる。まさに岩佐（2005: 258）が指摘したように、90年代以降、文学に対する作家たちの考え方に、何か劇的といってもよい変化が起きたように感じられるのである。

⁸ 『中国新時期文学30年』(pp.1-6)では、80年代を新時期文学の第一段階と呼ぶ。この段階は文学の「エリート化」の時期である。文学の「エリート化」は90年代からのマス文化、消費主義価値観の衝撃で解消した。

次に、中国文学が常に政治状況に密接しているため、中国現代文学を研究する際、重大な政治事件を境界線にして文学史を区分する伝統があるという点である。例えば、中華人民共和国成立から文革までの小説は「17年小説」⁹と呼ぶ。文革中に公開出版された小説は「文革小説」と呼ぶ。このような命名の方式は文革終結後（つまり新時期）から天安門事件までの小説を「新時期小説」と命名することに合理性を与える。

最後に、新時期は現在まで続くと主張する研究書においては、80年代小説とそれ以降の小説の内的な系譜的關係が提示されていないという点である。それどころが、80年代と90年代との文学作品で見られる大きな相違点が強調されている。『中国新時期文学 30年』によると、80年代文学はエリート文学で、文学の自主性を追求して、文学の政治、経済上の功利性を排斥する（p.6）。90年代に入ると、文学は脱エリート化して、純文学は周辺化されて、文学性と商業が絡み合ってきた（pp.14-16）。

ただし、出版の周期、歴史進展の連続性などを考え、本研究では1980年代すでに中国文壇で活躍してきた作家については1994年までに小説の作風が大きく変化しなかったものは新時期小説のカテゴリーに入れる。付録の新時期小説TTリストの選考基準もそれに適合させる。

また、新時期小説の他に、中国同時代文学（1976年から現在までの中国大陸における文学事象）という用語もある。本研究では新時期小説を含む広い文学事象に言及する場合、「同時代文学」という用語を使用する。

2.1.3 新時期小説の主な思潮

時期区分を確定してから、新時期小説のそれぞれの思潮と各思潮の特徴を紹介する。新時期小説の文学現象は様々であるが、およそ1985年を境に時期区分ができる。1985年までの新時期小説は「国家文学」の形で、殆どの作品は社会主義リアリズムの手法によって「社

⁹ 中華人民共和国の成立（1949年）から文革発生（1966年）までは17年間である。

会主義新人」¹⁰を作り出し、国家の政策に応じて「新时期」という歴史的な記述に積極的に関与した。1985年からの文学界では、「純文学」と「文学自主性」への追求が主流となり、文学作品の創作手法が多様化し、ルーツ文学、実験小説などの西側諸国で流行した文学ジャンルが現れた。この時代の中国文学は「中国」という閉鎖された空間から延伸して、世界文学の一部となるように展開していた¹¹。

1985年以前の新时期小説には、「伤痕小説」、「反省小説」、(農村と都市の)「改革小説」という3つの思潮が存在する。この3つの思潮は時間軸に順に並ぶものの、伤痕小説などの呼び方は、特定の時期によるものではなく、文学と当時の政治上の現実との関係によるものである(董&丁&王 2005: 401)。伤痕小説とは、文革が人々に与えた肉体と精神の傷跡を暴露する小説である。陳(2000: 24)によると、伤痕小説で最も注意を払う価値があるところは、悲劇を表現する小説が1949年以来の中国文壇で初めての正当性を獲得して、人民大衆に対する極左政治路線に憤慨を表明する窓口となり、「17年文学」の時期に制定された様々な文学創作の杓子定規を揺さぶる点にある。伤痕小説を踏まえて、一部の知識人¹²は、文革の傷痕に対する慨嘆を乗り越えて、文革と文革以前の政治運動が内的なロジック関係を持っているか、文革が中国の政治体制の必然的な結果なのかなどを思考しながら、さらに反省小説を通じて、中国政治体制の「機能不全」を論じた。

藤井(2011: 129)によると、70年代末とは、鄧小平派が毛沢東の権威を借りた華国鋒体制を切り崩し、自由派の時代へと移行していく時期である。毛死後の共産党内部路線闘争を背景に、党の権威を傷つけることなく文革への憎しみを語る伤痕文学は、鄧派イデオロギーをよく代弁していたのである。

しかしながら、1979年から、鄧小平が牛耳る改革派はすでに主導権を握って、改革開放

¹⁰ 「社会主義新人」とは、「四つの現代化」を達成するための奮闘者。——鄧小平「全国第四回文芸者代表大会の祝辞」

¹¹ 2012年にノーベル文学賞を受賞した莫言は1985年、「透明な人参」という中篇で中国文壇にデビューした。

¹² これらの知識人の殆どは、かつて共産党の幹部で、文革を含む政治運動で打倒されて文革以降復帰したため「復帰者」とも呼ばれる。このうち代表的な人物としては王蒙、陸文夫などが挙げられる。

の政策を策定した。4つの現代化の実現は全国の中心的な任務となる。これを背景に傷痕文学と反省小説は共産党にとって時代遅れのものになった。党の政策と歩調を合わせるために、主流文学は「社会主義新人」のキャラクター創造に取り組み、社会主義リアリズムの文学伝統に回帰する計画を考案した（黄 2009: 68）。このような時代を背景に、改革中の都市と農村の実態、及び改革に貢献した「社会主義新人」のイメージを描写する改革小説が登場した。

以上の主流的思潮以外にも、1985年以前の中国文学界ではまた様々なサブ思潮が存在した。例えば、『胡蝶』（日本で1982年に翻訳出版）をはじめとする王蒙の一連の作品は当時中国ではめったに見られない意識の流れの小説である。湛容の『人到中年』（日本で3回に翻訳された）は、知識人の生活困難を生き生きと描写して、社会からの関心を喚起する文学作品で、フラッシュバックの創作手法で当時大きな反響を呼んだ。

一方、西側の各種モダニズム文学作品の中国語訳は70年代初頭、すでに内部資料の形で中国で流通していたが¹³、改革開放政策の実施に伴い、80年代初頭に翻訳受容のピークになった（洪 2007: 291）。ここでの「西側モダニズム」とは80年代中国の文脈での特定概念で、外延は19世紀後期の耽美主義から、20世紀初期の象徴派、表現主義、意識の流れ、シュールレアリズム、60年代の実存主義に基づくブラックユーモア、ビート族まで、西側のありとあらゆるモダニズム文学思潮を含む（ibid: 115）。但し、宇野木（2003b: 75）が指摘したように、このようなモダニズムの受け止め方は「欧米理論の受容に基づく文学に対する見方の多様性の発見、即ち「文学観念」の変革の動きが脱文革動向を推進したのも事実だが、同時に、その多様性が一種の混沌現象を出現させたともいえる…（中略）…各々の理論が生み出されてきた欧米社会の文化・思想的背景に眼が向くというより、その形式面（表現技法）のみに関心がよせられていたことの証明といってもよい」。

¹³ 内部流通の範囲とこれらの文献を読む権限がそれぞれ決められたとはいえ、実は闇ルートを含めて、内部流通の文献はこれ以上の範囲で流通した。筆者が接触した文革体験者の殆どは、年齢、出身、身分を問わず、内部参考文献に接触したことがある。

西側モダニズム受容の影響や、「世界文学に向け」という文芸界で盛んになった呼びかけなど、一連の文学的要素と当時の比較的寛容な政治状況と相まって、1985年からの中国文学の中心的な目標は、社会主義リアリズムの手法で民衆を啓蒙することから、モダニズムの手法による「純文学」への追求に変化した。20世紀西側のモダニズム文学から養分を吸収した中国文学界では、2つの創作傾向が出現した。1つは、南米マジックリアリズム小説の大成功から啓発を受けて、自民族の民族文化から文学資源を探求して、自民族の古老な風俗と歴史伝統に基づいて文学創作を行うものである。このような創作傾向はルーツ文学¹⁴の誕生につながる。もう1つの傾向は、モダニズム文学を主要な芸術体験として吸収して、特定の時代の社会政治経済状況を乗り越えて、文学自体の意義を追求するようになった。このような文学創作の試みは、中国式モダニズム文学の誕生を導く。ルーツ探し文学と中国式モダニズムの文学思潮は、1985年ごろから盛んになり、中国文学の主流的な思潮になる。のちの1987年ごろから、新写実主義が勃興して、前者とともに中国現代文学の主流思潮に並立して、新時期小説最後の主流思潮となる。新写実主義とは、写実の創作方法に基づきながら、現実世界の原始生存形態（original ecology）を重視する創作理念で、90年代以降の小説にある程度の影響を与えることになる。また、新写実主義で創作する作家のうち、余華、蘇童のような90年代以降の文化消費市場で人気作家になる者も少なくない。

2.2 新時期小説の海外における受容状況

海外における中国新時期小説（あるいは同時代文学）の受容状況については、まだ研究があまり進んでいるとはいえない。調べたところ、中国新時期小説（あるいは同時代文学）の海外における受容状況に関しては『中国新時期文学在国外的伝播与研究』（姜智琴 2011）と『認同与“延異”—中国当代文学的海外接受』（劉江凱 2012）2冊の先行研究がある。姜

¹⁴ ルーツ文学の命名はアメリカ小説家ヘイリーの著書『ルーツ』から由来した。日本ではルーツ文学の公式な定着名がない、ルーツ探究文学、ルーツ文学などの名称が混用している状態である。本研究では直接引用の場合以外「ルーツ文学」に統一する。

と劉の研究が構成と性質上で大きな相違点がみられるものの、両者のどちらも中国同時代文学の海外での受容という分野での先駆者である。本研究では彼らの研究成果を部分的に受け入れる。

姜は主に英語圏国家における新時期小説の翻訳状況の全体像を紹介した（日本の状況にも若干ふれた）うえで、莫言、余華、王安憶など 9 人の中国の代表的な作家の作品がいかんを受容されたかのケーススタディーを行っている。一方、劉の研究ではケーススタディーは控えて、以下 4 つの特徴を持つ広がりのある研究成果を取り上げた。

- ①概説にとどまるとはいえ、詩、劇など小説以外の文学ジャンルの受容状況を考察した。
- ②外国で出版された中国文学史、翻訳誌をふくめ各種雑誌を検討する。
- ③日本、ドイツなど英語圏国家以外の国での受容状況にもふれている。
- ④WorldCat 検索システムによって 12 名の同時代名作家の各言語の訳本を調査する。

本研究は形式上姜と同様に概観紹介とケーススタディーという構成方法を採用する一方、劉の研究における海外で出版された中国文学史に対する関心を引き継ぎ、日本における新時期小説の翻訳専門誌ないし新時期小説の内容を含む文学史を考察する。なぜなら、長期にわたる雑誌と常に教材として使用する文学史は、単冊の訳本より一般読者に影響力を持っていることが想像できるだろう。また、劉の WorldCat 検索システムの活用から啓発を受け、様々なネット上の検索システムを活用し、日本における新時期小説の TT 情報を収集する作業を行う。

2 冊の先行研究から、莫言が海外でおそらく知名度が最も高い中国人の同時代作家であることがわかった。日本における莫言の翻訳状況に関しては、2 冊の先行研究が扱っている。このうち、姜（2011：91）は『豊乳肥臀』の出版によって、莫言が日本で好評を受けたことや、2004 年に訪日した際、十数のマスコミが莫言にインタビューしたことなど、21 世紀以降の日本における莫言の受容状況に触れた。これに対して劉（2012：222）は、1989 年に井

口が『現代中国文学選集：莫言』¹⁵、1991年に藤井省三、長堀祐（原文のまま、実は長堀祐造：引用者注）は『莫言短編小説集』を翻訳したなど、1990年代前期までの事実に触れた。本研究では先行研究を踏まえ、日本における莫言の翻訳状況を一層詳しく調査し、個別作家の翻訳がいかに関中国の文化的イメージを構築したかを考察するためのケーススタディーとして取り上げる。

先行研究の現状からみて、新時期小説の欧米における翻訳状況が次第に解明されたのに対し、日本での翻訳状況に関する研究は未だ多いとはいえない。なぜなら、上記2名の研究者は日本の状況に学術的興味を持っているにもかかわらず、語学能力や研究条件の制限があるため、日本における新時期小説の翻訳状況を直接的に考察することが難しいようである。それゆえ日本一国における新時期小説の翻訳状況の解明に専念する本研究は、これまでの海外における新時期小説および同時代文学の翻訳状況に関する研究を補う意義があるだろう。

¹⁵ 原文のまま。1989年に井口が翻訳したのは『現代中国文学選集 6：莫言』である。本研究では作品名の『赤い高粱』（1989年版）を使用する。また1990年に井口は『現代中国文学選集 12：莫言』（本研究で『続赤い高粱』（1990年版））を翻訳したが、劉はこの本に言及していない。

第3章 日本における新時期文学の翻訳の全体像と翻訳によって構築された中国の文化的

イメージの3つの次元

本章には2つの研究目的がある。1つは日本における中国新時期小説の翻訳の概観と特徴を整理することである。もう1つはTTの前書と訳後記に対する考察により、翻訳が構築した中国の文化的イメージの3つの次元を紹介することである。

3.1 新時期小説の日本における翻訳状況

日本における新時期小説の翻訳は1970年代末期から始まった。本研究の付録「日本における中国新時期小説のTTリスト」¹⁶により、2014年までに少なくとも659篇の新時期小説のTTが日本の公開出版物として刊行されている。このうち、1978年から1986年までの9年間では合計108篇のTTが見つかった。続く1987年から1995年までの9年間では合計412篇のTTが記録される。新時期小説の殆どの秀作がこの2つの時期で日本に紹介されたため、1978-1986年は新時期小説翻訳の黎明期、1987-1995年は黄金期であると考えられる。1996年以降は、日本で中国同時代文学翻訳の重心は新時期小説以降の中国小説に移ってきた。それにもかかわらず、2014年年末までは139篇ほどの新時期小説のTTが翻訳された¹⁷。ただし、翻訳が構築しようとする文化的イメージを解明するには、一定の時間的距離を置いて考察する必要があると考えたため、本研究では1996年以降の翻訳を検討しないこととする。では、新時期小説の翻訳を黎明期と黄金期に分けて、出版形態と訳者の職業構成に基づき翻訳状況を説明しよう。

3.2 黎明期における新時期小説の翻訳状況

本研究では1970年代末期から1986年までは日本における新時期小説翻訳の黎明期と定

¹⁶ リストの選択基準、参考資料、凡例は付録を参照

¹⁷ 例えば、中国文壇で文名を馳せる新時期郷土作家・路遥の『路遥作品集』（中国書店）は2009年に日本で出版された。

義した。では、黎明期には新時期小説の翻訳はどのような特徴を呈したのか。

3.2.1 1986年までの訳本の数量と出版形態

洪（2007:200）によると、文革終結後の一時期においては、作者の文学観念、材料の選択方式と芸術手法は「文革文学」の因襲である。「文革文学」からの乖離は1979年以降のこと…（中略）…当然ながら、1979年以前はこのような「乖離」を予示する作品が登場した。

このような『傷痕』、『クラス担任』など「乖離」を予示する作品こそ、日本人翻訳者の視野に入り、新時期小説の日本語訳の濫觴になった。但し、その時日本の知識界は主に香港を經由して中国大陸に関する情報を得ていたため、香港知識界の言説を踏襲し、「新時期小説」を「新写実主義小説」と称した。これは1987年以降勃興した余華らの新写実主義小説とは異なる概念であり、注意が必要である。

1978年から、当時島根大学助教授・西脇隆夫と日中友好協会常任理事を務めていた工藤静子はそれぞれ「志木強」、「真山夏」のペンネームで、「日中友好新聞」で新時期小説の翻訳作業を始めた。二人は共同でSTを選択し、1人がSTを翻訳し、もう1人がTTを校正する、という実践的な方法で、当時の中国の主流的文学思潮「傷痕文学」の代表作の一部を翻訳した¹⁸。1980年、二人はそれまでの訳文を集結して、『傷痕』の書名で刊行した。工藤は出版費用の一部を負担した。『傷痕』は「クラス担任」、「傷痕」、「神聖なる使命」など、「傷痕文学」の代表作を収録する一方、「傷痕文学」のカテゴリーに入らない李勃の小説「阿惠」も収録した。

西脇と工藤が新時期小説の翻訳に取り組むのと同じ時期、もう2人の日本人訳者が新時期小説に興味を持つようになる。1979年の夏、岩波書店編集者の田畑佐和子は北京で復活した著名な女流作家丁玲と知り合いになり、丁を介して中国で出版したばかりの文学雑誌『清明』を素早く手に入れた。田畑は『清明』に掲載されていた小説「天雲山伝奇」を読

¹⁸ 西脇隆夫へのメールインタビュー、2013年11月5日。

み、強く惹かれた¹⁹。彼女は東京通信社の北京駐在員を務めた夫の田畑光永とともに、3篇の中編小説を翻訳し、1981年に『中国告発小説集—天雲山伝奇—（以下『天雲山伝奇』と略称）の書名で出版した。ここでの告発というのは、傷痕文学のような文革に対する告発ではなく、文革終結後の当世中国の暗部を暴露する意味である。収録された作品のうち、「天雲山伝奇」は文革以前の政治運動で受難したインテリの物語であり、「反省文学」の鼻祖である。「転勤」は内陸部の町にある青年が様々なコネを使って、経済発展地域に転勤する物語を通して、文革後の下放²⁰された青年たちの窮地を描く一方、共産党行政体系の硬直化と官僚化を暴露した。「人妖の間」はルポルターージュの体裁で、中国東北地域での汚職事件を記録したものである。この3篇の小説では文革から視点を移し、当時の中国における社会問題に注目した。さらに、「天雲山伝奇」での呉遥、「転勤」での謝礼民など文革後の保守勢力の代表人物は、文革中の被害者であり、傷痕文学では大いに同情される人物である。

上記の2冊の訳本に続き、1981年に相浦が王蒙の意識流小説『胡蝶』を翻訳した。『胡蝶』は新時期小説のうち、日本語に翻訳された最初の長編である。1983年1月、中国文壇で脚光を浴びた反省小説と改革小説の翻訳選集『現代中国短編小説選』が日本で出版された。訳者の上野廣生は「黨員幹部と人民の関係」、「若い世代と老幹部」、「愛情小説」の3つのカテゴリーを設定して、中国人社会の人間関係（階級感情、肉親感情、愛情）の典型的状況を描写する10篇の作品を選択した。これらの作品は当時中国での人気作と話題作であり、多くは権威ある文学賞の受賞作でもある。1984年3月1日、短編小説選『ひなっ子』が出版された。『ひなっ子』は特定の文学思潮に基づく作品選ではなく、選ばれた10篇の作品のうち、中国政府公式の国家レベル文学賞の受賞作は1篇しかない。訳者の永田耕作は「文革期の体験」、「精神文明の高揚」、「日本とのかかわり」、「その他」という4つのカテゴリーで作品を選択した。ちなみに『ひなっ子』では、初めて新時期文学の少数民族作家とそ

¹⁹ 田畑佐和子へのメールインタビュー、2013年12月8日。

²⁰ 下放とは、文化大革命の間に、都市部の青年層を地方の農村で肉体労働を行わせることを通じて、都市部の就職難を緩和しながら、農村部の建設に協力させる政策である。

の作品（マラチンプの「生き佛物語」）が日本に紹介された。

以上の作品集以外にも、日本では特定のテーマまたは女性文学の新時期小説作品集も出版された。1982年から1988年にかけて出版された6冊の『中国農村百景』作品集シリーズは、山西省の公式な文学誌『汾水』（1982年には『山西文学』に改名）の1980年から1985年にかけて掲載された一部の小説を底本にした農村題材の作品集である。一方、1985年4月に出版された『キビとゴマ』作品集は80年代の女性作家の活躍に目を向け、異なる世代に属する中国の著名女性作家5名の代表作を1篇ずつ収録した。ちなみに、『キビとゴマ』の訳者辻康吾はインタビューで、『現代中国短編小説選』でのTTはきまじめすぎるため、芥川賞を受賞した加藤幸子の協力を得て、文学として読めるようにリライトする意思を表明していた²¹。

翻訳作品は合計で78件あるが、そのほとんどが作品集という出版形態である。単行本は5件のみに留まる。このうち厳密な意味での「純文学」と考えられたのは、前述した『胡蝶』のほか、湛容の『人到中年』である。この小説はフラッシュバックの手法を用いて、中国の中堅インテリの生活上のジレンマをいきいきと描く作品で、日本では2人の訳者によりそれぞれ翻訳出版され、中篇小説のうち最初の再翻訳作品となった。残りの『小説 張春橋』はルポタージュ風の政治小説である。『海誓—海への誓い』のSTはシナリオであり、日本で出版したのは作者と訳者の合意による修正版である（表①を参照）。

第三章表①1987年以前の新时期小説訳本一覧表²²（出版時期順）

出版形態	作品名（出版年）	訳者	出版社	収録作品数	冊数
作品集	『傷痕』（1980）	工藤静子&西脇隆夫	日中出版	7	1
単行本	『胡蝶』（1981）	相浦泉	みすず書房	1	1

²¹ 辻康吾への電話インタビュー、2013年12月14日。

²²表にのいる訳本以外に、柴田清伊知が翻訳した『現代中国中編小説選』がある。但し、この小説は非売品であり、公開發行したものではないため、本研究の考察対象から除外する。本の情報は国立国会図書館リンク <http://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000001726306-00> を参照、2013年12月1日アクセス

作品集	『天雲山伝奇』(1981)	田畑光永&田畑佐和 子	亜紀書房	3	1
作品集	『中国農村百景』 (1981-1988)	小林栄	亜紀書房	7.8.5.6.8.4	6
単行本	『小説 張春橋』(1982)	阿頼耶順宏&竹内実 &吉田富夫	中央公論社	1	1
単行本	『海誓』(1982)	黎夏、青木俊	エイジ出版	1	1
作品集	『現代中国短編小説選』 (1983)	上野廣生	亜紀書房	10	1
作品集	『ひなっ子』(1984)	永田耕作	朝陽出版	10	1
単行本	『北京の女医』(1984)	田村年起	第三文明社	1	1
単行本	『人、中年に到るや』 (1984)	林芳	中央公論社	1	1
作品集	『キビとゴマ』(1985)	加籐幸子編、辻康吾 訳	研文出版	5	1
合計				78※	16

※短編小説「児女情」、「愛・忘れ得ぬもの」、中編小説「人、中年に到るや」はそれぞれ2つの平行テキストがあるので、日本語訳された新時期小説のSTは75篇があり、日本語のTTは78篇がある。

上記の訳本以外、各雑誌に散在する新時期小説のTTも若干存在する。このうち、西脇と工藤が最初にTTを掲載した、日本中国友好協会が主宰する『日中友好新聞』には1985年までに8篇の新時期小説のTTを掲載した。島根大学中国文学研究室による『中国少数民族文学』は5篇の少数民族文学のTTを含む。また『日本と中国』や『早稲田文学』などの雑誌にも少ないながら新時期小説のTTが見つかった。

一覧表からみて、80年代前期の新時期小説の訳本の大部分は短編、中編小説の作品集である。作品集にはTTが73篇収録されている。これに対し、単行本のTTは5篇しかない（このうち純文学は3篇しかない）。

新時期小説訳本の作品集、単行本はいずれもページ数300前後のものであるため、紙幅の制限で短編を選択した可能性は低い。また翻訳者へのインタビューにより、新時期小説の翻訳の際、出版社からの圧力が全くなかったことが確認できた。それゆえ、短編中編の作品を選択したのは、訳者の主体的な決定にほかならない。では、殆どの訳者がなぜ短編中編に着目したのか。取材可能な訳者にインタビューした結果は表②に示めす通りである。

第三章表②訳者に対する訳本形態とSTの選択についての調査結果

問題: なぜ短編/中編小説選集の形で中国文学を翻訳したのか。長編を翻訳する考えを持っていたのか。

訳者	回答
西脇隆夫	長編を翻訳する考えがない。限りある紙面でできるだけ多くの新時期小説を紹介したい
永田耕作	長編を翻訳する考えがない。中国文学の翻訳に関して、専門家が出さないなら私が、という気持ちだが、その後はプロにまかせる
辻康悟	当時長編小説がないと思った

「天雲山伝奇」に惹かれた田畑に加えて、訳者にとって短編の作品集という形態を選択したことは決して下しにくい決定ではない。この原因は、恐らく新時期文学の特徴及び日本の当時の社会状況に繋がっている。

まず、1980年代前半期の新時期文学の3つの特徴を検討しよう。

1つ目は、その時代の新時期小説で最も成功した形態は短編小説である。

洪（1986: 156）によると、1977年以降、小説の繁栄は短編から始まって、のちに中編にも発展して、重要性を呈した。長編は確かに毎年数百部ほど出版されたが、読者に印象を

残したものは少ない。言い換えると、長編小説の思想性と芸術性はなかなか進展していなかった。作家の生活観と芸術観は停滞しており、長編小説の繁栄期はまだ来ていなかった。当時の観点からみた新時期小説の宿命的目標は、五四文学が目指した目標を背負い、国民を階級闘争及び個人に対する崇拜のイデオロギーから目覚めさせ、ヒューマンズムを意識させる啓蒙にあったという。曹（1988/2010: 27）によると、70年代末に、文学は人の価値について呼びかけを始める。80年代の初頭から、文学は個性の解放を喚起しはじめた。後者は前者より一歩先を進んだ。

そのため、当時の作家は数十年間の変遷を記述する長編小説よりも、社会問題を取り扱い、生活の断面に切り込めるメスのような短編小説の方に精力を注いだ。

2つ目は、長編であれ、短編であれ、新時期小説の殆どはリアリズムのテキストであり、世界文学の潮流からみて時代遅れで、美学価値が高くないものである。

1980年代前半の新時期小説の作家は概ね2つのグループに分かれる。1つのグループは、かなり以前から作品を発表して、作家としての名望があったが、政治運動により執筆活動が禁止されていた者たちである。彼らの殆どは50代過ぎであり、「帰来者作家」と呼ばれている。もう1つのグループは、思春期を文革中に過ごし、紅衛兵学生運動または奥地または辺境へ下放された経験がある者たちである。彼らの殆どは30代以下で、「知識青年作家」と呼ばれている。「帰来者作家」であれ「知識青年作家」であれ、彼らはリアリズムの創作手法しか展開できていない。なぜなら、まず、これまでの中華人民共和国では「工人、農民、軍人に奉仕するリアリズム文学」を作家に要求してきたからである。20世紀西側の文学思潮は、資産階級のものとして排除されていた。作家たちは西側の文学思潮に関する参考文献に接触しにくい状況であった。次に、数十年間にわたる知識人に対する政治運動に翻弄されたため、作家たちは西側の現代文学の創作手法を試す勇氣を持っていなかった。その結果、彼らの作品はもっぱらリアリズムに基づく小説になった。彼らの作品が中国で人気を博した最も大きな原因は、作品の芸術性より社会関与度にある。孟（1998: 152）

によると、「度重なる社会問題に直面する文学者たちは芸術表現と文章形式の問題を考える暇がない、芸術上の創造を棚上げにして、伝統的な言語システムを通して伝統的な社会問題を取り扱う。その結果、文学の機能は単一化され、文学作品が人気になったいかなる原因も、文学作品の文学性以外の要素に帰結できた…（中略）…これは時代の必然である」。

3つ目は長い中編または長編小説の執筆には時間と技術が必要である。

文学雑誌に短編を載せるという掲載形式とは異なり、長めの中篇または長編小説は単行本の出版が必要である。長編小説の創作周期と出版周期は短編より時間を必要とするものである。それゆえ、80年代前半の新時期小説の訳者は長編小説との接触機会が少ないのである。接触しても翻訳と出版の交渉には時間がかかるので1980年代中前期に長編小説の訳本を出すことは困難であった。日本に翻訳された長・中編小説の3篇はいずれも1980年前半までに完成したものである。

つまり、日本人訳者が接触できる1980年代前期までの新時期小説の殆どは、社会問題を取り扱うリアリズムのテキストであった。このうち短編の価値が最も高かった。

一方、当時の日本の社会状況も訳者の選択に影響を与える。

1970年代から、日本の同時代文学は次第に「脱社会化」の道に走った。1980年代、日本社会におけるサブカルチャーの登場と定着によって、日本文学史は「両村上以降」の時代に入った（西村 2003: 41）。両村上のうち、村上龍は主に経済高速成長期における若者たちの人生目標なき、ヒッピー的な生活を描写する。村上春樹は主に現代都市にいる人々の孤独な個人感情を描く。両村上が主流になった80年代の日本文学界は内面化する傾向が一層強くなり、文学と社会の関係より個人の生活と欲望を描写する文学作品が流行っていた。すなわち、文学が社会に積極的に介入すべきかどうかをめぐって、日中両国の主流の文学思潮が対立していた時期である。1970年代以降の日本文学に馴染む日本人読者は新時期小説を読む際、共感を持ちにくかったであろう。

しかしながら、2つの理由で新時期小説には日本国内において一定の読者を獲得した。

1つは、中国の吸引力である。

日中両国の間に経済・文化などの交流は長期にわたり行われてきた。戦争など極端的な両国関係においても交流が完全に途切れなかった。しかしながら、1980年代前の10数年間、中国はメガホン外交の政策および鎖国政策によって、日本との各種交流がほとんど中断してしまっただ。そのため中国が次第に開放してきた1980年代初期において、長い間に閉じこまれた巨大な中国の真実を知りたい日本人は大勢いた。

さらに、中国が資本主義の世界市場に参入するに伴い、ODAの円借款、日本企業の中国進出など、日中両国の経済協力と経済交流は次第に活発化していった。それゆえ、中国各地の風習、中国人の国民性、共産党政策と中国人の日常生活との関係など、中国に関するあらゆる情報は将来性のある経済利益に繋がっていると考えられた。

もう1つは、日本国民の「日中友好」意識である。

1980年代東西陣営の緊張緩和や冷戦構造の不安定化などの国際背景、長期にわたる日本民間の対中外交政策への反動と相まって、1978年10月に日中平和条約を調印した日中両国はやがて「ハネムーン」時期に入った。日本内閣府が行った「外交に関する世論調査」によると、中国に対して「親しみを感じる」日本人（の割合）は、国交が回復した1978年の62.1%から、1980年には最高の78.6%に達した（参考として2013年は3.9%）。このような時代背景は、一部の日本人の中国同時代小説翻訳に対する熱意を喚起させると同時に、新时期小説の潜在的な読者群と市場をもつくり出した。

上述の日本の社会文化状況の文脈において、訳者は「不定多数」の潜在的な読者の需要を鑑み、新时期小説を中国と中国人を知る窓口にする。沢山の訳後記において、訳者は翻訳を通じて中国人の日常生活を理解できると主張する。それゆえ、訳者が新时期小説のSTを選択する際、生活の様々な面を描写する短編小説を紹介することが、最もいいストラテジーとなったのであろう。

ただし、このうち一部の中編長編小説は時間が経過した後に、その文学上の価値が次第

に認識されて、日本で翻訳された例もある。例えば 1981 年 11 月に初版された古華が著した長編小説『芙蓉鎮』の翻訳は 1987 年 10 月に出版された。1983 年初版された陸文夫が著した中編小説『美食家』の翻訳も 1987 年 10 月に出版された。

3.2.2 1986 年までの新時期小説の訳者状況

外国文学翻訳の主力は一般的に当該領域の研究者と思われるだろう。しかしながら、1986 年までの新時期小説翻訳のもう 1 つの目立った特徴は「訳者職業の多元性」である。そこで、訳本出版の時期順にそって訳者たちの職業に簡単に触れよう（表③を参照）。

『傷痕』の訳者の工藤静子は 30 年間にわたって中国で生活した経験がある。同選集を訳した当時、日中友好協会の常任理事を務める一方、日本民主主義文学同盟員でもあった。もう 1 人の訳者西脇隆夫は島根大学の助教授で、「文革以後の詩的状況」、「中国の少数民族文学」などの論文/著書を出版している。『傷痕』は西脇のこれまでの新時期小説に関する唯一の成果である。

『胡蝶』の訳者相浦泉は当時大阪外国語大学の中国語専攻の教授であり、中国研究界でカリスマ性を持つ人物であった。

『天雲山伝奇』の訳者のうち、田畑光永は TBS の北京駐在員であった。『天雲山伝奇』以外にも、彼には『中国の冬—私が生きた文革の日々』（1984、サイマル出版会）、『宋王朝 中国の富と権力を支配した一族の物語』（1986、サイマル出版会）など、中国の政治を反映する訳書がある。田畑佐和子は岩波書店に入社し、雑誌『思想』や、岩波中国語辞典、岩波日中辞典などの編纂に携わった。岩波書店退社後、彼女は東京大学、早稲田大学などで中国語・中国文学を講ずる傍ら、現代中国文学の翻訳に専念した。

6 冊の『中国農村百景』を翻訳した小林栄は 1966 年より、NHK 中国語ラジオ講座、テレビ講座を中心として独学で中国語を勉強してきた。翻訳当時は長野県都筑製作所の勤務であった。

『小説 張春橋』の訳者阿頼耶、竹内、吉田は当時中国政治論や毛沢東研究で有名であった。竹内（1982: 423-425）はこの小説が加害者の紅衛兵の立場で書いたものであり、再出版した中国文学の中でも孤立した作品であるゆえ翻訳を決意したことを述べているが、『小説 張春橋』の性質が半ルポの政治小説で3人の研究分野に近かったことも彼らの翻訳理由となっていたのであろう。

『海誓』の編訳者日下熙は文筆家であり、青木俊郎は出版社主宰である²³。

『現代中国短編小説選』の訳者上野廣生は当時伊勢工業学校に勤務しており、彼（1983: 342）が「NHK テレビの中国語講座によって中国語の独習を始めたのは…1972年の春から」であった。

『ひなっ子』の訳者永田耕作は朝日新聞西部本社通信部で働き、1979年の春から同講座で中国語の勉強をしながら、「北九州北京放送スクーリング」という中国帰国者と共に言葉を学びあうという組織に参加した。

『北京の女医』の訳者田村年起は戦前大阪外国語大学支那語学科の出身、翻訳当時は72歳の高齢で『外語文学』雑誌の同人であった。

『人、中年に到るや』の訳者林芳（本名「俞馥英」）は中国出身、日本育ちの日本語・中国語バイリンガルである。翻訳当時はKDD嘱託社員を務めた。

『キビとコマ』の場合、編集者の加藤幸子は5歳から11歳までを北京で過ごし、1983年に芥川賞を受賞した日本の名作家である。しかしながら、もう1人の訳者・辻康吾へのインタビューによると、彼女は中国語がわからないということだ。辻は毎日新聞の北京支局長を経て、当該作品を翻訳した当時は東京本社外信部編集委員を務めた人物である。辻（p.271）によると、彼のほか伊藤克²⁴、下河辺容子²⁵、陶純²⁶の3人も『キビとコマ』の翻訳に

²³ 編訳者後記録（p.275）によると、株式会社大陸トラベルサービスの川崎昭二という人物も翻訳に関与した。ただし、この人物に関する資料が一切見付からない。

²⁴伊藤克(1915-1985)：北京在住の中国文学翻訳家、中国語を日本語に翻訳する仕事に従事すると同時に、北京師範大学と北京外国語学院分院で教鞭をとった。

<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/zhuanwen/200207/zhuan64.htm>（2013年10月28日アクセス）

協力したということである。

第三章表③翻訳当時の訳者職業一覧表（出版時期順）

作品集名	訳者	訳者職業（翻訳当時）
『傷痕』	工藤静子	日中友好協会常任理事、日本民主主義文学同盟員
	西脇隆夫	島根大学助教授
『胡蝶』	相浦杲	大阪外国語大学教授
『天雲山伝奇』	田畑光永	TBS 北京支局駐在員
	田畑佐和子	岩波書店編集者
『小説 張春橋』	阿頼耶順宏	追手門大学教授
	竹内実	京都大学教授
	吉田富夫	仏教大学教授
『海誓』	日下熙	文筆家
	青木俊郎	出版社主宰
『中国農村百景』	小林栄	長野県都筑製作所勤務
『現代中国短編小説選』	上野廣生	伊勢実業高校勤務
『ひなっ子』	永田耕作	朝日新聞西部本社通信部
『北京の女医』	田村年起	『外語文学』の同人（72歳）
『人、中年に到るや』	林芳	KDD 嘱託社員
『キビとコマ』※	辻康吾	毎日新聞外信部編集委員

※加籐は「中国語がわからない」ため表に入れない。伊藤、下河、陶の三氏は協力者のため表に入れない。

²⁵下河辺容子（1962- ）：翻訳当時東京外国語大学中国語学科在学中、訳本「江青警護兵の冒険」（1984、筑摩書房）がある。

²⁶陶純は杏林大学中国語学科出身、遠藤絢と改名して杏林大学中国語学科の特任教授を務めている。
http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/faculty/foreign/student/teacher/detail_2.php?id=for90001、2013年12月15日アクセス

このように、1986年までの新時期小説の訳者の職業は多種多様である。総勢16人のうち外国語文学翻訳の主力であるはずの研究者は5人しかいない（さらにうちの3人は1冊の小説を共訳）。マスコミ関係者は3人で、その他が8人である。

中国語の教育背景からみて、訳者は3つのグループに分けられる。バイリンガル: 工藤、林。大学中国語学科の出身者（学部/研究科両方が含まれる）: 西脇、相浦、田畑夫妻、辻、田村、阿頼耶、竹内、吉田。中国語独習者: 小林、永田、上野。訳者の中国語教育背景と職業には一定の関連性が見られる。中国語学科出身者の訳者は主に大学の研究者、マスコミ関係者、出版社の編集者として、中国に関係がある仕事をしていた。中国独習者のいずれも、中国に関係がない仕事をしていた。また、日下熙と青木俊郎の語学勉強歴については不明である。

Tymoczko (2007: 34) によると、訳者は人間であり、彼らのテキストに対する認知は、彼らがいる社会の歴史文脈、価値判断標準、イデオロギー、及び彼らが受けた訓練に関わる。それゆえ、1986年までの新時期小説翻訳者の「職業多元性」の原因を解明するには、訳者の翻訳動機などの内的要素と日本社会の文脈などの外的要素を連携して考察する必要がある。筆者は考察を経て、3つの原因があると考えた。

まず、新時期小説が従来の中華人民共和国成立後の文学と異なる点が挙げられよう。

中国語学科出身者による訳本のパラテキスト及び彼らに対するインタビューからみて、彼らの間に、文革後に変貌した新たな中国文学を日本人に伝えるという強烈な意図が存在する。

そもそもそれらの訳者は当時皆40代前後で、中国語を勉強した時代は折りしも中国の「17年文学」と「文革文学」時期の最中であった。彼らが接触できた中国の同時代文学作品は、中国の文化統制機関が輸出を許した、中国革命の勝利と新しい国家建設を反映するリアリズム小説、及び革命浪漫主義と革命現実主義を結合した「三つの突出」文学しかない。そ

れゆえ、彼らが新時期小説のような、様々な欠陥があるにもかかわらず、従来の中国小説と根本的に違う文学作品と出合った際の喜びと興奮は想像に難くないだろう。西脇はメールインタビューにおいて、「1966年以降、日本では政治関係の本や雑誌以外には文学関係の本を手に入れることはまったくできなかった。後に「傷痕文学」あるいは「新時期」の文学とされる当時の作品が、日本の読者（研究者にも）に強い衝撃を与えたことは確かである」と書いた。田畑佐和子はインタビューで、「天雲山伝奇」に関して、「非常に強い驚きと感動を感じ、ぜひ訳したかった」と述べた。

以上の西脇と田畑の話から見て、新時期文学と「17年文学」、「文革文学」との比較が、彼らの翻訳動機となった可能性がある。確かに新時期小説は西側の同時代小説と比べて、時代遅れに見えたにもかかわらず、研究者たちは「新時期小説は面白くなるぞ！」（高島1981: 222）と驚嘆した。このような比較によって生じた中国文学に対する再認識が、中国語学科出身の訳者たちを新時期小説の翻訳に取り組ませた理由だろう。

次に、「日中友好」の社会文脈である。

当時の日中両国の友好関係が、一般の日本人の中国同時代小説を翻訳する意欲を喚起させた。バイリンガルの工藤と林、中国独習者の永田らが新時期小説翻訳に取り組む理由は「日中友好」を呼びかける意識である。

『海誓』の扉には「この一篇を、日中人民の大いなる友誼と、そして犠牲となった先駆者たちへ心から捧げる……」という一文がある。小林（1984: 304）は『中国農村百景Ⅲ』で「日中友好、日中文化交流が声を大にして呼ばれています。私は今後も中国現代文学の紹介を続けていく覚悟でおりますので…」と書いている。永田（1984: 242）は自分の訳本『ひなっ子』を「文字通り日中友好の書」と評価した²⁷。『現代中国短編小説選』の訳者上野（1983: 342）は日中国交正常化の1972年の春から中国語の勉強を始めており、これは明らかに日中友好を促進する目的が上野にあったことを裏付けている。工藤静子は日中友好

²⁷ インタビューで永田耕作は、中国小説を翻訳する以外にも、留学生の世話をしたり、中国作家夫婦を招待したりするなど、日中友好の民間交流に寄与した人物であることがわかった。

協会の常任理事を務めた。林芳は 20 年間にわたって北京に在住して、北京放送局で働き続けた。さらに『人、中年に到るや』のカバーの「寒梅図」は、老舎²⁸の妻が画いてくれたものである。

このような一般の日本人に新時期小説の翻訳の熱意を喚起させた「日中友好」の意識は、80 年代の日中関係、及び日中両国を取り巻く国際関係に深く関わるものである。松井博光は『ひなっ子』の書評で、中国語独学者の新時期小説翻訳の現象に関して次のように評論した。

いわゆる専門研究者による訳書の刊行が長らくとぼしい状態が続いている今日、従来の読者群とはやや異なった読者層、それも各地に散在する形で隠れている読者層が存在していて、その数はそれほど多くないかもしれないが、潜在的な需要を形成しているのではないかと推測する。いいかえると、訳者自身、そのような潜在的な読者の 1 人に違いないだろう。

要するに中国語独習者の新時期小説への積極的関与は当時の日中友好がピークになった時代に生まれたもので、従来はなかった現象である。

最後に、当時中国同時代文学に対する研究が不完全であった点を挙げたい。同志社大学教授・宇野木洋²⁹の回想によると、1980 年代初頭に、中国語学科と中国語研究科を開設していた大学は現在よりはるかに少ない。中国文学の研究は旧帝大を中心に行われていた。旧帝大の研究は伝統的に漢文が重視され、中国成立後の文学は文学価値の低下によって重視されなかった。そのため、新時期文学が湧き出すように現れる 1980 年代前期、日本では新時期小説を翻訳し、研究する学者が不足していた。こうした客観的事実が、非学者型の新時期小説の訳者に活躍の舞台を提供することになった。

²⁸ 「人民芸術家」、「語言大師」と称された現代中国最優秀の作家の 1 人で、多くの作品が日本語に翻訳されている。

²⁹ 宇野木への対面インタビュー、2014 年 1 月 26 日。

3.3 1987年—1995年の新時期小説翻訳状況

1987年から1995年までは日本における中国新時期小説翻訳の「黄金期」である。TTの量も訳者の数量も1980年代前半期より大幅に増加したため、すべてのTTを表で示して説明することができなくなった。そこで本節ではこの時期の新時期小説翻訳の概観のみを説明する（TTの詳細情報は付録を参照）。

3.3.1 新時期小説翻訳の黄金期

1987年以降、訳本の数量はそれ以前の年間1-2冊から10数冊までに増加してきた。内訳からみて、新時期小説翻訳の専門誌の創刊と大規模な訳本シリーズの出版が非常に目立っている。松井（1988: 39）が指摘したように、「『文革』以降、翻訳が散発的にしか刊行されなかった事態が、ここに来てようやく改善されそうな気運が生じてきたと言えるように思う」という状況であった。

翻訳専門誌については、1987年の春、竹内好の教えを直接受けた8人の中国文学研究者が『季刊 中国現代小説』（以下『季刊』と略称）を発足させた。『季刊』は2期まで発行された。第1期は1987年春から1996年2月にわたって計36号が発行され、その間に164篇の小説テキストが翻訳紹介された。このうちの大部分は新時期小説である（cf.第4章）。

大規模なシリーズ作品については、1987年以降、4つの新時期小説シリーズが出版された。出版時期順にそれぞれを紹介する。

一番目の『80年代中国女流文学選』（全5冊）は25篇の中国女流作家の短・中編小説、加えて3つの資料文献を収録した。1巻ごとに1つのテーマを設定し、このテーマに関わる文学作品を収録した（表④参照）。『80年代中国女流文学選』の翻訳団体は現代中国文学翻訳研究会という、非常勤講師、定年退職者、図書館職員、家庭主婦4人の中国文学愛好者からなる同人グループである。翻訳目的に関して、リーダーの南條（1986: 6-12）は1986年

1月28日の朝日新聞夕刊に掲載された「女流作家の活躍が著しい中国文学界」という記事を引用しながら、「こうした新しい動向に注目し、『80年代中国女流文学選』を刊行することにした」、「翻訳を通して、現代化のもとで発展していく中国の社会と人間を理解する一助に資する」と説明した。

第3章表④『80年代中国女流文学選』出版情報一覧表

巻数	テーマ	書名	出版年
1	愛	錯、錯、錯!	1986
2	文革	終着駅	1987
3	若者	ラブレター	1987
4	働く女	四人の四十女	1988
5	世相	六月の話題	1989

二番目の『現代中国文学選集』（全12冊）は1987年から1990年にわたって出版され、当時中国文壇でトップレベルの作家11名の作品を翻訳紹介したもので、規模からみて新时期小説翻訳史上最大規模のシリーズである（表⑤参照）。

第3章表⑤『現代中国文学選集』出版情報一覧表

巻数	書名	訳者	監修	出版年
1.	王蒙： 淡い灰色の瞳・他	市川宏, 牧田英二	松井博光, 野間宏	1987
2.	古華： 芙蓉鎮	杉本達夫, 和田武司	松井博光, 野間宏	1987
3.	史鉄生： わが遙かなる清平湾・他	檜山久雄・ほか	松井博光, 野間宏	1987
4.	賈平凹： 野山—鶏巢村の人び	井口晃	松井博光, 野間宏	1987

	と・他			
5.	張辛欣： 同じ地平に立って・ 他	飯塚容, 山口守	松井博光, 野間宏	1987
別巻	遇羅錦： 春の童話	松井博光, 近藤直子	なし	1987
6.	赤い高粱	井口晃	松井博光, 野間宏	1989
7.	小鮑荘： 他	佐伯慶子	松井博光, 野間宏	1989
8.	チャンピオン： 他	立間祥介	松井博光, 野間宏	1989
9.	美食家： 他	陸文夫	松井博光, 野間宏	1990
10.	王府井万華鏡： 他	広野行雄, 柴内秀司	松井博光, 野間宏	1990
11.	百合の花： 他	松井博光	松井博光, 野間宏	1990
12.	赤い高粱. 続	井口晃	松井博光, 野間宏	1990

ルフェーブルは、文学システムは協賛者（patronage）からの影響を受けていると考えた。協賛者とはイデオロギー（特定の社会で文学システムがほかのシステムより乖離していることは許されない）、経済（訳者の生活を支える）、訳者地位（訳者の社会的地位を保障する）の3種類がある（1982/2000: 235-248）。

徳間康快は、長年にわたり文化イベントの主催を通じて日中友好を提唱した人物である。彼は1977年から「中国映画祭」を始め、地味ながら地道に中国映画の上映機会を作った（玉腰 2014: 137）。さらに、彼が総製作総指揮を担当した、日中合作の映画「敦煌」は日本国内で大きな反響を呼び、1980年代日中両国友好関係のシンボルともされている。『現代中国文学選集』も文学界の「敦煌」のような「日中国交回復後初の大型企画」³⁰に作り上げられた。これを達成するため、徳間の斡旋で長期にわたり日中友好を呼びかけてきた、大物作家・評論家野間宏が監修者を務めた。野間宏の知識背景からみて、彼が中国語 TT を監修す

³⁰ 近藤直子へのメールインタビュー、2013年8月8日、11月10日。

る語学力を持っているか否かを検討する余地はあるだろう。それゆえ、野間の参与は事実上添削の作業をすることより、中国文学者以外の日本知識人も日中友好に対する関心を示していたことを意味するだろう。

出版経費に関して、このシリーズは徳間書店の当時の社長徳間康快から経済的協賛を獲得でき、徳間書店により出版された³¹。また当シリーズの編集者・訳者牧田により、「徳間は赤字覚悟で出版したのである」³²。それで『現代中国文学選集』の出版にあたり徳間の資金援助が必要不可欠なことである。当時日中友好の時代背景において、徳間はこの選集のイデオロギーと経済上の協賛者であることが確認できる。

『現代中国文学選集』の作品選択は編集委員会によって決められたが、「芙蓉鎮」、「紅いコウリャン」など日本で上映された映画の原作にあたる小説がいくつか収録されていることからみて、中国の映画を日本に積極的に輸入していた徳間は協賛者として作品の選択に影響を与えた可能性が高いだろう。

ただし、協賛者・監修者が『現代中国文学選集』訳者との間に構築しようとする中国の文化的イメージが必ずしも一致するとは限らないようである。例えば、井口は選集 6 と 12 のあとがきで「ハンセン病者に対する差別」、「下品な表現」、「たわいない民族意識」などの原因で莫言を強く批判した (cf. 第 5 章)。また日本側の訳者は中国で物議を醸した女性作家・遇羅錦を翻訳しようとしたが、様々な原因でこの訳本はシリーズに組み入れられず、別巻として扱われている。この別巻に監修者野間宏の名前が記載されていない事実は協賛者・監修者と訳者の間に軋轢が存在していたことを物語るだろう³³。

三番目の『発見と冒険の中国文学』シリーズ (全 8 冊) は 1989 年中国で大きな政治事件が発生した後、藤井省三・山口守・宮尾正樹をはじめとする編集者たちが企画したものである。このシリーズは 20 世紀中国語圏文学という発想に基づき編纂されたもので、1930 年

³¹ 千野択政への対面インタビュー、2013 年 11 月 10 日

³² 牧田英二へのメールインタビュー、2015 年 11 月 28 日

³³ 別巻『遇羅錦』の最後には、中国からの質疑に対処するため『遇羅錦』を別巻として刊行する経緯を説明する「おことわり」、および遇羅錦を応援する松井の「付記」が書き加えている。

代から 1980 年代までの中国大陸・香港・台湾の作家の作品がそれぞれ収録されている。本研究の新時期小説にあたるものは半分の 4 冊である（出版状況一覧表に関して cf. 第 6 章）。

『発見と冒険の中国文学』は「冬の時代を迎えた中国作家にわずかでも物心両面の支援を送りたい」（藤井 2013: 278）という考えから編纂されたもので、このシリーズで中国政府と民主を求める知識人間の衝突を日本人読者に伝えた。例えば、訳者の藤井はシリーズの 1. 『古井戸』（原作者は鄭義）の翻訳を通して中国知識人の共産党イデオロギーに対する抵抗を述べた。2. 『中国の村から』（原作者は莫言）の翻訳を通して中国の農村が抱える巨大な危機を読者に伝えた。また 7. 『紙の上の月』（原作者、北島・史鉄生・他）において、宮尾ら訳者は 1980 年代新時期文学の繁栄の陰で隠蔽された、様々な原因から中国で公開出版できない「地下文学」の一部を翻訳し、日本人読者に紹介した。

1989 年の政治事件発生後、日本民衆の対中親近感は一時的に氷点まで下がったが、その後時間が経つにつれ徐々に緩和してきた。1992 年 10 月の天皇の訪中及び日中国交回復 20 周年のため、日本人の中国に対する親近感がある程度回復した。その勢いによって早稲田大学の教授陣岸陽子・牧田英二・杉本達夫・田畑佐和子を中心とする訳者は「日中国交正常化二十周年にあたるが、このささやかな訳業をその記念としたい」（岸 1993: xviii）と考えて、『新しい中国文学』シリーズ（全 6 冊）を翻訳出版した（表⑥を参照）。この選集では中国女性の生活・職場での大活躍ぶり及び少数民族の生活を反映できる作品を重視するのが特徴である。

第 3 章表⑥『新しい中国文学』出版情報一覧表

巻数	書名	原作者	訳者	出版年
1.	棺を蓋いて	陳健功	岸陽子・齊藤泰治	1993
2.	琥珀色のかがり火	ウロルト	牧田英二	1993
3.	都市の困惑	崔紅一	大村益夫	1993

4.	黒駿馬	張承志	岸陽子	1994
5.	初恋	池莉	田畑佐和子	1994
6.	縛られた村	朱曉平	杉本達夫	1994

専門誌とシリーズという形態で翻訳された小説は1987年から1994年までの間に翻訳されたものの大半を占めた。日中両国で評判がある新時期小説の大部分は上述のシリーズと『季刊』で翻訳されたが、この時期になると新時期小説または新時期小説の内容を含む単行本の出版についても1987年前より飛躍的に増加した。1995年までに少なくとも47冊の単行本が日本で出版された。単行本の翻訳で重要な現象はこの時期中国俗文学の日本における登場であった。1つは、『慈禧全傳』（訳本11冊）、『新・水滸伝』（訳本1995年までに4冊、1996年1冊）などの中国の大河小説が翻訳されたことである³⁴。もう1つは王朔をはじめとする、主流文学圏の自己神聖化を風刺する作品をもってダークホースの勢いで従来の中国文壇の杓子定規を打破する作家たちの作品が日本に翻訳されてきた。それらの作品を通して、中国人の文学上の審美感が多元化になったことが日本社会に伝わるだろう。

専門誌、シリーズ、単行本のほか、新時期小説 TT が散在する雑誌もある。このうち、1989年6月の中国政治事件への対応として、1989年10月号の『ユリイカ』には「中国文学の現在」特集を企画した。このうちの「小説—現代中国文学の新鋭」のコラムに5篇の新時期小説が訳出された。それ以外、1960年代に創刊して現在まで不定期的に発行し続ける、中国文学専門誌『火鍋子』は時折新時期小説の TT を掲載した。また中国政府が協賛する日本人向けの雑誌（例えば『人民中国』）、および日本人訳者による内輪の同人誌（例えば『早稲田文学』など）でも時折新時期小説の TT が掲載された。

以上の出版物の総力によって、1987年から1995年までの時期は日本における新時期小説翻訳の黄金期といっても過言ではないだろう。1995年までに、新時期小説の数多くの力作

³⁴ 『慈禧全傳』と『新・水滸伝』以外、また高櫻『孔雀の舞』（訳本全8冊、朝日ソノラマ、1995）がある。ただし、訳者が中国人の王敏であるゆえに本研究の研究対象から除外された。

が日本語で翻訳出版された。1995 年以降、日中両国関係の変化、日本国内の出版市場の低迷、未翻訳の新時期小説の傑作が少ないなどの理由で日本における新時期小説の翻訳は下火になった。ただし、黄金期に見逃された新時期小説の遺珠は現在まで翻訳され続けている。

3.3.2 黄金期の出現の理由

新時期小説の翻訳状態が 1987 年から一変した理由は以下の 3 つに帰結できる。

1 つ目は、新時期小説自身が大きな変化を遂げたことである。前述通り新時期小説の発展が 1985 年を境にして 2 つの段階に分けられる。李 (1988 / 1992: 68-72) によると、1978-1984 の小説はリアリズムが中心とされていた。同時に、中国が鎖国の政策を廃止するや否や欧米の現代文学思想が洪水のように中国に流入してきた。新時期小説の作家たちがそれらの思想を受け止め、内面に転化した結果、1985 年から欧米モダニズム文学を模する作品が大量に出版された。それらの作品は玉石混交にもかかわらず、従来の一元的なリアリズムを支配する中国文壇に大きな衝撃を与えた。このような変化に日本の中国文学研究者が興味を引き寄せられたのは当然であろう。当時日中両国間における文学作品の流通速度、及び翻訳作業から出版までかかる時間的コストを含めて考え、1985 年からの中国文壇に起ったモダニズム作品が、1987 年から日本で翻訳出版されたのは不思議ではない。

2 つ目は、日本社会には新時期小説の訳本に対する需要が存在していたことである。学者による翻訳が少なかった 1980 年代中前期、日中友好の信念をもって、中国語を独学した日本民間人が新時期小説の翻訳を引き受けた事実は、日本社会において中国新時期小説の読者層が存在し、新時期文学の訳本に対する潜在的な需要を形成していたことを物語っている。1987 年以降、日中両国の経済文化面の一層の交流が拡大するにつれて、そのような新時期小説訳本に対する需要も増大したに違いない。それゆえ、新時期小説翻訳の規模拡大は予想できる現象であったと考えられる。

3 つ目は、新時期小説の研究陣が整ったことである。1987 年以降も一部の民間人翻訳者がなお新時期小説を翻訳していたが、訳者に占める中国文学研究者の割合はそれ以前より大幅に上回っていった。それらの研究者の主な養成機関として、竹内好、竹内実、松枝茂夫ら教授がかつて教鞭をとった東京都立大学中国文学研究科（以下「都立大中文研」と略称）が特筆に価する。

旧帝大を中心とする日本名門大学での中国文学研究は従来「漢文重視」である。しかしながら、都立大中文研は 1950 年代の創立以来、中国同時代の文学に目を向ける研究を伝統として保っていた。都立大中文研の出身者たちは当初から新時期小説の翻訳に深く関わっていた。日本における新時期小説翻訳の濫觴である『傷痕』の訳者西脇及び『天雲山伝奇』の訳者田畑夫婦のいずれも都立大中文研出身であった。

都立大のこのような伝統は、竹内好によって創り出されたものである。竹内は知識人の独立した人格によって、彼の弟子・孫弟子の精神的支柱になる一方、彼が提起した、同時代の中国文学（竹内にとっての「同時代」は五・四文学、1949 年以降の中国文学を指す）を重視する「方法としてのアジア」の中国研究の視点も弟子たちによって受け継がれている。1950、60 年代に竹内の教えを直接に受けた田畑佐和子、牧田英二、市川宏、岸陽子ら同人 8 人は中国同時代文学を精神的資源として使用し日本人の世界を広げるという翻訳目的で 1987 年『季刊』を創刊した。このほか、彼らは新時期小説の翻訳シリーズなどにも積極的に取り組んだ（cf. 第 4 章）。

一方、1980 年代、都立大の中国同時代文学を研究する中堅は松井博光と井口晃であった。この時期、松井と井口は自ら現代中国文学選集など新時期小説の翻訳・研究の成果を取り上げながら、同時代中国文学の研究者（訳者）の養成にも注力した。近藤直子、飯塚容、宇野木洋、山口守、千野拓政をはじめとする両氏の弟子たちは、1987 年以降の新時期小説の翻訳と研究に携わる重要な存在となり、現在でも学界で活躍している。

都立大中文研の出身者以外にも、新時期小説に興味をもつ研究者が増加した。1987 年以

後の新時期小説の研究陣はそれ以前よりかなり充実したといえるだろう。それらの学者は新時期小説の諸課題を扱うと同時に、新時期小説の翻訳にも積極的に取り組んできた。

3.4 新時期小説翻訳により構築した中国の文化的イメージの3つの次元

では、それらの翻訳はいかに日本における中国の文化的イメージの構築に関与するのか。ジュネット（1987/2001:487）によると、「翻訳の場合、いまみたように、序文（ジュネットの定義で前書と後書両方を含む：引用者注）には翻訳者が署名をすることがある。翻訳者=序文作者は、とりわけ、自分自身の翻訳について語るができるのである」。筆者は上記の大部分の翻訳（すべてのシリーズ、『季刊』、1995年までの入手可能な単行本など）の前書きおよび後書きを考察したところ、作者および作品の内容紹介などの情報提供（訳者の書き方によってこのような紹介も中国の文化的イメージの構築にかかわる）以外、訳者はおもに3つのことに言及した。第1は、日常生活における中国民衆の精神状態である。第2は中国民衆と共産党イデオロギーとの関係である。第3は作品自体の文学的価値である。それゆえ、新時期小説の翻訳により構築された中国の文化的イメージは主に以上3つの次元からなるものではないかと考えられる。さらに、日本における新時期小説翻訳の最初期から、訳者たちはこの3つの次元に言及している。本節では新時期小説翻訳の濫觴である『傷痕』、『天雲山伝奇』、『胡蝶』を取り上げ、訳者たちがこの3つの次元に言及する際、どのような特徴に注目したかにふれてみよう。

3.4.1 日常生活における中国民衆の精神状態

考察したところ、訳者は通常、日常生活における中国人の知恵、善良な性格、生きるエネルギーなどプラスの面を浮き彫りにする傾向がある。さらに、このような中国民衆の精神力に対する賛美は常に日中友好の提唱につながることを確認できる。

日本で最初の新時期小説の翻訳選集である『傷痕』の場合、訳者の西脇と工藤は「中国

においても高く評価されているポピュラー作品」(1980: 254)を選んだ。これらの作品のほとんどは当時流行っていた、「黒暗な文革に告別し、新時期を迎え、国家を建設しよう」とする思想を反映した「傷痕文学」である。翻訳目的としては、訳者は「これらの小説を通じて同時代の中国の人々がどのように考え、いかに生きようとしているかを知ることができる」ということや、「もし本書によって、現代中国の文学に関心をもたれる方が少しでも増えれば、訳者にとって最大の喜びだと感じます」と述べ、小説の翻訳を通じて中国人に対する理解を促す意図を示した (ibid)。『傷痕』のほか、のちに出版した『季刊』、『新しい中国文学』シリーズ、『赤い高粱』、『続 赤い高粱』、『春の童話』以外の『現代中国文学選集』シリーズ、そして民間人が翻訳した大部分の新時期小説の訳本の訳後記には、訳者は中国人の日常生活における精神力と美德を高く評価した。

ただし、中国人の日常生活における苦悶に言及する訳者もすこしいる。また、翻訳によって日中両国の一般庶民の共感を探し出そうとする訳者もいる。例えば中 (1990:188) は、陳丹燕の中学生の自殺をめぐる小説の翻訳を通して、「校則にしばられ、受験勉強に追われ、親や教師の無理解」など苦しみの日中両国の中学生に共通するものと指摘する。

3.4.2 中国民衆と共産党イデオロギーとの関係

共産党の一元的統治および1949年人民共和国成立以来、知識人または民衆を巻き込む政治運動が相次ぎ発生したため、民衆と共産党イデオロギーとの関係に言及する際、訳者は両者間の軋轢を浮き彫りにする傾向がみられる。

『傷痕』の後に出版した『天雲山伝奇』は主流的イデオロギーと民間での評価に相違がある文学作品を選択した(民間では人気を博したが、「転勤」は共産党イデオロギーからの厳しい批判を受け、「天雲山伝奇」も「人妖の間」も同じく批判の砲火を浴びてしまう)。訳者の田畑夫妻は、中国社会における様々な不正を読者に伝えると同時に、中国及び中国文学の発展への盲目的な楽観視を戒めている。田畑夫妻のこのような懸念は、中華人民共

和国の従来知識人に対する政治運動の「伝統」と1979年前後に中国で起こった一部の文学作品に対する批判という現実状況からきている。田畑光永（1981: 298）は後書きでこのように自らの憂慮を述べた：

中国の文学者たちは再び厳しい時代を迎えている。…（中略）…現在、「七十九年文学」の旗手たちはしばしの沈黙を余儀なくされているようである。この「しばし」がどれほど続くのか予測はつかないが、外国の読者たるわれわれは、いつの日かの「七十九年文学」の再生を期して待つほかはない。

『天雲山伝奇』のほか、訳後記において主に中国民衆（知識人）と公権力との葛藤を語ったのは『発見と冒険の中国文学』シリーズ、『現代中国文学選集』のなかの近藤訳『春の童話』、安本実・竹内久美子訳『ある冬の童話』（1986、田畑書店）、押川雄孝・宮田和子訳、竹内実解説の『春の童話』（1987、田畑書店）などが数えられる。

3.4.3 作品自体の文学的価値

新時期小説勃興の当初、作家たちのほとんどは現実の社会問題に目を向けていて、文学スキルを磨き、文学的価値の高い作品を生み出すことはそれほど多くなかった。このリアリズムの手法に基づいた新時期小説が中国社会の一側面を記述するもののため、社会資料性が高い。訳者の解説は「日常生活における中国民衆の精神状態」、「中国民衆と共産党イデオロギーとの関係」など主として作品に巻き込まれた歴史文脈上の紹介を行い、L.ウェレックとA.ウォーレン（1948/1967: 65-125）が提起した文学の「非本質」的研究のパラダイムで作品を分析する。この意味では1981年に相浦が王蒙の『胡蝶』を翻訳したのは、「本質」の文学の考えで新時期小説を翻訳する可能性を提示した。『胡蝶』翻訳の3つの特徴に留意しておきたい。

まず、相浦晃は大阪外国語大学中国語学科の教授で、当時中国文学研究界において権威

ある存在である。さらに、NHK テレビ中国語講座の講師（1967-1970）を務めた経歴もあり、学術活動以外の社会活動でも活躍した人物である。相浦が『胡蝶』に視線を注いだことは、新時期文学が大学の重鎮研究者によって、研究対象としても扱われるようになったことを意味している。つまり新時期小説は、学問としての研究または翻訳という、いわゆる学術的な正当性を得たのである。

次に、『胡蝶』を出版したみすず書房は、1947年に創立された、人文科学の専門書を多く出版している著名な出版社である。従来の新時期文学を取り扱う関係図書を専門とする出版社ではなく、地方の小出版社³⁵でもない。日本の有名なみすず書房によって『胡蝶』が出版されたことで、『胡蝶』の学術価値と美学価値に対する一種の肯定が示されたといえる。

最後に、相浦が『胡蝶』を選んだ理由は、『胡蝶』の文学性の高さにも関係ある。『胡蝶』は当時中国文壇でごく珍しい意識の流れ小説である。相浦（1993: 160-161）は『胡蝶』の主人公と原作者王蒙との経歴を比較し、「主人公の体験はつまりそのまま作者・王蒙自身のだった」と確認でき、意識の流れを採用する意図は「文革中に受けた魂の内側の創傷を赤裸々に描いて見せようとした」ことを解明したうえ、作品における意識の流れの創作手法に興味を持っていた。

意識の流れはヨーロッパで始まった芸術の試みで、「記述には夢想と現実が交錯し、連想、象徴、省略、飛躍等が随処に現れ、時間も絶えず前後する。内面世界を精緻にとらえ、人間像をより彫り深くする一方で、感性的な理解から遠ざかり、難解にならざるを得ない」手法である（杉本 1982: 47）。日本では大正末期の野口米次郎、堀口大学らにより紹介され³⁶、すでにありふれた手法として知られている。しかしながら、相浦（1981: 178）は『胡蝶』における意識の流れが西洋の真似事より、むしろ「中西折衷の独特な手法と風格で創

³⁵ 松井（1984: 40）は『ひなっ子』の書評で、新時期小説は翻訳者の多くが研究者ではなく地方在住であり、また「地方の小出版社」により出版されたという事情に言及している。

³⁶ ベメッド・シェリフ「昭和初期における「意識の流れ」をめぐる一ジェームス・ジョイスの「ユリシーズ」と川端康成の「針と硝子と霧」一」を参照、URL：www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/issue/pdf/4/4-01.pdf、2013年12月12日アクセス

造的に中国風の、あるいは王蒙風の、ともいべき意識の流れ小説」と強調した。さらに相浦（1993: 227）は「王蒙ら作家たちが、意識の流れ、やその他の西方現代派の文学手法の長所を慎重に摂取して、人間の内面や心理を描くようになり、従来のリアリズムの範囲を拡大して文学的な貢献をした」ほど、『胡蝶』を含む、王蒙作品の独特の美学価値を認識した。

『胡蝶』のケースは、中国新時期小説が自らの文学的価値によって、海外の一流の中国文学研究者の関心を集め、海外の大手出版社によって出版される可能性を提示した。1980年代後半から、このように高い「文学性」のため注目され翻訳された新時期小説が次第に多くなってきた。中国作家の文学上における様々な試みも、訳者の手を通して中国文学の審美価値を日本人読者に伝えた。ただし、文学性に対する評価基準は訳者によってそれぞれであるため、傑作だと考えられた作品が訳者によって批判された例もある（cf.第5章）。

3.5 まとめ

新時期小説の日本語訳を全般的に見渡してみると、翻訳状況の特徴によって2つの時期に分けることができる。1970年末期から1986年までの黎明期の間、訳本は年間1冊、2冊のペースで出版されていた。そして出版形態の多くは短編小説の作品集である。訳者の構成は研究者、中国に関わる仕事に携わる者、中国語独学者など多様性があった。1987年から1995年までの黄金期においては、訳本は年間10冊前後までに増加した。出版形態は作品集以外、長編小説の単行本、選集シリーズ、新時期小説の翻訳専門誌など多様化を呈した。訳者は大学の中国文学研究者を主とする比較的単一の構成へと収斂されていく。

Venuti(1998: 72)は、冷戦最中の時代にアメリカにおける日本文学の翻訳によって日本の文化的イメージを戦前の脅迫的勢力から「エキゾチック、感傷的、典型的異質な土地」にリライトする、という例を取り上げ、翻訳が「外国文化の確定的なステレオタイプ」を構築したと指摘した。しかしながら、1980年代の日本における中国文学翻訳が作った文化的イ

イメージはステレオタイプより重層的で複雑なものである。数多くの TT 前書と訳後記に対する考察により、翻訳によって構築した中国の文化的イメージが 3 つの次元からなるものが確認できる。

1 つの次元は中国人の生活実態である。日本の訳者は中国人の日常生活における様々な美德、知恵、エネルギーを表現できる作品の翻訳と解説によって、文革を経て改革開放しはじめた中国人の生き生きとした姿というプラスのイメージを構築することである。そして、そのような生活面のプラスのイメージは日中友好の提唱につながる。

もう 1 つの次元は、中国民衆と共産党イデオロギーとの関係である。日本の訳者は中国内部における公権力と知識人を含む一般国民との軋轢に注目し、体制の改善をしないかぎり中国の近代化への道が必ずしも順調だとは限らないことを表現し、政治上の中国における一元的統治のマイナスのイメージを構築することである。

3 つ目の次元は作品自身の文学的価値である。王蒙の『胡蝶』のようなリアリズムの手法からの脱皮を試みた作品は文学価値を練り上げた。訳者はこのような作品の訳後記において、生活状態あるいは政治情勢のかわりに作品の文学価値に対する分析によって新時期小説の文学作品としての審美価値を説明する。

このように、新時期小説の翻訳が構築する文化的イメージ構築の 3 つの次元が確認できた。次の第 4 章、第 5 章、第 6 章では、典型的ケーススタディを通して、翻訳がいかにか上述の 3 つの次元を通して中国のイメージを構築したのかを分析する。

第4章 方法としての中国文学—新時期小説翻訳誌『季刊 中国現代小説』

翻訳を通して中国人の日常生活における精神性と知恵を反映すると同時に日中友好を提唱したものは、日本における新時期小説の翻訳のうち主流的な存在である。このうち、1987年から刊行し始めた『季刊 中国現代小説』（以下『季刊』と略称）の同人たちは竹内好の「方法としてのアジア」という学問的思想を受け継ぎ、STのもつ中国人の知的富みを資源として日本人の精神生活の豊かさに貢献できるようにと、新時期小説の翻訳に取り組んだ。

本章は、新聞など一次資料及び『季刊』の訳後記、前書き、編集後記に対する考察を通じて、以下3つの研究目標を掲げる。まずは、『季刊』の成立と竹内好との関係を解明することである。次は同人たちが提唱した方法としての中国文学がいかに関中国の文化的イメージを構築したのかを解明することである。最後は『季刊』がなぜ長期にわたって維持できたのかを解明する。なお、竹内好の教えを直接受けることができた同人は第I期に集中するため、本章では『季刊』の第I期のみを取り扱うことにする。

4.1 『季刊』に関する情報

まだ多くの研究者が新時期文学に目を向けていなかった1980年代前期、竹内好に大きく影響を受けた、中国現代・同時代文学の重要な研究拠点としての東京都立大学中国文学研究科（以下「都立大中文研」と略称）には、新時期文学に関心を持つ研究者がすでにいた。1987年の春、都立大中文研出身である市川宏、井口晃、大石智良、岸陽子、杉本達夫、田畑佐和子、牧田英二、和田武司の計8名の研究者は、新時期文学の翻訳検討会（読書会）の成果として『季刊』を創刊する³⁷。

『季刊』は、第I期と第II期に分かれている。第I期は1987年春から1996年2月までの間に計36号が発行され、その間に164篇の小説が翻訳、紹介された。第II期は1996年

³⁷ 朝日新聞 1988年7月22日、夕刊、p.1

10月から2005年1月までの間に計36号が発行され、152篇の小説が翻訳、紹介された（連載作品はそれをあわせて1篇とする）。同人の言によると、『季刊』の読者には以下のような人がいると理解されている。中国に関心を持つ人・中国関係の仕事をする人³⁸、中国語を専攻している人・中国語学習者³⁹、中国人作家と（会議・イベントなどで）交流する予定がある日本人作家⁴⁰、である。『季刊』は2005年に刊行を停止したが、3年後の2008年春、『季刊』の一部の同人は新メンバーを加え、新たな翻訳誌の刊行を模索した。この成果として年2回刊の『中国現代文学』が創刊され、現在まで続いている⁴¹。



(写真：『季刊』第1期の1号から6号)

³⁸ 「定期購買者の中に、文学研究者だけでなく中国関係の実務者も含まれる」『朝日新聞』1988年7月22日、夕刊、p.1

³⁹ 「この雑誌を大学の授業のテキストにしていますとか、当代文学で卒論を書く学生はみんなこの雑誌の翻訳を使っていますとか……」飯塚容『『季刊・中国現代小説』の歩みを振り返って』

http://www.mmjp.or.jp/sososha/pdf_file/syosetu.pdf 2014年6月9日アクセス。

⁴⁰ 千野拓政への対面インタビュー、2013年11月18日

⁴¹ 『中国現代文学』に関しては、当該雑誌のHP: <http://www.hituzi.co.jp/kotoba/syokai.html> を参照。

4.2 『季刊』創刊の目的と竹内好との関係

同人が『季刊』を翻訳、出版する目的は、『季刊』第Ⅰ期第2号⁴²の扉裏に掲載されている。以下にそのテキストを引用する。

中国の大地に生きる
人々の暮らしと
いま 中国文学は
それを世界に告げる窓だ
翻訳という鍵によって
その窓を開けよう
明るい景色 暗い景色
写し取った図柄を ひとつひとつ
ならべ つなげ
さらに大きな模様を 浮かびあがらせよう
それはきっと
私たちの世界を広げずにおかない。(傍点は引用者による)

同人は『季刊』を出す目的を、翻訳を通じて中国人の生活と思想を日本人に伝えると同時に、日本人の世界を広げることだと述べている。この『季刊』の発行目的をみるに、編集者たちは従来の中国文学を認知の客体として扱う態度を取るのではなく、中国文学から養分を吸収し、それを通じて日本人、日本社会のさらなる豊かな可能性を追求する、という態度を宣言する。

では、同人はなぜ中国文学に対してこのような態度を取るのだろうか。これを明らかに

⁴² 特別の注がなければ、本章での「第X号」は「第Ⅰ期第X号」の意味。

するためには、『季刊』の同人たちの中国文学の教育的背景を考察しなければならない。『季刊』最初期の同人8人は全員都立大中文研の出身である。同人が教育を受けた当時の都立大中文研は中国現代文学（「五・四」文学）研究の拠点の1つで、中国研究の重鎮が集まっていた。このうち、新時期文学の翻訳検討会（読書会）の成立と『季刊』の発行に影響を与えた研究者は、竹内好⁴³である。

竹内好は1960年、安保条約の強制可決に抗議するため、都立大中文研を去ってしまったが、大学離職後も読書会同人らとの絆を保っていた。読書会の座長であり『季刊』第I期の編集長である市川と竹内好の交流を例に取り上げよう。竹内好が市川にとって、師であり友でもあることは容易に想像がつく。理由は2つある。1つは、市川は竹内の監修の下で『韓非子』（徳間書店、1967）、魯迅の『阿Q正伝』（河出書房新社、1969）、戴季陶の『日本論』（社会思想社、1972）を翻訳したことがあり、ほかにも2人で協力して完成させた中国文学の研究成果が多く存在する。この時期に市川は30代前後にあたり、竹内の推薦がなければ、これほどの量の中国語著作の翻訳に恵まれなかつただろう。もう1つは、1977年に竹内好が他界した際、市川は葬儀の際に弔辞を述べた。同じく弔辞を述べた者には増田渉、久野収、田中克己、野間宏、谷口修太郎、鶴見俊輔がいる。いずれも竹内好の親友であり、日本の人文学研究界での大家である。当時40歳の市川が彼らの列に入れられたのは、市川と竹内の親密な関係の証といえるだろう。

孫（2007: 123）によると、竹内好は少なくとも2世代の人々の世界観に影響を及ぼすとされる。1つは戦後に思春期に入った世代である。もう1つは戦後に生まれ、1968年学生運動の主力となった世代である。年齢上、同人たちは孫がいう2世代のうちの前者である。慶應大教授・長堀祐造は、後に『季刊』の同人になった竹内良雄の退官記念の文で、竹内好の影響力に関して次のように述べた。

⁴³ 本章では姓が竹内である人が三人いる（竹内好、竹内実、竹内良雄）ため、原則としてフルネームを使用する。

竹内良雄は1965年東京都立大学人文学部中国文学科に入学。日本における魯迅研究の先駆者、竹内好氏は60年安保闘争時にすでに岸内閣に抗議して都立大学を去っていたが、その学生たちが院生として在籍しており、竹内好の影響が竹内良雄まで及んだことはいうまでもない。(傍点は引用者による)

さらに、新聞社の取材を受ける時、市川及び後の第Ⅱ期編集長飯塚容は読書会＝『季刊』の同人が竹内好から教えを受けたことを繰り返し強調している。

市川「編集同人の男女9人は、魯迅研究で知られる故竹内好・都立大教授の門下生が中心だ」(朝日夕刊1988年7月22日、1ページ)。

市川「同人は現在12人。在籍する大学や職場はまちまちだが、多くはかつて都立大で故・竹内好教授の教えを受けた研究者だ」(朝日夕刊1991年4月3日、9ページ)。

飯塚「十年前に発足した時の同人九人は、何らかの形で故・竹内好先生の教えを直接受けた人達でした」(朝日夕刊1996年12月9日、5ページ)。

以上の資料からみて、竹内好が同人に影響を与えたことは明らかである。もちろん、以上のケースには同人が竹内好からの教えを名誉あることとして受け止めると同時に、雑誌の宣伝に利用した可能性もある。

竹内の同人に対する影響を、以下2つの面から考える。

4.2.1 読書会の成立と竹内好との関係

竹内好からの影響の1つは、読書会の設立を促したという面である。市川が書いた『季刊』第1号の編集後書きでは、読書会の設立に関して次のように書かれている。

数年前から、かつての六十年安保の虚弱兵(遊撃戦が笑わせる)いま男女の「化石」が集って、懲りずにかつての「読書会」のようなものを始めた。中国現代文学作品の洪水にいくらかでも対応しようという、

良心のあらわれといえないこともない。

この文には3つの特徴があるのに気づく。1つは虚弱兵、遊撃戦など、革命ディススクールシステムにおけるメタファーが多く使用されていることである。2つに、読書会の設立と1960年安保の間に直接的関係があることが推定できるという点である。3つに、中国現代文学作品への対応は同人にとって、「良心のあらわれ」という点である。市川はなぜこう書いたのか。このような記述は竹内好とどのような関係があるのか。

安保抵抗運動が行われた1960年当時、後の読書会の同人となるメンバーは22歳から27歳であった。このうち、杉本、牧田、市川、田畑の4人はちょうど都立大中文研の修士課程に在学中であった。この年齢層の人はまだ研究者の卵であり、彼らの学術観および人生観は教師からの影響を受けやすいだろう。

1960年当時、竹内好は都立大中文研の教授を務めていた。日米安保に対して彼はどのような姿勢をとっていたのか。彼における戦後の日中関係に関する中心的な思想は、中国に対して最も重く戦争責任を感じ、中国との国交回復によってこの責任を償おうとすることにあった(1981: 96)。それゆえ、安保条約に対して、「新しい安保条約が発効したら日中関係の打開は非常に困難になる」(ibid: 95)と主張し、安保条約の可決に強く反対した。さらに、安保条約の強行可決を知って、「憲法無視の状態の下で私が東京都立大学教授の職に止まることは、就職の際の誓約にそむく。かつ、教育者としての良心にそむく」(ibid: 99-100)という理由から、都立大学の教授を辞任することになった。しかしながら、安保闘争は6月18日に安保条約の国会での自然承認によって、失敗に終わる。竹内好は、抵抗したにもかかわらず、安保条約の調印を阻止できなかった。同人らにとって、1960年は激動であり、失敗におわった年である⁴⁴。「虚弱兵」、「遊撃戦」などのメタファーは、政府の外交政策に

⁴⁴ ちなみに、当時都立大中文研のもう一人の名教授、田畑佐知子の指導教員である竹内実は安保闘争のさなかの1960年5月30日に、野間宏をはじめとする日本文学代表団の一員として、インドを経由し中国を

抵抗しても到底結果は変えられないという彼らの無力感を物語る。これは竹内好 (ibid: 102) の「態度決定をしなければならない… (中略) …私の選びうる範囲では、おのずから公職を退くという消極的な手段に考えが行き着かざるをえない」という行動への同情である。そして、文の最後の「良心のあらわれ」は、竹内好が自らの行動によって樹立した、知識人が持つべき正義感への同人たちの憧れである。この正義感は、同人の「季刊」創刊を促すと同時に、1989年北京の政治事件の際に同人らの批判的な声をあげる精神的な原動力になる (4.3.1 を参照)。

4.2.2 同人の中国文学観と竹内好との関係

竹内好が同人に影響を与えたもう1つの方面は、同人の中国文学観にある。

竹内好 (1966/1993: 260) は日本人の中国観を検討する際、明治以来日本人の文明観は「文明一元観」であると帰結した。「文明一元観」とは、「歴史は未開から文明への一方通行だ」という歴史観を軸にして世界を解釈する思想のこと」である。このような文明観が浸透している日本の民衆は後進的な中国を見る際、「侮蔑感」を持つようになったと指摘している (ibid: 64)。

竹内好の学術思想の中核は、「西欧的な優れた文化価値を、より大規模に実現するために、西洋をもう一度東洋によって包み直す、逆に西洋自身をこちらから変革する、この文化的な巻返し、あるいは価値の上の巻返しによって普遍性をつくり出す。東洋の力が西洋の生み出した普遍的な価値をより高めるために西洋を変革する」 (ibid: 469) という考え方に帰結できる。これを実現するために、彼は中国、インドなど、「非常に内発的に」 (ibid: 453) 近代化の道を歩むアジア諸国の再評価が必要になるとする。

彼がとった中国を再評価する方法とは、中国文学に切り込むということである。竹内好

訪問した。この代表団は7月6日までに、40日弱の間中国に滞在して、上海で毛沢東と周恩来の接見を受けた。このことから、都立大中文研の教授たちの日米安保に対する姿勢は明らかであろう。

(ibid: 443)によると、「私は文学というものを広く考えております。ある国の人々のものの考え方とか感じ方、さらにそれを通してもっとも深いところにある生活そのもの、それを研究対象にする。もののほうから生活をみるのではなくて、心の面から生活を眺めるのが文学だ」。呉(1996: 118)によると、竹内好の中国文学に対する研究は、文学が現実に関与する独特の方式を用いて、現実政治(大東亜戦争)以外の文化政治を構築することである。彼は中国文学そのものを研究することから、中国文学研究/中国研究を方法として、日本自らの主体性を掘り出すという試みへと発展させた⁴⁵。

竹内好のこのような中国文学観と、「中国の大地に生きる人々の暮らしと想い、いま中国文学はそれを世界に告げる窓だ、翻訳という鍵によって、その窓を開けよう」とすることによって、「私たちの世界を広げずにおかない」という『季刊』の掲げた目標とを対照すれば、両者のどちらも、中国文学を方法として、日本の近代化の道を反省しながら、日本人の独特の政治・文学・生活空間(市川がいう日本人の「世界」)での新しい展開を目指すという共通の方法論がみられる。このことから『季刊』の同人が竹内好の中国文学の捉え方を受け継いだことが見て取れる。ただし、竹内好が方法として利用した文学資源は魯迅など、五・四時代の作家であり、対して『季刊』が利用したのは、新時期文学の作家である。

4.3 「方法としての中国文学」と中国の文化的イメージとの関係

同人は竹内好の思想を受け継ぎ、翻訳を通じて中国を観察の客体から、みずからの対照物に変化させる目標を提起した。このような方法としての中国文学がいかに関現するのか、その考えがいかに関中国の文化的イメージの構築にどのような影響を与えたのか。それを解明するために、本節では同人の『季刊』のST選択及び訳後記、編集後記の作成に貫かれていると思われる主導的思想として、以下3つの観点に着目する。

⁴⁵ 竹内の中国の近代化に対する客観性を超える賛美と憧れは、溝口(1989)をはじめとする学者の批判を招く。

4.3.1 文学を政治イデオロギー批判の道具にしない

1つ目の主導的思想として、中国文学と政治を分離する試みを挙げたい。

中国文学は終始政治と密接に関わっていたため、それまで日本で出版された新時期小説訳本の後書きのうち、意識的/無意識的に何らかの形で共産党政権との関係で中国文学を捉えているものが多かった。このアプローチは新時期小説を考察する視点の多様性を抑制する。政治と文学の関係というイデオロギー批評の立場で新時期文学を観察すると、2つの結果しか導くことはできない。1つは政治からの干渉が少なくなったことで、新時期文学がよりよく発展するだろうというものである。もう1つは、共産党の政治政策は朝令暮改であり、新時期小説は必ずしも順調に発展するとは限らないというものである。中国文学を通して日本人を観照するつもりであれば、中国文学はイデオロギー批評の道具にすぎないという日本人の従来の考えを変えなければならないだろう。そのため、同人は具体的に、以下3つの手段を使用して、イデオロギー批判を、中国文学をみる唯一の立場から複数の立場のうちの1つに降格させる。

①中国文学と重大な政治事件との関係を切り離す

『季刊』は中国文学の専門誌として、文学の範囲で中国事情を取り扱う。中国で起こる政治事件に対して、『季刊』の公式的な態度は非常に控えめで、できる限り中国文学と重大な政治事件との関係を切り離そうとする。

例えば、1989年の政治事件は、日本の中国研究者の間に未曾有の波紋を投げかけたが、事件発生後の第11号(1989/10/31)、第12号(1990/1/30)、第13号(1990/4/30)をみると、この3冊には事件に影響された作家のうちの1人である鄭義の作品「遠い村」が収録されている。「遠い村」は大石智良によって翻訳され、紙幅の都合で第11号から第13号にかけて連載されているのである。長くなるが、政治上煩瑣な問題が発生すると思われる作家の作品に対する、同人の取り扱い方を知る例として、次に大石の「遠い村」に対する翻訳の

ケースを詳しく述べる。

鄭義は山西省の代表的作家であり、日本では1987年の東京国際映画祭でグランプリを受賞した映画「古井戸」の原作者として知られている。学生運動を支持したために、3年間の亡命生活を送った。その後、妻と共に香港を経由してアメリカに脱出した。彼の小説は主に中国山西省の農村生活に取材し、山西農村の苦しい伝統的生活と厳しい環境の中でも希望を捨てずに懸命に生きる農民像を描く。大石によって翻訳された「遠い村」は、1983年に発表された作品である。物語の粗筋は次のようなものである。朝鮮戦争から復員した主人公の楊万牛はもともと幼馴染の恋人葉葉（大石のTTでは「葉々」。以下葉々）と付き合い。しかしながら、葉々は山西省農村地域の独特な婚姻習俗「豆腐交換婚」の形で張四奎という男と結婚してしまう。様々な事情があつて羊飼いになった楊万牛は張四奎との間で葉々を「シェア」すると同時に、葉々と張四奎の家計を支える状態で生活する（これを「道連れ」という）。このような生活が20年間ほど続いたが、結局葉々は楊万牛の息子犬犬（大石のTTで「犬々」）を産んでから死んだ。1980年、農村で経済改革が行われ、山西省農村地域の生活条件も次第に向上する。楊万牛は、子どもたちが自分と葉々のような辛い生活を送る必要はもうないということに胸がいつぱいになる。

この小説を発表した当時の鄭義は、復員軍人に対する支援の不足や農村政策の失敗など、共産党の諸政策を批判するつもりはまったくなかったが、小説には共産党批判として捉えられる内容が多く含まれている。しかし、訳者の大石は1989年の政治事件直後のような激動の歴史的文脈においてさえも、「遠い村」をイデオロギー批評のアプローチから分析することをしなかった。3篇の訳後記では、彼はおもに小説内で描かれる婚姻文化と動物の占める比重の大きさに注目する。

まず、大石は小説の構造を考察する角度から、「道連れ」など風変わりな婚姻形式は小説に安定感をもたらしていると指摘する（第13号: 176-177）。

ふたりは恋愛を、制度としての婚姻という形で成就できなかったが、「道連れ」という土地の習俗が許す変態的婚外婚の形で全うした。外在的事情で成就できなかった恋愛を内的に全うするというパラドクスが二人に限りない憂愁と憎みをもたらし、惨酷な生をたどらせた根本である。しかし、この作品世界の特徴を憂愁、憎み、惨酷などの暗いイメージだけで覆うことは難しい。「道連れ」のほかに「副え馬」（「道連れ」とほぼ同じ意味：引用者注）というもうひとつの風習の力が同時に動いていて、それが作品世界に奇妙な安定感と明るさを与えているからである。

もう1つは、小説における動物に対する描写である。主人公は羊飼いであるため、牧羊犬が必要不可欠の存在であろう。とくにこの小説では牧羊犬の比重が極めて高い。紙幅からみて、ボス犬のクロは殆ど第2の主人公と位置付けられる。大石（ibid）が指摘するように、「動物が作品世界でこれほど比重をしめるのは、中国文学にあっては極めて珍しい」。彼は鄭義がクロを主人公格にまで引き上げる理由を、主人公との鮮やかなコントラストをなすようにするためと分析する（ibid）。

自由と束縛、勇猛と懦弱、…（中略）…楊万牛のみじめな生活を描きこむにつれて、クロの生命力あふれるイメージも対照的に膨らんでいったのだと見てよさそうだ。

大石は、「遠い村」の文学性に注目し、「豆腐交換婚」は作品世界に奇妙な安定感と明るさを与えており、クロの役割は主人公とのコントラストをなすものとして使われていると分析する。このように純粋に文学作品として取り扱われる「遠い村」の例をみると、手配を受けた中国作家の作品であっても、同人は政治批判の道具としてそれを使用しなかったとわかる。

ただし、同人は第10号の編集後記において隠喩的表現で政治事件に対する自らの考えを示す（第10号:181）。

このところ耳について離れない曲があって、それは「インター」なのだ。…（中略）…（歌詞での）「奴隷」はだれか、「真理」はなにか、「旧世界」はなにか、「一無所有」なのはだれか、「天下の主人」はだれか、だれであるべきか。…（中略）…「最後の闘争」で「旧社会」を守った人々は、自分たちに唱和する声が「楚歌」であることを知るべきでしょう……

事件では学生が終始「インターナショナル」を歌っていた。特に学生が「インター」を歌いながら、手を繋いで広場から退場したことは、「インター」を事件における1つの象徴的存在にした。編集後記において市川はあの事件に言及する言葉は一語も書いていないものの、「インター」はすぐに読者に事件を連想させた。さらに、「インター」の歌詞が事件との間にインターテクスチュアリティがあるため、市川は「インター」の歌詞を利用し、運動を弾圧する人々に詰め寄りながら、運動に参加する人たちを励ます。

また、事件に関する控えめな感想は同人の訳後記にも散見される。例えば、井口は13号劉心武「忘れ傘」の訳後記には「この訳を終えたのは一年ほど前のことだ。その後、海を隔てた者でさえ胸の動悸があらためて強まるような痛ましい事がつづいた」と述べた。13号は1990年4月に出版したため、「一年ほど前」は1989年4月である。するとその後の「痛ましい事」が何を指しているのかは判断しやすいだろう。

以上をまとめると、同人は中国文学を中国政府を批判する武器とはしていないが、必ずしも共産党政権に無批判で、盲目的に日中友好を提唱する人たちでもない。彼らは安保闘争時の竹内好のように、知識人の良知と批判意識を持ちつつ、非正義と思われた行為に自分の声をあげる研究者の集合体である。

②訳後記、編集後記で中国政治を論じることの回避

「季刊」では、原則2枚以内の訳後記がつけられている。さらに、編集者市川による編

集後記がある。同人は中国文学の専門家であるゆえ、訳後記と編集後記で述べられる作品に対する評価は読者に直接的な影響を与えるに違いない。では、同人はいかにそれらのテキストを書くのか。

訳後記は、作家の紹介、小説の背景知識の説明、小説に対する訳者自らの感想、という3つの部分から構成される。『季刊』には2、3行しかない訳後記もかなりあるものの、第22号でのウロウドの「雪」の訳後記は2ページにおよぶ充実した内容であるため、これを例として説明しよう。訳後記の第1段落では原作者ウロウドの出自民族エベンキ族の基本情報を紹介する。第2段落ではウロウドの経歴を述べる。第3段落ではウロウドの作風と本作品の読み方を分析する。第4段落では訳者が自らの生活経験に結び付けながらこの小説に対する感想を述べる。第5段落ではウロウドの最新状況と最新作を紹介する。文章中には、中国共産党の政治、少数民族施策などにはまったく触れられていない。

編集後記の場合、内容はいくつかの例外を除いて、当該号の編集におけるエピソードまたは『季刊』に関する情報説明（使用するワープロ機種の変更など）に限られる。

このような訳後記と編集後記の書き方からみても、同人が中国政治を論じることを回避していることが分かる。

③STの選択を訳者に任せる

Holz-Mänttari (1984) が指摘するように、翻訳行為 (Tranlatorisches Handeln) は単純な言語間のコード転換活動ではなく、専門家、依頼者、読者に関わる複雑な行為である。それゆえ、訳者は常に自らが翻訳したい作品を選択できるわけではない。例えば、第2号から同人に加入した近藤直子は1987年の『現代中国文学選集』シリーズでは、物議を醸した遇羅錦の小説の翻訳を引き受けていた。近藤が当時「若輩の一訳者で、企画編集や中国側との交渉に関わる立場にはなかった」⁴⁶ことと、「遇羅錦」巻の監修者が彼女の大学研究科の

⁴⁶ 近藤直子へのメールインタビュー、2013年8月8日。

師匠松井博光であることを合わせて考えてみると、近藤が「遇羅錦」巻を翻訳したのは訳者、依頼者の間の打ち合わせの結果であろう。

しかし、このような現象は『季刊』においては殆ど存在しないと思われる。なぜなら、『季刊』第1号で「掲載作品の選択は、全く同人の個人の意志にもとづく」という原則を掲げたからである。このような原則のもとに、同人は自らの専門知識と学術上の興味に基づき新時期小説のSTを選択できる。近藤の学術的関心は1985年以降の中国モダニズム文学にある。特に女性作家残雪に関する研究業績が数多くあり、残雪の研究者として知られている。選集シリーズでのST選択とは対照的に、第I期の『季刊』では、近藤は13篇の小説を翻訳したが、このうちの10篇が残雪の作品である。残りの3篇のうち、劉索拉の「滑走路」と徐曉鶴の「院長と彼の気狂いたち」も残雪の作風に近い不条理主義の作品である。つまり、『季刊』において訳者は、自らの専門知識と学術上の興味に基づきSTを自由に選択していたことが伺える。

同人は『季刊』において以上の3つの方針を貫き、中国文学を政治批判の道具にしないようにと意識したのである。

4.3.2 小説を通じて中国人の生活と思想を知らせる

『季刊』の同人たちは中国文学研究者という身分は共通しているが、それぞれが自分の専門領域を有している。例えば井口晃は農村を題材とした小説に関心を寄せる。牧田英二は中国少数民族文学の専門家である。田畑佐和子は共産党統治下の知識人の運命を研究し、のちに女性作家への関心が強くなる。飯塚容と市川宏は中国文学を総合的に取り扱う⁴⁷。近藤直子は残雪を中心とする新時期モダニズム文学の研究をする。同人は新時期小説の各領域に精通する研究者の集まりと言っても過言ではない。同人による作品選択には3つの傾向があると思われる。

⁴⁷ 飯塚容の主な専攻は中国現代劇であるが、『季刊』では原則として小説以外のテキストの翻訳は掲載されない。

① 各タイプの小説がバランスよく紹介されている

『季刊』が創刊された1987年の頃には、すでに中国では1985年以前に主流であったリアリズム文学は下火になっており、西側の文学思想を参考にする文学作品が開花する状況にあった。にもかかわらず、『季刊』では、新時期の中国文壇に存在したあらゆる文学思潮の作品を選んでいる。このうち、1985年以降のモダニズム小説が占める割合は1985年以前のリアリズム小説よりやや多い。

また、中国のモダニズム小説には様々な流派がある。このうち王安憶、莫言が代表するルーツ文学、残雪の不条理主義、格非が代表するパイオニア文学、余華、蘇童が代表する新写実主義などが代表的流派である。同人はこれらの中国の最新の文学傾向を示す流派を『季刊』で紹介した。このうち、同人の近藤は残雪の研究者であるがゆえに、残雪の作品を10篇ほど翻訳し、これは中国作家のうちで最も多かった（いずれも近藤訳）。

② 中国の伝統的生活哲学に富む小説が紹介されている

中国のモダニズム文学を大量に紹介する一方、同人は中国人の伝統的思考様式が反映している作家も重視する。例えば、荘子思想、周易など中国の伝統的思想から創作の養分を吸収する阿城に関しては、5篇の作品が収録された。

4篇の作品が収録された汪曾祺は沈從文の教えを受けたことから、中国小説の真髓を心得た作家といわれている。新時期文学の時代に実作をもって中国文学の「良き伝統」の手本を示した功績が大きい⁴⁸。『季刊』に選ばれた彼の作品は、民衆の生活に着目し、穏やかな筆先で「郷土中国」の人々の生活状態と生存哲学を描写する。

同じく4篇の作品が収録された史鉄生は下半身麻痺という障害を負う体験をしたために、彼の作品には生命と人生に対する特別な思考と悟りがある。彼の生活をめぐる「随想」、及び抽象的な世界を描き哲学的な問答が交わされる「哲理小説」は同人の間で関心が高かつ

⁴⁸ 飯塚容『『季刊・中国現代小説』の歩みを振り返って』http://www.mmjp.or.jp/sososha/pdf_file/syosetu.pdf、2014年6月9日アクセス。

た⁴⁹。

③ 少数民族作家が書いた小説が紹介されている

少数民族作家の紹介を続けたことも、『季刊』の特色の1つである。同人の牧田英二は、専攻が中国の少数民族作家の文学であるため、『季刊』第I期では少数民族作家が書いた小説を17篇翻訳して収録している（表①を参照）。

第4章表①少数民族作家の内訳表

名前	民族	篇数
艾克拜尔米吉提（アクバイルミギティ）	ウイグル族	1
乌热尔图（ウロウド）	エベンキ族	4
扎西达娃（ザシダワ）	チベット族	4
色波（セボウ）	チベット族	1
丹珠昂奔（デズウアンベン）	チベット族	2
赵大年（チョオウ ダネン）	満族	1
边玲玲（ベン リンリン）	白族	1
蔡测海（ツァイ ツェハイ）	土家族	2
马拉沁夫（マラチフ）	モンゴル族	1

この表から、牧田は各民族の均衡を保つように気配りし、できるだけ多くの少数民族の作家を日本に紹介していることがわかる。このうち、1985年以前のリアリズム流派の重鎮ウロウドと1985年以降のマジックリアリズムの先駆者として知られたザシダワの作品がそれぞれ4篇ずつ選ばれたのは非常に合理的である。なぜならこれらの小説は少数民族作家

⁴⁹ 第I期第II期を通算すれば、史鉄生の作品は7名の同人が翻訳した16篇で、掲載作品の内もっとも多かった。飯塚容『『季刊・中国現代小説』の歩みを振り返って』http://www.mmjp.or.jp/sososha/pdf_file/syosetu.pdf、2014年6月9日アクセス。

が自民族の文化と日常生活を題材としているため、日本人の読者にとって、多民族国家中国における少数民族の考えと生活の実態を理解する上で役に立つと思われるからである。

以上3つの傾向からみて、『季刊』に収録された小説は共時的に多種多様の流派があると同時に、通時的関心から現代中国人の哲学的な思考と古代中国の伝統的の智慧が秘められた作品を重んじていると言えよう。この結果、『季刊』には、中国の現実を反映するリアリズム小説もあれば、世界文学の主流思潮の軌道に乗るモダニズム小説もある。中国人独特の生活哲学が含まれる哲理小説もあれば、各民族の伝統的生活状態を追求するルーツ探し小説もある。『季刊』は中国を知るための1つのデータベースと言っても過言ではない。これを読む日本人読者は現代中国人の生活と思想を知ることができるだろう。

4.3.3 中国人の精神力を伝える

『季刊』では、日本人の世界を広げようとする究極的目標を実現するために、もう1つの指導的思想が貫かれていると見ることができよう。それは中国人と日本人の同情喚起、及び中国人の精神力を日本人に伝えることである。

例えば、1995年1月17日、兵庫県南部地震により阪神・淡路大震災が発生し、被災地域では6,400名以上の死者が出た時、竹内良雄は1996年2月29日に出版された『季刊』第36号で馮驥才の「あの人は生きている」を掲載した。この小説は中国で1976年に起こった唐山大震災を背景にしている。粗筋は、盲目の主人公が倒壊した建物に押しつぶされそうになったとき、スポーツマンらしい人に助けられた。しかし、スポーツマンは主人公を救うために、瓦礫の下敷きになった。救助された主人公はやってくる解放軍に頼み、スポーツマンを救おうとしたが、盲目のため正しい場所がわからず、捜索ができなかった。地震で被った傷が癒えた主人公は命の恩人を探し回るが、結局見つからなかったというものである。小説では地震を扱っているが、被害者たちの惨状や都市の壊滅を後景化し、災害に直面する普通の人々の自己犠牲の精神と互いに助け合う精神を前景化している。

竹内良雄（第36号:78）は小説を翻訳する目的について以下のように述べる。

小説では、一種の美談を取り上げて書いているが、われわれはこのような小説を読まなくなって久しい。人間は大災害を前にした時だけ、精神のバランスを保つためにも、美談を取り上げずにはいられないのかもしれない。

中国作家が掲げた災害時における人々の積極的な精神力は、日本人にとって共感を呼び起こし、精神的バランスを保つのに有益な資源である。そのため、竹内良雄はこの小説を翻訳したのである。

小括すれば、中国文学を方法にして、日本人の世界を広げようとする同人は『季刊』を編集する際、主に3つの主導的思想を貫いた。①中国文学を中国政治批判の道具にしない。②多種多様な中国文学の紹介によって、日本人読者に日常の中国を知らせる。③中国人の精神力を有益な資源として日本人に伝える。この3つの原則が目的を達成するために同時に働くということである。

- ①中国文学を中国政治批判の道具にしない
 - ②日本人読者に中国の日常を知らせる
 - ③中国人の精神力を日本人に伝える
- } 日本人の世界を広げる

ちなみに、同人たちの合意により、『季刊』の翻訳原則は「原文に比較的忠実に」⁵⁰訳すことである。本章では同人の『季刊』編集上の中心的思想に研究の重点を置き、翻訳における異質化の運用例に関しては追究しない。

では、上記3つの指導的思想に基づき構築された中国の文化的イメージには、どのよう

⁵⁰ 「毎日新聞」、1996年11月22日、東京夕刊、p.12

な特徴があるだろうか。まずは、専門分野が異なった同人が様々な種類の作品を 150 篇以上翻訳紹介したことで、一時的に騒がした政治事件の影響から解放された、重層的かつ全面的な文化的イメージが構築できたことだろう。それにより、従来特定の政治事件に関心を持って中国研究を読む日本人読者にも、日常的な中国という考察視点を提供することになっただろう。もう 1 つは、『季刊』の出版目的が中国文学を精神的資源として日本人の世界を広げることであるため、学ぶ価値がある中国人の生活哲学を意識的に強調したことである。

4.4 『季刊』が長期にわたり維持できた理由

『季刊』発刊当時の日本の出版業界は中国現代小説にあまり好意を示していなかった。にもかかわらず『季刊』の発行が継続して行われた理由は以下 3 つにまとめられるだろう。1 つは、『季刊』の作成にあたりコストを削減できる新しい文字処理技術の導入時期であったことである。もう 1 つは出版社の協力である。3 つ目は、中国文学の著作権上の便宜である。

4.4.1 文字処理技術の革新と翻訳事業の発展

『季刊』が生まれた当時、日本では中国同時代小説は売れ行きの良いものとは思われていなかった。さらに『季刊』は雑誌であるため、読者の持続的な関心と購買が必要である。それゆえ、従来の出版の流れで『季刊』を出版することは、不可能ではないものの、出版社の負担をどう軽減するかが問題となる。

このような背景を踏まえると、ワープロ専用機（以下「ワープロ」と略称）という文字処理設備の登場が、『季刊』の公開出版を大いに後押ししたことは想像に難くない。ワープロは文章を入力、編集、印刷できるシステム機能を組み込んだ機械である。80 年代後半には、すでに値段が 30 万円以下に下がると同時に、大きさも持ち運びが可能のように小型化

され、中小企業や個人への導入が始まった。同人のうち、ワープロを運用して、新時期小説の訳本を出版することを最初に提唱したのは、市川である。市川は蒼蒼社主人の中村公省からワープロの紹介を聞き、「これは蒼頡・蔡倫に比すべき、文字印刷史上の大変革」と思い、「さっそく一台購入した」（市川 第1号: 183-184）。のちに、中村がワープロを使用してブックレットを作る作業から市川は啓発を受け、読書会の同人全員にワープロを購入させ、読書会の成果をブックレットの形で残すことにした。このブックレットが『季刊』の前身である。

市川は第1号の最後に次のように書く。

この雑誌は訳者が自分で打ったワープロを集中して編集し、最終的に30ドットレーザービーム方式プリンタで打ち出したものを版下として、簡易オフセットによって印刷したものです。版下作成までは全て同人の手仕事によっています。使用機械は富士通オアシス・ライト、AF30、オアシス100H・GX。同様な形での「ゲリラ」の蜂起に期待します。

文章から2つのことが読み取れる。一つは、製本の具体的な流れと使用機械の規格を逐一記入し、その機械を使える新人（の増加）に期待するということである。この結果、第2号から加入する近藤直子をはじめ、第1巻の終結編である第36号では同人数はすでに8人から14人に増えるに至り、同人組織はかなり拡大した。ただし、ワープロで文字処理ができる、中国現代文学の翻訳ができる、読書会での議論ができるなどの条件をすべて満たす人物は、大学での中国文学研究者以外にはきわめて少ない。市川が求める同人像は事実上、東京在住の中国文学の研究者に限定される。増えた6人⁵¹は全員大学での中国文学の研究者であったという事実はこれを裏付けるだろう。市川も指摘している⁵²。

⁵¹ 増えた6人は、近藤直子、飯塚容、千野拓政、竹内良雄、渡辺新一、金子わこ。

⁵² 市川宏「《季刊 中国現代小説》 第一期完結に際して」『蒼蒼』第67号
<http://www.mmjp.or.jp/sososha/soso/soso067.html#SO2> 2014年6月4日アクセス

同人の構成ということであれば、最初の八人が種となり、人間的つながりで広がったわけなので当然「偏り」がある。翻訳という作業の性質として、細工は流々ということはあるにしても、さほど「観点」にはこだわらないから、だれでも参加できる道理ではあるが、物理的・心理的な垣根がどうしても邪魔するのだろう。

もう1つは、版下までの全ての作業が、同人の手作業で済むことである。当時の出版の流れでは、手書きの文章を本にするためには「活字」を職人が一字一字打ち込まねばならなかった。同人らがワープロで文字処理をして今のパソコンでできるような版下をみずから作成することは、当時の出版の流れでは進歩であり、それによって『季刊』の出版費用も削減されることとなった。

このような方式で出版された『季刊』第1号から第22号の単価は700円程度である⁵³。しかしながら、のちに製作諸費用が徐々に増加したうえ、さらに1992年10月に中国がベルヌ条約へ加入し、許可無く無償で中国作家の作品を公開出版することができなくなった。このような背景から『季刊』第23号から第36号までの単価は1,236円になる。『季刊』の発行部数は最初1,000部であったが、売れ行きを考えて後に每期700部前後にまで減らすことになる。

では、『季刊』の収支状態はどうか。編集後書で市川はこれに言及する際、「平行飛行」、「収支トントン」、「利益追求ではない」、「ずっと少しだけ赤字」、「拠出金連続追加という事態になっていないのは、ハッピーと言わねばなりません」などと繰り返し述べる。恐らくワープロを使用せずに、製作コストを減らしていなければ、『季刊』がいつまで維持できていたかは非常に疑わしい。

⁵³ 郵送費・送金費こみ1,000円、店頭販売では1,030円

4.4.2 出版社の協力

同人はワープロの使用によって、製作コストの削減を試みた。と同時に、出版社側の協力がなければ『季刊』の長年にわたる安定した出版状況を維持することは困難であっただろう。なぜならば、『季刊』の運営モデルは、もともと出版社の扱う版下作成の業務をみずから代行することによって製作費用を減らそうとするため、事実上出版社の利益を減らすことになる。さらに、売れ行きの良い中国同時代文学の雑誌を定期的に出版するということは、出版社にとって冒険的行為に違いない。それについて、市川は次のように指摘している⁵⁴。

「『季刊』を）流通に乗せ、必要に答えるという形で雑誌の理念も経営もなりたつわけだから、これを担う蒼蒼社なしでは印刷済みの紙の山が虚しく積みあがるのみであろう。」

蒼蒼社は、ほかの新時期小説の訳本を出す出版社と同様、小規模の中国書籍専門出版社であり、1982年に創立された。「蒼蒼」の出典は『莊子』の「天ノ蒼蒼タルハ、ソノ正シキ色ナルカ」であり、同人のもう1人の師匠であった竹内実によって名づけられた⁵⁵。その最初の業務展開は、竹内実と密接な関係を持つというものだった。蒼蒼社が『季刊』の出版を受け入れる理由は3つあると思われる。

① 蒼蒼社社長の中村公省と『季刊』の編集者市川は古い友人である。

第1号の後記によると、市川は中村の勧めに応じて、蒼蒼社の仕事現場でワープロ作業を見学して、ワープロの購入を決心した。その後、市川は中村のワープロを使ってブックレットを作る様子を見て、『季刊』の出版に乗り出すことを考えた。したがって、『季刊』の誕生に中村が深く関わっていると言っても過言ではない。さらに、これらの事実から推

⁵⁴ 市川宏「《季刊 中国現代小説》 第一期完結に際して」『蒼蒼』第67号
<http://www.mmjp.or.jp/sososha/soso/soso067.html#SO2>、2014年6月4日アクセス

⁵⁵ 中村公省「『竹内実全集』を！」http://www.21ccs.jp/soso/takeutisenseituito/tuitoubun_nakamura.html、2014年6月4日アクセス。

定できることは、中村と市川は以前からの友人であり、そうでなければ、中村は市川にワープロを勧め、また市川を社内見学に誘うはずがないという点である。2人のこのような個人的交友関係は、『季刊』刊行の成立に一定程度影響を与えたであろう。

② 決済方式によって出版社がリスクをコントロールできる。

『季刊』刊行会と蒼蒼社との決済は次のように行われる（第22号:203）。

（同人はまず製作費用を出版社の口座に振り込む：括弧は筆者注、以下同様）原則として年に四回（『季刊』を出版するたびに）、清算を行うことになっている。間違いが起きるといけないので、毎回銀行口座に振り込み振り込まれるという、現金キャッチボール作業を行っている。つまり、会としては蒼蒼社から売上金（の一部）を貰い、そこから製作費等の諸経費を支払うわけだ……

まず蒼蒼社は同人から製作費をもらう。その後、『季刊』の売上金の一部を同人に渡して、さらにその中の一部を次期の製作費として返金してもらうシステムである。この方式では出版社の立て替えが一切必要ないため、ひとまず出版社側の利益が保障できる。これは、蒼蒼社が『季刊』の刊行に協力する理由の1つであろう。

③ 『季刊』と蒼蒼社は互いに宣伝しあう

『季刊』初期の成功によって、『季刊』が蒼蒼社の宣伝になった可能性が考えられる。中国研究者間で知名度が高い『季刊』を出版することによって、蒼蒼社自体も知られるようになったと考えられる。蒼蒼社のホームページには「中国現代小説」というコラムがあり、クリックすると『季刊』第Ⅰ期・第Ⅱ期の目録及び第Ⅱ期の訳後記録など非常に詳しい情報が掲載されている⁵⁶。

一方、同人は『季刊』に関してマスコミの取材を受けるたびに、蒼蒼社の名前（場合に

⁵⁶ <http://www.mmjp.or.jp/sososha/novels.html> を参照（2014年6月5日アクセス）。また、2005年9月『季刊』第Ⅱ期36号の出版が完結すると、『季刊』と蒼蒼社との関係が切れる。『季刊』第Ⅲ期たる『中国現代文学』はひつじ書房によって出版されることになる。

よって住所・電話まで)に言及する。これらの記事では蒼蒼社の名前が通常『季刊』の後ろに併記され、人目を引くところにある。例えば、以下のようである。

「文化大革命以降に発表された、中国人の生活感を映す現代小説を翻訳刊行してきた《季刊・中国現代小説》誌の第2期刊行が蒼蒼社（東京都町田市、0427・21・xxxx⁵⁷）」で始まった。」毎日新聞・東京夕刊、1996年11月22日。

このほか、『季刊』では、蒼蒼社の情報誌「蒼蒼」を雑誌の最後に添付する形にした。同人と『季刊』が、蒼蒼社の宣伝に役に立ったことは確かだろう。

以上3つの理由で、蒼蒼社は『季刊』の出版を請け負ったものと思われる。市川が「《季刊 中国現代小説》第一期完結に際して」、読書会と蒼蒼社の関係は「たぶん『会』のほうが少し優勢な立場にある」とまとめた⁵⁸。これはホンネかタテマエか分からないが、蒼蒼社と読書会の協力は大きな成果を残したといえるだろう。

4.4.3 中国作家の著作権への対応

先に少し触れたが、中国が1992年10月までベルヌ条約に加入していなかったことは、新時期小説の日本での翻訳出版にとって絶大に有利な条件であった。『季刊』の場合、第I期の23号と24号が発行される間に、中国がベルヌ条約に加入した。これに対する『季刊』のすばやく適切な対応は『季刊』の発行を保障することとなった。

従来、同人は原作者との交渉の手間も著作使用料も無い状態で、気に入った中国作家の小説を翻訳し、出版できていた。『季刊』は1992年10月までに第I期36号のうちの3分の2にあたる23号を出し、小説を計109篇（連載は1篇とする）を翻訳した。

⁵⁷ 引用者による暗号化、原文には数字がでる。

⁵⁸ 市川「《季刊 中国現代小説》第一期完結に際して」『蒼蒼』第67号
<http://www.mmjp.or.jp/sososha/soso/soso067.html#SO2>、2014年6月4日アクセス

1992年10月14日、中国がベルヌ条約に加入すると、翌10月15日の時点から、中国作家の著作権が加入国の中で保護されるようになった。同人は従来のように小説を翻訳し、読書会で互いに検討することは可能ではあったが、作者の同意を得ずにTTを公開出版することはできなくなった。この問題を解決できなければ、『季刊』は存続できない。

そのため同人は、中国が条約に加入する前に解決策を考えており、中国が加入してからすぐに実行した。解決策は次のものである（第25号: 174）。

前号（24号: 引用者注）から、原作者に連絡を取って事前の承認を得るという原則を立てた。謝礼については「100頁未満（連載は一回ごとに）五千円相当の金額、100頁以上のものは一万円相当の金額」と一応の規定を作り、それを申し添えて、この雑誌に一回だけ翻訳を載せることに関して作者あてに承認を求める手紙を送ったのだ。

事実上手数料などの問題があるため、同人側からの送金はそれぞれ45ドル、90ドルになる。当時の平均為替レートで換算すれば5,580円、11,160円ぐらいになる。同人のこれらの措置に対し、殆どの中国作家は好意を示し、載せることを快諾する。これにより『季刊』の運営存続が可能となった。

ちなみに、45ドル、90ドルは1992年の平均為替ルートでそれぞれ245人民元、490人民元前後にあたる。当時中国経済のトップであった上海市の労働者平均月収の356人民元からみると、同人が提供する謝礼金は安くないといえるだろう。

4.5 まとめ

竹内好の影響を受けた都立大学中文研出身の同人たちは、日本人に中国を一層理解させると同時に、中国文学を通じて日本人自身の世界を広げるという目的で『季刊』を創刊した。

『季刊』は専門雑誌のため、出版部数が限られている。そのため同人たちが自分の目標をどれぐらい実現したかについては、『季刊』に関する評論または読者からの評価が1つも見つかっていないので判断しにくい。それにもかかわらず、まさに田畑（2014: 10）が指摘するように、『季刊』は「小規模ながら、存在意義は決して小さくない」。松井（1988: 39）は当時創刊して1年間前後の『季刊』を「作品の選択から翻訳検討、編集、刊行（？）まで手作りで自分たちがやってやろうというユニークな雑誌『季刊中国現代小説』の試みに拍手を送りたい」のように賞賛した。

『季刊』の存在意義は、少なくとも3つの方面からまとめることができよう。

まず、重層かつ日常的な中国の文化的イメージを構築した。同人は売れ行きを促す、または関心を集めるためにオリエンタリズムまたはセンセーショナルな立場で中国文学をもてあそぶことをしなかった。彼らはみずからの学術的な興味で小説を選択した。これによって同人たちは翻訳を通して日常生活における中国人の知恵/美德/力を日本人読者に伝え、重層かつ日常的な中国の文化的イメージを構築した。

次に、『季刊』は日中両国の文化・文学交流に貢献した。『季刊』はこれまで日本で唯一の中国同時代文学を翻訳する専門誌として、中国文革後小説の殆どの代表作を日本に紹介し、中国語が分からない日本人読者に中国を理解する1つの窓口を開いた。同人たちは地道に中国同時代小説を大量に翻訳した。それらの翻訳成果は日本の中国同時代文学研究の領域で貴重な財産になると同時に、中国全般を勉強するための良い教材にもなっている。そのため同人たちの翻訳業績は学術水準の面で日本の中国文学・中国研究界でよく評価されている。例えば城山（2014: 74）は『『季刊中国現代小説』（蒼蒼社、1987-2005）や『中国現代文学』（ひつじ書房、2008から現在）…（中略）…は中国現代文学の専門家の名訳が集まる、魅力的な翻訳誌です。みなさんも是非、原文と照らし合わせながら、翻訳の妙を楽しんでください』と、中国語/中国研究専攻の学生に『季刊』を推薦した。

最後に、翻訳研究の立場からみて、『季刊』の事例は、翻訳出版と技術革新との関係とい

う研究課題を呼びかける。従来の翻訳研究では、翻訳事業の発展と目標社会の歴史的・文化的文脈との関係を重視する一方、文字処理技術の進歩による翻訳事業の発展を論じる研究が少ない。一国の文学システムの周边的位置にある翻訳文学にとって、技術革新による出版コストの削減は、文学訳本が目標社会に出るための有利な条件となる。まさに同人の田畑が指摘するように、「売れない、儲からない」と分かっている本を自分たちで出すためには、「ワープロ」が役立つ⁵⁹。本研究ではこれ以上は展開しないが、翻訳出版と文字処理を含むメディア技術の発展との関係を扱う研究は、近い将来注目される可能性があるだろう。

⁵⁹ 田畑佐和子へのメールインタビュー、2014年4月16日。

第5章 1つの作品における文学的価値の二重性

—井口晃による『赤い高粱一族』の翻訳と批評

Lefevere(1992:14-15)によると、「文学システム内部にいるのは専門家（批評家、教師、翻訳者）である」。彼らは「常に文学作品を特定の時代および特定の地域の詩学とイデオロギーに合致するまでリライトする」が、このうち、「彼らは詩学を重視する」。

訳者の新時期小説の文学的価値に対する評価は中国の文化的イメージの構築に関わる。訳者の文学的センスによって文学的価値を評価する基準は多種多様である。さらに、起点文化社会において認められる作品の詩学が必ずしも目標文化社会において受け入れられるとは限らない。このような場合、訳者をはじめとする専門家は通常、様々な手段を通してTTを目標文化社会の主流的詩学に合致できるようリライトする。典型的事例として、本章では井口晃による『赤い高粱一族』の批評と翻訳を挙げる。このケースにおいて、井口は原作者莫言の迫力ある筆力をそのまま日本人読者に伝えるTTを生産する一方で、後書において日本社会の主流的詩学に反する、および自身の文学観に反する莫言作品の様々な欠点についての批判的態度を明確に示している⁶⁰。

本章では5つの研究目標を掲げる。1つ目は、莫言小説の日本における翻訳状況を紹介する。2つ目は、中国文学をずっと好意的にみる井口がなぜ『赤い高粱一族』を批判したのかを明らかにする。3つ目は、井口の訳文の特徴を解明する。4つ目は井口晃の莫言批評に対する日中両国研究界の態度を考察する。最後はインターネット上で公開されている読者の感想から収集したデータに基づき、井口によって構築された中国文学のイメージを読者がいかに受容したのかを考察する。

⁶⁰ 井口にとって『赤い高粱一族』が理想的文学作品ではないならば、井口はなぜ翻訳を引き受けたのかを解明するため、本論執筆中に筆者は数回にわたり（最近の一回は2015年11月17日）、中央大学教授の飯塚容を通して井口に連絡してみた。が、井口が現在面談や文通で対応するのは困難であるゆえ、筆者は井口から直接的に教えてもらうことができなかった。

5.1 莫言文学の日本における翻訳状況

中国同時代文学には世界的に知られている作家は多いとはいえないが、莫言はそのうちの1人に入るだろう。1985年、莫言は「透明な人参」を持って文壇でデビューして以来、独特のマジックリアリズムの手法と作品に含まれる思想性によって国内でも海外でも注目されることになる。さらに、中国大陸作家初のノーベル賞受賞者として、莫言は現在、中国同時代文学のシンボルとなり、あらゆる中国同時代小説史の記述において、見逃してはならない存在となっている。では、日本における莫言の翻訳状況はどうか。国立国会図書館での調査結果は以下の通りである（表①を参照、本研究で新時期文学であるか否かに関わらず全てのTTを下表に入れる）。

第5章表① 莫言小説の訳本一覧表（出版年順、2014年5月5日現在）

書名	種別	訳者	出版年
現代中国文学選集 6 赤い高粱	中編選集	井口晃	1989（2003再出版）
現代中国文学選集 12 赤い高粱 続	中編選集	井口晃	1990（2013再出版）
中国の村から：莫言短篇集	短編選集	藤井省三、長堀祐造	1991
花束を抱く女	短編選集	藤井省三	1992
酒国：特捜検事丁鉤児の冒険	長編	藤井省三	1996
現代中国短編集（合集の内2篇）*	短編	藤井省三	1998
豊乳肥臀（上、下）	長編	吉田富夫	1999（2014再出版）
至福のとき：莫言中短編集	中短編集	吉田富夫	2002
白檀の刑（上、下）	長編	吉田富夫	2003
白い犬とブランコ：莫言自選短編集	短編選集	吉田富夫	2003
四十一炮（上、下）	長編	吉田富夫	2006

転生夢現（上、下）	長編	吉田富夫	2008
イリーナの帽子：中国現代文学 選集（合集の内1篇）	短編	立松昇一	2010
牛 築路	中編選集	菱沼彬晁	2011
蛙鳴	長編	吉田富夫	2011
中国現代文学 9（合集の内1篇）	短編	立松昇一	2012
動乱と演劇：ドラマ・リーディ ング上演台本（合集）	上演台本 （未発 売）	菱沼彬晁	2012
天堂狂想歌	長編	吉田富夫	2013
透明な人参：莫言珠玉集	中短編集	藤井省三	2013
変	中短編集	長堀祐造	2013
疫病神：莫言傑作中短編集	中短編集	立松昇一	2014

*合集とは、複数の作家の作品集

上記の本のほか、公開出版されていない様々な同人誌でも莫言は人気の高い存在である。ただし本研究ではそれを追究しない。

莫言作品の日本における受容の特徴として、以下の3つを挙げておく。

まず、複数の研究者（訳者）の努力によって、ノーベル賞を受賞する前から、莫言の作品がすでに長編6点、短中編数十点が日本語に翻訳されていた。日本での中国小説の翻訳出版の状況からみて、莫言は中国大陸の同時代文学作家の中で、最も多くの作品が日本語に翻訳された作家のうちの一人であろう。これは、日本の学者によって、莫言が中国作家のうちでも独特な存在だと認められている証拠だといえるだろう。さらに、ノーベル賞受賞以降、莫言小説の増し刷及び新しく翻訳された作品の出版数が次第に増えてきている。

莫言の年齢（1955 年生まれ）を考慮しても、彼はまだ文学創作をし続ける可能性が大きい。それゆえ、日本で翻訳された中国同時代小説の第一人者としての、莫言の地位が、今後暫く揺らぐことは考えにくいだろう。

次に、訳者と小説の種類との関係からみて、莫言の短編・中編小説は井口、藤井、長堀などの訳者によってそれぞれ翻訳されたが、長編小説の殆どは吉田によって翻訳された（ただし、吉田も短中編小説の翻訳に取り組んだ）。

最後に、翻訳の時期という点から、莫言の日本における受容は 3 つの時期に分けられる。①1989 年から 1992 年の間に、莫言文学の翻訳は短編中編を中心として行われた。②1993 年から 2012 年までには、長編と短編・中編が半分半分の割合で翻訳された。③2013 年から、ノーベル文学賞受賞（2012 年）の影響で、莫言は世界から注目されると同時に、研究者と出版社の間で注目の的にもなる。2012 年 10 月のノーベル賞受賞から 2014 年 10 月までの 2 年間に、既に 8 冊の莫言小説訳本が出版された（このうち『赤い高粱 続』と『豊乳肥臀』は再出版）。訳本のほか、『莫言神髓』（中央公論新社、2013）のような、莫言の講演録も出版された。また『朝日新聞』などのマスコミで日本における莫言作品の翻訳状況を紹介する文章も掲載された⁶¹。ノーベル賞のセンセーションが、出版市場にもたらした反響がはつきり見られるだろう。

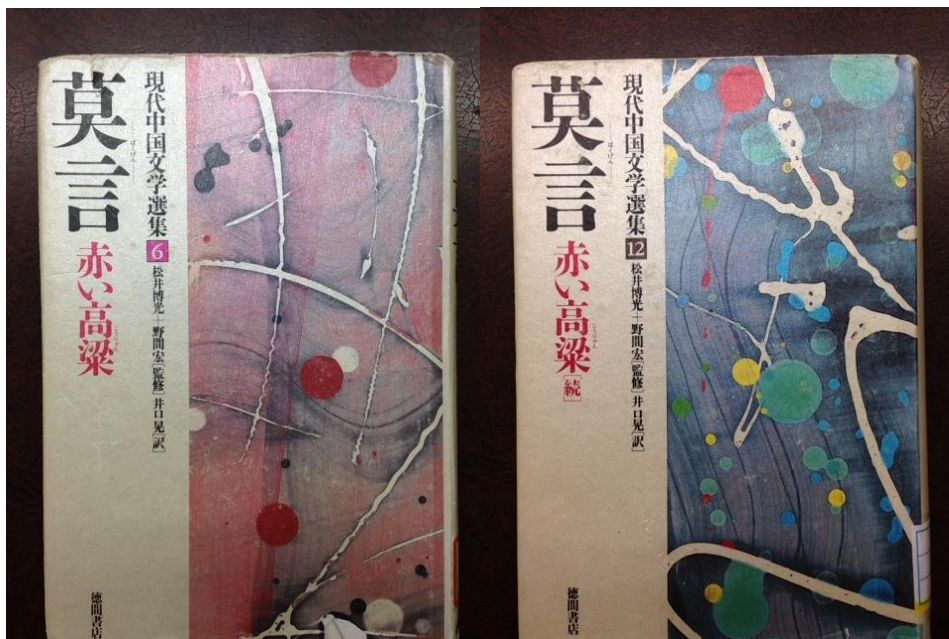
莫言の翻訳者は 6 人いるが、業績量からみて主な訳者は井口、藤井、吉田の 3 人である。このうち、出版年順からみて井口は莫言を日本に翻訳紹介した先駆者に違いない。井口は『季刊 中国現代小説』で「枯れた河」を翻訳したのを皮切りに、日本における莫言文学の翻訳受容の先陣を切った。続いて 1988 年のベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞した映画「紅いコーリャン」が 1989 年に日本で上映された勢いにのり、井口は 1989 年と 1990 年に当該映画の原作、莫言の『赤い高粱一族』⁶²を翻訳し、徳間書店が刊行した『現代中国文学

⁶¹ 飯塚容「(ニュースの本棚) ノーベル賞の莫言 したたかに生きる庶民を描く」、朝日夕刊、p.13、2012 年 10 月 28 日。

⁶² 井口の使用した ST は『紅高粱家族』（解放軍文芸出版社、1987）によって出版されたものである。本研究で参照する ST は『紅高粱』（作家出版社、1995）である。内容は同一だと思われる。

選集』のうちの6『赤い高粱』(以下「1989年版」として出版した。『赤い高粱一族』は5篇の中篇小説からなる小説群である。『赤い高粱』は前の2編「赤い高粱」、「高粱の酒」からなるものであり、2003年に岩波書店によって文庫化され、2012年までに7刷り発行された(以下「2003年版」)。『赤い高粱 続』は後ろの三編「犬の道」、「高粱の葬礼」、「犬の皮」からなるものであり、2013年に岩波書店によって文庫本の形で再出版された(以下「2013年版」)。文庫版のTTは『現代中国文学選集』とほぼ一致し、際立つ書き直しはみられないようである。本研究では、『赤い高粱一族』は莫言のSTを指し、『赤い高粱』(xxxx年版)と『赤い高粱 続』(xxxx年版)は井口の訳本を指す。

井口は莫言を最初に日本で翻訳紹介した一人である。しかしながら、井口が後書きで莫言文学の様々な欠点を指摘しながら、莫言を「初心を失った」作家とさえ呼んだ。これによって井口は日中両国の研究者によって批判を受けてしまった。現在莫言の翻訳者が言及される場合、藤井と吉田が中心的に扱われる一方、井口については影が薄くなる傾向がみられる。



(写真：現代中国文学選集6『赤い高粱』と12『赤い高粱 続』)

5.2 井口の批評風格及び中国文学観

井口は第4章で扱った『季刊』の同人でもあり、新時期小説の翻訳に大きく寄与した人物である。井口は何の理由で『赤い高粱一族』を強く批判したのか。それを解明するには、まず批評家の批評風格及び文学観を考察する必要があるだろう。本節では井口の訳書の後書き及び彼の中国文学を論じる他の文章を総合的に考察しながら、井口の批評風格及び中国文学観を見てみよう。

5.2.1 常套的な枠組みを超えることを重視する中国文学観

調べたところ、井口は様々なテキストにおいて新時期小説における常套的な枠組みを超えることを強調し、常にそのような作品に良いコメントを与えている。井口にとって常套的な枠組みを超えることは以下の3点に整理できる。

①新たな理念の導入

井口は新しい理念を反映できる小説に好意的態度を示す。例えば、彼はフェミニズムの考えを含む新時期小説を評価している。

蒋子丹「贗の月」の訳後記において井口は「中国でも徐々にその地歩を固めつつあるらしいフェミニズムの風が感じられる。すこぶる観念的な「あたし」のモノローグはいささか粗けずりだし、意識過剰の気味がなくもない。だが、それは形・質ともにありきたりの枠組みを越えようとする作家・蒋子丹の若い意気込みだと解しておこう」と評価した（『季刊』第6号：64）。また、中国国内で「フェミニズム」への傾斜で一時的に「非文学の本性をもつ、庸俗な批判者」によって批判された作家・王安憶には井口なりの「声援をおくる」（『季刊』第18号：136）。

②新たな文体の創出

井口は中国作家の新たな文体の創出を重視し、中国の伝統的小説で強調されてきた物語

性を超越しようと試みた作品に讃美の言辞を惜しまない。

たとえば、井口は、史鉄生の重層的記述方法を使用する「私の舞い」を以下のように評価した。

この作品で、青年作家・史鉄生は漢字（漢語）という定型的かつ限定的な質をもつ文学（言語）でもって、非定型的な想念の世界を描こうと試みている。それは、また現代中国の文学がただただ地べたを這い回る風の「リアリズム」を超えるための試みの一つでもあるだろう。（『季刊』第3号：49）

また、蔣子丹「贗の月」を「「お話」にならぬ「お喋り」型の作品のひとつ」（『季刊』第6号：64）と評価し、趙本夫の「夏の日に・月の光・雪の夜」を「やたら芋蔓式のだらけた文章が多い昨今の小説としてはめずらしい」（『季刊』第25号：43）と批評したことから、「お話」と「芋蔓式」からなる物語性を超越する記述方式を用いた小説への期待という井口の考えが読み取れるだろう。

③地道な創作態度

井口は大げさな表現をせずに地道にものを書く態度を重視する。例えば彼は何立偉の「石工の家」を以下のように評価した。

時の流れに筆をまかせず、奇を追わず、あたりまえの事をあたりまえの事としてとらえる確かな目を持ち、それを読むに耐えうる作品にしあげるだけの力量をそなえているらしい青年作家・何立偉は数ある同時代の作家のなかでも、やはり注目に値する存在といわなければなるまい。（『季刊』第1号：59）

ここで井口が何立偉に注目する理由は、「あたりまえの事をあたりまえの事としてとらえる」、「読むに耐えうる作品にしあげる」ことである。のちに彼は王安憶もほぼ同様に評価している。

平凡な日常の陰影を確かな目で捉えうる作家—ここ二、三年の王安憶には、そんな言葉がふさわしい。大人になったのだと言ってしまえばそれまでだが、大人になりかけたり、大人になってしまっても賑やかなだけの人が目立つ中国の作家のなかで、王安憶はやはり貴重な存在である。 (『季刊』第4号:64)

井口が王安憶を「貴重な存在」と考えた理由は、王が「平凡な日常の陰影を確かな目で捉えうる」能力を有するからである。これと対照的に、井口は現在の中国作家には、「大人になってしまっても賑やかなだけの人」が多いと考えた。以上の2つの例からみて、井口が作家の地道な創作態度を大切にすることが読み取れるだろう。

訳後記の考察によって、井口にとっての中国新時期小説の理想像は常套的な枠組みを超える、「新理念の反映」、「新たな文体の創出」、「地道な創作態度」などの特徴を持つ作品であることがあきらかである。

5.2.2 直接性がある批評風格

では、以上のような中国新時期小説の理想像に合致しない文学作品と出会うとき、井口は普段どのような姿勢で文学批評を展開するのか。調べたところ、彼の文学批評は、歯に衣着せぬ遠慮のない物言いをする直接性が特徴となっていると考えられる。

例えば、彼は『現代中国文学選集』の6『赤い高粱』と12『赤い高粱 続』を翻訳したほか、2『野山—鷄巢村の人々・他』(原作者: 贾平凹)も翻訳した。贾平凹は莫言と同じ世代の作家で、農村題材の小説を中心に創作活動を展開して、莫言と同じように、ルーツ文学の代表者の一人である。井口(1987: 238-239)は後書きにおいて、贾平凹の文学手法を批判した。

世界の「近代文学」の概念や手法を摂取することについて、贾平凹はかなり保守的である。旧来の「故

事性」、「情節性」に対するこだわりが強い。「近代文学」に慣れ親しんでいる読者が、平凹の作品を平板で、いかにもお話風、さらには陳腐だとさえ感じてしまうのは……やはり伝統的な形式や手法に対する平凹のこだわりがあまりにも強すぎるからである。

井口は贾平凹が伝統の叙事方式に拘りすぎると批判した。この批評は説得力があるものの、相当厳しいものと思われるだろう。ただし、日本では贾平凹が莫言ほど知られていないため、研究界では贾平凹に対する批判がさほど注目されていない。こうした実例から井口の批評には「はっきりものを言う遠慮のなさ」が確認できる。このような批評スタイルは、莫言批判においても表れていると考えられる。では、このような井口の文学批評の特徴を念頭に置いて、莫言に対する批判を分析しよう。

5.3 井口の莫言認識の変化

井口の最初の莫言に関する文章は、『紅い高粱』を翻訳した3年前の1986年に存在する。しかしながら、井口が最初から莫言に対して批判的な態度をとったわけではない。むしろ莫言に対して相当好意的な態度を示していた。本節では井口の莫言に対する認識の変化を追跡する。

1986年7月出版の『東方』に掲載された「莫言の中篇小説「金髪嬰兒」」において、井口は1985-1986年の莫言の小説の発表状況に触れつつ、「枯れた河」と「金髪嬰兒」に対する分析を通じて、莫言の作風を評論した。文章から2つのことが読み取れる。

1つは、井口が莫言の存在に最初に気付いたのは、1985年に『北京文学』で発表した「枯れた河」を読んだ時である。のちに『季刊』で井口はこの小説を翻訳した。

もう1つは、井口の抱いた莫言に対する最初の印象は、「異色」だった。井口は莫言の小説中に、当時の中国文壇でもてはやされていた「故事性」や「客観的事実」のような尺度とは一線を画する新鮮さを感じ取ったのである。つまりその時井口は莫言小説を「新たな

文体上の創出」があるものとして受け止めた。それゆえ、井口（1986: 22）は「そうした制限からの脱出をこころみているらしい莫言は、やはり異色の存在である。この青年作家からは、今後しばらく目がはなせないような気がする」と述べている。1985年に莫言文学と最初に出合った井口は、中国小説のリアリズムの伝統から脱出しようとする莫言の試みに、大きな期待を抱いていたことがうかがえるだろう。

井口が2回目に莫言について言及したのは、1987年1月21日に東京の中国研究所で行われた座談会の時である。

1986年11月3日から6日まで、井口晃、林芳、近藤直子、松井博光は当時、中国における最大級規模の、新时期文学に関する会議「中国当代文学国際討論会」に参加した。中国研究所での座談会は、井口ら4人の「中国当代文学国際討論会」に参加した感想を聞くために行われたものである。

座談会において井口（1987: 100）は近藤の「莫言は中国で一時さわがれていましたね」という発言に対して、「まだ修業中の人ですからね」と評価した。このコメントは前の『東方』における「青年作家」莫言に対する期待の延長線上にあり、莫言がなお未熟であるゆえ、騒がれてももっと寛容に扱おうという、好意的な態度を示すものである。さらに、修業完成後の莫言に期待する、という莫言に対する希望が見て取れる。

井口が最初に翻訳した莫言の作品は、1988年の夏に出版された『季刊』第5号での「枯れた河」である。訳後記で井口は以下のように評論した。

莫言の作品には、しばしばむきだしの暴力とその力に運命を左右される人間の生と死が描かれる。だが、莫言はいわゆる「社会派」風の告発を試みているのでもなければ、同情を表明しているのでもない。莫言の諸作では、非情な暴力や無残な生と死が、そのまま彼の「美」の世界を構築する契機となり、また素材そのものとなっている。興味と同時に、どこか危なさを感じさせる青年作家。莫言は、そんな作家である。

『赤い高粱』の出版より1年前のこの文章には、すでに莫言批判の影が潜んでいるといえるだろう。なぜなら、井口は「莫言の諸作では、非情な暴力や無残な生と死が、そのまま彼の「美」の世界を構築する契機となり、また素材そのものとなっている」と指摘した。まず、「莫言の諸作」という表現から、井口が莫言の複数の作品を読んだ事実がわかる。その中には、莫言の代表作ともいえる『赤い高粱一族』が含まれる可能性が非常に高い。次に、井口は「美」に括弧を付けた。というのは、井口は莫言作品の暴力と生死からなる「美」は井口の眼からみて、純粋な美とはいえないと考えているからだろう。なんとなく異様な雰囲気が漂う（残忍なあるいは冷酷な？）「美」である。さらに、最後の「興味と同時に、どこか危なさを感じさせる」という言葉から、井口は莫言に興味を持つと同時に、生命の尊厳に対して彼がとった無視の姿勢に、道徳的な危機を感じていることが明らかであろう。このような道徳危機への心配は、莫言批判のロジカルな原点になるのではなかろうか。

この文章において井口の莫言に対する見方は、すでに単純な期待から、「危なさを感じさせる」ような感覚に移る。

こうして、莫言の「修業」は、井口の予想から外れてしまった。井口の「青年作家」莫言に対する期待は心配に変わり、結局『赤い高粱』の後書きでの批判と化した。

5.4 井口晃の『赤い高粱一族』批評に対する分析

井口は『赤い高粱』1989年版、2003年版、及び『赤い高粱 続』1990年版の後書きで、作品に対して批判を書き加えた。井口の批判は主に「ハンセン病者差別」、「下品な表現」、「たわいない民族意識」という3つの要点に帰結できる。

5.4.1 日本社会の主流的詩学に離反するハンセン病者差別

後書において井口が指摘した『赤い高粱一族』における欠点は、莫言のハンセン病者差別のような書き方である。これによって、井口は莫言が「初心を失った」（1989: 237）とさ

え考えた。やや長いが、以下に井口の主な批評観点を表明する一部を引用する（太字は筆者による）。

①『赤い高粱』（1989年版: 234-237）

この『赤い高粱』という作品には、たとえば右にあげたようなハンセン病者にたいする数々の粗暴な差別的言辭が目立つ。そもそも「差別」に許容範囲などあろうはずもないのだが、この作品における莫言のハンセン病者にたいする扱いは度をすごしているとしか言いようがないのである。…（中略）…この『赤い高粱』に見るかぎり、莫言のこころみは成功しているとは言いがたい。成功していないばかりか、莫言という作家は初心を失ったのか、とさえ私には思えてくる。

②『赤い高粱 続』（1990年版: 330）

そうした莫言の底の浅さこそが、前巻（『赤い高粱』1989年版: 引用者注）の「あとがき」で指摘したようなハンセン病者に対する思慮のない、粗暴な表現などにもつながっているのだと思わざるをえないのです。読者のみなさんも、本書を読みすすめられるなかで、やはりわたしと似たような感想をもたれる方が多いのではないのでしょうか。

③『赤い高粱』（2003年版: 312-313）

『赤い高粱』について言えば、「麻風病（ハンセン病）」に対する恐ろしいほどの偏見、差別表現があります。…（中略）…本書を読んでくださる方は、莫言の文学がもつ、そうした側面にもきちんと目を向けていただきたい。訳者である私は、そう願っています。

たしかに、井口は莫言が「俗」を使用して中国文学伝統における「聖なるもの」に対置することを指摘し、ある程度莫言文学の「俗」を説明したこともあるが、以上のテキストから井口が莫言のハンセン病者に対する差別表現をかなり厳しく批判したことは読み取れ

るだろう。

弱者に対する配慮は現代の文明社会における人間の共通的价值観といっても過言ではない。特に日本は高度に発展した先進国として、社会の主流的詩学は一人一人の人間に対する尊重を提唱することであり、弱者に対する差別には非常に敏感である。例として日本では公の場においておし、めくら、つんぼ、かたわ、気違いなどの語彙はすべて差別用語として「xx 障がい者」によって取り換えられ、障がい者に対する配慮を重視する。『赤い高粱一族』にしきりに見られるハンセン病者に対する差別的描写は、日本社会においてタブー視される可能性が高いだろう。このような内容を含む TT を日本社会において問題なく出版するには、まず訳者井口の説明あるいは断り書きが必要であろう。2003 年版後書最後の「本書を読んでくださる方は、莫言の文学がもつ、そうした側面にもきちんと目を向けていただきたい」という文も井口の事前のことわりといえるだろう。

また、王安憶、蒋子丹らの小説におけるフェミニズムを、生まれつきの弱者地位から女性を解放しようとする一種の思潮であると理解する井口自身も、弱者に対する配慮を重視する人物であろう。それゆえ、『赤い高粱一族』にしきりに繰り返されるハンセン病者に対する描写を差別として読み取った井口は、莫言の弱者に対する思慮の欠如を批判することになった。

5.4.2 井口の理想的文学像に反する「下品な表現」と「たわいない民族意識」

「ハンセン病者に対する差別」のほか、井口は作品における「下品な表現」と「たわいない民族意識」を強く指摘した。まず「下品な表現」をみてみよう。

『赤い高粱』（2003 年版: 312-313）

莫言の場合は、そのお喋りのなかで糞、小便、尻、屁、ちんぼこといった、あまり品のよくない言葉が頻出することがあります…（中略）…莫言のそうした姿勢、手法は、まやかしのすべてを笑いとはず 笑

の世界へと広がる可能性を確かにもっていますが、それも度をこすと思慮を欠く、ただの粗暴な物言いと
なってしまう。

井口は莫言が糞、屁などの品の悪い表現を多用することを指摘した。実は、下品な表現は従来、莫言文学の特徴ともいえるところである。井口のほか、数多くの研究者も莫言文学における下品な表現に気づいている。代表的なコメントを2つ挙げておく。

『爆炸』までは、莫言小説での「悪心」（日本語で気持ち悪さ：引用者注）は我慢しづらいものの、まだ限度があった。しかし、やがてこのような「淡々とした憂愁」のような「気持ち悪さ」は、粗暴かつ残忍な表現に取り換えられた。このような転換のシンボルは、『赤い高粱』である。この小説では小便・大便に言及するところがあるが、ほかの描写と比べると、大したものではない。強烈な刺激として我慢できない気持ち悪さは、日本軍による人皮剥きと生殖器切りにある。 (李 1988/2006: 191)

いうまでもないことだが、『透明な人參』から、文壇で名作と認められた『赤い高粱』を経て、『紅蝗』まで、莫言の「醜」に対する描写、という強烈な欲望が次第に膨らみ、「限度なし」の状態まで発展した。彼は自然界の至る所にある醜を聖なる誇りにさせ、一般読者に恐怖を感じさせ、気持ち悪くさせる。

(丁 1989/2006: 225)

莫言文学における下品な表現をめぐって、批判する学者もいるし、「醜」における「美」を発見しようと呼びかける学者もいるため、研究界では従来、その価値判断に関して論争が行われている。ただし、『赤い高粱一族』において下品な表現が多用されているのは、すでに文学研究界で公認される事実になっているようだ。

次は「たわいない民族意識」に対する指摘をみてみよう。

『赤い高粱 続』(1990年版: 328-329)

『赤い高粱』の作者・莫言を「中国のガルシア・マルケス」あるいはそれを「超える」などと称すること…(中略)…そうした陳腐で、無意味な類比もやめた方がいいのではないか、とわたしは思っているのです。

この作品(『赤い高粱一族』: 引用者注)のあちこちにあらわれるたわいもない「民族精神」礼讃、「原始」の世界讃美などにでくわすたびに、わたしの筆はとまってしまい、しばらくの間苦笑しているしかありませんでした。

井口は『赤い高粱一族』に現れる民族意識をたわいもない「民族精神」礼讃と指摘し、井口の眼に映る莫言文学は「浅」である。『赤い高粱一族』はルーツ文学の代表作のため、『赤い高粱一族』批判の背景には、井口のルーツ文学そのものに対する態度が関係している。

井口は最初ルーツ文学にある程度期待していた。

1980年代後半、中国のいわゆる文革世代の作家たちは、欧米の近代的文学手法を使用して、通称「モダニズム派」という多種多様な風格の小説を創作し始めた。ルーツ文学はモダニズム派のうちの1つである。当時、中国国内では、それらの「モダニズム派」を非難する声が少なくなかった。それに対し、井口(1987: 98)は「外への模倣に見える新しい試みができきたり、そういう試みをしているんだという主張が出てきたとたんに「民族」や「伝統」がやみくもに強調される、非常に気になる」と述べて、モダニズム派への非難に対して懸念を表明している。さらに、彼は当時ルーツ文学の代表者ザシダワが非難されたことに対して、「私はべつにザシダワの試みやいわゆる西欧指向の働きだけに現代中国の文学の可能性があるとは思っていません。だけど、とくに若い作家の実験的な試行錯誤、それを許容する範囲はあまりひろくはない、それほど寛容じゃないんだ」(ibid)という感想を述べた。少なくとも、1987の初頭までに、井口がルーツ文学を否定していなかったこ

とがわかる。井口がそうした理由は、彼がルーツ文学を含めたモダニズム文学を、客観事実に対する描写をもっぱら重視した中国近代小説の伝統の対置物とみなしたからである。つまりその時期に中国文学に勃興したモダニズム文学を井口は「新思想・新文体の導入」として受け止め、井口の文学の理想像に合致する。

しかし、のちにルーツ文学が形式のみ欧米の手法を受け入れながら、内実はたわいもない「民族精神」礼讃という反動に転じたと考えた井口は、ルーツ文学に対する見方が大きく変化した。

『赤い高粱 続』（1990年版:326-328）

一九八〇年代の中国文学界に高揚をもたらした「ルーツ探求の文学」は、当初の壮大な構想にもかかわらず、短命に終わります。…（中略）…その挫折の主な原因は、やはり「ルーツ探求の文学」を主張し、実践した作家、文学者自身のなかにあったのではないか…（中略）…既存の「文化」は、高大な廃屋のようなものです。…（中略）…「伝統」の廃屋に穴をうがち、爆薬をしかけるという作業をもっと地道につづけなければならなかったのではないか。…（中略）…「ルーツ探求の文学」の担い手たちが触発され、ひとつのモデルとしたラテンアメリカの文学も、たしかに表面では「ルーツ探求の文学」とおなじように荒々しい原初の世界、その世界への信仰をえがいてはいますが、深い底の部分では常に外の世界へ向かってひらかれているようです。そこには、ひとりよがりな民族意識や矮小な自己權威化などがはいりこむ余地は見当たりません。だから、ラテンアメリカの文学は「世界の文学」として大きな共感をえたのだと思います。一方、そのラテンアメリカの文学をモデルとした「ルーツ探求の文学」は、たんなる「先祖がえり」、ただの荒々しさを売り物にする、それこそ「根」なしの小手先芸におわりました。

井口によると、ルーツ文学の欠陥は2つある。1つは、ルーツ文学の作家はもっと徹底的に自らの創作手法を磨き、文学に対する認識を深め、完結性を重視する中国小説の伝統に挑むべきなのに、彼らはそうしなかった点である。つまりルーツ文学は殆ど新時期文学に

「新たな文体の創出」を行っていないことである。もう 1 つは、ルーツ文学ではもっぱらひとりよがりな民族意識があふれて外の世界に開かないため、ラテンアメリカのマジックリアリズム小説とはまったく別物であることだ。つまり井口は、ルーツ文学の作家には「地道な創作態度」が欠如していると考えていた。

井口のルーツ文学に対するこのような考えは『赤い高粱一族』以外のルーツ作品を批評した時にもみられる。例えば井口は中国におけるルーツ文学の開祖ともいえる阿城の小説について以下のようにコメントした。

ところで、わたしの記憶によれば、阿城は韓少功らとともにかつてあの刺激的な「尋根”文学”」を主唱したはずだ。この作家には、ここに訳出した類の「三題漸」めいた文章ばかりではなく、もっと読みごたえのある作品を書いてもらいたい。これは、「真面目」な希望である。 (『季刊』第 15 号 : 124)

小括すると、井口は 2 つの理由で『赤い高粱一族』を批判した。1 つは、作品におけるハンセン病患者差別は日本社会の主流的詩学に合致しないため、出版にあたり訳者の説明やこたわりが必要である（当然ながら井口本人も差別表現の反対者である）。もう 1 つは「下品な表現」及び「たわいない民族意識」などの欠点が「新思想の導入」、「地道な創作態度」という井口の文学的理想像に反したからである。

5.4.3 井口批評に対する日中両国研究界の態度

これまで井口の莫言批評の中身と理由を解明した。この節では日中両国の学者たちが井口の莫言批評にどのような態度をとっていたのかを記述する。資料を調べたところ、井口の批評に賛同する文章はいまだ見つからないが、彼の批評に反論または無視する文章は大量にある。このような文章を以下に 3 つのタイプに分類して整理しておく。

まずは、井口の翻訳を無視の態度で対応することである。代表的文章は、中国作家協会

のオフィシャルネット「中国作家ネット」に2012年11月14日（ノーベル賞受賞の1か月後）に掲載された「莫言作品在日本」⁶³（「日本における莫言の作品」）である。文章は次のように書かれている。

日本开始真正意义上的莫言文学作品的译介与研究活动，却是始于东京大学教授藤井省三…（中略）…尽管井口晃是日本第一位翻译莫言作品的译者，但在莫言众多作品中选取《红高粱家族》翻译，可见多少受到电影《红高粱》的影响，因而藤井省三应该算是从文学价值的角度翻译介绍莫言文学作品的日本第一人，并从一开始就对莫言的文学作品给予了很高评价。（大意：井口は日本で初めて莫言作品を翻訳した人であるが、彼が莫言の作品から『紅い高粱一族』を選択して翻訳した理由は、映画『紅いコーリャン』から影響を受けたからであろう。それゆえ、文学価値の視座から莫言文学作品を紹介した日本の第一人者は藤井省三である。）

「中国作家ネット」は井口の翻訳に関しては一切を評価しなかった。一方、同ネットは藤井を莫言翻訳の第一人者として認定していることから、「井口を無視、藤井を重視」という態度が見て取れるだろう。

次は井口の訳者としての立場を疑うことである。代表的なのは、神戸国際大学教授・毛丹青である。

莫言氏の小説は日本では3人（実はその時点で6人：引用者注）の日本人の中国研究者が訳してきました。最初に彼の作品を翻訳した中国研究者は井口晃氏です。この人は中央大学の方で、莫言氏の小説『赤いコーリャン』（書名は『赤い高粱』：引用者注）を翻訳しました。ただ、この人の面白いのは、彼はこの小説を翻訳した後に、何とも不思議なことに、小説の後書きで莫言氏のことを口汚く罵っているのです。

⁶³ 「莫言作品在日本」<http://www.chinawriter.com.cn/bk/2012-11-14/65781.html>、2014年10月14日アクセス。

もし罵りたいのなら、何故彼の作品を訳したのでしょうか⁶⁴。

毛は、井口の批判を「口汚く罵る」と評し、井口が訳者として失格だと考えているようだ。

最後は井口の批判の中身を検討することである。莫言作品のもう1人の訳者藤井は1989年から1995年までに、井口の莫言批判の中身に対して、学術上の論争を行った。藤井が様々な文章で井口の莫言批評に言及したが、ここでは井口の批評に対する態度の変化を端的に示す3つの内容を紹介する。藤井は、まず1989年8月16日付「共同通信配信・岐阜新聞」に掲載した『『赤い高粱』の翻訳』において、悪病の社会的メタファーの視座から莫言のために弁解した。

中国文学において少数民族や身体障害者に対する配慮が欠けているという訳者の不満はもっともであるが、スーザン・ソントグが名著『隠喩としての病』（みすず書房）で自身のがん体験を通して指摘した病気の社会的意味を、莫言も中国社会の中で描いてみせたともいえよう。その莫言を差別主義者として一方的に断罪してよいものであろうか。

その時、藤井は読み解き方の相違によって、同じテキストであっても様々な意味に解釈することができることを主張し、「訳者の不満はもっともである」として井口に一定の理解を示しつつ、自分と井口の考えを両立させようと考えていた。続いて『中国文学この百年』（1991b:145）では以下のように述べた

ところで邦訳書『紅い高粱』のあとがきで、訳者井口は六頁の紙幅のほとんどすべてを費やしてハンセ

⁶⁴ 人民日報海外版日本月刊「第2、第3のノーベル賞受賞を目指す中国——神戸国際大学・毛丹青教授×本誌蔣豊編集長」<http://jp.jnocnews.jp/news/show.aspx?id=52536>、2014年10月11日アクセス。

ン病者に対する差別的表現がこの作品の随所に見られると言ひ、莫言への批難を露わにしている。しかし、村一番の財産家である単家が業病に祟られているというパラドックス、赤い高粱から蒸溜される高粱酒にこの業病の毒を消す薬効があり、しかも単家がほかならぬ高粱酒の造り酒屋であるという聖と賤の同一性は、作品における価値の多様性という主題と密接に絡んでおり、莫言としても興味本位に差別的描写をしたものではあるまい。…（中略）…中国や日本の読者は井口氏の言う「粗暴な差別的言辞」を物語の構造の中で解説するのであって、現実におけるハンセン病者への差別感を煽り立てられるということとはかんがえられまい。

今回藤井は、文学作品に秘められた価値の多様性を取り上げ莫言のハンセン病者に対する描写を説明した。実はその時、藤井はちょうど莫言の小説を翻訳している途中であった。藤井は莫言の描写が社会学及び文学価値での意味をもつと主張するのは、莫言の小説が共産党イデオロギーの理不尽さを暴露する、という藤井自身の指摘を支持するためではないだろうか。しかしながら、『酒国』から井口の批判に対する藤井の見方は大きく変化した。

（『赤い高粱一族』：筆者注）の邦訳も出ているが、訳者の莫言に対する偏見と悪意を含む解説が災いしてか、日本ではあまり話題にならなかったのは残念だ。（藤井 1996:289）

『酒国』以降、藤井は井口の莫言批評を批判的態度でとらえてきた。例えば、藤井（2002/第3刷 2004:36）⁶⁵は「妙な訳者解説が災いしたのか、同時期に中国人留学生がフランス語で書き上げた『赤いコーリャン』（ヤー・ディン著）という紛らわしい題名の小説が翻訳されたためか、増刷されることもなく書店から消えてしまった」と井口の訳本に言及した。このように、井口の批判に対し、日中両国の研究者は程度の差はあるもののほぼ批判的な

⁶⁵ 実は藤井は『赤い高粱一族』のTTに増刷なしと指摘したが、2002年より1年後の2003年、『赤い高粱』は岩波書店の文庫本の形で再版した（つまり本研究での「2003年版」）。但し、日本で人気映画「紅いコーリャン」の原書『赤い高粱一族』は1990-2002年まで増刷されなかったのは事実である。

姿勢をとっているようだ。これもおそらく現在莫言の翻訳者に言及される場合、井口の影が薄くなってしまった一因といえるだろう。

ちなみに、莫言のもう 1 人の重要な訳者吉田富夫は終始井口の莫言批評に直接に意見を表明していない。

5.4.4 「ハンセン病患者差別」に対する批評の問題点

井口が日本社会の主流的詩学に合致しない内容を含む TT を出版するため、リライトの手段として『赤い高粱一族』における「ハンセン病患者差別」を取り上げ、事前にことわりをしたことはわかった。しかしながら、それにしても「ハンセン病患者差別」に関しては検討の余地があるではないかと考えられる。

5.4.4.1 文学作品の創作に対する 2 重の制限

文学作品の創作は常に 2 重の制限を受けている。1 つは作者の生活経験、生きる時代の文脈など、作者からの制限である。もう 1 つは、作品が語る時代の文脈からの制限である。井口の莫言批判には、この 2 重の制限が考慮されていないように思われる。1941 年にプロミンが発明される以前の時代においては、ハンセン病患者に対する蔑視と嫌悪は人類共通の感覚である。例えば、フーコー（1961）によると、中世のヨーロッパでは、ハンセン病人は収容所で隔離された。日本においても、ハンセン病は「当時は業病として忌み嫌われた。」（井口 1989: 57）。ハンセン病患者を強制収容して隔離する無癩県運動などハンセン病患者に対する差別的活動は戦後も続いていた。以上のハンセン病に対する人類の認識を説明した上で、作者莫言の生活経験と『赤い高粱一族』の時代背景をそれぞれ考察しよう。

まず、莫言は小学 5 年生の時、「文化大革命がはじまるとすぐ学校を中途退学した」（井口 1990: 319）。その後彼は 20 歳まで農村で生活した。生活経験からみて、莫言がハンセン病に関する知識をまったく持っていなかったのも当然だろう。確かに、もっと責任感を

持って、様々な資料を調べた上でハンセン病人を描写するにこしたことはないのだが、莫言がそうしなかったことをもって「初心を失った」と指摘するのは、度を越えているのではないだろうか。

次に、作品自体の文脈を考えよう。『赤い高粱一族』は、主に 1930 年代から 40 年代にかけて、抗日戦争時代の中国山東省農村という閉塞的な空間の農民たち（時には商人、時には盗賊になる）を主人公とする物語である。当時、近代的な医学の教養を持っているはずのない農民たちのハンセン病に対する見方は、いうまでもなく忌まわしくて、差別的なことであろう。したがって、莫言がハンセン病について知っているかどうかはさて置き、彼の『赤い高粱』でのハンセン病に対する差別的な描写は、小説の登場人物の視点をそのまま反映するといえるだろう。

それゆえ、莫言のハンセン病患者差別を批判する井口による主張は、一種の時代錯誤(anachronistic) ともいうべきであろう。

ただし、莫言作品における弱者に対する差別的な描写は、人権を重視する日本社会の主流的詩学に合致しないため、日本人読者の不快感を引き起こす可能性は否めない。それゆえ、後書きでの井口の ST に対する批判は、訳者の立場表明の 1 つの方法なのである。この方法以外で、読者の理解を得るためによく使用される方法は、訳者または出版社による声明である。例えば、『赤い高粱』（2003 年版）には、岩波現代文庫編集部は「本書には身体等の表現で今日的ではないものもふくまれるが、本作品の文学性を考慮して、原文の表現のまま訳出した箇所がある」という声明が付けられている。他の莫言作品の日本語版にもこのような声明がよく見られる。藤井省三訳の『透明な人参』（2013、朝日出版社）には、「本書のなかに不適切と思われる表現がありますが、作品の時代背景に鑑み、原文のままとしました」という声明が付いている。また、吉田富夫訳の『天堂狂想歌』（2013、中央公論新社）には「本書の原文には、身体、身分、職業などに関して不適切と思われる語句や表現が含まれていますが、作品の歴史背景や文学価値に鑑み、訳者とも協議のうえ最小限

の訂正にとどめました」のような声明がある。

このような声明は訳者または出版関係の人の立場を示すと同時に、原文を大幅に修正することを避けるもので、読者の了承を得るための手段としてよく使用されている。

5.4.4.2 無意識的に「病気の社会的意味」を運用

では、莫言は自分のハンセン病描写についていかに考えているのだろうか。藤井の莫言へのインタビューで、なぜ体の不自由な人物が小説に頻出するかという質問に対して、莫言は以下のように答えた。

それは特に考えがあつてのことではありません。私にとって、身障者の存在はごく普通のことでした。たとえば、私が住んでいる家の南隣は、一家三人とも唾者でした。ですから、特に意識することなく身障者を描いてきたのでしょう。 (藤井&莫 1992: 189)

莫言は、身障者を書くことについて「特に考えがあつてのことではありません」と答えているが、無意識的に藤井が提起した「病気の社会的意味」を運用した可能性がある。『赤い高粱一族』の場合、「私のお婆さん」はもともと単扁郎（単という人の息子）の嫁になるはずであった。「私のお爺さん」は嫁を単扁郎のところまで運んで行く人足であった。しかしながら、単扁郎がハンセン病者のため、「私のお婆さん」が彼と接することを命懸けで拒否し、「私のお爺さん」と高粱の畑で野合した。さらに、「私のお爺さん」は単一族を殺して、「私のお婆さん」とともに単一族の高粱酒醸造産業を受け継いだ。医療が今ほど発達していなかった時代、人々は「業病」と呼ばれたハンセン病に偏見を持ち、その患者が前世悪人だったと考えていた。さらに、単一族は村の高粱酒の醸造を独占し、村で最も豊かな一族になった。中国の伝統的価値観で「富むと仁を失い、富むと義を失う」という金持ちに対する偏見もある。物語でそのような二重の偏見は、お婆さんが単扁郎との婚姻を拒否

し、お爺さんと結婚（実際は同棲）した一連の行為を正当化させる理由になると同時に、農村コミュニティが彼らの行為を承認する理由にもなる。それゆえ、莫言が『赤い高粱』で単扁郎をハンセン病患者として描いたことは、彼が知らないうちに「病気の社会的意味」を実践した成果ではなかろうか。

5.5 ST 中心の翻訳方式

井口は後書きで『紅い高粱一族』における欠点を指摘している一方、心血を注いだ TT を産出した。『季刊』第 I 期の同人でもある井口は「原文に比較的忠実に」³ 中国語小説を取り扱う翻訳習慣が見られる。『紅い高粱一族』の翻訳にあたり、彼は「原文への忠実」によって ST における異質性を保ちつつ、文体上で非常に流暢かつ自然な日本語訳文を作成した。

5.5.1 ST における異質性の保持

Berman (1985/2000) は、(前提として文学の) 翻訳の目的が、他民族との差異を浮き彫りにさせ、自民族中心主義を破ることにあると考えたため、翻訳が「異質に対する追求」であると提唱した。ベルマンのこの思想を受け続けた Venuti (1995: 148) は、外国の文学を翻訳する際、起点文化の異文化的特質をそのまま保持し TT に移すという異質化の翻訳思想を提起した。「原文に比較的忠実に」の翻訳習慣は異質化の翻訳思想に接点を持つ。TT を分析したところ、井口の『赤い高粱一族』の翻訳では大まかに 2 つの次元において ST の異質性を保っていることが観察された。

5.5.1.1 特定の意味がある語彙または短文の異質性

井口は日本人の読者にとって理解しにくい単語または短文を翻訳する際、簡単に日本語に存在する意味が近い単語または短文に置き換えることをせず、ST に含む特定の意味を読者に伝えるため「複写」と「割注」を併用することにより、極めて高い異質性を表現する

ストラテジーを使用した。このような併用は主に2つの場合に使用されている。

1つは、物事及び人に対する俗称を翻訳する場合である。このような俗称は正式な公式語ではないものの、中国社会で流通しており、認知度が非常に高いものである。例えば、

ST: 调查的重点, 就是我父亲参加过的, 在墨水河边打死鬼子少将的著名战斗。 (1995: 304)

TT: 調査の重点は、父も参加した戦い、墨水河傍で鬼子 (鬼子は、もともと洋鬼子_外国からの侵略者に対する憎悪をこめた蔑称。日本人は東洋または日本鬼子と呼ばれた)の少将を撃ち殺した、あの有名な戦闘であった。 (1989: 19)

ここでは、「鬼子」は日本からの侵略者という意味である⁶⁶。井口は「鬼子」という語を中国語のまま TT に持ち込み、この語彙に含まれる「憎悪」、という感情的な意味を TT の読者に伝える。もし「鬼子」を「日本軍」または「日本侵略者」に取り替えてしまうなら、読者は当時の日本人侵略者に対する中国の百姓の憎しみを軽く読んでしまう可能性があるだろう。

もう1つは、特定の言語変種を翻訳する場合である。このような変種は現代中国語の文法に必ずしも則するとは限らないが、言語社会での認知度が非常に高いものである。例えば、

ST: 太君, 这个女人, 大大的疯了有的。 (1995: 308)

TT: 太君、這個女人、大大的瘋了的有 (上官ドノ、コノ女、オオイニ狂ッテイルノアリマス。ここでは傀儡軍の兵士が、当時の日本植民者や日本軍流の“中国語”をまねて話している)。 (1989: 25)

通常の日本語の語順は SOV、中国語の語順は SVO である。しかしながら、ST で莫言は

⁶⁶ 「鬼子」の感情的意味は牧田 (1973.8:37-39) を参照

傀儡軍に日本人流（OV 倒置）の中国語を真似させることによって、一種の滑稽さを引き出そうとする。このようなテキストはライス（Reiss）（1971/2000：24-47）の提起した「表現型」（The form-focused Text）に属する。このジャンルのテキストにおいて、作者は形式的要素を利用し、特別な美学効果を達成する(ibid:33-34)。井口は ST の表現のまま TT に移した上で、説明を付ける。これによって日本人の読者が理解できると共に、滑稽さも表現されるだろう。このような「複写」と「割注付け」を併用する方法で翻訳される例が『赤い高粱』1989年版の226ページ中に41例、『続 赤い高粱』1990年版の312ページ中に80例が確認できる。

5.5.1.2 日本社会の主流的詩学に合致しない部分の異質性

後書で訳者の立場を表明した上で、井口は ST におけるハンセン病患者に対する差別など日本社会の主流的詩学に合致しない描写をそのまま訳出した。以下二か所の描写を見てみよう。

ST：有的说单扁郎是个流白脓倘黄水的麻风病人，他们说站在单家院子外，就能闻到一股烂肉臭味，单家的院子里，飞舞着成群结队的绿头苍蝇。 (1995：42)

TT：单扁郎は白や黄色の膿だらけの麻風病だという者。彼らは言った。単家は塀の外まで腐肉のにおいがする、庭にはぎん蠅がうじゃうじゃとびまわっているぞ。 (1989：77)

ST：天，你认为我有罪吗？你认为我跟一个麻风病人同枕交颈，生出一窝癞皮烂肉的魔鬼，使这个美丽的世界污秽不堪是对还是错？ (1995:70)

TT：神様、あたしは罪人なのでしょうか。あなたは、あたしが麻風病の男と枕をかわして、肉のただれた化け物を犬ころのように産み、この美しい世界をめちゃくちゃに汚したほうがよかったとおっしゃるのですか。 (1989:100)

以上の文を翻訳する際、もし井口が優美化（ennoblement cf.Berman.1985/2000）などのス

トラテジーを使用してもっと簡潔に、または優美化して翻訳していたら、日本人読者にとって受け入れやすくなったであろう。しかしながら、井口はそうせずに、TT では ST のハンセン病に対する描写を一語一語対応して翻訳し、わざわざ読者に ST の乱暴さを意識させようとした。それによって井口は当時中国の文壇で脚光を浴びた赤い高粱における野性が溢れる詩学をそのまま日本人読者に伝えた。

5.5.2 流暢な文体

『赤い高粱一族』の TT は単なる異質に対する無限度な追求ではない。むしろ ST における異質性を保ちつつ、自然かつ流暢な日本語を目指すものである。つまり井口は ST の異質性と目標言語の流暢さとの間にバランスをとっている。このような調和は文体上で比較的に体现できる。

『赤い高粱一族』の ST において、莫言は作中人物の感情の勢い及び場面の緊張感を表現するため、リズム感がある、構造が似通った短文の連続という修飾格を使用している。特に激しい戦闘や生死の瞬間などのシーンを描写する際には、このようなリズム感が強い短文体を使用する傾向がみられる。井口の訳文には、短文連続の修飾格をできるだけ対応させて翻訳する姿勢がみてとれる。

例えば、小説の冒頭近くのおそらく『赤い高粱一族』における最も有名な段落をみてみよう。

ST : 高密东北乡无疑是地球上最美丽最丑陋、最超脱最世俗、最圣洁最龌龊、最英雄好汉最王八蛋、最能喝酒最能爱的地方。 (1995 : 2)

TT : 高密県東北郷は地球上でもっとも美しく、醜く、もっとも超俗的で、俗っぽく、もっとも清らかで、汚らわしく、もっとも雄々しくて、人の道にはずれ、もっともよく酒をくらい、愛しあうのにふさわしいところだったのだ。 (1989 : 8)

ここで莫言は、互いに正反対の意味を持つ単語からなる短文を連続して使用し、主人公の故郷に対する極めて矛盾めいた感情を生き生きと表現している。このうち、最高級を表す「最」を10回使っている。TTでは、井口は「最」と同じ意味の「もつとも」を5つの形容詞節の前に置き、STの文体上の特徴を保つ。ではなぜ莫言のように10の「もつとも」を使用しないかという点、と、「もつとも」(mottomo)の音節の長さが「最」(zui)の倍以上であるため、10の「もつとも」を入れるとテキストがくどくなり、自然な日本語ではなくなると考えたためではなかろうか。つまり、莫言の勢いのある文体上の特徴を取り入れつつ、日本語として流暢になるようにという工夫が見られる。

もう1つの例をみてみよう。「祖母」戴鳳蓮が戦場で弾丸を浴びて倒れ、死に迫った時の心理的描写という小説で有名な段落である。

ST:奶奶感到疲乏极了，那个滑溜溜的现在的把柄、人生世界的把柄，就要从她手里滑脱。这就是死吗？我就要死了吗？再也见不到这天，这地，这高粱，这儿子，这正在带兵打仗的情人？枪声响得那么遥远，一切都隔着一层厚重的烟雾。豆官！豆官！我的儿，你来帮娘一把，你拉住娘，娘不想死，天哪！天……天赐我情人，天赐我儿子，天赐我财富，天赐我三十年红高粱般充实的生活。天，你既然给了我，就不要再收回，你宽恕了我吧，你放了我吧！…（中略）…天，什么叫贞节？什么叫正道？什么是善良？什么是邪恶？你一直没有告诉过我，我只有按着我自己的想法去办，我爱幸福，我爱力量，我爱美，我的身体是我的，我为自己做主，我不怕罪，不怕罚，我不怕进你的十八层地狱。我该做的都做了，该干的都干了，我什么都不怕。但我不想死，我要活，我要多看几眼这个世界，我的天哪…… (1995:70)

TT: もう疲れた、祖母はそう感じた。つかみどころのない現在が、生の世界が、彼女の手からすり抜けようとする。これが死なのだろうか。わたしは死ぬのだろうか。もうこの空、この大地、高粱、息子、兵を率いて戦っている愛らしい人を見ることはできなくなるのだろうか。銃声はるか遠くで聞こえる。す

べてが厚い霧に隔たてられている。豆官！豆官！ねえ、おまえ、母さんをつかまえておくれ。母さんは死にたくない。ああ！神様……あなたは愛しい人を、息子を、富を、三十年の赤い高粱のように満ち足りた暮らしを、わたしにくださった。神様、どうぞくださったものなら、取りかえさないでください。あたしを放して！…（中略）…神さま、貞節とは、正義とは、善良とは、邪悪とはなんでしょうか。あなたは、どうとう教えてくださらなかった。あたしは自分なりにやるしかありませんでした。あたしは幸せを、力を、美しさを愛しました。あたしの身体はあたしのもの、自分で決めました。罪も罰も、あたしは怖くない。地獄の底へ落とされても平気です。やるべきこと、やらなければならないことを、わたしはみんなやりました。あたしは、なにも怖くない。ただ死にたくない、生きていたい。この世界をもう少し見たいのです。ああ、神さま……

(1989 : 100-101)

これは「祖母」の生命の最期である。リズム感がある短文の連用はここで2つの機能を果たしている。まずは、「祖母」が弾丸を浴びて次第に意識が遠のいていく様子を反映する。次は「祖母」の生に対する強烈な渴望というエネルギーを描いている。井口が連続の、リズム感がある短文を使いTTにおいて「祖母」のその時の断続的な精神状態と生命の迫力を再現すると同時に、STにおける重複の部分を消した。たとえば「天賜我情人，天賜我儿子，天賜我财富，天賜我三十年红高粱般充实的生活」の中の「天賜我」（神様から私にくださった）を一回だけ残し、訳文を「神様……あなたは愛しい人を、息子を、富を、三十年の赤い高粱のように満ち足りた暮らしを、わたしにくださった」に変えた。また「什么叫贞节？什么叫正道？什么是善良？什么是邪恶？」の中の「什么叫」（とは何か）も一回を残して省略し、「貞節とは、正義とは、善良とは、邪悪とはなんでしょうか」という訳文になる。TTはこうした省略により、STのエネルギーなどを反映しつつ、流暢な日本語訳文を達成した。

井口は、STに比較的忠実な考えに基づき、特定の意味を持つ単語または短文及びSTの詩学という2つの次元におけるSTの異質性を保つことによって、小説人物の日本軍に対する憎みやハンセン病者に対する嫌悪など、様々な感情を如実に日本人読者に伝えた一方、

文体上で非常に自然な日本語訳文を産出した。

次の節では、『赤い高粱一族』の TT の読者はどのような感想を持っているのかを考察しよう。

5.6 井口の翻訳に対する読者の反応

井口は小説の欠点を指摘する一方、異質化のストラテジーで語彙の意味上も文体上も ST に接近する TT を翻訳した。では、読者はどのように井口の翻訳を受け止めているのか。小説の登場人物の強烈な感情や生命のエネルギーに傾ける読者と井口が指摘した諸欠点が気になる読者のどちらが多いのか。

5.6.1 読者の反応の測定方法

読者の翻訳目的が達成されるかどうかを解明するには、読者の反応に対する考察が必要不可欠である。読者反応の研究で最も難しいところは、読者の反応を収集することにある。なぜなら、文学作品の読者は不特定多数であり、散在しているため、新聞など伝統的なメディアを利用して、特定の文学作品に対する読者の感想を数多く収集することは簡単ではない。

ところが、インターネットなど、新しいメディアの発展によって、文学作品に対する不特定多数の読者のコメントの収集が可能となる。特に、『赤い高粱一族』の場合、日本人読者のコメントがインターネット上に大量に存在している。そうしたインターネット上のコメントを活かすために、筆者は以下の研究プロセスを考案した。

①個人ブログ、アマゾン、読書感交流ネット「読書メーター」などでの『赤い高粱』のコメントを収集する。選択の基準は読者が確かに本を読んだことを確認できるコメントに限る。

②コメントで頻出するキーワードを抽出し、一覧表を作る。

③コメントで直接に井口の訳文または後書きに言及する部分を重視する。

④以上のキーワード一覧表と訳文/後書きに対する読者の感想を考察し、井口の訳文に対する読者の感想を分析する。

ただし事前にとわっておきたいのは、このような方法で収集した読後感 は 2014 年前後のものであり、『赤い高粱』が出版されたばかりの 1980 年代末のものではない。それゆえ、それらの読後感 は 1980 年代末の読者の観点を必ずしも代表できるとは限らない。

5.6.2 『赤い高粱』の読者反応

前記の選択基準に合うコメントは 95 件確認できた。コメント掲載ページの内訳表は以下の通りである (表②を参照)。調べたところ、『赤い高粱』に対するコメントは多く存在するのに対し、『赤い高粱 続』に対するコメントは殆どなかった。理由は、恐らく『現代中国文学選集』での『赤い高粱』と『赤い高粱 続』は長い間絶版となっていたが、『赤い高粱』の文庫本は 2003 年以来何回も増刷されたため、読者が多いのである。一方、『赤い高粱 続』のは 2013 年によろやく出版されたため、コメントが少ないのは当然と言える。それゆえ、本研究では、『赤い高粱』のコメントのみを取り上げる。ただし、このうちの一部のコメントは、『赤い高粱 続』にも言及する。

また、著作権などを考慮にいれ、本研究ではコメントの全文引用はしないが、コメントを掲載している URL を明記する (表②を参照)。

第 5 章表②読者感想コメントの掲載ページの内訳表

数量	掲載ページ	URL (2014 年 11 月 1 日から 3 日までにアクセス)
17	アマゾン	http: //www.amazon.co.jp/product-reviews/4006020791/ref=cm_cr_pr_top_link_1?ie=UTF8&showViewpoints=0&sortBy=bySub

		missionDateDescending
73	読書メーター	http://bookmeter.com/b/4006020791
1	個人ブログ A	http://d.hatena.ne.jp/nisijimadokusyo/20121107/1352272554
1	個人ブログ B	http://sekitanamida.hatenablog.jp/entry/2012/01/01/143000
1	個人ブログ C	http://donhenley.blog.so-net.ne.jp/2013-02-19
1	個人ブログ D	http://gomitsu.cocolog-nifty.com/blog/2013/01/post-7e62.html
1	個人ブログ E	http://members.jcom.home.ne.jp/tana-masa/kansou/akaikouryo.htm

5.6.3 キーワード一覧表からみる読者の感想

まず、コメントで頻出するキーワードの一覧表を作成し、読者の読後の感想を分析する。一覧表はアマゾンと読書メーターの 90 の短いコメントに基づいて作成する。個人ブログはいずれも長い文章であり、短いコメントと同等のキーワード抽出の研究手法で分析するのは不適切であるため、キーワード抽出の対象から除外する。頻出順にそって並ぶキーワード表は以下のようなものである（表③を参照）。

第 5 章表③『赤い高粱』コメントに出るキーワード一覧表（前 10 位+2）

順位	キーワード	出現頻度
1	抗日戦争（反日、抗日、日本軍の暴行、etc）	28
2	残酷（残忍、グロイ、暴力、殺戮、etc）	27
3	ノーベル賞（ノーベル賞受賞、etc）	24
4	エネルギー（エネルギー、生きる力、etc）	23
5	おもしろい（etc）	13
5	フォークナー、ラテンアメリカ文学（マルクス、リョザ、etc）	13

7	(マジック、チャイニーズ、etc) リアリズム	10
8	生臭い (血臭い、etc)	8
8	下品な表現 (糞、尿、etc)	8
8	映画「紅いコーリャン」(映画、映画「紅い高粱」、etc)	8
-	ハンセン病、差別的な表現	2
-	英雄崇拜、身内礼讃	1

他のキーワード: 状絶と華美 (etc)、多弁 (etc)、鮮烈 (etc)、グロテスク (etc)

*表には高粱、登場人物名などの固有名詞は入れない。

井口が指摘した『赤い高粱』における欠点にあたるキーワードは太字**で表現する。

以上の (10+2) のキーワードは、以下四つのジャンルに分けられる (表④を参照)。

第5章表④『赤い高粱』コメントに出るキーワードの分類表

ジャンル	キーワード (頻出順)
作品の外部情報	ノーベル賞 (3)、映画「紅いコーリャン」(8)
作品の時代背景	抗日戦争 (1)
作品の創作方式	フォークナー、ラテンアメリカ文学 (5)、(マジック、チャイニーズ、etc) リアリズム (7)
作品に対する感想	残酷 (2)、エネルギー (4)、おもしろい (5)、生臭い (8)、 下品な表現 (8) 、ハンセン病、差別的な表現 (—)、 英雄崇拜、身内礼讃 (—)

統計の結果からみて、読書の動機に関して、莫言のノーベル賞の受賞をきっかけに『赤い高粱』の閲読にとりかかる読者が非常に多いようである。但し、この本を読んでから、さすがノーベル賞作家の小説だと考えている読者もいれば、有名無実だと考える読者もい

るようだ。ついで、映画を見てから原作小説を読もうとする読者も少なくない。但し、映画に対しては一様に好評であったが、本に対する評価は多様である。「映画に強い衝撃を受けたので、原作にトライ。あっけなく、撃沈。文体について行けないし、感情が入っていない」と、苦情までいう読者もいる。

『赤い高粱』のレビューで、最も多くの日本人読者が注目している点は、抗日戦争という時代背景である。『赤い高粱』における抗日戦争の位置づけをめぐって、日本人読者と文学研究者との間で大きな隔たりが生じる。というのは、日中両国の研究者たちは『赤い高粱一族』を分析する際、日本に対して敵視すること、または日本軍の残忍さを暴露することを小説のメインテーマとしないようだ。研究者の『赤い高粱一族』と抗日戦争との関連性に言及する言論は主に以下2つが代表的である。

①彼の小説は戦争を奇想化させる。沢山の奇想は戦争生活の詩学を構築している。彼の『赤い高粱一族』が軍事題材にもたらした新鮮な息吹は、数年間を置いて読み返せばもっと明らかになるだろう。

(徐 1990: 1)

②莫言が全力を挙げて褒めているのは、偉大な戦争（日中戦争：引用者注）のため高まる民族精神ではなかろうか。

(雷 1987/ 1990: 129-130)

井口（2003: 310）は後書きで『赤い高粱一族』と抗日戦争との関係を以下のように述べている。

『赤い高粱一族』は抗日戦争を語っているようですが、その本当の中身はわが村人たちが語っていた民間の伝奇<＝荒唐無稽な物語>なのです。

以上のテキストからみて、日中両国の文学研究者のうち、抗日または日本軍の残忍さを

『赤い高粱一族』のメインテーマと考えている人は殆どいないだろう。訳者の井口も『赤い高粱一族』の中身は民間の伝奇だと主張している。さらに、彼は読者をもっぱら抗日戦争に注目させないように、『赤い高粱 続』（2013:426）でもう一度強調した。

『赤い高粱』の物語は、抗日戦争を背景に展開されていますから、私たち日本の読者はどうしても「重く」読んでしまいます。それはしかたないことかもしれません。しかし、…（中略）…しかつめらしい「文学」とは離れた、荒唐無稽なエンタテインメントとして読む—そういう読まれかたもあってよいのではな
いか。

それにもかかわらず、日本人読者のうち、『赤い高粱一族』を抗日の宣伝として受け止めている人が相当いるようだ。「抗日戦争」という表現は読者コメントで出現頻度の最も高いものである。「抗日戦争が物語の中心にあるため残虐なシーンが多くて、読むのがしんどかった。日本軍がこれだけのことをしたのだったら、恨まれても仕方ないな…と正直思った」と考えた読者もいるし、「ただの反日感情むきだしの本」とさえ考える極端な読者もいる。当然ながら、例えば、「日本憎し」の呪詛に満ちた内容なんだろうなと想像してしまうのだけれど、これがじつにリーダビリティの高い大河冒険娯楽小説となっている」と考え、抗日戦争を後景化したものとして受け入れる読者もいる。

このほか、出現頻度の2番目に高い「残酷」というキーワードも日本軍の暴行にかかわっている。特に日本軍が劉羅漢大爺の皮を剥くシーンは、大勢の読者の眉をしかめさせる。抗日や日本軍の残忍さといったイメージは、日本人読者にとって『赤い高粱一族』の最も印象的な部分となってしまう。

ちなみに、欧米での『赤い高粱一族』の書評においては、日本軍の残忍さ、及び小説キャラクターの間の性的交渉を重んじて紹介している（孔&施 2006: 243-246）。これは、小説が売れるためにとられた戦略である可能性が低くないだろう。

日本人読者の作品に対する感想は出現頻度の高い順に、残酷（27）、エネルギー（23）、おもしろい（13）、生臭い（8）、下品な表現（8）である。このうち「残酷」は日本軍の暴行と一部関連しているため、読者のコメントに頻繁に現れている。「残酷」に次いで多いのが、ほぼ1/4のコメントに見られる「エネルギー」及びそれに類するキーワードである。いくつかの例を取り上げよう。

①「生きているんだ」という強烈な生命力、生きるための本能の力強さといったものが、文体からひしひしと伝わってくるのだ。

②登場人物一人一人の生きる力が紙面からほとばしるようで、凄まじい。

③そんな世界を善悪ではなく、あるがままの生の営みとして捉えるとき、そこに横溢する「生」のエネルギーの美しさにただ圧倒される。

コメントからみて、ここで「エネルギー」の指し示すものが、主人公たちの溢れる生きる力という意味であることが推察される。生のエネルギーは、『赤い高粱』の特徴として、これに関する研究成果がすでに山ほど残されている（cf. 孔&施 2006、張 1990、etc）。「エネルギー」に次ぐ読者の感想は、「おもしろい」である。コメントからみて、この面白さは2層の対象を指す。第1層は、文化的同質性が非常に高い日本では、マジックリアリズムの文学者は少ない（大江健三郎の一部の小説はその特徴を持つ）。日本読者は莫言の中国風のマジックリアリズムに出会うと、その作風の新鮮さと面白さを感じるだろう。つまり、日本人読者は創作方式が面白いと感じている。第2層は、莫言のノーベル賞受賞講演「物語る人」からみて、彼は自分の物語る能力に非常に自信を持っているようだ。彼の作品のうち、『赤い高粱一族』の伝奇性は文学研究界で定評がある。この本で莫言は確かに物語る才能を十分に発揮して、読者を圧倒している。つまり、日本人読者は、物語が面白いと感じている。

以上の「エネルギー」、「おもしろい」は当然ながら、井口の筆によって読者を感じさせたことである。

一方、井口の指摘した欠点のうち、下品な表現（糞、尿）などに関するコメントは最も多く、8回出現する。とはいえ、読者はひたすらこのような表現を嫌悪するわけではない。

「当時の中国の農村の人々の生活振りが糞尿、尻、屁と言った卑俗な言葉遣いを多用して描かれている点がチャイニーズ・リアリズムと称されている所以であろう」という、風刺の口調でそのような表現を嫌がる読者もいるし、「本作においても、猥雑かつ残酷なシーン、糞、小便、屁などの品の悪い言葉が頻出するが、それだからこそ、「生きているんだ」という強烈な生命力、生きるための本能の力強さといったものが、文体からひしひしと伝わってくるのだ。」のように、粗暴な表現を、作品中に溢れる生きる力に関連付けて考察する読者もいる。

ハンセン病者に対する差別に関しては2つのコメントのみ言及されている。たわいない民族意識の高揚に関して、確かに後書きを通じて莫言がマジックリアリズムの方法を使用していることを知っている読者はいるが、彼らのうち、この方法を「たわいない」民族礼讃ととらえる人は殆どいない。（ただし、作品から「共産党礼讃」を読み取ったコメントがある）。

5.6.4 コメントからみる読者の訳文及び解説に対する評価

井口の訳文または解説に言及する読者のコメントは以下 11 ある。このうち①から⑧まではアマゾンと読書メーターに載せられたものである。⑨から⑪は個人ブログに書かれたものである（表⑤を参照）。

第5章表⑤『赤い高粱』コメントに出る読者の訳文及び解説に対する評価内容一覧表

番号	内容
----	----

①	<p>そうだ！一番近いのはガルシア・マルケスだ！と思ったら、解説によると莫言はマルケスを 読み大いに触発されたい。</p>
②	<p>ディテールに粗さがあって、注釈がついていたりもして。</p>
③	<p>また、私は翻訳物が苦手でありあまり読まないのですが、本作品は訳者の力量とでも云いますか、 親切で読みやすいものでした。</p>
④	<p>原書を読めたらいいのだけど</p>
⑤	<p>解説でガルシア=マルケスとの類似点があげられていて、なるほどと思いました。</p>
⑥	<p>解説を読んでいたら「残虐なまでの命の収奪は、生きる本能として捉えられている」と記さ れている。「そのように読むのか～」と半ばあきれてしまうが、</p>
⑦	<p>作中にも注がある。</p>
⑧	<p>こんな上手な文章で中国に触れられて、新鮮で幸せだ</p>
⑨	<p>訳者は「莫言のころみは成功しているとはいいがたい」「この作品のあちこちにあらわれる たわいもない『民俗精神』礼参、『原始』の世界賛美などにでくわすたびに、私の筆はとまって しまい、しばらくの間苦笑しているしかありませんでした」「莫言の底の浅さこそがハンセン病 者に対する思慮のない、粗暴な表現などにもつながっている」と書き、さらには同世代の作家 である残雪の「原始的な民俗、神話の類いに粉飾を加え、いい加減にでっちあげ、生命そのも のの衝動に見せかけたまがい物」というかなり辛辣な批判まで掲載する始末。</p> <p>12巻はまだ解説といえますが、6巻の「訳者あとがき」は不満や愚痴しか書かれておらず、 「そんなに嫌だったら、翻訳を引き受けなければよかったのに！」と突っ込みたくなるほどで す。作者はともかくとして、訳者や解説者は嘘でも褒めるのが常識だと思っていた僕は、大変 ショックを受けました（その後、発行された岩波版も同じ訳者ですが、あとがきは差し替えら れている。</p> <p>とはいえ、彼らがいいたいこともよく分かります。莫言の小説は、いかにも支那人らしい図々 しさ、太々しさ、無邪気さ、俗っぽさに溢れており、これを許せないと感じる人もいると思う</p>

	からです。
⑩	訳文なので、文体という表現が適切かどうかわかりませんが、鮮やかで生を強烈に感じさせる文体です。
⑪	巻末の訳者（井口晃）解説と、解説の張競の解説がとても良い。莫言の生い立ちから、莫言の生きた中国の時代、更には莫言の文学的位置まで、きっちりと解説している。

では、この表から読者の訳文および後書きに対するどのような評価が読み取れるのか。

まず、全体との比率からみて、自分が読んでいるのが莫言の ST ではなく、井口の TT であると意識している読者が少なからずいる。さらに、この中には「訳文なので、文体という表現が適切かどうかわかりません」のような、ST と TT との区別を意識する読者までいる。

次に、内容からみて、読者は主に3つの観点に注目している。

1 つは、訳文の質である。「本作品は訳者の力量とでも云いますか、親切で読みやすいものでした」と「こんな上手な文章で中国に触れられて、新鮮で幸せだ」の2つのコメントがある。これに対して、訳文に関して不満を言う読者はほとんどいないようだ。これで少なくとも一部の日本人読者が井口の訳文に満足していることはわかった。ただし、TT を読む読者の殆どは TT と ST の対照をしない（できない）ため、彼らの TT の良し悪しの判断基準は非常に曖昧であろう。例えば、コメント④「原書を読めたらいいのだけど。」⁶⁷は「TT の質が悪いため ST を読んでみたい」のか、それとも「TT を読んで、ST でも読みたくなった」のかは、文脈からは判断しにくい。

もう1つは、訳文における注である。井口が使用する割注は常にテキストの流暢性を切

⁶⁷ 読了後、ずしんと重い何かのしかかってくるような感じがした。血生臭いのに、美しく、力強い物語だった。目を覆いたくなるような残酷な描写に何度も挫折しかけたけれど、それでもページを捲る手は止まらず、最後まで読んでしまった。人間の、ありのままの営みを、決して飾ることない姿を見事に描いていると思う。読後も高粱畑が目の前に広がっているかのよう。原書を読めたらいいのだけど。

断するため、訳者の役割を浮き彫りにする方法である。『赤い高粱』における割注の殆どは、井口が ST の異質性を保つと同時に、読者に文章を理解しやすくさせるための知識の補足説明である。注に言及した読者は何人かいる。

最後に、解説（後書き）は作品全般、作品の文学史における位置付け、作家の履歴と評価など、当該作品をめぐるより大きな視点から、訳者が自らの意見を表明する場である。井口は『赤い高粱一族』に対する批判もここで行う。しかしながら、コメントからみると、読者たちは小説の作風、作家・莫言の資料など、知識的な情報のみに興味を持っているらしい。唯一の例外は、コメント⑨の読者が、「莫言の小説は、いかにも支那人らしい凶々しさ、太々しさ、無邪気さ、俗っぽさに溢れて」と言っていて、井口の主張に理解を示したことである。それにもかかわらず、彼は「そんなに嫌だったら、翻訳を引き受けなければよかったのに！」という感想を書き込んでいる。つまりこの読者は井口の観点到賛成するものの、井口の批評が過酷ではなかろうかと完全に納得してはいないようである。

総括すると、読者は訳文に大体満足し、注と解説における情報提供の部分に関心を持っている。「抗日戦争」や「日本軍の暴行」など歴史的要素以外、日本人読者の『赤い高粱』に対する読後感は、主に「エネルギー」、「おもしろい」などに集中する。つまり井口は ST にあふれるエネルギーや生命の迫力を読者に確かに伝えている。（映画「赤いコーリャン」が生動的エネルギーを浮き彫りにしたことが読者に影響を与える要素となったことも考慮にいれる必要がある）。

もちろん井口の後書における指摘によって、ハンセン病患者差別やたわいない民族精神礼讃などの欠点が気になる読者も少ないながら存在している。ただし、莫言は現在の日本で最も有名な中国人作家であるため、莫言に関する様々な資料が簡単に入手できる。このため、単なる井口の批評のみで莫言を認識する読者は少ないと予想できる。それゆえ莫言の作品が井口によってしか翻訳されなかった 1980 年代末期には、井口の莫言批評が現在より読者に対する影響力が強かった可能性があることは認めざるを得ないだろう。

5.7 まとめ

日本において最も有名な中国作家莫言の作品には 6 人の翻訳者が存在している。このうち井口は莫言を日本に紹介した先駆者として、莫言の代表作『赤い高粱一族』を翻訳した。

『赤い高粱一族』は中国農民の生的エネルギー及び作家莫言の想像力を存分に表現する一方、1980 年代の日本社会において容認できないハンセン病者差別などの欠点を含む。それゆえ、井口は翻訳する際、後書で「ハンセン病者に対する差別」、「下品な表現」、「たわいない民族意識」など日本社会の主流的詩学および井口自身の文学観に合致しないところを指摘する一方、特定の意味を持つ単語または短文及び ST の詩学という 2 つの次元における ST の異質性を保持する形で、『赤い高粱一族』における文学的価値の二重性を作り出した。井口の翻訳を通じて、日本人読者は中国においてマイノリティーグループに対する配慮が日本社会より鈍感である事実を認識しながら、生的エネルギーが溢れ、無尽な想像力が湧き出す中国新時期文学の高い水準をしみじみ感じる。

ただし、本論では「ハンセン病者に対する差別」の批判がすこし度を越えるのではないかと検討した。また、井口の批判のためか日本で人気映画「紅いコーリャン」の原書『赤い高粱一族』の訳本は 1990-2002 年まで増刷されなかったことなどがあげられるだろう（藤井 2002/第 3 刷 2004 : 36）。

第6章 藤井省三の莫言論と大江健三郎

—1990年代における藤井による莫言像の構築

第5章では、井口が『赤い高粱一族』の翻訳によって新時期文学の文学的価値の二重性を作り出したことを解明した。

続いて第6章では莫言のもう1人の訳者藤井省三が1990年代において四位一体の莫言像を構築することによって、莫言文学の価値を肯定する一方、知識人を含む一般民衆と共産党イデオロギーとの軋轢を語った。1990年代に限定する理由は、藤井が1990年から1990年代中期まで日本における莫言の主な訳者⁶⁸であり、彼の莫言に対する研究の大部分も1990年代の間に完成したため、1990年代において日本における莫言像が主に藤井によって構築されたからである。対して1990年代末期から、吉田富夫は莫言小説の翻訳に取り組み⁶⁹、莫言に対する研究も展開してきた。21世紀に入ると日本における莫言像が多種多様の様相を呈していく。

1980年代末期の中国で起こった政治事件をきっかけに、藤井は「冬の時代を迎えた中国作家にわずかでも物心両面の支援を送りたい」（2013:278）、「日本において一人でも多くの読者の共感を得て、多少なりとも「時局」に影響を与える一つのきっかけとなれば幸いと思う次第である」（1990:278）などの目的で、莫言と鄭義の作品を中心に中国同時代文学の翻訳に取り組んだ。1990年代において彼は莫言の作品を3冊にまとめて翻訳したうえ、大量の莫言論を書き、莫言と対面インタビューも行い、優秀な作家、農民、受難者、抵抗者という四位一体の莫言像を作り上げた。井口に反して、藤井は『赤い高粱一族』を含む莫言の諸作における文学性を大々的に賞賛し、莫言をガルシア・マルケスほどの作家にまで引き上げる一方、莫言の紹介及び莫言文学の翻訳を通して中国内部における公権力と一

⁶⁸ 1991年に出版した『中国の村から：莫言短篇集』では長堀祐造も翻訳の作業に参加したが、長堀は後書など書いていなかったため、莫言像の構築にさほど関与していなかった。

⁶⁹ 最初の訳本『豊乳肥臀』は1999年9月に平凡社によって出版された。

般民衆との軋轢を明らかにする。

莫言は、もともと映画「赤いコーリャン」の原作者としてすでに日本の知識人の間にある程度の知名度を持っていた。藤井の作り上げた四位一体の莫言像が、特別な歴史的背景の中で日本の知識人の中国作家に対する期待に応えることになり、莫言は、当時の日本の知識層の間で最も知られた中国同時代作家になった。日本の人文学者たちは、莫言の文学創作力を高く評価すると同時に、中国の主流イデオロギー的な諸規範に挑戦する姿勢に共感を示した。特に、このような莫言像は大江健三郎に共感をもって受け入れられ、大江の莫言受容に大いに影響を及ぼす。

本章では藤井の中国同時代文学に興味を持つ起因を探求し、1990年代に彼の作り上げた莫言像の構成要素を分析する。そして大江がいかに藤井の作った莫言像を受容したのかを考察する。

6.1 1989年の政治事件による藤井の中国文学研究上の転換

1989年6月に中国北京で大きな政治事件が起こった。日本内閣府による「外交に関する世論調査」では、「中国に親しみをもつ」と答えた回答者は1988年の70%未満から1989年には約50%に落ちてしまった。毛里(2007:232)によれば、1989年の政治事件以来、対中イメージは着実に悪くなってきている。

一方、もともと日中友好が主流の意見をしめる日本の知識人層はこの事件をきっかけに、対中姿勢が大きく変化した。1989年6月5日に51人の知識人は中国政府に連名抗議の声を上げた⁷⁰。この中には丸山昇、小島晋治などの中国研究者もいれば、経済評論家の海江田万里、『現代の理論』編集長の安東仁兵衛など中国研究以外の分野の識者もいた。その時期、日本の一般知識人のうち、中国の情勢に関心を持つ人が数多くいたことがうかがえる。

藤井は1988年から現在までずっと東京大学に在職している。1980年代、藤井はすでに中

⁷⁰ 「中国の武力鎮圧に抗議声明 学者・評論家ら51人」「朝日新聞」、朝刊、1989年6月6日、p.30

国現代文学の研究者として活躍していたが、彼が中国同時代文学に関心を寄せるようになったのは、天安門事件がきっかけである。CINII で調べたところ、事件以降 1 年半の間に、それまでは人民共和国成立後の文学現象を扱ってこなかった藤井は 4 点のそれに関する業績を残した（表①を参照）。

第 6 章表① 1989.6-1990.10 の間の藤井の研究業績一覧表⁷¹（中華人民共和国時代の文学に関与する業績は太字）

文章名	掲載雑誌	出版年
共和国の興亡と中国文学（中国文学の現在—激動の半世紀<特集>）	ユリイカ vol.21-13	1989-10
現代中国年表（中国文学の現在—激動の半世紀<特集>）	ユリイカ vol.21-13	1989-10
エロシェンコの北京講演-2-「世界語とその文学」をめぐって	桜美林大学中国文学論叢 第 15 号	1990-3
中国,碎ける—開高健と老舎の死（開高健<特集>）	ユリイカ 第 22 巻第 8 号	1990-7
詩人たちの共和国——魯迅から老木まで（世界の詩は、いま——80 年代の光と影<特集>）	現代詩手帖 第 33 巻 10 号	1990-10

CINII で藤井の研究成果が網羅されているとは限らないものの、天安門事件後の藤井の研究の重心が同時代文学になったのは一目瞭然であろう。

では、藤井の関心はなぜこのように変わったのか。1 つの理由は天安門事件が藤井に与えた衝撃である。当時の世論からみて、このような衝撃は日本の知識人たちに共通するものとも言える。もう 1 つの理由は、おそらく藤井が長い間ずっと抱いていた共産党統治下の中国に対する不信感にあるだろう。藤井がもともと研究対象に中国文学を選んだのは、「社

⁷¹ CINII での検索結果：<http://ci.nii.ac.jp/nrid/1000070156818>(2014 年 12 月 10 日アクセス)

会主義にあこがれたから」だ。彼は「日中国交正常化後の初めての交換留学生として 79 年 9 月から約 1 年間、北京と上海・復旦大学で学んだ」。しかし、中国の「すべてが矛盾だらけで非効率にみえた」ため、「留学後ショックで 10 年間、中国へ行かなかった」⁷²という。この記述から見て、藤井は中国に留学した 1979 年以降、共産党統治下の中国社会の現実にショックを受け社会主義に失望したようだ。このような中国の現実に対する「ショック」が下敷きにあったからこそ、藤井は天安門事件でふたたび「ショック」を受けて共産党イデオロギーに対する不信感を噴出させたのではないだろうか。

藤井の同時代文学の研究活動は、4 つの分野で行われる。

1 つ目は作家論・作品論である。藤井は主に莫言と鄭義及び彼らの作品を中心に考察する。

2 つ目は文学史の編纂である。藤井は 1991 年に文学史的性格をもつ『中国文学この百年』を編纂し出版した。さらにそれを基にして、藤井は 2013 年までに既に 4 冊の文学史を出版した。それらの文学史では、新たな創作理念を追求すると同時に共産党の正統的イデオロギーに挑戦する一部の文学者（鄭義、莫言、北島、高行健など）が高く評価された（cf. 第 7 章）。

3 つ目は対人交流である。この時期に藤井が接触した作家は、鄭義と莫言が中心である。鄭義の場合、1990 年 3 月、藤井は中国作家協会山西分会気付で日本語版『古井戸』の序文を書いてもらう旨の手紙を鄭義宛に送った。これは藤井が鄭義と連絡を取り合おうとした最初の試みである。当時、鄭義が亡命中であったため返事を書くことは不可能だった（彼の妻の北明がそのかわりに序文を書いた）。のちに藤井は鄭義と連絡を取るようになった。鄭義の日本での講演会の殆どは藤井の招請によるものであり、また藤井が鄭義の 2 冊の著書の日本語訳を請合ったという事実からも、2 人の交流が少なからずあったことが伺える。

一方、莫言はこの時期にずっと自由な状態であったため、藤井と直接に連絡することが

⁷² 「学び合って、日中近く 隣人付き合い、もっと（日中復交 30 年）」「朝日新聞」、朝刊、2002 年 9 月 24 日、p.11

できた。藤井から莫言への最初の文通は1991年1月25日である⁷³。さらに、1991年12月藤井は北京で莫言に対面取材をした。その後、2人は終始連絡を取り合っている。2000年までに文字化された藤井と莫言との対談は4回あった。さらに、藤井(2013:270)は「莫言の故郷の山東省高密市東北部の村まで、彼の父上と兄上たちを訪ねたこともあり、今でも東京や北京で毎年のように顔を合わせている」。2人が頻繁に交流していることは明らかであろう。

最後は、中国文学の翻訳である。事件発生後、藤井は山口守、宮尾正樹とともにすぐに『発見と冒険の中国文学』シリーズ(JICC出版局、1990-1991)の企画と翻訳に取り組んだ。

藤井によると、シリーズの翻訳目的は2つある。1つは「冬の時代を迎えた中国作家にわずかでも物心両面の支援を送りたい」ということだ(ibid:278)。1990年当時、中国はまだベルヌ条約に加入していなかったため、中国作家の文芸作品を翻訳出版する際には、印税などを原作者に支払うことが必要だったわけではなかった。それにもかかわらず、藤井と出版社の打ち合わせによって、すべての作家に4%の印税が提供された。例えば莫言の場合、『中国の村から』が初版2,500部のため、藤井は莫言に221,400日本円(約15,000人民元に相当)を支払った。1990年当時、中国の有職者の平均月收入が179人民元前後であることからみて、その莫大な金額は確かに中国作家にとって物質的な支援になったに違いない。

もう1つの翻訳目的は、藤井によると、翻訳が「日本において一人でも多くの読者の共感を得て、多少なりとも「時局」に影響を与える一つのきっかけとなれば幸いに思う次第である」(1990:278)とのことである。つまり、藤井は中国同時代文学の翻訳を現実の政治状況に関与する重要な方法として扱うことがうかがえるだろう。

『発見と冒険の中国文学』は全8巻からなり、「20世紀中国語圏」という理念に基づき、中国大陸から香港・台湾まで、公开发表された文学作品から地下文学まで、1930年代から80年代までと、幅広い作家の作品を収録する翻訳選集である(表②を参照)。このうち、藤

⁷³ 藤井省三へのメールインタビュー、2015年1月15日。同メールで藤井は莫言に送った最初の文通の内容を提供してくれた。

井は第 1 卷（鄭義）の全体、第 2 卷（莫言）の一部を翻訳した。鄭義と莫言を選集の第 1 卷・第 2 卷にして優先的に出版したことは、藤井（2005：226）の述べた「天安門事件により逃亡し、あるいは弾圧されていた作家たちへの支援」という翻訳目的に合致するようだ。

『発見と冒険の中国文学』を皮切りに、藤井は莫言と鄭義の作品の翻訳に取り掛かった（2014 年末までに、藤井は中国大陸作家のうち殆どこの 2 人の作品しか翻訳していない）。

表②藤井の中国大陸作家の作品翻訳単行本一覧表（国立国会図書館サーチシステムにより整理）

書名	原作者	出版社	出版時期
古井戸：鄭義	鄭義	JICC 出版局	1990
中国の村から：莫言短篇集	莫言	JICC 出版局	1991
花束を抱く女*	莫言	JICC 出版局	1992
中国の地の底で	鄭義	朝日新聞社	1993
酒国：特捜検事丁鉤児の冒険	莫言	岩波書店	1996
神樹	鄭義	朝日新聞社	1999
透明な人参：莫言珠玉集**	莫言	朝日新聞社	2013

*本論では「花束を抱く女」は 1991 年『人民文学』7・8 号合刊に掲載された莫言の中編小説を指す。『花束を抱く女』は藤井の 1992 年の訳書を指す。

**『透明な人参：莫言珠玉集』の内容には、『中国の村から』と『花束を抱く女』の一部の TT が収録されている。

以上 4 つの研究分野を検討し、天安門事件をきっかけに、藤井が莫言と鄭義を中心にして同時代文学の研究を展開したことがわかった。そして彼の研究は中国の現実状況に関与する強烈な意識を持つ側面が見られる。



(写真:『発見と冒険の中国文学』シリーズの表紙はモノクロの背景に血色の文字で綴る様式である。他の新時期小説の訳本ではめったに見られない、こうした衝撃の強いカバーデザインは中国の現状に対する藤井の悲観的見方を反映しているだろう)

6.2 「優秀な作家」、「農民」、「受難者」、「抵抗者」——藤井の作り上げた四位一体の莫言像

1991年4月初版の『中国の村から』の解説「魔術的リアリズムの描く中国農村」は、藤井の最初の系統的な莫言論である。文章の中心的思想は、農民出身の莫言は希代の文学才能を武器にして共産党の独裁体制を批判することであるとよみとれる。この莫言論において藤井が莫言を（ガルシア・マルケスなみに）優秀な作家と位置づけた上で、さらに「農民」、「受難者」、「抵抗者」という像を彼に付与し強調するという、藤井の複眼的な莫言像の構築の枠組みを体現していると見ることができるだろう。その後の莫言像の構築は、基本的にその枠組みで行われている。莫言とのインタビュー、作家論、作品論などを通じて、

1990年代において藤井はその四位一体の莫言像を日本社会において定着させた。では、上記の莫言像を構成する4つの要素をそれぞれ説明しよう。

6.2.1 主要な構成要素: 優秀な作家

もし莫言が非凡な才能を持たずに、人々の心に刻まれる作品が書けないのであれば、彼の農民の天性、抵抗、受難は文学上の意味を持ち得なくなり、そうであれば藤井が莫言像を作る意味すらなくなることになる。それゆえ、優秀な文学的資質が、莫言の根本的な属性といっても過言ではない。

藤井(1991a: 214-215)は解説の1節目のテーマを「莫言—中国のガルシア・マルケス」にした。この節において藤井は中国の名作家鄭万隆の話から「ガルシア・マルケスなみの作家が、そう遠くない将来、中国に出現すると思う」という意見を引用し、莫言が鄭万隆の期待に応える作家のひとりであると判断した。2012年に莫言がノーベル賞を受賞した事実からみて、藤井の文学研究者としてのセンスと遠見がどれほど確かなものであったかが分かる。

後の『中国文学この百年』において、藤井は『赤い高粱一族』の粗筋紹介と文学批評をしている。『赤い高粱一族』は1989年にすでに井口によって翻訳されたが、出版当時井口はその小説の欠点を批判しただけで、厳密な意味での文学批評をしていない⁷⁴。それゆえ、日本で初めての『赤い高粱一族』論は『中国文学この百年』における藤井の文章である。この文章で藤井は赤い高粱の中核的精神は無法者の精神と帰結しながら、「叙述時間の魔術性という点では、莫言はマルケスをも超えていると言えるかもしれない」と、重層的に複数の物語を展開する入れ子式の語りの巧みさを高く評価した(1991b: 140)。

1992年、藤井は「蠅・前歯」を翻訳し、『中国ユーモア文学傑作選』に収録した。壮絶な『赤い高粱一族』や重い中国農村小説の他にも、藤井は当時の莫言文学に滅多にみられな

⁷⁴ ただし、2003年岩波新書版の『赤い高粱一族』で井口は文学批評を付け加えている。

いユーモア溢れる作品を日本人読者に紹介し、莫言の多彩な作風をみせた。

1996年、藤井は『酒国』を翻訳した。『酒国』は莫言のほかの作品と比べ読者の人気はやや低いものの、文学批評家たちから、莫言の作品のうちでは文学水準が最も高いと評価されている。『酒国』は深く関係しあう三重のテキストから成り立つ。第一重のテキストは、作家莫言による小説で、特捜検事丁鈎兎の捜査経過が描写される。第二重のテキストは、酒国市醸造大学の院生李一斗と彼が文学の師と仰ぐ莫言との往来書簡である。第三重のテキストは、李一斗が各種の銘酒を飲みながら書いた、中国現代文学の殆どすべての文体を備えた9編の、一連のつながりがある小説である。この魅力的でありながら難解な『酒国』を読者に理解させるために、藤井（1996：292-301）は上海師範大教員・張閔の『酒国』に対する分析を引用しながら、補足材料として自らの中国社会主義制度の二重性に対する認識も述べた。

一連の翻訳活動以外にも、『四十一砲』の書評と言い、4回にわたる莫言取材と言い、藤井は終始莫言文学の日本での受容に注力している。

藤井の全面的な推薦があったため、日本の評論家や文筆家の中にも莫言文学の文学性に注目する者が出てくるようになった。例えば川西政明は『花束を抱く女』の書評で、「本書を読んで、中国文学の世界同時性を信じることができた。…（中略）…石川淳や安部公房を連想させる奔放でいて緻（ち）密（みつ）な構成力と想像力と描写力がここにはある。花束を抱く女とは、物それ自体のように存在する自由の幻（ビジョン）である。そこには聖的な浄化が予告されているといえよう」⁷⁵と評価した。風間賢二（1997：234-235）は『酒国』を「昨年度の翻訳小説ベスト3」に選び、「伝統的価値観を転覆し、境界性を侵犯、過剰にして逸脱した語りによって表象された幾つもの嘘やイリュージョンを積み重ねていくことで現実＝真理に対する小説自身の関係を問題視した極めて自己照射的な長編である」と指摘した。

⁷⁵ 川西政明「『花束を抱く女』莫言著 逃避行が導く不条理の世界」、読売新聞、東京朝刊、1992年10月13日

このように、藤井の翻訳と紹介によって、中国文学研究者以外の日本の知識人は次第に莫言文学の魅力を意識するようになる。

6.2.2 副構成要素①: 農民

優秀な作家のほか、藤井は莫言像の3つの副構成要素を掘り出す。

まず、藤井がしきりに強調したのは莫言が純粹の中国農民の出身であり、中国農民だという点である。

藤井によると、中華民国期に農村小説を書くのは、「農村や小都市の富豪の子弟であり、故郷で数年の教育を受けたのち、大都市に進学したり就職した新興知識階級である。人民革命期に「人民文学」の星とされた趙樹理でさえ、出身こそ中農ではあるものの、師範学校入学の学歴を持っている。現代ルーツ文学派の鄭義、阿城らも北京など大都市の出身者である。このような中国文学の伝統の中であって、ひとり農村の出身者である莫言は異彩を放っている」(1991a : 226-227)。なぜなら、莫言は「生まれ落ちたときから青春期までの二十年間を高密県の農村で過ごしたのだ」、「小学校も中退で、幼年期から農作業をしてきたから、農民の思考、行動様式が身に染みついている。農民の願望、現代の農民の情念にたいへん近いものを抱いている」(1992 : 182)。

さらに、純粹な農民出身であるゆえ、莫言は農民を他者化した観察の客体としなかった。莫言が言ったように、「私が文学創作の状態に入った時、突然私の幼い頃の記憶が呼び覚まされたのです」(2001 : 201)。莫言が書いたのは、「自分の故郷の物語」、「少年時代の暮らし」に基づく一種の神話である。すると彼の小説でのキャラクターには、彼自身及び彼のまわりの人々の影と個性が絡み合っている。例えば、莫言はしばしば、デビュー作の「透明な人参」の主人公「黒い子」の原型が彼自身にあると強調している。また莫言の村人は彼の小説を読み、キャラクターの原型が彼らだと連想するケースも少なくない。このような莫言文学は、中国農民の心性を解き明かし、農民の考えを反映するものである。一方、

莫言自身も自分の農民という身分を強調している。

私は下層民衆の出身であり、現在も相変わらず民衆の一人です。私が民衆の運命に共感するのは、私自身为民衆だからなのです。私の父はいまも農村におり、私は毎年帰郷しては父たちと喜びや悲しみを分かち合っています。父たちの関心のありかたが、すなわち私の関心のありかたなのです。 (2003 : 187)

莫言の農民のアイデンティティは、紙面に躍如として描かれる。莫言自身が純粋な農民の出身であるため、時代に翻弄された 20 世紀の中国の農民が嘗めなければならなかった辛酸や苦痛も引き受けることになったのである。すると莫言の文学作品においては自然に農民のアイデンティティを主張し、農民たちの苦しい生活実態を描写するシーンが数多く含まれる。このような特徴をもつ莫言文学は一元的アイデンティティに対する抵抗になると同時に、中国社会での既得権益者との対立により批判を受けることが不可避になる。そのため、「莫言像」のもう 2 つの副構成要素として「受難者」と「抵抗者」が浮かび上がる。

6.2.3 副構成要素②: 受難者

莫言の受難に関する藤井の観点は、以下の 3 つの方面にまとめられよう。

1 つ目は、莫言の農民としての生活面における受難である。中国の農民階層は、中華民族が現代民族国家の形成と発展のプロセスで、大いに貢献したと同時に、莫大な苦難を受けた。中国では 1953 年からの一連の工業政策の優先と農業政策の失敗が相まって、農民たちは集団化されて、低い生産力と重い負担の下で苦しい生活を続けている。さらに 1959-1961 年の間に中国大陸で大飢饉が発生したときの被害者数は、未だに公開されていないものの、学者によっては莫大な人数が推定されている。そのうちの殆どは農民である。このような時代を背景にして 1955 年山東省高密県に生まれた莫言の生活上の困窮は様々なテキスト材料に散見される。

2つ目の受難は、莫言の家庭の身分は「中農」であったため、政治的差別を受けたことである。人民共和国の成立後、農民は財産によって「地主、富農、中農、貧農、雇農」という五つのランクに分けられている。「中農」は原則上中国革命の主力とされる貧農、雇農にとって団結の対象と設定されていたにも関わらず、当時比較的左傾化した方針のもとで常に闘争の対象になってしまった。莫言は以下のように述べている。

受けました。相当に激しい差別を。例えば入隊です…（中略）…中農の農家の子弟はなかなか機会に恵まれませんでした。…（中略）…募兵があるたびに私は申し込みました。毎年毎年です。そして四年目にあまり正常ではない手段によって採用になりました。農村の幹部に賄賂を贈り買収したのです。

(1992 : 186-187)

このような生活上と政治上の苦難は、莫言の受難者のイメージを構築すると同時に、中国農民が「政治的には愚弄され、経済的には差別されている」というイメージにつながる。

3つ目の受難は、莫言が話題作を発表したことから弾圧を受けたという、文学創作上の受難である。藤井と莫言のインタビューからみて、莫言は3回の弾圧を受けたことがある⁷⁶。

1回目は莫言が1987年に『人民文学』で話題作「歓楽」を載せた後のことである。1990年『人民文学』編集部は人事異動にあった。続いて1990年7・8月の合併号で新たに設けられた「読者の声」欄の6通の投書のうち、2通が莫言の「歓楽」を名指しで批判した。藤井&莫言(1992 : 206)によると、「こうして事件以来、莫言の作品は事実上の発表禁止となった」。

2回目は莫言が『人民文学』の1991年7・8号に「花束を抱く女」を載せた時である。これによって彼は復活を宣言したが、莫言と藤井の対談(1992a:195)において莫言は「花束を抱く女」は「掲載に際しては大量に編集部の手が入っている」と打ち明けた。それゆえ、

⁷⁶ 藤井(2013)では2回を主張したが、筆者は3回だと考える。

藤井はこの作品を翻訳する際、直接莫言からもらった原稿から訳した。編集部への添削に対して、藤井（2013：278）は「随所に無断の削除改変」があったと指摘した。

3回目は1997年、莫言の話題作『丰乳肥臀』の増刷禁止である。『丰乳肥臀』は誘惑性がある題名及び中国現代文学における革命歴史小説の伝統に対する徹底的な転覆のため、出版するやいなや大きな話題になった。政権取得の正当性が掘り崩されると恐れた現政権は、増刷放棄するよう莫言を説得した。

6.2.4 副構成要素③: 抵抗者

農民として生活苦や政治的差別などの受難を受けた莫言はそれなりの抵抗をした。莫言の抵抗の仕方は彼自身が述べたように、文学作品を通して「間接的に民衆の考え方を表現しているために、純文学を追求してはいても、政治問題にも自ずと関わらざるをえない」（2003：187）という迂回的なやり方での抵抗である。

藤井は莫言の文学作品における抵抗を以下の3つの方面にまとめる。

1つ目は題材である。莫言の小説には、敏感な話題に触れる傾向がある。例えば、『赤い高粱一族』では人民共和国成立前の農民の雄姿と成立後の悲惨な末路を対照的に描いている。『酒国』は、ある市の幹部たちが嬰兒を食べているという事件をめぐって、一人の検事が調査に乗り出すところから物語が展開する。藤井(1996:299)によると、その検事の「自滅的行為とはあの悲惨な「月の日曜日」事件をはじめとする民主化を要求する知識人たちの暗喩であったとは言えまいか。『酒国』という作品は巨大な迷宮である中国に立ち向かう非力な知識人たちの物語と読むこともできよう」。

2つ目は作品に漂う雰囲気である。莫言の専門家張（1990）の諸分析を踏まえ莫言を紹介した。張の諸分析のうち、藤井がもっとも重視するのは、張が社会主義中国において収奪され、生産力の低下を強いられて最大の被害を受け、最大の危機に直面させられた農民という新しい視点を莫言から取り出したことである。藤井(1991a)は莫言の『赤い高粱一族』

の冒頭で「進歩と同時に私は種の退化を痛切に感じるのである」と述べたことを人民共和
国成立後農民たちの挫折感の表現として説明する。さらに、「全編に苦痛と喪失感、荒涼た
る思いが溢れ出ざるを得ないのである。そして人民共和國期を舞台とする作品群でも、そ
の背景は飢餓であり、中越戦争で負傷した農村出身兵の絶望であり、現在の開放経済体制
下で生じる地域社会崩壊の危機である」と主張した (ibid : 218)。莫言の作品に漂うのは農
民たちの絶望という雰囲気である。これは、共産党の農村政策の失敗の隠喩ではなかろう
か。

3つ目は莫言が操るマジックリアリズムの創作手法である。藤井 (ibid:229) によると、「莫
言が誠実な文学者として、中華民国から人民共和國四〇年の圧政を経て現在に至る中国農
村をリアルに描き、その手法は魔術リアリズム (藤井の用語、本研究では「マジックリア
リズム」: 筆者注) にならざるを得ず、描かれる世界は特異な時空感覚と生命感覚とに満ち
たものとならざるをえない。そしてこのような想像力に溢れた文学こそ、人民共和國体制
を根元から掘り崩すのである」。具体例として、藤井 (1991b:146) は「そもそも『紅い高粱
一族』は、絶対一元的な法秩序が国家の倫理に過ぎぬこと、そして高粱畑の世界で迷妄に
とらわれつつも自らの意志で生を選びとった無法の英雄を描く作品であったのだ。「差別的
だ」と批判し、法秩序で規制せんとする者に対し、この小説はそのような一元的価値体系
を強制することの虚妄さを逆に鋭く指摘しているのである」と評価し、莫言のマジックリ
アリズムに秘められた絶対一元的な法秩序に対する抵抗意識を強調した。

藤井の考えでは、中国人のうちもっとも深刻な苦難を受けた農民階級の出身者でありな
がら、当時世界文壇で先鋒的なマジックリアリズム手法を使い、中華人民共和國成立後に
確立された正統的な文学価値観を掘り崩した作家は莫言しかないようである。それこそ藤
井が積極的に莫言を日本に紹介した理由ではないだろうか。

このような莫言像の構築によって、藤井は莫言の文学水準の高さを認めながら、莫言/莫
言文学に対する分析を通して中国内部における以下 2 つの階級と公権力との軋轢を明らか

にする。1つは人口構成の大部分を占めるにもかかわらず、人民共和国の成立後ずっと様々な政策によって生活に苦しむ農民階級である。もう1つは政治運動で翻弄されてきた知識人階級である。これによって藤井は中国内部における矛盾を暴露し、現政府の政治上の暗いイメージを指摘した。

6.2.5 強調された「受難」と「抵抗」

藤井が莫言像を作り上げる際、莫言の受難と抵抗を強調する傾向が見られる。

藤井は、1990年7・8号合刊の『人民文学』雑誌で、2通の読者投書が莫言を名指しで批判したという事例も紹介し、天安門事件以降中国文壇の保守派の巻き返しによって、莫言の作品が事実上の発売禁止となったことを強調した。

7・8号合刊は『人民文学』の新しい編集長・劉白羽が着任してからの第1刊である。今回の人事異動は天安門事件以後、共産党中央が文芸界に対して行った調整の結果といわれる。読者の投書は『人民文学』の旧体制を批判する道具として使われた。この意味では莫言が受けた批判の裏には国家権力が潜伏していたといえる。しかしながら、この2通の投書は殆ど1987年1・2号合刊の『人民文学』で掲載された莫言の小説「歡樂」における、受忍限度を超える数多くの表現（蚤が膾内に潜り込んだなど）をめぐって批判し、莫言自身に対する批判にならなかった。『人民文学』は中国作家協会の機関誌であり、共産党の文芸成果の公表および文芸政策の宣伝の総本山でもある。このような雑誌であまりにパイオニア的な作品が掲載されれば、確かに伝統的な道徳観/価値観を持つ、一部の読者の不満を招く可能性がないとはいえない。ただし当時の文脈でこのような不満が利用された可能性はある。藤井は莫言の短中編を数多く翻訳したが、批判を浴びた「歡樂」を未だに翻訳していないのも興味深い事実であろう。

さらに、藤井が頻りに強調した「事実上の発表禁止」は、恐らく当時の文脈をもとにした藤井自らの判断であろう。2000年のインタビューで、藤井の政治事件以後の知識人たち

の状態に関する質問に対し、莫言は次のように答えた。

前々回のインタビューを受けた時は、確かに六四事件の後でしたが、まったく創作できない状態ではなかったのです。物書きには何の障害もありませんでした。ただ、多くの作家はもう書く気がなくなっていました。 (2000 : 199)

ここで莫言は、政治事件発生後に作品が発表禁止されたことを否定した。ただし、莫言が批判を受けてから1年間以上『人民文学』に投稿しなかったのは事実である。それゆえ、「事実上の発表禁止」が本当か否か、決定的な証拠が見付からない限り検証できないであろう。

また、藤井（2013 : 278）は莫言の復活を宣告した『人民文学』1991年7・8月合併号に掲載した「花束を抱く女」において「随所に無断の削除改変」があったと指摘した。「随所に無断の削除改変」の内容を解明するため、筆者は『人民文学』における「花束を抱く女」のST、藤井の莫言の原稿にもとづくTT、そして1995年に作家出版社により出版された莫言文学選集『鮮女人』における「花束を抱く女」のST②を対照する方式を使用する。1995年出版された『鮮女人』におけるSTでは主人公の身分はすでに「中尉」に戻った。STの内容も『人民文学』におけるSTより藤井が莫言の原稿に基づき翻訳したTTに近い。1995年において公開出版する莫言作品は1990年代初期より、莫言の原稿に接近するものと考えられるだろう。

対照したところ、『人民文学』に掲載されたSTには大まかに2つのところで修正されたことが確認できる。1つは主人公の肩書きを海軍の中尉から遠洋貨物船の2等航海士に変更した点である。主人公の身分に対する修正は確かに人民解放軍の名誉を傷つけないなど編集部が慎重な考えが反映し、もし莫言の同意を得ないまま強引に行われるものであれば「無断の削除改変」といえるだろう。もう1つは『人民文学』におけるエロスの描写及びしも

ねたを部分的を修正した点である。このような修正は必ずしも「随所に無断の削除改変」とは限らない、なぜなら莫言の原文のしもねたのうち、適切とはいえないところが確かにあるからだ。次の例をみてみよう。

『人民文学』の ST：二副有些恼怒上来，提高了声音说：“你打算干什么？告诉你，黑头发的女人我见过，黄头发的，亚麻色头发的女人我都见过！” (1991:132)

藤井の TT：中尉は怒りがこみ上げてきて、声を荒げて言った。「いったい、どうしてろって言うんだ。いいかい、広東や海南島の女なんか、ずっと綺麗で五〇もあれば“一発”できるんだぜ！」 (1992:135)

『鮮女人』の ST②：上尉有些恼怒上来，提高了声音说：“你打算干什么？告诉你，你这种女人我见过，就算打你一炮，也不过 50 块钱，你高贵，一百元总可以了！” (1995:465)

主人公は女に 50 人民元を払い、縁を切ろうとするため、女を脅かす場面である。

太字かつ下線を引いた長い部分に関して、藤井の TT は莫言の原稿によって翻訳されたため、莫言の元原稿は「広東や海南島の女なんか、ずっと綺麗で五〇もあれば“一発”できるんだぜ！」に近いものと推測できるだろう。対して『人民文学』の ST の大意は「お前のような黒髪の女はもとより、黄色い髪、亜麻色髪の女も見たことあるよ」。つまり主人公が航海士（莫言の原稿は「海軍中尉」）であるゆえ様々な国の女と交際したことがあると法螺を吹いた時の、婉曲的表現である。『鮮女人』の ST②の大意は「お前のような女、一発やっても 50 元しかいらなないだろう」である。莫言の元原稿に広東や海南島の女性に対する差別的表現を含むのは一目瞭然であるため、公開出版する際に、編集者は莫言の不適切なところに修正を加える必要があると考えたのだろう。

それゆえ、編集者の修正をすべて「随所に無断の削除改変」と言うのが適切かどうかに関して議論の余地があるだろう。

一方、抵抗については、藤井は莫言の作品が、共産党が確立した正統イデオロギーを壊

す潜在力を秘めていることを強調した。たしかに、莫言のマジックリアリズム文学作品が共産党の一元的史観や現実上の農村政策を批判した。が、それは藤井（1991a:225）が主張した「中共イデオロギーを掘り崩す」威力を持っているかどうかに関しては、検討する余地があるだろう（ルーツ文学と政治の関連については cf.7.3.2）。

また、莫言がしばしば中国社会で衝撃性がある文章を書いているにも関わらず、1980年代初頭から1998年までずっと中国人民解放軍システムに所属していたなど生活面の事実からみて、莫言は主観的に「中共イデオロギーを掘り崩す」意図を持っている可能性が低いだろう。むしろ莫言の抵抗は「間接的に民衆の考え方を表現しているために、純文学を追求してはいても、政治問題にも自ずと関わらざるをえない」（2003：187）という迂回的なものである。

藤井が莫言像を作り上げる際に、「受難」と「抵抗」の特徴を強調した理由は2つあると考えられる。まず、藤井は激動の歴史文脈の背景で莫言研究に取り掛かったため、最初の作家論及び作品翻訳がある程度の政治的功利性を帯びることになったためだろう。この功利性は莫言自身の「受難」と莫言文学の「抵抗」を強調することから体现されている。

さらに、莫言像の構築の間に、莫言は文通や対面インタビューなどによって絶えず藤井に情報を提供した。例えばインタビューで莫言は自ら「花束を抱く女」が発表される前に『人民文学』の編集者によって大きな改ざんを受けたことを藤井に伝えた。このことから、莫言はある程度自分の「作家像」の構築に関与し、日本人に伝えてほしい「莫言像」を藤井の手を借りて日本人読者に伝えようとした可能性がある。ただ、当時の中国の激動する歴史的な文脈においては、作家自身ものに発生することをまったく予想できないこともありうる。それゆえ、莫言は自らの状況そのものではなく、自らの状況に関する推測を藤井に伝えたとも考えられるだろう。

6.3 藤井の作り上げた莫言像の大江健三郎による受容

当時の激動の歴史文脈において、中国知識人の運命は、すでに全世界の注目を集めていた。このような背景で藤井に推薦された莫言は、日本の文化人たちにある程度の反響を呼んでいた。このうち、莫言に強い関心を寄せ、さらに莫言が国際的影響力を持つように尽力したのは、ノーベル賞受賞者の大江健三郎である。

6.3.1 大江の莫言像に対する受け止め

大江は『中国の村から』の中の「秋の水」（藤井訳）をきっかけに、莫言文学に接触した。その後、彼は主に莫言の藤井訳と吉田訳を読んだ。

自身の作品が世界各国で翻訳された大江は、読んでいるのが莫言の原文ではなく、翻訳者による訳文であるという事実を明らかに意識している。莫言の日本語翻訳者のうち、大江は吉田と藤井の翻訳に言及し、藤井の訳文の方を高く評価している（太字は引用者による）。

我借助法文、英文和日文阅读了莫言先生被翻译为这些文种的所有作品，在这过程中呀，曾数度给译者写去信函，写的也是匿名信。莫言先生的日译本有两个主要译者，一个叫作藤井省三，是东京大学的教授，另一个叫作吉田富夫，还是藤井先生翻译得比较好。另一位译者翻译了莫言先生的很多作品，他是大阪那边的人，我对他的翻译存有疑问。每当莫言先生新的日译本出版时，我就进行调查，最终还是认为藤井先生的翻译“真好呀”。莫言先生是一个非常宽容的人，对译者不怎么说起这个问题吧。（引用者訳：私はフランス語、英語、日本語を通じて莫言先生のあらゆる翻訳された作品を読んだ。私は数回読んでから訳者に匿名の手紙を出したことがある。莫言先生の日本語訳は主に2人によって翻訳された。1人は藤井省三、東京大学教授である。もう1人は吉田富夫である。やはり藤井先生の翻訳がいい。吉田は莫言先生の大量の作品を翻訳した。彼は大阪出身の人である。私は彼の翻訳に疑問を持っている。莫言先生の日本語訳が出るたび、私は調査を行う。最終的にはやはり藤井先生の翻訳が「とてもいい」と思う。莫言先生は非常に寛容な人で、訳者にこの問題をあまり言わないだろう。） (2009:47)

大江が藤井の訳文をもっとも好んでいるのは明らかだろう。ただし、大江は中国語が堪能ではなく、原文と訳文との対照研究が行えない。彼は莫言の日本語訳が出るたび調査を行うと述べているが、どのような調査なのか。これに関して藤井はメディアの取材で次のように述べている。

吉田先生延续我的工作，翻译了《檀香刑》，《四十一炮》等好几部长篇。可是好像大江先生对吉田的翻译不是很满意，他更愿意读英文或者法文的译本⁷⁷。(引用者訳：吉田先生は私の翻訳作業を引き継ぎ、『檀香刑』、『四十一炮』などいくつかの長編を翻訳した。しかしながら、大江先生は吉田の翻訳が気に入らないらしい、彼は英語またはフランス語の訳本を好んでいる。)

藤井の記述から判断すれば、大江の調査では英語版またはフランス語版と日本語版とを対照的に読んでいる可能性が高い。そして、吉田の日本語訳より、大江は英語訳またはフランス語訳を愛読したようだ。ただし、そのような原文使用言語抜きの複数言語の訳文間の対照研究においては、どの程度吉田訳の特徴を見つけることができるのか疑わしい。大江は確かに吉田訳より藤井訳の方が好ましいとする態度を表明しているものの、調べたところでは、彼が藤井訳の優れた点と吉田訳の不足する点について、具体的に説明した文献は見つかっていない。一旦ある訳者の翻訳の特徴が気に入ってしまうと、同じ作家のほかの訳者に抵抗感を感じるような排他的意識が生じるのではないかと思われる。大江が最初に莫言を読んだ1990年代初頭から中盤まで、莫言の翻訳の殆どは藤井によって行われていた⁷⁸。藤井が作った莫言像はその時期すでに大江の心に染み付いていたのだろう。

さらに、大江の中国文学に関する知識は藤井の論評と論文からも大きく影響を受けたこ

⁷⁷南方都市報の藤井省三へのインタビュー、同席者施小炜(当時中国上海の杉達大学の教授、村上春樹の翻訳者) <http://news.nandu.com/html/201303/28/40680.html>、2014年11月6日アクセス。

⁷⁸ 藤井訳より井口訳の『赤い高粱一族』が先行した。ただし、大江は最初に藤井訳の莫言を読んだ。その後大江は井口訳の『赤い高粱一族』を読んだが、この訳作に一切の評価をしなかった。

とがわかる。

私の引用（莫言を含む中国文学の諸事象：訳者注）は、我が国のおそらく最良の専門家、藤井省三教授の『中国文学この百年』（新潮選書）によるものです。これから後も幾つもの点でこの本に事実を確かめながら話をしてゆきます。 (2001:210)

大江は藤井を日本で最も優秀な中国文学専門家と呼び、『中国文学この百年』に完全に信頼を置く姿勢を見せていた。この本で藤井は『赤い高粱一族』と他のいくつかの莫言小説を関連させて考察しつつ、農民出身の莫言が自身の小説で「忠実に純粋に生きた無法の人びと」を「美しく……英雄的」と回顧しているようであると説明した。一方でこの対置として、人民共和國体制下に生きる農民の「種の退化を痛切に感じる」と莫言が記していることを藤井は強調している（1991b : 145）。また、「（『天堂ニンニクの歌』において：引用者注）莫言は意識の流れの手法を多用しつつ、現代農村で復活した売買婚制、共産党官僚の腐敗などの諸問題を鋭く突いている」など、藤井は莫言の作品がいかに関共産党政権を動揺させたかについて分析した（ibid : 148）。つまり藤井による「優秀な作家、農民、受難者、抵抗者」という莫言像の原型はすでに『中国文学この百年』に秘められていると言えよう。大江は『中国文学この百年』のほか数多くの莫言の藤井訳及び莫言に関する論文、インタビューを読んだことがあるようである。このようなテキストも大江の目に映る莫言のイメージに少なからず影響を与えただろう。

藤井による莫言文学の翻訳及び藤井の作り上げた莫言像に接触した大江は、莫言への関心を示したが、それは主に2つの方面に向けられていた。1つは2人の文学思想の共鳴であり、もう1つは莫言の政治姿勢の問題である。

6.3.2 大江の莫言文学に対する評価

莫言も大江も小さくて閉鎖された村に生まれ、20歳前後で故郷を離れた。2人の文学世界も、周縁（大江は四国の山々と森林、莫言は東北高密郷）にいる無法な人々の運命に対して関心を持ったことが出発点であった。さらに、2人のどちらもマジックリアリズムの手法で創作活動を展開する時期があり、創作経験には様々な共通点がある。それは大江が莫言文学に関心を寄せた主な理由であろう。このほか、前述の通り、大江にとっては、藤井訳の上手さも莫言文学を読みたくになった一因と言えるだろう。大江の莫言の文学水準に対する評価については、以下の言説が代表的なものと考えられる。

若い世代、莫言の『赤い高粱一族』や鄭義の『古井戸』に私が圧倒的な感銘を受けたのは、中国人として生きる今日の現実を、過去の深みからつながるものに重ねて、かれら独自の想像力における共和国を建設しようとする意志があきらかであるからです。…（中略）…日本文学はとくにこの三十年間、いまあげた莫言や鄭義の野心的な、しかもいかにもリアルにかれらの土地と民衆に根をおろした表現をなしとげなかった、現実の国家に対置されるほどの規模の想像力の共和国を作り出してはこなかった、といわざるをえないからです。

(2001: 212)

大江は莫言（及び鄭義）の文学を非常に高く評価していたことがわかる。大江は、莫言をはじめとする中国の若手作家は日本の青年作家より優れていると述べたうえで、莫言の文学的想像力を「現実の国家に対置されるほどの規模の共和国を作り出した」ことに匹敵すると言って驚嘆した。

6.3.3 莫言の政治姿勢への大江の関心

文学思想以外では、大江は莫言の「受難」と「抵抗」に非常に関心を持っているようだ。大江自身は作家という身分のほか、原爆、戦後日本人の戦争意識など日本の社会・政治の諸課題に積極的に関わる知識人として知られている。大江は作家の政治との出会いについ

て以下のように述べた。

もっとも外目には、ひとりの作家が無傷で政治の迷路の曲がり角を駆けぬけたようにみえることがある。しかし、かれはいつのまにか人知れぬ擦過傷をおっている筈である。 (1981 : 67)

なぜならば、大江は作家が取るべき政治に対する姿勢が以下のようなものであると考えているからだ。

作家が政治的であることにおいて、美しくヒロイックに政治的である確率は、きわめて低い筈である。もしそれがあるにしても、かれは作家が文学を断念して政治に、しかも敗者の最後の戦いとして絶望的に体当たりする瞬間に、はじめて成立するヒロイックな美しさである。… (中略) …かれ (作家: 引用者注) が政治にかかわるのは、強権の側においてでなく、つねに民衆の側においてであるべきだし、しかも、未来への見とおしと共に現在を生きる、少数のエリートと共にではなく、つねに錯誤しつつジグザグに進む大多数の民衆と共に、政治にかかわる他はないのである。 (ibid:73-74)

それと対照すれば、マジックリアリズムの手法で国家が宣伝する正統のイデオロギーに柔軟に対抗する莫言の政治姿勢は、まさに大江が強調した「つねに民衆の側においてであるべき」、「つねに錯誤しつつジグザグに進む大多数の民衆と共に」という作家の理想に当てはまる。しかしながら、このような常に弱者のために戦う作家の運命は、実にほぼ悲劇的なものと定められているだろう。大江は以下のように予言する。

おおむね作家には、ふたつの死に方が可能である。任意のひとつの時代に荷担して、自分自身の意思によって死ぬか、他人の意思によって殺されるかとすること。さもなくば、かれは、すべての時代に荷担しながら… (中略) …生きて、生きて、生きのびねばならぬ。… (中略) …もしひとりの人間が今日、作家

として出発するなら、そしてもし、かれに選択の自由があるなら、かれは右にあげたどちらかの道をえらばなければならない。おそらく第三の道あるいは中間の通路は、すでに閉じられてしまったのである。

(ibid:66-67)

大江は作家の2つの結末を提示した。1つは、作家が勇ましく生活する時代に挑み、壮烈な最期を遂げることである。もう1つは、人類のすべての悲しみを背負いながら、絶えず書くことによって、この世に希望を与えることである。こうみれば、藤井の翻訳紹介した莫言は大江が提示した作家の2つ目の結末にいたるようだ。莫言は反政府活動を一切行わないものの、昔から共和国成立後の農民の苦難と悲しみを背負い、絶えず書くことによって、時空交錯のマジックリアリズムの手法で昔の農民と現在の農民を共生させ、中国農民の古来共通の苦難を表している。これは明らかに大江が提示した「すべての時代に加担しながら…(中略)…生きて、生きて、生きのびねばならぬ」ことであろう。

それゆえ、大江は莫言像に出合った際、彼の文学世界に惹かれたと同時に、作家の政治的運命をきわめて心配していた。彼は様々な場所で莫言(及び鄭義)の運命のために呼びかけ、特に1994年のノーベル賞受賞講演で2人への憂慮を示した。

私は韓国の金芝河や中国の鄭義、莫言に結びつけることにもなりました。私にとって文学の世界性は、まずそのような具体的なつながりにおいて成立しています。かつて韓国の秀れた詩人の政治的自由をもとめる、ハンストに参加した私は、いま、天安門事件以後、表現の自由を失っている、きわめて良質な中国の小説家たちの運命を憂えています。

(1995:14-15)

実はその時、鄭義はすでにアメリカに到着し、執筆活動も再開していた。莫言は政治事件以後、あまり影響を受けないうま創作活動を続けていた。両作家の実際の状態はおそらく「表現の自由を失っている」という大江の推測から外れているようである。莫言は藤井

とのインタビューで大江の発言を聞き、以下のように答えた。

大江さんが「憂慮」しておられる点についてですが、実は現在の中国はそのような状況からすでに抜け出していると私は感じているのです…（中略）…現在の中国では表現の自由は十分に認められていると思うのです。 (1996:138)

確かに「表現の自由」をめぐる日中両国の知識人の認識が異なり、莫言が考えた「表現の自由」は藤井、大江にとって、「表現の自由」とは言えない可能性もある。しかしながら、大江のノーベル賞受賞講演での呼びかけと莫言の実際の生活状態との間にはズレがあると言わざるを得ない。このようなズレが生じた理由は、1990年代に日本で藤井が莫言の独占紹介者になったうえ、受難及び抵抗を強調し、大江がその莫言像をまるごと受け止めてしまったからではないだろうか。

2000年、大江は中国社会科学院の招待で北京に赴き、莫言、鉄凝などの作家と会ってからは、中国共産党の知識人弾圧という印象（特に莫言弾圧の印象）がすこし緩和したようだ。

そして私の予想を大幅に超えて、中国の若い作家たちが豊かに実現したものに、羨望と敬意をいただいています。私がストックホルムでの演説で鄭義と莫言の名をあげたのは、このような新文学農民としてでありました。私はかれらに学んだ日本人の若い作家たちの盛んな活動をねがっています。それも私は、かれらが中国の有力な作家たち、また韓国の若い作家たちとともに、明確にアジア文学と呼びうるものを達成し、その名において世界文学に参加することを期待しているのです。 (2001:220)

ここで大江は鄭義と莫言の「表現の自由」の問題にまったく触れていない。なぜなら、大江は莫言との対談で、莫言が実は大きな弾圧を受けたことがなかったという事実を把握

したからではないか。しかしながら、大江は講演の後半部で、当時中国大陸でまだ封殺されていた鄭義の名前をわざわざ取り上げ、彼の直面する災いに対して憂慮を示した。これは知識人としての共同運命に対する関心でもあれば、彼が作家生涯にわたって貫く、国家権力による知識人弾圧に対する抵抗の態度でもある。

6.3.4 国際文学圏における大江の莫言推薦

中国での大江諸作品の訳者・許金龍によると、大江は2000年の訪中の折、初めて面会した莫言と共に現代文学館を見学した。その際、自身について、毎回アジアで3人のノーベル文学賞受賞者のうちの1人だと指摘され、非常に恥ずかしかった覚えがあったと言った。彼は、もし莫言がもっと早くノーベル賞を取っていたなら、この羞恥心を莫言に譲っていたらという冗談半分の発言をしたらしい⁷⁹。

実はこれは大江のお世辞ではない。大江はノーベル賞受賞講演をはじめとする様々な講演会で莫言の名前を取り上げることや、ベルリン自由大学における授業で莫言の小説を教材に使用するのみならず、ノーベル賞審査委員会にも頻りに莫言を推薦した。ノーベル賞文学賞審査委員会主席 Per Wastberg によると、大江はかつて5年連続で莫言を推薦したことがある⁸⁰。確かに莫言の受賞は様々な要素が働いた結果であり、Howard Goldblatt や Anna Gustafsson Chen など欧米系の文学研究者および訳者からの影響が大きいことは知られている⁸¹。が、莫言の国際文学圏での高い名声及びノーベル賞受賞に、大江も幾ばくかの貢献をしたことがうかがえるだろう。また、大江が最初に藤井の翻訳と紹介を通して莫言文学と

⁷⁹ 許金龍「始自边缘的呼唤--大江健三郎评说莫言」

<http://www.chinawriter.com.cn/wxpl/2012/2012-10-16/144007.html>、2015年4月8日アクセス

⁸⁰ 重慶日報によるノーベル賞文学賞審査委員会主席 Per Wastberg へのインタビュー「莫言授奖词宣读人：大江健三郎连续5年推荐莫言」<http://www.chinanews.com/cul/2012/12-10/4394403.shtml>、2015年4月8日アクセス

⁸¹ 中国新聞網「莫言诺贝尔奖“背后的功臣”：各国译者功不可没」<http://www.chinanews.com/cul/2012/10-24/4271171.shtml>、2014年11月14日アクセス。中国新聞網「莫言指出翻译的重要性：“得诺奖离不开翻译”」<http://www.chinanews.com/cul/2012/12-08/4392592.shtml>、2014年11月14日アクセスなどを参照

出合ったことからみて、藤井も莫言の世界文壇への出世に寄与したと言えるだろう。

6.4 まとめ

1980年代の政治事件をきっかけに、中国同時代小説の翻訳に取り組んだ藤井は1990年代において日本における莫言の主要な訳者として、「優秀な作家」、「農民」、「受難者」、「抵抗者」という四位一体の莫言像を構築した。この莫言像を通して、藤井は莫言作品の文学的価値を肯定する一方、中国における公権力と知識人を含む一般民衆との軋轢を語った。その時期の中国の知識人の運命に強い関心をもつ日本の文化人は藤井の作った莫言像を受け入れた。特に大江健三郎に共感をもって受け入れられ、大江の莫言受容に大いに影響を及ぼすことになった。のちに大江は莫言が世界範囲で知られる作家になるのを後押しすることとなった。

ただし、四位一体の莫言において、藤井が莫言の「受難」と「抵抗」を強調した点に注意を喚起しておきたい。

第7章 日本で編纂された中国文学史にみる新時期小説

これまでの章では TT と訳後記、文学批評、論文、読者の読後感などを繋げて考察する形で行ってきた。が、以上の諸要素以外に、文学史も翻訳文学システムを構成するものであり見逃してはならない要素である。Lefevere (1992: 123) によると、文学史とは、たいてい「論争を超越した」時間を超越した立場から書かれるのではなさそうだ。むしろ、特定のイデオロギーや詩学やその両者にとって正典化した作家たちの支持を得ながら、特定の時代の「論争」を過去へと投影する。それゆえ、文学史は特定のイデオロギーや詩学に基づき、中国の文化的イメージを操作する可能性を有していると考ええる。

また、文化的イメージの構築において、文学史は一般の TT より更なる重要な役割を果たしている場合も有りうる。なぜなら、程 (2011: 15) によると、編纂者、作者と出版社は従来一般読者にとって疑いを差し挟む余地がない権力を持っている。このような権力関係はマックス・ウェーバーにより発見された、一方通行的に教える教師とその教えを受ける学生との間にも同様の関係がみられる。文学史が常に権威がある研究者によって編纂され、教材として使用されるゆえに、文学史はほかのテキストより読者に影響を与えやすいといえるだろう。このような文化的イメージの構築における文学史の重要性に鑑み、本論では章を設けて新時期小説の記述を含む文学史を単独に検討する。

本章では2つの研究目的を設定する。

1つは、新時期小説の記述を含む文学史が中国の文化的イメージの構築においてどのような役割をはたしているかを解明することである。もう1つは、翻訳文学システムの構成要素として文学史が新時期小説の TT に言及しているか否か、及びどのように言及しているかの状況を確認することである。

7.1 新時期小説の記述を含む文学史の概観

本章では文学史を、特定のジャンルの文学現象を通時的に扱ったものと規定する。モワザン (1996: 5) によると、文学史の第一の目的は、いろいろな事象を結びつけてその進展をしめすこと、つまり、それらの事象が不変である点と変化している点を示すことである。陳平原⁸² (2011: 1) は文学史を含む全ての学術史の基本的目的は、価値の判断・系譜の探求・各思潮の分析によって、この専攻を勉強しようとする人に学術発展の脈絡と傾向を理解させ、学術の伝統を身につけさせることにあると指摘している。

日本人研究者による中国文学史の記述は素早く始まった。日本が世界において中国文学史を編纂した最初の国として、明治期において中国文学史が数種あったと確認できる (川合 1998: 1-2)⁸³。このような中国文学史を編纂する学術的伝統を持つ日本の研究界は、文革終結後に生まれた同時代文学を速やかに文学史記述のカテゴリーに取り入れた。調査したところ、2014年現在、日本ではすでに9部の同時代文学の記述を含む文学史 (あるいは文学史の性格をもつもの) を出版している。このうち萩野の『中国「新時期文学」論考』以外の8冊はすべて教材として使用されたことがあるか、または使用中のものである (表①を参照)。

事前に断っておくが、本研究で定義した「新時期文学」が、ここで扱う殆どの文学史においては時期区分としては使用せずに、同時代文学に内包される概念だと見なされている。それゆえ、本節では、まず文学史における同時代文学 (文革終結後の1976年から現在まで) の割合を確認し、同時代文学の中の新時期文学の割合を考察する、という流れで進める。

第7章表①「新時期小説の記述を含む日本で出版された文学史 (初版年順)」

書名	編纂者	出版社	初版年
中国文学史*	前野直彬	東京大学出版会	1975

⁸² 本章では姓が陳である人が2人 (陳平原、陳思和) いるため、2人のフルネームを使用する。

⁸³ 日本人が最初に編纂した中国文学史に関しては、川合の研究以外戴燕 (2002)『文学史的権力』にも参照。

中国文学この百年	藤井省三	新潮社	1991
図説 中国 20 世紀文学	中国文芸研究会	白帝社	1995
中国「新時期文学」論考	萩野脩二	関西大学出版部	1995
新しい中国文学史	藤井省三・大木康	ミネルブァ書店	1997
中国文学の改革開放	萩野脩二	朋友書店	1997
中国 20 世紀文学を学ぶ 人のために	宇野木洋/松浦恒雄 (中国文芸研究会)	世界思想社	2003
20 世紀の中国文学	藤井省三	放送大学教育振興会	2005
中国語圏文学史	藤井省三	東京大学出版会	2011

*同時代小説に関する部分は 1980 年に丸山昇、1998 年に釜屋修が補筆する。

同時代小説の占める割合からみて、上記の 9 部の文学史は 3 つのタイプに分けることができる。

①中国文学通史: 『中国文学史』

『中国文学史』では、新時期小説の占める割合がわずかに過ぎない。正文 310 ページのうち同時代文学が 7 ページの補筆ぐらいである (2000 年 25 刷の場合)。このうち、新時期小説は 5 ページ前後の分量を占める。

②20 世紀中国文学史: 『中国文学この百年』、『図説 中国 20 世紀文学』、『新しい中国文学史』、『中国 20 世紀文学を学ぶ人のために』、『20 世紀の中国文学』、『中国語圏文学史』。20 世紀中国文学史では、同時代文学に関する部分が全体の 1/4 から 1/3 前後の分量を占める。このうちの一部は新時期小説に対する記述である。

20 世紀中国文学史は 6 冊出版されたが、このうちの 4 冊、『中国文学この百年』、『新しい中国文学史』、『20 世紀の中国文学』、『中国語圏文学史』は藤井省三によって編纂されたものである。『図説 中国 20 世紀文学』と『中国 20 世紀文学を学ぶ人のために』の 2 冊は中

国文芸研究会（以下「研究会」と略称）によって編纂されたものである。それゆえ、日本で出版された 20 世紀中国文学史は「藤井系」と「研究会系」⁸⁴に分けられる。

「藤井系」の場合、後出した『新しい中国文学史』、『20 世紀の中国文学』、『中国語圏文学史』のいずれも年代順にそって書かれている文学史である。同時代文学の内容には大きな区別が存在しない。『中国文学この百年』は 1991 年までに出版した藤井の 20 世紀の中国文学に関する文章選集で、前出した 3 冊の文学史の底本となっている。

「研究会系」の場合、『図説 中国 20 世紀文学』（以下『図説』と略称）は学部生用の副教材として開発されたため、図や原典テキストなどの一次資料が数多く含まれるのが特徴である。そして、20 世紀の中国文学を 10 年毎に区切って、全 9 期に分類して概説をつける。このうち、新時期小説に関する概説の執筆者はそれぞれ青野繁治と宇野木洋である。『中国 20 世紀文学を学ぶ人のために』（以下『学ぶ人のために』と略称）は 3 つのパートから構成される。宇野木がパート 1、文学史の総論である「中国二〇世紀文学史」を執筆した。パート 2 は「理論と制度」、「詩」、「小説」、「演劇」というそれぞれの各論で、研究会の同人を中心とする学者たちの論文集である。パート 3 はパート 1、パート 2 では浮彫にできなかったトピックやテーマ（映画、台湾文学など）を短い分量ながらも記述することを目指すもので、小論文集である。このうち、総論で言及された新時期小説の内容を『図説』のと同対照すれば、説明の流れがほぼ一致するとはいえ、説明用の材料には違いが見られる。

③同時代文学専門史：『中国「新時期文学」論考』と『中国文学の改革開放』

『中国「新時期文学」論考』（以下『論考』と略称）と『中国文学の改革開放』（以下『開放』と略称）は関西大学教授・萩野脩二によって書かれた姉妹作で、前者は 1995 年出版された、同時代小説の研究書である。後者は 1997 年に出版された、中国同時代文学に興味を

⁸⁴ 宇野木への対面インタビュー（2014 年 11 月 30 日）により、『学ぶ人のために』を編集する際に、中国文芸研究会のうちの同人宇野木、今泉、絹川、松浦等は小研究会を作り、『学ぶ人のために』の編纂方針など諸課題を検討した。『学ぶ人のために』は、大体小研究会のメンバーによって執筆された。それゆえ、厳密に言えば『学ぶ人のために』は中国文芸研究会同人全員の成果とはいえない。「研究会系」はここで分類の便宜上の呼び方として使用される。

持つ人向けの入門書である。萩野が使った『中国「新時期文学」論考』での「新時期文学」は、時間的範疇からみて本研究で定義する「新時期文学」より、同時代文学に近い概念である。

以上の文学史以外にも、新時期文学の発展を論じる総論的な文章も少なくはない。吉田富夫による新時期の文学と演劇をまとめて考察する、編年体の『反転する現代中国』（研文出版、1991）もあるが、この本は演劇を中心に取り扱っている。また、洪子誠の『中国同時代文学史』のような優秀な中国人学者が書いた文学史の日本語訳及び中国の文芸活動に関する重要な原典資料を採録し翻訳する『原典中国現代史第5巻思想文学』のような資料本があるが、本章では日本人によって編纂された中国文学史を問題にするため、ここでは論じないこととする。

次の節から、この9冊の文学史を考察し、編纂者が文学史においてどのように新時期小説を記述したのか、そしてそのような記述が中国の文化的イメージにどのような影響を与えたのかを解明しようとする。

7.2 中国文学通史における新時期小説の語り方

元東京大学教授前野直彬と弟子たちが編纂した『中国文学史』は、1975年の出版以来、増し刷を重ね、日本でもっとも権威がある中国文学史であると思われる。その本で新時期文学に言及する部分は、第九章「近一現代」の五「人民文学の誕生と展開」の後半部にある。このうち、「文革後の転換」は1980年に丸山昇によって書かれ、「新時期文学の時代へ」と「ポスト「尋根」」は釜屋修によって1998年に書かれた。どちらも補筆の形である。

では、丸山と釜屋はどのように新時期文学の歴史を語るのか。

まず、説明の道筋について、丸山と釜屋は新時期文学を文革後の中国の近代化の過程という文脈において考察する。具体的には、彼らは傷痕文学から新写実主義までの文学思潮に対する考察を軸にして、思潮の生じる原因、特徴、代表的作家、及び各思潮の関係

を分析しつつ、新時期小説を語る。記述において、彼らはできるだけ個別の作家または作品については殆ど論じていない。このような説明の仕方は『中国文学史』のほかの章で使用される、中国の歴史過程と中国文学との関係を軸にする説明方法と共通している。

そして、新時期文学が発展する段階を論じる際、彼らは生成期（77-78年）、成長期（80年代中期まで）、円熟期という3段階にわけ、釜屋は（2000: 306）ルーツ文学の登場までは、問題作を含めて小説の主人公たちが依然として伝統的英雄系列だと指摘した。この記述方法には、新時期小説の発展に対して編集者自身の新たな知見があるといえよう。なぜかという、中国国内の同時代文学研究界では、新時期文学の発展に対する2つの見方がある。1つは、新時期文学は劉心武の「クラス担任」から発端し、傷痕文学、反省文学、改革文学、ルーツ文学などの流れで漸進的に発展してきたという見方であり、もう1つは、傷痕文学などの文学思潮が本質上、文革期の文学とあまり変わらないため、新時期文学の系譜は北島・舒婷らの「朦朧詩」⁸⁵から発端し、1985年のルーツ文学、1987年の実験小説にそって発展するという見方である。丸山と釜屋は三段階の分類法を使用すると同時に、ルーツ文学の登場を新時期文学の発端にする、という独特の説明方式を探索した。

7.3 20世紀中国文学史における新時期小説の語り方

この節では、「藤井系」と「研究会系」の20世紀中国文学史を考察する。その考察の流れは、まず、両者それぞれの20世紀中国文学という概念に対する認識を対照して説明する。次は、文学史で取り上げる新時期小説の文学事象を対照して、2人（組織）の編纂思想および構築した中国の文化的イメージを解明する。

7.3.1 20世紀中国文学とは何か

1980年代半ばまで、中国における20世紀の中国文学研究は、近代文学（中華民国建国前

⁸⁵朦朧詩：はっきりしない含みのあるイマジネーションを表現した詩。文化大革命後期から出現し、代表的な詩人に北島・舒婷らがいる。

後まで)、現代文学(五四運動前後から中華人民共和国の成立まで)、17年文学(中華人民共和国の成立から文革開始まで)、新時期文学(文革終結後)のような時期区分のパラダイムで行われてきた。このようなパラダイムの最大の欠陥は、文学発展の流れを人為的に切断して、各時期間の連続性を無視したところにある。

これを意識した学者たちは、20世紀の中国文学をトータルに考察する研究の新たなパラダイムを考案した。1985年『文学評論』第5期において、黄子平、陳平原、錢理群の3人が連名で書いた「論20世紀中国文学」において、3人は従来の研究パラダイムの欠陥を指摘し、文学史を社会政治史の附属的地位から解放し、文学自身の発展段階の完結性を研究の基準とするパラダイムを呼びかけた(1985:3)。この論点が中国文学研究界で爆発的な反響を引き起こし、中国文学研究の従来のパラダイムを改変した、革命的な役割を果たした⁸⁶。

一方日本において、20世紀中国文学史を書いた藤井と研究会はそれぞれどのように「20世紀中国文学」という概念を受け入れたのか。

藤井(1991b:12)は『中国文学この百年』において「中国三千年の文字表現の歴史において、“文学”という制度はたかだか百年ほどの時空を経ているに過ぎない」、そして、中国における文学の歴史は「共和国建設と文学とが不可分であった百年の歴史」と指摘した。彼にとって、20世紀の中国文学を連続的に考察する理由は2つある。1つは、中国での近代的な学術的意味での「文学」は20世紀以降発祥したものであり、もう1つは、20世紀の中国文学は国家建設との関係の視点から考察できるためである。

15年後の2005年に出版した『20世紀の中国文学』において、藤井は前書きの冒頭で「二〇世紀以降の中国文学史とは、越境の歴史である。」と強調し、国家建設との関係以外に、「越境」という20世紀中国文学のもう1つの共通性を発掘してみた。『中国文学この百年』と比べ、本の内容も考察の視角の変化にそって、中国文学の越境の実践を記述する章が書き加えられた。

⁸⁶ 「20世紀中国文学」の理論的内包および研究界への影響に関しては賀(2010:274-280)を参照

一方、研究会系の場合、20 世紀中国文学という概念に関する、中国の文学研究界からの影響が見て取れる。『図説』の前書きでは以下のように書いてある。

80 年代後半になって陳平原らは「20 世紀中国文学」という枠組みを提唱した。それはこれまでの政治的基準による「時期区分」に対する否定と、中国文学を世界文学のなかへと解き放つという野心的な意図が含まれていた。本書が「20 世紀中国文学」でなく「中国 20 世紀文学」を表題に採用したのは、ことさら異説を立てるためではなく、上記 4 時期（「清末」、「現代」、「当代」、「新时期」：引用者注）を一括して叙述できるという便宜性によったにすぎない。だが、「20 世紀」という時期区分は、比較的客観的な歴史叙述を可能とし、これまでの既成概念を多少とも突き崩すことができたかも知れない。

研究会の同人たちが、陳平原らが提出した「20 世紀中国文学」に基本的に賛成の意を表することはわかった。

その後の『学ぶ人のために』では、『図説』における 20 世紀中国文学に対する認識がそのまま援用された。宇野木（2003a: 4-5）は「政治的基準に基づく時期区分を少しでも相対化し、時期区分によって生じかねない断続性だけでなく、連続性の側面をも視野に入れることができる」ため、「(近代文学、現代文学、当代文学という：引用者注) こうした従来の時期区分を根底から問い直す必要がある」。それゆえ、「中国 20 世紀文学を設定してみた」と提唱した。

以上、藤井と研究会の 20 世紀という時期に対する認識が明らかになった。次に、両者の文学史に言及する 20 世紀中国文学の範疇を考察しよう。

藤井は中国文学の地理的範疇で独創性を見せている。

彼は大陸に香港や台湾やマレーシアなど、さらに世界各地に散在するエミгранトの華人文学を加え、中国語圏文学という概念を作り上げた⁸⁷。藤井は文学史のキーワードを「越

⁸⁷ 中国語圏という概念は 2011 年に出版された『中国語圏文学史』で初めて明記されたが、1997 年に出版された『新しい中国文学史』では、藤井はすでに大陸、台湾、香港の文学事象をそれぞれ記述し、事実上

境」に設定し、彼の中心的目標は東アジアで文学生産/再生産の過程を通じて、東アジアと共感することである（2011: i-8）。この目標を達成するために、彼は「中国語圏」という複数の国家・地域から構成される考察範囲の設置が必要不可欠だと考えている。

一方、研究会の学者たちは、『図説』で自らの中国文学に対する創見を抑えたが、『学ぶ人のために』において20世紀中国文学の文学形式において独創性を発揮する。

従来の現代文学史の中心は小説だと思われるが、研究会の同人たちは『学ぶ人のために』において、文芸理論、小説、詩をほぼ同じぐらい割り当てる。演劇の紙幅はやや少ないが、見逃せないほどの分量がある。彼らが考える文学史は、文芸理論、小説、詩など、文芸形式の全般を包括する文学史である。この文学史から、彼らのすべての文芸形式が同じ重要性を持つという発想が見られる。文学史をこのように編纂した彼らの理由は、2つあると思われる。まずは、『学ぶ人のために』の目標は「中国二〇世紀文学を多面的・重層的に記述する」ことである。つまり小説の一面ではなく、演劇、詩、文学理論から多面的に中国文学を考察しようとする。もう1つは、編纂者たちが各自の研究分野を持つため、このような記述の方式は研究者たちそれぞれの強みを最大限に発揮できる。文芸理論や詩などの文芸形式を小説と均等的な地位として取り扱うのは、『学ぶ人のために』のみである。研究会同人たちの中国20世紀文学の範疇に対する考えはこの本で見取れる。

ただし、藤井の文学史（特に『20世紀の中国文学』と『中国語圏文学史』）には詩、劇など小説以外の文芸形式に対する考察が存在する。研究会の同人が編纂する文学史には「中国二〇世紀文学にとって台湾文学の位置づけ」などの論文を収録する、という点を留意しておきたい。

7.3.2 新時期小説の材料と説明の対照

まず分析対象として、「藤井系」と「研究会系」の文学史から1冊ずつ取り上げる。

の「中国語圏」の概念を運用していた。

「藤井系」4冊の文学史のうち、3冊の文学史の底本『中国文学この百年』は1991年に出版されたもので、このうちの同時代文学に関する文章の殆どは藤井が1989年の政治事件発生後に書いたものである。それを底本にした同時代文学史の内容は、政治事件の余波に揺らされた、当時の激動の歴史文脈における藤井の同時代文学に対する見方が反映したものであり、まさに Levefere が指摘した「特定の時代の「論争」を過去へと投影する」といえるだろう。しかしながら、後出した3冊における同時代文学に関する叙述は殆ど『中国文学この百年』と変わらないことから、藤井が自分のその時代の中国同時代文学に対する見方をそのまま堅持する気持ちをもてとれるだろう。本研究では分析材料として、4冊のうち最新の出版物である『中国語圏文学史』(2013)を取り上げる。

「研究会系」の2冊のうち、『図説』は「大学における中国「近代」文学に関する講義・講読用のテキストとして編纂したもので」、学生の「レポートや卒業論文などの作成に役に立つように配慮した」ものであるため、同人たちは『図説』で自らの中国文学に対する創見または考えを控えめにした。そのため、本節では同人たちの学術思想をより反映できる『学ぶ人のために』を選ぶ。考察はまず両文学史の使用した材料の共通点と相違点を見分ける。次に、それらの材料が編纂者各自の文学史記述でいかに説明されるのかを考察する、という手順で行う。

一覧表に収録される材料に関して、事前に断わっておきたいことが2つある。1つは、文学は様々な文芸形態から構成されるが、本研究は小説のみを研究対象にするため、ほかの一切の文芸形態（エッセイ集、詩、文芸理論など）に対する接触は必要最小限に留める。もう1つは、本研究の新時期小説の定義によると、同じ作家の作品のうち新時期小説に当たるものもあれば、あたらないものもある。文学史の関連性に鑑み、本節では作家の新時期文学でない一部の作品も表に取り入れるが、それはイタリックで表示する。また、新時期小説か否かを問わず、やや詳しい紹介がある作品は太字で表示する（イタリックと太字が重なる場合もある）。

まずは『中国語圏文学史』を分析する（表②を参照）。

第7章表②『中国語圏文学史』に収録される新時期小説の作家と作品一覧表（文学史での掲載順）

章立て:	作家（作品）
第6章 鄧小平時代とその後（1980～現在）—天安門事件と高度経済成長	
1 異議申し立ての傷痕文学と巴金『随想録』	劉心武（ クラス担任 ）、廬新華（ 傷痕 ）、魯彦周（ 天雲山物語 ）、茹志鵠（ つなぎ間違えた物語り ）、劉賓雁（ 人妖の間 ）、葉文福（ 將軍、それはなりません ）
2 モダニズムと紅衛兵世代の復権—高行健と『今天』派詩人	王蒙（ 胡蝶 ）、残雪（ 黄泥街 ）、韓少功、阿城（ 棋王 ）、鄭義（ 古井戸 ）、莫言（ 紅い高粱一族、金髪の赤ちゃん、白い犬とブランコ ）
3 大江健三郎が語る鄭義、莫言への共感	鄭義（ 古井戸 ）、莫言（ 紅い高粱一族 ）
4 天安門事件とエミгранト文学	阿城、劉索拉、鄭義（ 中国の地の底で ）、劉心武、莫言（ 花束を抱く女 ）、葉兆言、余華、蘇童、格非
5 改革・開放の加速と上海のリバイバル	劉心武、莫言（ 豊乳肥臀、白壇の刑、酒国 ）、王安憶（ 小鮑莊、長恨歌、桃の夭夭たる ）、張抗抗（ 赤い嵐 ）、池莉（ 水と火のもつれ合い ）、鉄凝（ 大浴女 ）
6 ポスト鄧小平時代の社会と文学	
7 村上春樹チルドレン	

*網掛けの欄：本研究で定義する新時期小説をとり扱っていない章（以下同様）

『中国語圏文学史』は20世紀の中国文学を「越境の歴史」と特徴付ける。章立ての「大江健三郎が語る鄭義、莫言への共感」と「村上春樹チルドレン」から、藤井が日本と大陸

との間に発生した「文学の越境」を記述する試みが見られる。

「越境」のほか、『中国語圏文学史』にはまた2つの特徴が見られる。1つは、80年代前期の中国文壇の主流であった反省小説・改革小説など、リアリズム小説思潮が無視される傾向がみられることである。80年代前期は、中国で文学と政治が緊密な協力関係を持つ時期であった。作家たちは国家の改革・開放政策に応じて、国民の理想像「社会主義新人類」の構築に取り組んだ。国家はそのかわりに、作家に自由な創作の権利を保証した。「もちろん、こうした歩みに対する批判の働きも存在しなかったわけではない…（中略）…全体的に見れば、政治的圧力は徐々に力を失っていく」（宇野木 1995: 163）。しかし、この時期が藤井の文学史で消えてしまった。

もう1つは、天安門事件までの4節のうち、鄭義と莫言はそれぞれ2、3、4の3節で挙げられ、文学史での中心的人物に位置付けられる。莫言に対する藤井の評価は作品と作風以外に、「悪い階級の出身として迫害を受け、小学校も文革中に中退している」（p.137）、「2通（の『人民文学』雑誌への来書：引用者注）は莫言を名指しで批判している。こうして莫言の作品は事実上の発表禁止となった」（p.142）などがある。一方、鄭義は天安門事件で中国当局の手配を受け、三年間の潜った生活を送った後、妻とともにアメリカへ行った経歴についても、藤井は詳しく書いた。さらに、藤井は「大江健三郎が語る鄭義、莫言への共感」という章において、大江健三郎のノーベル受賞講演で鄭義と莫言の名前を取り上げ、「表現の自由を失っている中国の極めて良質の小説家たちの運命を憂えています」（p.139）という発言を引用し、二人が共産党イデオロギーにより抑圧されたことを証明すると同時に、二人と文学の越境をつなげようとする。

以上の材料が文学史のみならず、藤井の莫言と鄭義に関する文学研究・批評・訳後記にもしばしば出ている（cf.第6章）。それゆえ、藤井は文学史の記述を莫言と鄭義の作家像を作る手段の1つとしていることがわかるだろう。莫言と鄭義の事跡を通じて、藤井は中国の同時代文学史における知識人と国家との軋轢を強調する傾向が見られるだろう。また、

藤井が文学史で重んじる、作家以外の知識人、例えば老木、北島（詩人）、高行健（文芸理論家と劇作家）らは、みんな共産党イデオロギーと対立する立場に置かれる人である。それらの人物も文学史のこの側面を強調するだろう。

以上、藤井の文学史における文学資料上の特徴を説明した。次は『学ぶ人のために』を考察しよう。『学ぶ人のために』で新時期小説に言及したのは、宇野木の総論と今泉の各論である（表③を参照）。

第7章表③『学ぶ人のために』で収録される新時期小説の作家と作品一覧表（文学史での掲載順）

章立て	作家（作品）
パート1 6.第4 四半世紀 (1) 脱文革へ向けた着実な歩み	劉心武（クラス担任）、王蒙、劉賓雁、白樺、高曉声、張賢亮、張潔、堪容、戴厚英、蔣子龍、賈平凹、王安憶、張辛欣
(2) 欧米文学・理論の受容と変容	残雪、劉索拉、余華、蘇童、鄭万隆、鄭義、阿城、莫言
(3) 民主化運動からコマーシャリズムの隆盛へ	
パート2 二〇世紀後半の小説「書く」ことの意味 1 知識人の宿命	阿城（ 孩子王 ）
2 不幸な代弁人	鄭義（ 神木 ）
3 なにを「書く」か・どのように「書く」か	汪曾祺（ 橋辺小説三篇、小学同学 ）
4 書かないことの意味	

宇野木の総論では、文革からの脱立、欧米文学思潮の受け入れという、文学発展の流れを手掛りにして文学史を考察する。これは研究会の文学史と藤井の、文学（者）と政治との衝突を軸にした文学史との根本的な違いと考えられる。それゆえ、藤井の文学史で除外

された張潔、堪容、戴厚英、蔣子龍など、伝統的なリアリズム創作手法を持ち、社会に積極的に関与する作家たちは宇野木の文学史においては一定の地位がある。

ただし、宇野木の総論では、文学作品に対する紹介が見られない。文学史の記述で作家を紹介すると同時に、その作家の代表作をせめて作品名だけでも簡単にふれるのが必要不可欠であろう。しかし、総論の「第4 四半世紀」において、20名以上の作家の名前が取り上げられたのに対し、作品名は「クラス担任」しか挙げていない。この理由は、宇野木により、総論は「30分間のうちに中国20世紀文学史を知る」という目標にそって書かれたものであるため、数多くの固有名詞で読者を戸惑わせないようにと、作品名を割愛してしまった⁸⁸。

次は今泉の各論を考察する。今泉は論文で、阿城、浩然、鄭義、汪曾祺、沈從文の作品を取り上げ、「書く」ということの意味と形式をめぐって、20世紀後半の中国作家の宿命と役割を検討した。今泉は藤井と同様に共産党の知識人に対する抑圧に言及していると同時に、作家たちが如何に自らの主体性を発揮し、共産党イデオロギーと向き合うかにも注目する。この狙いで、論文では知識人と共産党との間の対立から共謀までの軸上の多様な関係が現れる。典型例として以下の4つの関係が反映されている。

- ①イデオロギーとの紛争に超然とした態度を取る：阿城、汪曾祺
- ②イデオロギーに向き合う：浩然
- ③イデオロギーと対立する：鄭義
- ④イデオロギーによって小説創作を自粛する：沈從文

そして、今泉の論文におけるもう1つのオリジナリティーは、文革中で執筆活動が許された、共産党イデオロギーを代表した作家浩然と北京での事件以降アメリカへ亡命した作家鄭義を比較して、両作家の根底にある政治的ヒロイズムという共通点の発掘を通じて、従来の中国の同時代文学における「体制に奉仕する文学」と「反体制の文学」という二元

⁸⁸ 宇野木への対面インタビュー、2014年11月30日。

対立的な枠組みを脱構築してみたところにあると考えられる。

前者（浩然の「艷陽天」：引用者注）は、文革期の絶対的な政治的価値観のもとに、農民の代弁をしようとしており、後者（鄭義の「神樹」：引用者注）は亡命先で中国農村の歴史の「真実」のために代弁をしている。発表時期や政治的立場がかけ離れているにも関わらず、この二篇の長大な小説は、実は同じ種類の熱っぽい感情によって書かれた作品である。…（中略）…とくにこの二人の作家の場合には、それは過剰ともいえる一種の政治的ヒロイズムにまで昂じるといえはしないであろうか。 (p. 161)

宇野木と今泉は新時期文学発展の流れを見て、当時の文脈で大きな反響を呼び起こした作家と作品を取り上げ、文学自身の発展のルートにそって文学史を語った。

以上は 2 冊の文学史の材料選択での相違点を解明した。次は、材料の説明を考察しよう。同じ材料であっても、編纂者の目的によって説明が全く異なる場合も多く存在する（表④を参照）。

第 7 章表④『中国語圏文学史』と『中国 20 世紀文学を学ぶ人のために』で言及される作家対照表

2 冊のいずれにおいても言及する作家	劉心武、王蒙、劉賓雁、王安憶、殘雪、劉索拉、余華、蘇童、格非、鄭義、阿城、莫言
『中国語圏文学史』のみ言及する作家	廬新華、魯彥周、茹志鵠、葉文福、韓少功、葉兆言、張抗抗、池莉、鉄凝
『中国 20 世紀文学を学ぶ人のために』のみ言及する作家	白樺、高曉声、張賢亮、張潔、堪容、戴厚英、蔣子龍、賈平凹、張辛欣、鄭万隆、汪曾祺

2 冊の文学史のいずれにおいても言及された作家は 12 名いる。しかし、これらの作家のうち、紹介に大きな相違がみられる人も出ている。余華、蘇童、格非 3 人を例として挙げ

よう。

『中国語圏文学史』：中国国内に踏みとどまった文学者たちも屈服しなかった。芒克は「第三世代」の島子らとともに一九九一年に季刊の民間雑誌『現代漢詩』を創刊している。事件後二年間も沈黙を強いられてきた莫言も『人民文学』九一年八月号には、改革・開放体制下で崩壊していく農村を黙示録的に描いた『花束を抱く女』を発表して復活した。この間も、文壇には葉兆言、**余華**、**蘇童**、**格非**など若い世代の作家が誕生している。 (p. 143)

『中国 20 世紀文学を学ぶ人のために』：85 年頃より、欧米文学の単純な模倣という段階を超えた、「探索文学」「新潮小説」「先鋒文学」などと総称される小説群が登場する。主な作家は残雪・劉索拉・**余華**・**蘇童**・**格非**などであり、濃厚な現代意識を描き出した点に特徴がある。 (p. 25)

宇野木は 3 人の作家を新時期文学の文学思潮変化の流れの中に取り入れて紹介して、創作手法と創作特徴など文学の面で説明する。これに対して、藤井は余華、蘇童、格非 3 人を天安門事件の後に誕生した文学者として位置付けた。余華らの 3 人は 1985 年以降中国文学革新の名作家である。余華の代表作「18 歳の家出」、蘇童の「1934 年の亡命」、格非の「迷い舟」のいずれも 1987 年に発表された。3 人のいずれも、1985 年前後にモダニズムの手法で作品を発表し始めた中国の中堅作家である。それゆえ、藤井が彼らを天安門事件以降に誕生した作家と称するのは適切かどうかに関しては議論の余地がある。ただし、張 (1998: 88) によると、1990 年代に一般読者の読書センスにあわせるために、1980 年代後期勃興したパイオニア小説家たち余華、蘇童、格非などは、写実風な創作理念に転向した。おそらく藤井は 3 人の作風・創作理念の転向を天安門事件につなげようとしたのではあるまいか。

作家以外では、文学思潮に対する説明にも 2 冊の文学史では大きな違いがある。例えば、ルーツ文学に対する説明を対照してみる。

『中国語圏文学史』：ルーツ文学派の批判する「儒教正統文化」とはいわゆる孔孟の道を指すのではなく、人民共和国を支配する共産党イデオロギーを暗喩していた。その独裁的体質が儒家一尊に通じる、という意味で儒教の名が掲げられたのであり、彼らの標的は共産党であったのだ。(p. 136)

『中国 20 世紀文学を学ぶ人のために』：この時期、欧米指向の状況に対する反省から、民族・伝統文化の多様性に着目し、その生命力を描き出そうとした鄭万隆・鄭義・阿城・莫言などの「尋根文学」と呼ばれる小説群が登場してきた点も注目しておく必要がある。(p. 25)

ルーツ文学が勃興した 1985 年は、中国文壇では「世界文学に追いつこう」というスローガンが掲げられる年である。この年、マルケスのマジックリアリズム小説など、自民族の伝統的文化資源を利用して大成功を収めた事例から刺激を受けた中国の作家たちは、中国の各民族、各地域のそれぞれの文化伝統に目を向けるようになり、「ルーツ文学」が文学思潮を形成した。宇野木はルーツ文学を「民族・伝統文化の多様性」を表す文学現象として取り扱うのに対し、藤井はルーツ文学のイデオロギー批判の指向に着目していた。

研究界ではルーツ文学が政治批判の目的を持っていたかどうかに関しては 2 つの主張がある。

1 つは、ルーツ文学が政治批判の目的を持っていたとするもので、代表的な理論として賀桂梅のを取り上げよう。

ルーツ文学の提唱者は、「文化」テーマを政治・時代テーマ以上の位置につけた。この秩序関係において文化（民族）は政治（国家）を包摂して超越できる…（中略）…この秩序関係において文化（民族）は政治（国家）を批判する能力を獲得できる。事実上これこそ文化批判を通じて政治批判を行う、「歴史反省運動」のロジックである。文革は誤った政治路線と政府管理の（政治）悪果のみならず、国民の悪い根性と封建思想の復活によるもの（文化）にも見なされている。…（中略）…民族文化に対する歴史批判は当代政治への批判の一種の暗喩である。(2010:189)

もう 1 つの主張は、ルーツ文学が政治批判の目的を持っていないとするもので、その理由は以下のようなものである。

まず、ルーツ文学創始時の一連の綱領文献（阿城「文化は人類を制約する」、鄭万隆「私の根」など）を読むと、共産党批判の目的がまったく読み取れない。これらの作家たちが「ルーツ文学」を提唱する最大の目的は、恐らく「民族を再認識し、審美意識に潜り止まる歴史要素をよみがえらせ、この世の無限と永続を対象化」（韓 1985）することであろう。

さらに、作家たちの自民族の伝統的な文化資源を利用して、中国文学を世界に認められるようにしたいというルーツ文学に対する功利主義的捉え方が、ルーツ文学の早老を導くことにつながった。張（1998: 110）によると、これは才能があるかどうかにかかわらず、農村生活経験の不足のためである。ルーツ作家自身は数年間しか農村生活の経験をもっていないという。農村から遥かに遠い都市に戻った彼らは、最初のうちは、農村生活の回想から新しい文学素材を引き出せたが、のちに継続できなくなる。もしルーツ文学の根本的目的が共産党批判であれば、1980 年代末期の民主化運動の勃興につれて、ルーツ文学は一層繁栄したであろう。

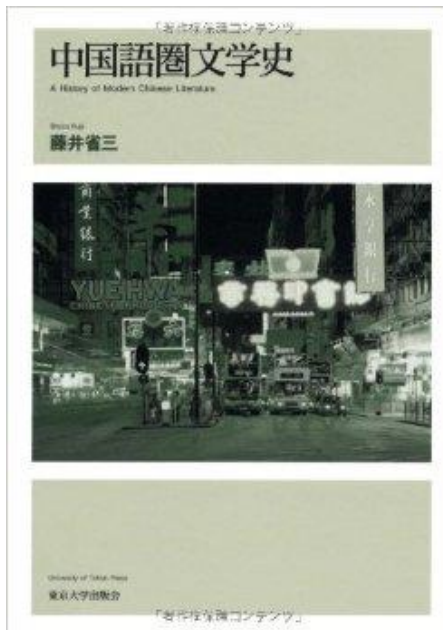
ただし、岸（2004: 243）が指摘したとおり、「一口に民族文化伝統といっても、広大な地域にさまざまな民族が入り混じって生きている中国においては、一様ではありえない。漢民族に限っても、儒教文化という規範によって覆われてはいるものの、その深層に降り立っていくと、地理的条件や自然条件の異なる地域に生きる人々の情念や思惟形式はそれぞれに異なっている」。それゆえ、多様な各地域・各少数民族の伝統（いわばルーツ）を追究する過程は、必然的に一元的イデオロギーを解体する過程につながっている。この意味ではルーツ文学は藤井が指摘したとおり、「儒教正統文化」を批判することになる。しかしこのような批判はおもに漢民族文化中心主義への反省及び中華民族の文化多様性への提唱、という文化面で展開するものであり、直接の政治批判には及ばないものである。呉（2009:

215) が指摘したとおり、ルーツ文学は初めから社会に認められた政治の枠組みで展開されたもので、明確または強烈な政治要求を生まれながら持たないままである。本研究第 5 章でふれた井口のルーツ文学に対する批判でも、ルーツ文学が未熟な中国作家の南米作家への見劣りの模倣に過ぎないものであり、大いなる文学上または政治上の抱負を掲げなかったと指摘した。

以上 2 つの主張のいずれもルーツ文学は第一義で文化上の運動だと認めている。政治批判の意味合いがあるとしても、ルーツ文学による政治批判は文化批判をふまえる、婉曲的なものであることが確認できる。それゆえ、もし編纂者が文学史でルーツ文学の政治批判の特質を強調するとしたら、それらの強調と文学史編纂の目的との間にどのような関係を持っているかに留意すべきであろう。

では、藤井はなぜ中国文学史をこのように書いているのか。理由は 2 つあると考える。1 つ目は第 6 章で言及した通り、藤井の中国の主流的イデオロギーに対する不信感および政治事件が藤井に与える衝撃のことである。もう 1 つは、彼が政治に対する考察を通じて 20 世紀中国の文学現象を説明できると考えていることである。藤井 (1989b: 193) により、「文学制度」がほぼ固まる一九二〇年代以来、約十年周期で大きな変動が生じており、それが中国大陸における政治の動向と直結している点も、改めて押さえておく必要がある」。

小括すると、藤井が文学史を「特定の時代の「論争」を過去への投影」にし、共産党イデオロギーと対抗する作家を繰り返し取り上げることによって、文革後の中国文学史を知識人と共産党イデオロギーとの衝突の歴史に作り上げる。それによって日本人読者にとって中国の政治上のマイナスイメージを浮き彫りにする傾向がみられる。これに対して、研究会は『学ぶ人のために』において、基本的に文学発展の流れにそって中国同時代文学の歴史を語る態度をとっている。



写真：『中国語圏文学史』



写真：『中国二〇世紀文学を学ぶ人のために』

7.4 同時代文学における新時期小説の語り方

元関西大学教授の萩野脩二は1982年から1995年までの14年間に霞山会が編纂する『中国年鑑』の中国文学「動向」欄を担当し、年ごとに中国文学の最新状況を紹介する。さらに、1983年の年末から彼は中国研究所が編纂する『中国総覧』の文学欄を引き受け、2年ごとに中国文学の最新動向を紹介することになった。のちに彼は『中国年鑑』での文章を『中国新時期文学論考』（以下『論考』と略称）に収録した。『中国総覧』に書いたものを改編して、『中国文学の改革開放』（以下『開放』と略称）に収録した。萩野は両者をダブルらないように心掛けはしたが、「その年度の話題作となる作品はやはり一、二の作品に集中するものなので、わずかなスペースの紙幅ではダブルが多かった」（1997: 159）。

萩野の記述は2つの特徴を持っている。1つは、新時期小説の発展とともに記録するため、彼の記述は、一時期の文学現象を代表する作品を軸に論じる、同時代性を帯びる作品批評集に近いものである。

もう1つは、彼の記述は目標読者によって変化することである。『論考』は作家論から新

時期小説での表現問題まで取り扱う部厚い専門書である。想定される読者は中国文学の研究者であり、萩野は『中国総覧』に書いたものを少しだけの修正を加えて使用した。これに対して、『開放』は中国文学に興味を持つ人に「中国現代文学を読んでもらおう」(ibid: ii) というために書かれた、初心者向けの中国同時代文学紹介書であるゆえに、萩野はこの本で『中国年鑑』に書いたものを容易に理解できるように改編した。内容からみて、『論考』での情報量は『開放』より多い。同じ作品に対する分析の場合、『論考』は『開放』より深いと見られる。

例として『論考』と『開放』での1982年文学事情の紹介を対照してみよう。まずテーマ・字数・言及した小説家数/小説作品数などの概観をみよう(表⑤を参照)。

第7章表⑤『論考』と『開放』での1982年文学事情の紹介の対照表

書名	メインテーマと節のテーマ	字数	言及した小説家数/小説作品数(本文と注を通算する)*
『論考』	メインテーマ: 中国当代文学管見—1982年の小説について— 節のテーマ: 四節があるが、テーマなし	約 10664	22/22
『開放』	メインテーマ: 試練に立たされる作家— 1982年度 節のテーマ: 1 生産責任制による農民 2 女の自立を求めて 3 詩、その他	約 2911	22/21

*『開放』と『論考』で取り上げた作家と小説の殆どは重なる。ただし、小説以外の文学形式は統計に入れない。

説明用の材料はほぼ一致してはいるものの、2冊の文学史は説明方式上、2つの違いがある。1つは、『論考』の場合、文章は4つの部分から構成されるが、それぞれの節はテーマをもたない。一方、『開放』の場合、文章も同じく4つの部分から構成されるが、それぞれの節にテーマを付けて、節の内容が一目瞭然となっている。これは初心者には文章の構造とテーマを容易に理解させようとする配慮であろう。もう1つ、字数は3倍以上の差があるのに、言及した作家数と作品数がほぼ同じである。これによって初心者向けの『開放』での作品紹介は研究者向けの『論考』よりはるかに簡潔であることがわかるだろう。この簡潔さは2つの方面で現れる。

1つは、小説のあらすじの紹介にある。『論考』で萩野は問題作だと思われる小説を非常に詳しく紹介することがある。最も長い遇羅錦の『春天的童話』は1ページ半ほどの紙面で紹介する。半ページを占めた小説紹介も数篇ある。これに対し、『開放』では、最も長い紹介は『存銭』の8行、多数の作品紹介は2行前後に止まる。

もう1つは、『論考』では、問題作に対して多かれ少なかれ萩野自らの感想と評価を紹介に付けている。これに対し、『開放』ではこのような評価が殆どなく、まったく小説のスケッチである。

ホワイト(2003: 71)によると、混雑な事実直面する歴史学者は、記述の目的に基づきそれらの事実を選択し、分割する必要がある。日本の文学史家は新時期文学を文学史の対象にする際には、それぞれの編纂目的に基づいて文学材料の選択と説明を行っている。このうち、『中国文学史』(丸山・釜屋)と『学ぶ人のために』(研究会)は文学発展の流れにそって、自分の創見に基づき中国の文学史を整理した。藤井は同時代文学史を文学者と共産党イデオロギーとの闘争の歴史として描く傾向がみられる。萩野は、自分の詩学体験によって、作品中心の文学史を構築する。さらに、彼は目標読者によって異なった文学史の述べ方を使用する。

以上の諸文学史が日本人読者に伝える中国文学/中国の文化的イメージもそれぞれであろう。例えば、前野の『中国文学史』を読んだ読者は、中国文学に関する一般教養を備え、中国文学の発展の脈絡を理解できる。一方、藤井の中国文学史を読んだ読者は、藤井が構築した、中国内部における公権力と一般民衆との軋轢に満ちたイメージからの影響を受け、中国文学に興味を持つようになる読者はいるだろう。

陳思和（1988）は、文学史を編纂/研究する際、編纂者のそれぞれの基準、視角、価値判断の基準を認めなければならないと主張した。なぜならそうすると研究が多文化の局面を呈することができるからだという。むしろ、筆者は、文学史を研究する際、編纂者の文学史に対するリライトを読者に知らせることが、研究者の任務だと考える。

7.5 文学史で言及される新時期小説の翻訳状況

この節では、日本における新時期小説の翻訳状況がいかに同時代文学史で言及されているのかを検討してみたい。まず、文学史における新時期小説の翻訳状況に対する記述を考察しよう（表⑥を参照）。

第7章表⑥ 文学史における新時期小説の翻訳状況に言及する一覧表

書名	編纂者	新時期小説の翻訳状況
中国文学史	前野直彬	言及なし
中国文学この百年	藤井省三	訳者名・出版社・出版年
図説 中国 20 世紀文学	中国文芸研究会	毎コラムの「研究資料」欄に当該原典の翻訳状況（訳者名・出版社・出版年）
中国「新時期文学」論考	萩野脩二	言及なし
新しい中国文学史	藤井省三・大木康	言及なし

中国文学の改革開放	萩野脩二	日本語訳がある作品に波線が付いている
中国 20 世紀文学を学ぶ人のために	宇野木洋/松浦恒雄 (中国文芸研究会)	宇野木の総論: 言及なし 今泉の論文: TT の引用・訳者名・出版社・出版年
20 世紀の中国文学	藤井省三	第 14 章 4「戦後における現代文学の研究と翻訳」で 一部の新時期小説の翻訳状況 (訳者名・出版社)
中国語圏文学史	藤井省三	言及なし

この表から見て、文学史と新時期小説の翻訳との間に、以下 4 つの関係があるとまとめられる。

①文学史では新時期小説の翻訳状況に言及しない

『中国文学史』では、紙幅と説明方法のため具体的作品の翻訳状況を取り上げることができない。同じ原因で、『学ぶ人のために』における宇野木の総論にも新時期小説の翻訳状況を紹介することができない。

②文学史で新時期小説の翻訳状況を紹介する

萩野は『論考』で新時期小説の翻訳状況に触れない一方、『開放』で日本語訳がある作品に波線を付ける。その理由は、『論考』の想定読者とされる中国同時代文学の研究者にとって、新時期小説の翻訳状況が常識であり、わざわざ提示する必要がない一方、想定読者が初心者とされる『開放』では、数行の紹介しかない小説に興味を持つ読者が、この ST に日本語訳があるかどうかを、波線の有無によって、すぐ確認できるようにするためであろう。萩野のこの行為は、客観的に新時期小説翻訳状況の宣伝になるだろう。

ただし、新時期小説の TT の登載誌、号数など、より詳しい状況を付け加えていれば、読者にとってもっと役に立つ情報になっただろう。

一方、研究会によって作られた『図説』は学生の副教材用に編纂されたものであり、研究会の同人は学生に日中二言語を対照しながら中国の原典を読ませるように、当該原典が

翻訳を持つ場合、翻訳状況を詳しく紹介する（TTを『図説』に載せない）。

③文学史と新時期小説のTTを互いに観照する。

『学ぶ人のために』での今泉の各論「「書く」ことの意味」において、彼はそれらの小説のTTを、20世紀の中国にいる知識人の宿命と役割を説明する材料として取り上げた。論文での引用であるため、今泉はTTの出版情報を詳しく記述した。例えば、阿城の小説「孩子王」の場合、今泉は「邦訳に、『季刊中国小説』第I巻第5号、田畑佐和子訳「新米教師でんまつ記」/『現代中国文学選集8 阿城 チャンピオン・他』徳間書店、1989年、立間祥介訳「中学教師」がある」のようにTTの出版情報をいちいち記した。

④文学史と新時期小説の翻訳状況を互いに観照する。

藤井は本研究で言及した編纂者のうち、文学史の編纂と新時期小説の翻訳実践のどちらにも取り組んだ唯一の存在である。彼は莫言と鄭義の作品を中心に翻訳実践を行っている。

藤井の新時期文学史では、莫言と鄭義は中国同時代文学を探求するための手掛りのような存在である。この意味で藤井の翻訳実践と文学史の編纂はお互いに支えあう関係が見られる。具体的には、藤井は鄭義と莫言の作品を翻訳し、2人の反体制の英雄像を作り上げる。そして、文学史を編纂する際、この2人を文革後小説の中心的人物として取り上げ、文革後の中国文学史は一元的な、共産党イデオロギーに対する知識人の抵抗史であると提示する。このような操作の方法は、文学史とTTが翻訳文学システムの構成要素として連動することを反映している。

もう1つ、藤井は『20世紀の中国文学』で第14章「20世紀の中国文学読書史」を設けている。このうち、新時期小説に関する内容は4「戦後における現代文学の研究と翻訳」にある。筆者の調べたところ、これは初めての翻訳文学に対する紹介の章を設ける中国文学史である。専門的な翻訳文学史が出る前に、外国文学史に収録されるのは翻訳文学を歴史において可視化させるほぼ唯一の方法である。但し、藤井の記述では、新時期小説の翻訳史に関する情報が網羅されていないわけではない。藤井自身が編集者である『発見と冒険の

中国文学』のほか、市川宏が編集した『現代中国文学選集』（第5章を参照）と松村瑛が監修する『現代中国の小説』に言及しているのみであり、各種の新時期小説の単行本も『季刊 中国現代小説』も提示していない。さらに、『20世紀の中国文学』を「前身にして、全面的に改訂したものとして」（藤井 2011: iv）、後に出版した『中国語圏文学史』では、中国文学の翻訳状況に対する紹介が殆ど削除された。

以上の事例から、新時期小説の文学史の場合、文学の翻訳状況が文学史を編纂する際に重視されていない事実がわかっている。編纂者のいずれも、日本における中国文学（本研究の場合新時期文学）の翻訳状況が中国文学史の必要不可欠な考察要素だとは考えていない。宇野木、丸山、釜屋はそれを割愛してしまう。萩野はそれに触れたが、目標文学の具体的な翻訳状況を一切記さなかった。今泉がそれに言及するのは、翻訳状況に対する重視よりも、それを論証での証拠に使用する学術規範のためである。編纂者のうち、文学史が目標文学システムの構成要素だと意識する唯一の研究者は、藤井である。それにもかかわらず、藤井は最新の『中国語圏文学史』には翻訳状況に関する論述を割愛した。

7.6 まとめ

新時期小説の内容が含まれる文学史はパラテキストの一種として新時期文学の翻訳システムの構成要素である。さらに、常に教科書として使用されているため、文学史は目標社会の読者が外国文学に対するイメージを形成する上で重要な役割を果たしている。日本で出版された9冊の新時期小説の内容が含まれる文学史のうち、『中国文学史』（丸山・釜屋）は文学発展の流れにそって中国の文学史を整理した。文芸研究会は小説、詩、劇など文芸形式及び文芸理論を均等に扱う。藤井は同時代文学史を文学者と共産党イデオロギーとの闘争の歴史として描く傾向がみられる。萩野は、自分の詩学体験によって、作品中心の文学史を構築する。

陳平原（2011:4）により、文学史の研究は社会史に絡み合うこともあれば、思想史にかか

わることもある。作家の印象を重視することもあれば、文学形式の変遷を強調することもある。文学史のすべての記述ストラテジーはメリットがあると同時にデメリットがある。どのようなストラテジーを採用するのは、編纂者の目的にかかわる。この 9 冊の文学史が記述ストラテジーによって読者に伝える中国文学/中国の文化的イメージもそれぞれであろう。前野の『中国文学史』、研究会の『図説』及び『学ぶ人のために』を読んだ読者は、中国文学に関する一般教養を備え、中国文学の発展の脈絡を理解できる。一方、藤井の 4 冊の中国文学史を読んだ読者は、藤井が構築した、中国内部における公権力と一般民衆との軋轢に満ちたイメージからの影響を受ける可能性がありうる。萩野の『開放』を読み、中国文学に興味を持つようになる読者はいるだろう。『論考』を読み、新時期文学に対する理解を深める研究者もいるだろう。

また、新時期小説の文学史の場合、文学の翻訳状況が文学史を編纂する際に重視されていないのは事実である。これからの文学史の記述において、目標文学の翻訳状況に対する紹介も一定の割合を占めるなら、読者はもっと効率的に文学史を利用でき、TT の情報をもっと便利に手に入れることができるだろう。

第8章 おわりに

本研究は日本における中国新時期小説の翻訳システムがいかに中国の文化的イメージを構築したのかを考察する翻訳研究である。

本研究ではまず、日本で公開刊行された中国新時期小説の TT が少なくとも 659 篇以上あることを明らかにした。それらの TT の訳者・出版社・出版年などの情報を整理した一覧表を、本論の付録とした。作成した一覧表から、日本における新時期小説の翻訳は 1970 年代末期から 1986 年までの黎明期、1987 年から 1995 年までの黄金期に二分することができることが確認できた。黎明期には 108 篇の訳文が見つかった。それらの訳本の大部分が短編小説の選集にあり、訳者の職業が様々に異なるという特徴を持つ。それに対して黄金期には 412 篇の訳文が見つかった。それらの訳本の出版形態が多種多様になり、訳者の職業が中国文学の専門家に収斂した。そしてこれら 2 つの時期における新時期小説の翻訳の傾向と特徴を説明した。

ちなみに、1996 年以降 2014 年末現在までに 139 篇の新時期小説の訳文が見つかった。

次に、翻訳者は翻訳を通して主に「日常生活における中国民衆の精神状態」、「中国民衆と共産党イデオロギーとの関係」、「作品自体の文学的価値」という 3 つの事柄について言及する傾向があるということが確認できた。翻訳により構成される中国の文化的イメージは、この 3 つの次元からなると考えられる。中国民衆の精神状態について、大部分の訳者は主に日常生活において中国人の知恵、美德、生きる力を日本人読者に伝えている。典型例として、竹内好の「方法としてのアジア」という思想を受け継いだ都立大中文研の出身者たちが、中国同時代文学を資源にして、日本人の精神的生活を豊かにする目的で新時期小説の翻訳専門誌『季刊』を創刊したケースがある。中国民衆と共産党イデオロギーとの関係について、大部分の訳者は両者間の軋轢を物語っている。その具体例として、藤井は 1989 年の政治事件をきっかけに中国同時代文学の翻訳に取り組み、「優秀な作家」、

「農民」、「受難者」、「抵抗者」という四位一体の莫言像を構築することによって、莫言作品の文学的価値を肯定する一方、中国における公権力と知識人を含む一般民衆との軋轢を伝えた。作品自体の文学的価値については、訳者たちは主に新時期小説に現れる近代的な文学思潮および創作手法を紹介した。ただし、当時起点文化社会の中国と目標文化社会の日本が社会状況の面で千差万別であったため、中国で絶大な人気を獲得した作品の価値観は必ずしも日本社会の主流的詩学に合致するとは限らなかった。その場合、訳者は作品が日本社会に受け入れられるよう様々なストラテジーを使用した。その典型例として本論では、井口の『赤い高粱一族』の翻訳を取り上げた。『赤い高粱一族』には中国農民の生的エネルギー及び作家莫言の想像力を存分に表現する一方、1980年代の日本社会において容認できないハンセン病者差別などの欠点が含まれている。それゆえ、井口は翻訳に際して、後書で「ハンセン病者に対する差別」、「下品な表現」、「たわいない民族意識」など日本社会の主流的詩学および井口自身の文学観に合致しないところを指摘する一方、特定の意味を持つ単語または短文及びSTの詩学という2つの次元におけるSTの異質性を保持する形で、『赤い高粱一族』における文学的価値の二重性を作り出した。

その後、本研究では翻訳文学システムにおける文学史がいかに対象国の文化的イメージの構築に寄与したかを考察した。文学史は特に教材として使用されることが多く、読者に規範としての知識を焼き付けるため、文化的イメージの構築への影響力は大きいと考えられる。新時期小説の内容を含む文学史のうち、前野と中国文芸研究会は主に文学自体の発展の流れにそって諸文学事象を説明している。藤井は文学史の編纂と彼の中国同時代文学の研究を連動させ、鄭義と莫言の文学史における地位を強調することによって同時代文学史を中国知識人の共産党イデオロギーへの抵抗史として書き直した。萩野については自分の詩学体験によって、作品中心の文学史を構築する特徴がみられる。

約20年間にわたる新時期小説の翻訳システムによって構築された中国の文化的イメージは重層的かつ多元的なものであることが明らかになった。翻訳システムを通して、日本人

読者はより複眼的視角で中国を考察することができる。中国に関心を持つ民衆は、地域研究者が作りあげた政治的観点からのマイナスの中国像を植え付けられた一方、新時期小説の翻訳システムによって構築された重層的かつ多面的な中国像も受け取っていた。これこそ 1980 年代において日本の一般庶民が中国に親近感を持った一因ではないかと考えられる。ましてや、日中友好を促進するための翻訳が大量にあれば、日中友好を提唱する後書きなどパラテキストも大量に存在する。読者たちはそれらのテキストを読んで中国に好感を抱くようになったという可能性は否定できないだろう。

最後に、翻訳研究の視角からみて日本における新時期小説の翻訳状況には、ST の選択、翻訳ストラテジー及び翻訳の文学批評など、翻訳の諸要素が相手国の特定の文化的イメージを構築することができるといえるだろう。二国間の交流において、文学の翻訳によって構築される相手国の文化的イメージが読者に植えつけられることによって、読者の相手国に対する見方に影響を与える可能性を見逃してはならない。それゆえ、国家間における文学翻訳の役割をいかに認識し、利用するかは、訳者または国家の文化政策を制定する機関にとって大きな課題となるだろう。

本研究にはまだまだ様々な不足点があることは十分に承知している。まず本研究で取り上げた事例以外にも、近藤の残雪翻訳、牧田の中国少数民族文学翻訳など日本における新時期小説の翻訳には代表的なものがまだ数多く存在する。しかしながら紙幅の制限で本研究に取り入れることができなかった。また、非学者型の訳者も新時期小説の翻訳に貢献しており、彼らが翻訳した小説は新時期小説翻訳システムの一環として、民間人の新時期小説への関心を示している。しかしながら、公開出版されたものは一部に留まり、多くは内輪の同人誌に訳文を掲載する傾向がみられる。これらの未公開出版物が日本人の中国観に対して与えた影響力は大きくないと判断したため、本研究では非公開出版の新時期文学の翻訳事情については詳しく検討していない。しかし、さらなる研究の発展のためには、ここでは検討しなかった作品も考慮する必要があるだろう。

以上の諸問題については今後の課題としたい。

参考文献

日本語 (50 音順)

1. 相浦泉「訳者まえがき」王蒙『胡蝶』相浦泉訳 (1981)、東京: みずず書房
2. 相浦泉 (1993)『求索—中国文学語学』、東京: 未来社
3. 「飯塚容さん 中国小説の新人作家を翻訳で紹介 (テーブルトーク)」『朝日新聞』夕刊、1996年12月9日、p.5.
4. 飯塚容「(ニュースの本棚) ノーベル賞の莫言 したたかに生きる庶民を描く」『朝日夕刊』、2012年10月28日、p.13.
5. 飯塚容「『季刊・中国現代小説』の歩みを振り返って」http://www.mmjp.or.jp/sososha/pdf_file/syosetu.pdf、2014年6月9日アクセス
6. 市川宏「『季刊 中国現代小説』 第一期完結に際して」『蒼蒼』第67号、1996.4、<http://www.mmjp.or.jp/sososha/soso/soso067.html#SO2>、2014年6月4日アクセス
7. 井口晃「莫言の中篇小説「金髪嬰兒」」『東方』、1986.7、東京: 東方書店、pp.20-22.
8. 岩佐昌暉 (2005)『八〇年代中国の内景』、東京: 同学社
9. 上野廣生 (1983)「解説」『現代中国短篇小説選』、東京: 亜紀書房
10. ウェレック, L.&A.ウォーレン (1948/1967)『文学の理論』太田三郎訳、東京: 筑摩書房。
11. 宇野木洋「80-00 概説: 1980年代」中国文芸研究会編 (1995)『図説 中国 20世紀文学』、東京: 白帝社
12. 宇野木洋 (2003a)「コンパクト・中国二〇世紀文学史」宇野木洋&松浦恒雄編『中国 20世紀文学を学ぶ人のために』、京都: 世界思想社、pp.3-31.
13. 宇野木洋 (2003b)「「統治」の枠組みから文化「解読」へ向けた模索の営為へ」宇野木洋&松浦恒雄編『中国 20世紀文学を学ぶ人のために』、京都: 世界思想社、pp.60-91.

14. 大江健三郎（1981）『書く行為 大江健三郎同時代論集 7』、東京：岩波書店
15. 大江健三郎（1995）『あいまいな日本の私』、東京：岩波書店
16. 大江健三郎（2001）『鎖国してはならない』、東京：講談社
17. 今泉秀人「書く」ことの意味」宇野木洋&松浦恒雄編『中国 20 世紀文学を学ぶ人のために』、京都：世界思想社、pp.60-91.
18. 風間賢二「物語の酒宴 小説の無礼講」『文学界』、1997.3、東京：文芸春秋社、pp.234-235
19. 川合康三「唐代における文学史的思考（上）」『京都大学文学部研究紀要』、1998 年 37 号、pp.1-44.
20. 川西政明「花束を抱く女」莫言著 逃避行が導く不条理の世界」、読売新聞、東京朝刊、1992.10.13.
21. 岸陽子（2004）『中国知識人の百年』、東京：早稲田大学出版部
22. 岸陽子「解説」陳建功『棺を蓋いて』岸陽子&斉藤泰治訳（1993）、東京：早稲田大学出版会
23. 現代中国小説刊行会（1987-1996）『季刊 現代中国小説』（第 I 巻 1-36 号）、東京：蒼蒼社
24. 近藤直子（1997）『アジア理解講座 1997 年度第 3 期「中国文学を味わう」報告書』、東京：国際交流基金アジアセンター
25. 小林栄「はしがき」『中国農村百景Ⅲ』小林栄訳（1982）、長野：銀河書房
26. 贾平凹『野山—鶏巢村の人びと・他』井口晃訳（1987）、東京：徳間書店
27. シェリフ, M.「昭和初期における「意識の流れ」をめぐって—ジェームス・ジョイスの「ユリシーズ」と川端康成の「針と硝子と霧」」、URL:
www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/issue/pdf/4/4-01.pdf、2013 年 12 月 12 日アクセス
28. 城山拓也「第 6 章 文学 4—同時代」中国モダニズム研究会編（2014）『中国現代文化 14 講』、兵庫：関西学院大学出版会、pp.69-79.

29. ジュネット, G. (1982/1995) 『パランプセスト』和泉涼一訳、東京: 水声社
30. ジュネット, G. (1987/2001) 『スイユ』和泉涼一訳、東京: 水声社
31. 人民日報海外版日本月刊: <http://jp.jnocnews.jp/news/show.aspx?id=52536>、2014年10月11日アクセス
32. 園田茂人「日中相互認識の四〇年」園田茂人編 (2014) 『日中関係史 1972—2012Ⅲ社会・文化』、東京: 東京大学出版会、pp.3-19.
33. 高島俊男 (1981) 『声無き処に驚雷を聞く : 「文化大革命」後の中国文学』、東京 : 日中出版
34. 竹内好 (1966/1993) 「方法としてのアジア」『日本とアジア』、東京 : 筑摩書房
35. 竹内好 (1981) 「破局に直面する日中関係」『竹内好全集 9』、東京 : 筑摩書房
36. 竹内実「解説」胡月偉&楊鑫基『小説 張春橋』阿頼耶順宏&吉田富夫&竹内実訳 (1982)、東京中央公論社
37. 田畑光永「解説」『天雲山伝奇 : 中国告発小説集』田畑佐和子&田畑光永訳 (1981)、東京: 亜紀書房
38. 田畑佐和子「私を「この道」に引き戻してくれた丁玲との出会い」『東方』400号、2014.6、東京: 東方書店、pp.8-11.
39. 玉腰辰己「歓迎、中野良子！」園田茂人編 (2014) 『日中関係史 1972-2012Ⅲ社会・文化』、東京: 東京大学出版会、pp.125-159.
40. 「「中国当代文学国際討論会」に参加して」『季刊 中国研究』、1987.8、東京: 中国研究所、pp.80-107.
41. 「中国の武力鎮圧に抗議声明 学者・評論家ら51人」『朝日新聞』、朝刊、1989年6月5日、p.30.
42. 辻康吾「現代中国文学によせて」『キビとゴマ : 中国女流文学選』辻康吾&加藤幸子 (1985)、東京: 研文出版
43. 辻康悟&吉田富夫「まえがき」『中国新時期文学の10年』中国研究所編 (1987)、東京: 大

修館書店

44. 長堀祐造「竹内良雄さんの定年退職を送る」http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/download.php?koara_id=AA12310306-20110331-0001.
45. 南条純子「まえがき」『錯、錯、錯!』現代中国文学翻訳研究会訳（1986）、大阪: NGS
46. 中村公省「『竹内実全集』を！」
http://www.21ccs.jp/soso/takeutisenseituito/tuitoubun_nakamura.html、2014年6月4日アクセス
47. 西脇隆夫「短編小説からみた「四人組」追放後の中国文学の現状」工藤静子&西脇隆夫訳（1980）『傷痕』、東京: 日中出版
48. 日本中国同時代文学研究会（2007）『中国新時期文学邦訳一覧（増補・改訂版）』
49. 萩野脩二（1997）『中国文学の改革開放』、京都: 朋友書店
50. 萩野脩二（1995）『中国“新時期文学”論考』、吹田： 関西大学出版部
51. 莫言『赤い高粱』井口晃訳（1989）、東京: 徳間書店
52. 莫言『続 赤い高粱』井口晃訳（1990）、東京: 徳間書店
53. 莫言『赤い高粱』井口晃訳（1989/2003）、東京: 岩波書店
54. 莫言『続 赤い高粱』井口晃訳（1990/2013）、東京: 岩波書店
55. 莫言『透明な人参』藤井省三訳（2013）、東京: 朝日出版社
56. 莫言『天堂狂想歌』吉田富夫訳（2013）、東京: 中央公論新社
57. 馬場公彦（2010）『戦後日本人の中国像—日本敗戦から文化大革命・日中復交まで』、東京: 新曜社
58. 馬場公彦（2014）『現代日本人の中国像: 日中国交正常化から天安門事件・天皇訪中まで』、東京: 新曜社
59. 藤井省三「『赤い高粱』の翻訳」『共同通信配信・岐阜新聞』、1989.8.16.
60. 藤井省三「作品・作家紹介」莫言「秋の水」藤井省三『ユリイカ』vol.21-13、1989.10、

東京: 青木社、pp.192.

61. 藤井省三「共和国の興亡と中国文学」『ユリイカ』vol.21-13、1989.10、東京: 青木社、pp.193-205.
62. 藤井省三「解説」鄭義『古井戸』藤井省三訳（1990）、東京: JICC 出版局
63. 藤井省三「解説 魔術的リアリズムの描く中国農村」莫言『中国の村から』藤井省三訳（1991a）、東京: JICC 出版局
64. 藤井省三（1991b）『中国文学この百年』、東京: 新潮社
65. 藤井省三「訳者あとがき」莫言『花束を抱く女』藤井省三訳（1992）、東京: JICC 出版局
66. 藤井省三「訳者解説」莫言『酒国』、東京: 岩波書店
67. 藤井省三「現代中国農村の狂騒」『文学界』、2006.6、東京: 文芸春秋社、pp.283-285
68. 藤井省三「学び合って、日中近く 隣人付き合い、もっと（日中復交 30 年）」『朝日新聞』、朝刊、2002.9.24、p.11.
69. 藤井省三（2002/第 3 刷 2004）『中国映画 百年を描く、百年を読む』、東京: 岩波書店
70. 藤井省三（2005）『20 世紀の中国文学』、東京: 東京大学出版会
71. 藤井省三（2011）『中国語圏文学史』、東京: 東京大学出版会
72. 藤井省三「莫言一人と文学」莫言『透明な人參』藤井省三訳（2013）、東京: 朝日出版社
73. 藤井省三/大木康（1997）『新しい中国文学史』、京都: ミネルヴァ書房
74. 藤井省三&莫言「中国の村と軍から出てきた魔術的リアリズム」莫言『花束を抱く女』藤井省三訳（1992）、東京: JICC 出版局、pp.181-201.
75. 藤井省三&莫言「抑圧の下の魔術的現実」『すばる』、1996. 5、東京: 集英社、pp.134-140.

76. 藤井省三&莫言「幼少期の孤独な生活が想像力を与えてくれた」『世界』(670)、2000.1、東京: 岩波書店、pp.199-204.
77. 藤井省三&莫言「“伝奇世界” から覗く中国民衆のエネルギー」『中央公論』(118) 2003、東京: 中央公論社、pp.180-188.
78. 藤井省三監修 (2010) 『中国文学研究文献要覧 近現代文学 1978～2008』、東京: 日外アソシエーツ
79. フーコー, M. (1961/1975) 『狂気の歴史』 田村俣訳、東京: 新潮社
80. ベイカー, M. & サルダナーニャ, C. (2013) 『翻訳研究のキーワード』 藤濤文子監修・編訳、東京: 研究社
81. 「毎日新聞」東京夕刊、1996年11月22日、p.12.
82. 前野直彬編 (1975/2000) 『中国文学史』、東京: 東京大学出版会
83. 牧田英二「“鬼子” について」『ILT NEWS』 51、1973-08、東京: 早稲田大学語学教育研究所、pp.37-39.
84. 松井博光「書評 永田耕作『最新中国短篇小説集 ひなっ子』(朝陽出版社)」『中国研究月報』 1984.8.25、東京: 社団法人中国研究所、pp.40-41.
85. 松井博光「日本における中国当代文学研究」阿部幸夫&松井博光編 (1988) 『中国現代文学』の深化と現状』、東京: 東方書店
86. 「学び合って、日中近く 隣人付き合い、もっと (日中復交 30 年)」『朝日新聞』、朝刊、2002年9月24日、p.11.
87. 水野平次 (1932) 『新講支那文学史』、東京: 東洋図書
88. 溝口雄三 (1989) 『方法としての中国』、東京: 東京大学出版会
89. 毛里和子「日中関係の再構築のために」川島真編 (2007) 『中国の外交』、東京: 山川出版社、pp.214-238.
90. モワザン, C. (1996) 『文学史再考』 広田昌義訳、東京: 白水社
91. 「[[らんだむ批評] 《中国現代小説》が再出発」『毎日新聞』東京夕刊、1996年11月22

日、p.12.

92. 「ワープロ誌（窓・論説委員室から）」「朝日新聞」夕刊、1988年7月22日、p.1.
93. 「ワープロ誌の受賞（窓・論説委員室から）」「朝日新聞」夕刊、1991年4月3日、p.9.

中国語（ピンイン順）

1. アンダーソン.B. (1983/2011) 『想像的共同体』 吳叡人訳、上海：上海人民出版社
2. 阿城「文化制約着人類」『文芸報』、1985年7月6日
3. ベリンスキー（1980）『別林斯基選集』第3巻、上海：上海訳文出版社
4. 曹文軒（1988/2010）『中国八十年代文学現象研究』、北京：北京大学出版社
5. 陳平原（2011）『作為学科的文学史』、北京：北京大学出版社
6. 陳思和「要有個人写的文学史」『文芸報』、1988年9月24日
7. 程光炜（2011）『当代文学の『歴史化』』、北京：北京大学出版社
8. 「重慶新聞」によるノーベル賞文学賞審査委員会主席 *Per Wastberg* へのインタビュー
<http://www.chinanews.com/cul/2012/12-10/4394403.shtml>（2015年4月8日アクセス）
9. 戴燕（2002）『文学史的権力』、北京：北京大学出版社。
10. 丁帆（1989/2006）「褻瀆的神話：『紅蝗』的意義」孔范今&施戰軍編『莫言研究資料』、濟南：山東文芸出版社、pp.217-226.
11. 董健&丁帆&王彬彬（2005）『中国当代文学史新稿修訂本』、北京：人民文学出版社
12. 賀桂梅（2010）『新启蒙. 知識档案—80年代中国文化研究』、北京：北京大学出版社
13. 黄平「再造“新人”」程光炜編（2009）『文学史の多重面孔：八十年代文学事件再討論』、北京：北京大学出版社、pp.65-82.
14. 黄子平&錢理群&陳平原「論20世紀中国文学」『文学評論』、1985年第5期、pp.3-14.
15. 洪子誠（1986）『当代中国文学的芸術問題』、北京：北京大学出版社

16. 洪子誠 (2007) 『中国当代文学史修訂版』、北京: 北京大学出版社
17. ホワイト.H (2003) 『後現代歴史叙事学』陳永国&張万娟訳、北京: 中国社会科学出版社
18. 姜智琴 (2011) 『中国新时期文学在国外的传播与研究』、濟南: 齊魯書社
19. 李潔非 (1988) 「新时期小説的兩個階段及其比較」藍棣之&李復威編 (1992) 『尋找的時代—新潮批評選萃』、北京: 北京師範大学出版社、pp.68-84.
20. 李潔非 (1988/2006) 「莫言小説里的惡心」孔范今&施戰軍編 『莫言研究資料』、濟南: 山東文芸出版社、pp.190-198.
21. 劉江凱 (2012) 『認同与“延异”—中国当代文学的海外接受』、北京: 北京師範大学出版社
22. 孟繁華 (1998) 『1978 激情歲月』、濟南: 山東教育出版社
23. 莫言 「懷抱鮮花的女人」『人民文学』、1991 年 7・8 月合併号、北京: 人民文学出版社
24. 莫言 (1995) 『鮮女人』、北京: 作家出版社
25. 莫言 (1995) 『紅高粱』、北京: 作家出版社
26. 莫言&大江健三郎&鉄凝 「中日作家鼎談」『当代作家評論』、2009 年 5 期、pp.46-57.
27. 南方都市報の藤井省三へのインタビュー、<http://news.nandu.com/html/201303/28/40680.html>、2014 年 11 月 16 日アクセス
28. 『人民文学』1990 年 7・8 月合刊、北京: 人民文学雜誌社
29. 孫歌 「在大陸語境中「翻譯」竹内好」石之諭編 (2007) 『近代日本対華思想』、台北: 國立台灣大學政治學系中國大陸暨兩岸關係教學與研究中心、pp.113-142.
30. 陶東風&和磊編 (2008) 『中国新时期文学 30 年, 1978-2008』、北京: 中国社会科学出版社.
31. 吳俊 「間于〈尋根文学〉的再思考」程光炜編 (2009) 『重返八十年代』、北京: 北京大学出版社、pp.214-226.
32. 吳珮蓀 (2007) 『從中國反譯日本?: 竹内好抗拒西方的策略』、台北: 國立台灣大學政

治學系中國大陸暨兩岸關係教學與研究中心

33. 許紀霖 (2000) 『二十世纪中国思想史論』、上海: 東方出版中心
34. 許金龍「始自邊緣的呼喚—大江健三郎評說莫言」 <http://www.chinawriter.com.cn/wxpl/2012/2012-10-16/144007.html>、2015年4月8日アクセス
35. 許子東 (2011) 『許子東講稿卷2 張愛玲・郁達夫・香港文学』、北京: 人民文学出版社
36. 楊慶祥「如何理解「80年代文学」」程光炜編 (2009) 『文学史的多重面孔: 八十年代文学事件再討論』, 北京: 北京大学出版社、pp.3-13.
37. 查建英 (2006) 「写在前面」 『八十年代訪談錄』、北京: 三聯書店、pp.1-13.
38. 張志忠 (1998) 『1993 世紀末的喧嘩』、濟南: 山東教育出版社
39. 鄭万隆「我的根」 『上海文学』、1985年第5期、pp.44-46.
40. 中国作家網「莫言作品在日本」: <http://www.chinawriter.com.cn/bk/2012-11-14/65781.html>、2014年10月11日アクセス
41. 中国新聞網「莫言諾貝爾獎“背后的功臣”: 各国訳者功不可没」
<http://www.chinanews.com/cul/2012/10-24/4271171.shtml>、2014年11月14日アクセス
42. 中国新聞網「莫言指出翻译的重要性: “得諾獎离不开翻譯”」
<http://www.chinanews.com/cul/2012/12-08/4392592.shtml>、2014年11月14日アクセス

その他 (アルファベット順)

1. Berman, A. (1985). 'Translation and The Trials of Foreign', in Venuti, L. (Ed.) (2000). *The translation studies reader*. Routledge. pp.284-297.
2. Even-Zohar, I. (1979). 'Polysystem theory', *Poetics today*, vol1, pp.287-310.
3. Hermans, T. 'Introduction Translation Studies and a New Paradigm' .in. T. Hermans (ed.) (1985). *The manipulation of literature. studies in literary translation*. Croom Helm. pp.7-15.

4. Holz-Mänttari, J. (1984) *Translatorisches Handeln. Theorie und Methode*. Annales Academiae Scientiarum Fennicae. Ser. B 226. Helsinki: Suomalainen Tiedeakatemia.
5. Lefevere, A. (1980) 'Mother Courage's Cucumbers Text, system and refraction in a theory of Literature' in L. Venuti (ed.) (2000) *The translation studies reader*. Routledge. pp.233-250.
6. Lefevere, A. (1992). *Translation, rewriting, and the manipulation of literary fame*. London: Routledge.
7. Pym, A. (1998). *Method in translation history*. St. Jerome.
8. Reiss, K. (trans. Rohde) (1971/2000). *Translation Criticism-Potentials and Limitations: Categories and Criteria for Translation Quality Assessment*. Routledge.
9. Tymoczko, M. (2007) *Enlarging Translation, Empowering Translators*. (1 edition). Routledge.
10. Venuti, L. (1995). *The translator's invisibility: A history of translation*. Routledge.
11. Venuti, L. (1998). *The Scandals of Translation: Towards an Ethics of Difference*. Routledge.
12. Vogel, F. & Yuan Ming & Tanaka Akihiko (eds.) (2002). *The Golden Age of the US-China-Japan Triangle, 1972-1989*. Harvard University Press.

付録 日本における中国新時期小説の TT リスト

選択基準（下記基準①から③までのいずれにもあてはまること）

①翻訳された ST が 1976 年ごろから 1980 年代末までの中国大陸で出版された、中華人民共和国国民によって書かれた小説。ただし 1980 年代すでに中国文壇で活躍してきた作家の作品で、小説の作風が大きく変化しないものについては 1994 年までを含む。

②日本人によって翻訳され、日本の出版社または組織によって公開刊行されたもので、ISBN コード乃至 ISSN コードを有するもの。

③ TT あるいは TT を掲載した出版物が国立国会図書館のサーチシステム (<http://www.ndl.go.jp/>)、NII 学術情報ナビゲータ[サイニィ]のうちの「日本の論文をさがす」 (<http://ci.nii.ac.jp/>) と「大学図書館の本をさがす」 (<http://ci.nii.ac.jp/books/?l=ja>) の 3 つのシステムのうち、最低 1 つで検索可能なもの。

主要な参考資料

①藤井省三監修（2010）『中国文学研究文献要覧 近現代文学 1978～2008』、日外アソシエーツ

②日本中国当代文学研究会編（2007）『中国新時期文学邦訳一覧（増補・改訂版）』、同時に『中国新時期文学邦訳一覧（増補・改訂版）』のオンラインデータベース

凡例

- ①同一 ST に複数の TT がある場合、翻訳者が異なれば別の TT とみなす。
- ②雑誌に連載されたもの、および長編小説が分冊で刊行されたものは 1 つとする。
- ③TT の初出の情報を採用する。初出が不明の場合出版時期の最も古い版の情報を採用する。

④確認できない項目欄は空白にする。

⑤659 篇の訳文のうち 644 篇の原物が確認できた。原物が手に入らなかった 15 篇の訳文

は**イタリック太字**で示す。

	原作者	訳題	原題	訳者	収録書等	編・監修	出版社	発行年月
1.	劉心武	担任教師	班主任	真山夏ほか	日中友好新聞 1052 号～ 1070 号		日本中国友好 協会	1978 年 2 月 26 日から
2.	劉心武	めざめよ、弟	醒来吧、弟弟	真山夏・志木 強	日中友好新聞 1111 号～ 1121 号		日本中国友好 協会	1979 年 5 月 13 日から
3.	張弦	記憶	記憶	西川信江・荒 井潤	日中友好新聞 1122～1130 号		日本中国友好 協会	1979 年 8 月 5 日から
4.	陸文夫	献身—唐淋の場合	献身	工藤静子・西 脇隆夫	傷痕		日中出版	1980 年 2 月
5.	李陀	君よ、この歌を聞け	願你聽到這支 歌	工藤静子・西 脇隆夫	傷痕		日中出版	1980 年 2 月
6.	李勃	阿惠	阿惠	工藤静子・西 脇隆夫	傷痕		日中出版	1980 年 2 月
7.	盧新華	傷痕	傷痕	工藤静子・西 脇隆夫	傷痕		日中出版	1980 年 2 月
8.	王垂平	冤罪	神聖的使命	工藤静子・西 脇隆夫	傷痕		日中出版	1980 年 2 月
9.	蔣子龍	喬さんの工場長就 任記	喬廠長上任記	石黒やすえ・ 嶋田恭子	日中友好新聞 1147～1176 号		日本中国友好 協会	1980 年 2 月 17 日から
10.	李勃	阿惠	阿惠	前野淑子	野草 25		中国文芸研究 会	1980 年 5 月
11.	茹志鵬	家事	家務事	真山夏	日中友好新聞 1177～1182 号		日本中国友好 協会	1980 年 10 月 5 日から
12.	劉心武	密供	密供	田所武彦	週刊朝日		朝日新聞社	1980 年 12 月 26 日
13.	李功達	小路	小路	水木哲男	日中友好新聞 1193 号～ 1200 号		日本中国友好 協会	1981 年 2 月 8 日から
14.	高曉声	リー・シュンターの 家づくり	李順大造屋	石黒やすえ	日中友好新聞 1201～1213 号		日本中国友好 協会	1981 年 4 月 12 日から

15.	王蒙	胡蝶	胡蝶	相浦泉			みすず書房	1981年8月
16.	魯彦周	天雲山伝奇	天雲山傳奇	田畑佐和子	天雲山伝奇—中国告発小説集		亜紀書房	1981年10月
17.	劉賓雁	人妖の間	人妖之間	田畑佐和子	天雲山伝奇—中国告発小説集		亜紀書房	1981年10月
18.	徐明旭	転勤	調動	田畑光永	天雲山伝奇—中国告発小説集		亜紀書房	1981年10月
19.	譚容	色あせた手紙	褪色的信	小谷哲男	日中友好新聞 1231号～1248号		日本中国友好協会	1981年11月29日から
20.	高曉声	陳奐生町へ出る	陳奐生上城	岩田真佐子	日本と中国		日本中国友好協会(正統)	1982年1月
21.	趙新	皆な同じ世界だ!	一万和一万	小林栄	中国農村百景—「山西文学」短篇小説集		銀河書房	1982年3月
22.	張石山	くわの柄韓宝山	鏤柄韓宝山	小林栄	中国農村百景—「山西文学」短篇小説集		銀河書房	1982年3月
23.	鄭義	降りつづく秋雨	秋雨漫々	小林栄	中国農村百景—「山西文学」短篇小説集		銀河書房	1982年3月
24.	楊茂林	酒の酔いから今さめて...	酒酔方醒	小林栄	中国農村百景—「山西文学」短篇小説集		銀河書房	1982年3月
25.	賈大山	趙三勤	趙三勤	小林栄	中国農村百景—「山西文学」短篇小説集		銀河書房	1982年3月
26.	韓文洲	秋の収穫の頃	秋收時節	小林栄	中国農村百景—「山西文学」短篇小説集		銀河書房	1982年3月
27.	馬烽	集団結婚式	結婚現場会	南条純子	日本と中国		日本中国友好協会(正統)	1982年4月
28.	王蒙	王蒙ショートショート集	不如酸辣湯及其他	菱沼透・青谷政明	中国研究月報 410		中国研究所	1982年4月
29.	劉心武	蘭州での再会	相逢在蘭州	山本信子	日本と中国		日本中国友好協会(正統)	1982年6月
30.	胡月偉・楊鑫基	小説 張春橋	瘋狂的節日	阿頼耶順宏・竹内実・吉田富夫			中央公論社	1982年6月
31.	王蒙	寸草の憂い	悠悠寸草心	上野廣生	現代中国短編小説選	上野廣生	亜紀書房	1983年1月
32.	高曉声	李順大の家	李順大造屋	上野廣生	現代中国短編小説選	上野廣生	亜紀書房	1983年1月

33.	蔣子龍	喬所長の着任	喬廠長上任記	上野廣生	現代中国短編小説選	上野廣生	亜紀書房	1983年1月
34.	茹志鵬	構成のまづい物語	剪輯錯了的故 事	上野廣生	現代中国短編小説選	上野廣生	亜紀書房	1983年1月
35.	茹志鵬	草原の道	草原上的小路	上野廣生	現代中国短編小説選	上野廣生	亜紀書房	1983年1月
36.	茹志鵬	女ごころ	兒女情	上野廣生	現代中国短編小説選	上野廣生	亜紀書房	1983年1月
37.	張潔	愛、忘れ得ぬもの	愛、是不能忘記 的	上野廣生	現代中国文学短編集	上野廣生	亜紀書房	1983年1月
38.	張弦	愛に見捨てられた 片隅	被愛情遺忘的 角落	上野廣生	現代中国短編小説選	上野廣生	亜紀書房	1983年1月
39.	陳世旭	小鎮の將軍	小鎮上的將軍	上野廣生	現代中国短編小説選	上野廣生	亜紀書房	1983年1月
40.	白樺	一束の手紙	一束信札	上野廣生	現代中国短編小説選	上野廣生	亜紀書房	1983年1月
41.	焦祖堯	ところてんの店で	涼粉攤上	小林栄	中国農村百景Ⅱ—「山西文 学」短篇小説集		銀河書房	1983年2月
42.	潘保安	仕返し	報復	小林栄	中国農村百景Ⅱ—「山西文 学」短篇小説集		銀河書房	1983年2月
43.	馬烽	山村のお医者さん	山村医生	小林栄	中国農村百景Ⅱ—「山西文 学」短篇小説集		銀河書房	1983年2月
44.	李海清	かえるの鳴き声	蛙鼓声声	小林栄	中国農村百景Ⅱ—「山西文 学」短篇小説集		銀河書房	1983年2月
45.	謙容	人が中年になると	人到中年	福地桂子	民主文学 209		新日本出版社	1983年4月
46.	烏熱爾図(ウ ルツ)	エヴェンキ族獵師 の息子	一个猎人的恳 求	牧田英二	早稲田文学 1983年4月号		早稲田文学会	1983年4月
47.	烏熱爾図(ウ ルツ)	ある獵師の願い	一個獵人的懇 求	西脇隆夫	中国少数民族文学 1 小説 特集		島根大学中国 文学研究室	1983年5月
48.	インツェレ ン	雪原の中の少女	Yimu qiong qiong	西脇隆夫	中国少数民族文学 1 小説 特集		島根大学中国 文学研究室	1983年5月
49.	陳多	村のおばさん	大嬸	西脇隆夫	中国少数民族文学 1 小説 特集		島根大学中国 文学研究室	1983年5月
50.	楊蘇	織り上げられなか ったスカート	没有織完的統 裙	西脇隆夫	中国少数民族文学 1 小説 特集		島根大学中国 文学研究室	1983年5月
51.	艾克拝爾・ 米吉提 (ア バル・マジッ ト)	わが青春のハリタ イ!	啊!十五歲的 Halitai	西脇隆夫	中国少数民族文学 1 小説 特集		島根大学中国 文学研究室	1983年5月

52.	張賢亮	邢老人と犬の話	邢老漢和狗的故事	六木純	風にそよぐ中国知識人		文藝春秋	1983年10月
53.	王東滿	柳大翠一家の物語	柳大翠一家的故事	小林栄	中国農村百景Ⅲ—「山西文学」短篇小説集		銀河書房	1984年3月
54.	何垂京	夕風	晚風	小林栄	中国農村百景Ⅲ—「山西文学」短篇小説集		銀河書房	1984年3月
55.	胡正	元宵節	又是元宵	小林栄	中国農村百景Ⅲ—「山西文学」短篇小説集		銀河書房	1984年3月
56.	徐捷	野心家	野心家	小林栄	中国農村百景Ⅲ—「山西文学」短篇小説集		銀河書房	1984年3月
57.	沈治平	誕生日の贈り物	生日的礼物	永田耕作	ひなっ子—最新中国短篇小説集		朝陽出版社	1984年3月
58.	張興元	アンズ村のニュース	杏花村的新聞	永田耕作	ひなっ子—最新中国短篇小説集		朝陽出版社	1984年3月
59.	趙大年	農園の大將	園頭	永田耕作	ひなっ子—最新中国短篇小説集		朝陽出版社	1984年3月
60.	鄧友梅	喜多村秀美	喜多村秀美	永田耕作	ひなっ子—最新中国短篇小説集		朝陽出版社	1984年3月
61.	瑪拉沁夫(マラチンフ)	活き仏物語	活佛的故事	永田耕作	ひなっ子—最新中国短篇小説集		朝陽出版社	1984年3月
62.	方方	安樹と詩の仲間たち	安樹和他的詩友們	永田耕作	ひなっ子—最新中国短篇小説集		朝陽出版社	1984年3月
63.	葉蔚林	たつのひげ草の帽子	龍鬚草帽	永田耕作	ひなっ子—最新中国短篇小説集		朝陽出版社	1984年3月
64.	羊翬	首のこぶ	癭	永田耕作	ひなっ子—最新中国短篇小説集		朝陽出版社	1984年3月
65.	魯琪	ローちゃん	小鷺	永田耕作	ひなっ子—最新中国短篇小説集		朝陽出版社	1984年3月
66.	魯琪	ひなっ子	Y 蛋	永田耕作	ひなっ子—最新中国短篇小説集		朝陽出版社	1984年3月
67.	李准	マンゴー	芒果	白水紀子	早稲田文学 1985年4月号		早稲田文学会	1984年4月
68.	謹容	北京の女医一人、中年に到れば	人到中年	田村年起			第三文明社	1984年5月
69.	謹容	人、中年に到れば	人到中年	柴田清伊知	現代中国中編小説選		柴田清伊知	1984年8月

70.	葉蔚林	航路標識のない河 で	沒有航標的河 流	柴田清伊知	現代中国中編小説選		柴田清伊知	1984年8月
71.	諶容	人、中年に到るや	人到中年	林芳	中公文庫		中央公論社	1984年12月
72.	権文学	つづら折りの山奥 の村で	記していない	小林栄	中国農村百景IV—「山西文 学」短篇小説集		銀河書房	1985年3月
73.	成一	陳家のできごと	記していない	小林栄	中国農村百景IV—「山西文 学」短篇小説集		銀河書房	1985年3月
74.	張魯	口から出かかった 言葉	記していない	小林栄	中国農村百景IV—「山西文 学」短篇小説集		銀河書房	1985年3月
75.	李銳	壁耳ニュース社情 報	記していない	小林栄	中国農村百景IV—「山西文 学」短篇小説集		銀河書房	1985年3月
76.	王西蘭	麦播機の鳴る頃	記していない	小林栄	中国農村百景IV—「山西文 学」短篇小説集		銀河書房	1985年3月
77.	王東満	朝焼けに燃える男	記していない	小林栄	中国農村百景IV—「山西文 学」短篇小説集		銀河書房	1985年3月
78.	茹志鵬	児をおもう	兒女情	伊藤克 他	キビとゴマー中国女流文学 選	加藤幸子 ・辻康吾	研文出版	1985年4月
79.	諶容	讚歌	讚歌	伊藤克 他	キビとゴマー中国女流文学 選	加藤幸子 ・辻康吾	研文出版	1985年4月
80.	戴厚英	キビとゴマ	高的是秫秫, 矮 的是芝麻	伊藤克 他	キビとゴマー中国女流文学 選	加藤幸子 ・辻康吾	研文出版	1985年4月
81.	張潔	愛、この忘れがたき もの	愛、是不能忘記 的	伊藤克 他	キビとゴマー中国女流文学 選	加藤幸子 ・辻康吾	研文出版	1985年4月
82.	張抗抗	夏	夏	伊藤克 他	キビとゴマー中国女流文学 選	加藤幸子 ・辻康吾	研文出版	1985年4月
83.	張弦	愛情もとどかない 村	被愛情遺忘的 角落	楠本紀子	早稲田文学 1985年4月号		早稲田文学会	1985年4月
84.	鄭万隆	奇跡が起こった夜	奇跡出現在那 天夜里	白水紀子	早稲田文学 1985年4月号		早稲田文学会	1985年4月
85.	鄭万隆	誰かが戸をたた いている	有人敲門	青木治人	早稲田文学 1985年4月号		早稲田文学会	1985年4月
86.	王安憶	雨のささやき	雨, 沙沙沙	佐伯慶子	早稲田文学 1985年4月号		早稲田文学会	1985年4月
87.	艾克拜爾・ 米吉提 (ア ク郎)	天山のトラック野 郎	車禍	今岡博美 他	中国少数民族文学 2 特集 新疆の少数民族文学		島根大学中国 文学研究室	1985年6月

	バル・マジット)							
88.	劉心武	担任教師	班主任	中井政喜	大分大学経済論集 37			1986年1月
89.	韓石山	部長と農村へ行く	陪部長下郷	小林栄	中国農村百景V―「山西文学」短篇小説集		銀河書房	1986年3月
90.	義夫	見通せない世の中	看不透的世事	小林栄	中国農村百景V―「山西文学」短篇小説集		銀河書房	1986年3月
91.	権文学	村の西のはずれの 天保じいさん	村西頭有個老 天保	小林栄	中国農村百景V―「山西文学」短篇小説集		銀河書房	1986年3月
92.	周宗奇	きれいな沙水河	清涼的沙水河	小林栄	中国農村百景V―「山西文学」短篇小説集		銀河書房	1986年3月
93.	張平	糟糠の妻	糟糠之妻	小林栄	中国農村百景V―「山西文学」短篇小説集		銀河書房	1986年3月
94.	馬烽	彭成貴じいさん	彭成貴老漢	小林栄	中国農村百景V―「山西文学」短篇小説集		銀河書房	1986年3月
95.	李逸民	高天順という人	高天順其人	小林栄	中国農村百景V―「山西文学」短篇小説集		銀河書房	1986年3月
96.	李銳	老いのさびしさ	晚悵	小林栄	中国農村百景V―「山西文学」短篇小説集		銀河書房	1986年3月
97.	劉心武	詠嘆調―北京のバ スの物語	公共汽車詠嘆 調	辻康吾	エコノミスト		毎日新聞社	1986年4月
98.	張辛欣	狂気の君子蘭	瘋狂的君子蘭	梶村真澄	季刊中国研究 3		中国研究所	1986年5月
99.	陳建功	楽しみを見つけて	找樂		早稲田文学 1986年5月号		早稲田文学会	1986年5月
100.	劉心武	5.19の望遠レンズ	五・一九長鏡頭	桜庭ゆみ子	中国研究月報 459		中国研究所	1986年5月
101.	曹冠龍	火	三個教授一火	白水紀子	早稲田文学 1986年6月号		早稲田文学会	1986年6月
102.	張賢亮	男の半分は女	男人的一半是 女人	北霖太郎			二見書房	1986年8月
103.	張賢亮	早熟	早安！朋友	北霖太郎			二見書房	1986年11月
104.	遇羅錦	ある冬の童話	一個冬天的童 話	安本実・竹内 久美子	遇羅錦作品集 1 現代ア ジア叢書		田畑書店	1986年12月
105.	遇羅錦	兄、遇羅克の憶い出	乾坤特重我頭 輕一回憶我哥 哥遇羅克	安本実・竹内 久美子	遇羅錦作品集 1 現代ア ジア叢書		田畑書店	1986年12月
106.	諶容	錯、錯、錯！	錯、錯、錯！	現代中国文学	80年代中国女流文学選 1	南條純子	NGS	1986年12月

				翻訳研究会	錯、錯、錯！			
107.	陳愉慶	壁	壁	現代中国文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 1 錯、錯、錯！	南條純子	NGS	1986年12月
108.	池莉	故郷の月	月兒好	中国現代文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 1 錯、錯、錯！	南條純子	NGS	1986年12月
109.	劉心武	如意	如意	中井政喜	大分大学経済論集 38—4 38—5			1987年1月
110.	張潔	方舟 その一・二・三	方舟	福地桂子	長崎総合大学紀要 第27 巻第2号・第28巻第1号・ 第28巻第2号			1987年3・6・ 11月
111.	韋君宜	醒める	清醒	田畑佐和子	季刊中国現代小説 1		蒼蒼社	1987年4月
112.	烏熱爾図(ウ ルツ)	琥珀色のかがり火	琥珀色的篝火	牧田英二	季刊中国現代小説 1		蒼蒼社	1987年4月
113.	何立偉	石工の歌	石匠留下的歌	井口晃	季刊中国現代小説 1		蒼蒼社	1987年4月
114.	高曉声	陳奂生町へ行く	陳奂生上城	杉本達夫	季刊中国現代小説 1		蒼蒼社	1987年4月
115.	戴厚英	ああ人間よ！	人啊、人！	大石智良	季刊中国現代小説 1・2・3		蒼蒼社	1987年4・7・ 11月
116.	張承志	緑夜	緑夜	岸陽子	季刊中国現代小説 1		蒼蒼社	1987年4月
117.	馮驥才	BOOK! BOOK!	BOOK! BOOK!	市川宏	季刊中国現代小説 1		蒼蒼社	1987年4月
118.	于強	風媒花 流れる 星の下で	風媒花	夏文宝・伊藤 桂一	光人社		光人社	1987年5月
119.	祁放	いのちの夏	生命的夏天	伊藤敬一	季刊中国 9		季刊中国刊行 委員会	1987年6月
120.	王安憶	終着駅	本次列車終点	現代中国文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 2 終着駅	南條純子	NGS	1987年7月
121.	張抗抗	愛する権利	愛的權利	現代中国文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 2 終着駅	南條純子	NGS	1987年7月
122.	鉄凝	果樹園への小路	小路伸向果樹 園	現代中国文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 2 終着駅	南條純子	NGS	1987年7月
123.	余未人	星のきらめき	星光閃爍	現代中国文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 2 終着駅	南條純子	NGS	1987年7月
124.	劉俊民	月清く	月色清明	現代中国文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 2 終着駅	南條純子	NGS	1987年7月

125.	李功達	青いスカーフ	藍圍巾	岩佐昌暲	中国語 331		内山書店	1987年7月
126.	劉索拉	滑走路	跑道	近藤直子	季刊中国現代小説 2		蒼蒼社	1987年7月
127.	梁曉声	不可思議な大地 北大荒	這是一片神奇 的土地	杉本達夫	季刊中国現代小説 2		蒼蒼社	1987年7月
128.	扎西達娃 (ガシダガ)	星のない夜	没有星光的夜	牧田英二	季刊中国現代小説 2		蒼蒼社	1987年7月
129.	劉真	黒旗	黒旗	田畑佐和子	季刊中国現代小説 2		蒼蒼社	1987年7月
130.	祁放	ふるさとの柿	故郷的柿子樹	伊藤敬一	季刊中国 10		季刊中国刊行 委員会	1987年9月
131.	馮驥才	100人の10年	一百個人的十 年	大里浩秋	季刊中国研究 8		中国研究所	1987年9月
132.	陸文夫	美食家	美食家	陳謙臣			松籟社	1987年9月
133.	王蒙	おお、モハメッド・ アマド	哦、穆罕默德・ 阿麦德 在伊 犁之一	市川宏・牧田 英二	現代中国文学選集 1	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1987年10月
134.	王蒙	淡い灰色の眼	淡灰色的眼珠 在伊犁之二	市川宏・牧田 英二	現代中国文学選集 1	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1987年10月
135.	王蒙	戸締りを忘れた農 家	虚掩的土屋小 院 在伊犁之 四	市川宏・牧田 英二	現代中国文学選集 1	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1987年10月
136.	王蒙	ブドウの精霊	葡萄的精霊 在伊犁之五	市川宏・牧田 英二	現代中国文学選集 1	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1987年10月
137.	王蒙	アイミラ嬢の恋	愛彌拉姑娘的 愛情 在伊犁 之六	市川宏・牧田 英二	現代中国文学選集 1	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1987年10月
138.	王蒙	辺城アラベスク	邊城華彩 在 伊犁之八	市川宏・牧田 英二	現代中国文学選集 1	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1987年10月
139.	古華	芙蓉鎮	芙蓉鎮	杉本達夫・和 田武司	現代中国文学選集 2	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1987年10月
140.	史鉄生	わが遙かなる清平	我的遙遠的清	檜山久雄	現代中国文学選集 3	松井博	徳間書店	1987年10月

		湾	平湾			光・野間 宏		
141.	史鉄生	お婆さんの星	奶奶的星星	小谷一郎	現代中国文学選集 3	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1987年10月
142.	史鉄生	サッカー	足球	小谷一郎	現代中国文学選集 3	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1987年10月
143.	史鉄生	命は琴の弦のよう に	命若琴弦	三木直大	現代中国文学選集 3	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1987年10月
144.	史鉄生	昼休みのひととき	午餐半小時	井口晃	現代中国文学選集 3	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1987年10月
145.	賈平凹	小さな町の小さな 店	小城街口的 小店	井口晃	現代中国文学選集 4	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1987年10月
146.	賈平凹	鬼城	鬼城	井口晃	現代中国文学選集 4	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1987年10月
147.	賈平凹	野山一鶏巢村の人 びと	鶏窩窪的 人家	井口晃	現代中国文学選集 4	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1987年10月
148.	張辛欣	狂気の君子蘭	瘋狂的君子蘭	山口守	現代中国文学選集 5	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1987年10月
149.	張辛欣	わが世代の夢	我們這個年 紀的夢	山口守	現代中国文学選集 5	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1987年10月
150.	張辛欣	同じ地平に立っ て	在同一地平 線上	飯塚容	現代中国文学選集 5	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1987年10月
151.	遇羅錦	春の童話	春天的童話	松井博光・近 藤直子	現代中国文学選集 別巻		徳間書店	1987年10月

152.	遇羅錦	春の童話	春天的童話	押川雄孝 ほか	遇羅錦作品集 2 現代アジア叢書		田畑書店	1987年10月
153.	蔡測海	白河	白河	牧田英二	季刊中国現代小説 3		蒼蒼社	1987年11月
154.	残雪	雄牛	公牛	近藤直子	季刊中国現代小説 3		蒼蒼社	1987年11月
155.	史鉄生	我の舞	我之舞	井口晃	季刊中国現代小説 3		蒼蒼社	1987年11月
156.	邵振国	出稼ぎ	麦客	杉本達夫	季刊中国現代小説 3・4		蒼蒼社	1987年11月・ 1988年2月
157.	王小鷹	香錦	香錦	現代中国文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 3 ラブレター	南條純子	NGS	1987年12月
158.	王浙濱	ラブレター	情書の慕情	現代中国文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 3 ラブレター	南條純子	NGS	1987年12月
159.	祁放	冬の物語	冬天的故事	伊藤敬一	季刊中国 11		季刊中国刊行 委員会	1987年12月
160.	張潔	より美しく生きる 者	誰生活得更美 好	現代中国文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 3 ラブレター	南條純子	NGS	1987年12月
161.	張玲	帰来	歸来	現代中国文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 3 ラブレター	南條純子	NGS	1987年12月
162.	喻杉	女子大生宿寮	女大学生宿舍	現代中国文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 3 ラブレター	南條純子	NGS	1987年12月
163.	余未人	嫁ぐ日近く	女兒就要出嫁	現代中国文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 3 ラブレター	南條純子	NGS	1987年12月
164.	朱子奇	ロープの奇蹟		内田勝子 他	日中友好新聞		日本中国友好 協会	1988年1月5 日
165.	周鷹	雨もよう		馬場一也 他	日中友好新聞		日本中国友好 協会	1988年1月25 日
166.	王安憶	老康	老康回来	井口晃	季刊中国現代小説 4		蒼蒼社	1988年2月
167.	残雪	天窓	天窓	近藤直子	季刊中国現代小説 4		蒼蒼社	1988年2月
168.	蔣子丹	その日は雨だった	那天下雨了	井口晃	季刊中国現代小説 4		蒼蒼社	1988年2月
169.	陳建功	轆轤把胡同9号	轆轤把胡同9 号	岸陽子	季刊中国現代小説 4		蒼蒼社	1988年2月
170.	馮驥才	酒の魔力	酒的魔力	市川宏	季刊中国現代小説 4		蒼蒼社	1988年2月
171.	陸文夫	道に面した窓	臨街の窓	田畑佐和子	季刊中国現代小説 4		蒼蒼社	1988年2月
172.	戴厚英	ああ人間よ！一現	人啊、人！	大石智良			サイマル出版	1988年2月

		代中国長篇小説					会	
173.	蔣滄	夜明けの太陽を求めて	新鮮の太陽		エコノミスト 22/29		毎日新聞社	1988年3月
174.	阿城	新米先生てんまつ記	孩子王	田畑佐和子	季刊中国現代小説 5		蒼蒼社	1988年4月
175.	扎西達娃 (ザシダワ)	古い館	古宅	牧田英二	季刊中国現代小説 5		蒼蒼社	1988年4月
176.	残雪	阿梅、ある太陽の日の愁い	阿梅在一个太陽天里的愁思	近藤直子	季刊中国現代小説 5		蒼蒼社	1988年4月
177.	残雪	私の、あの世界での事一友へ	我在那个世界里的事情	近藤直子	季刊中国現代小説 5		蒼蒼社	1988年4月
178.	張弦	銀杏	銀杏樹	大石智良	季刊中国現代小説 5		蒼蒼社	1988年4月
179.	莫言	枯れた河	枯河	井口晃	季刊中国現代小説 5		蒼蒼社	1988年4月
180.	何凱旋	レンガ作りの作業場で	在場上	杉本達夫	中国語 343		内山書店	1988年7月
181.	黄旦璇	モデルにきた女	来做模特兒的女人	中国現代文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 4 四人の四十女	南條純子	NGS	1988年7月
182.	胡辛	四人の四十女	四個四十歲的女人	中国現代文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 4 四人の四十女	南條純子	NGS	1988年7月
183.	陳彬彬	キューピットの矢はどこに？	丘比特的箭啊、在哪里？	現代中国文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 4 四人の四十女	南條純子	NGS	1988年7月
184.	程琪	駱駝を曳く女	拉駱駝的女人	現代中国文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 4 四人の四十女	南條純子	NGS	1988年7月
185.	葉文玲	秋爽	秋爽	中国現代文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 4 四人の四十女	南條純子	NGS	1988年7月
186.	馬拉沁夫(マ ラチンフ)	愛、夏の夜に燃焼す	愛、在夏夜里燃 燒	牧田英二	季刊中国現代小説 6		蒼蒼社	1988年7月
187.	蔣子丹	贗の月	假月亮	井口晃	季刊中国現代小説 6		蒼蒼社	1988年7月
188.	張宇	国公の墓	国公墓	田畑佐和子	季刊中国現代小説 6		蒼蒼社	1988年7月
189.	李銳	「厚土」より つっ かい石	眼石	大石智良	季刊中国現代小説 6		蒼蒼社	1988年7月
190.	李銳	「厚土」より 山を 見る	厚土一呂梁山 印象之二 看 山	大石智良	季刊中国現代小説 6		蒼蒼社	1988年7月

191.	馮苓植	王鳥の座 鳥は飼 い主に似る (一)、 (二)、(三完)	蚪龍爪	杉本達夫	季刊中国現代小説 6・7・8	蒼蒼社	1988年7・10 月 1989年1月
192.	張平	血の復習	血魂	小林栄	中国農村百景VI―「山西文 学」短篇小説集	銀河書房	1988年8月
193.	鄭惠泉	小さな店	小店	小林栄	中国農村百景VI―「山西文 学」短篇小説集	銀河書房	1988年8月
194.	田中禾	五月	五月	小林栄	中国農村百景VI―「山西文 学」短篇小説集	銀河書房	1988年8月
195.	李逸民	首をまわらせられ ない人々	彎不過脖子的 人	小林栄	中国農村百景IV―「山西文 学」短篇小説集	銀河書房	1988年8月
196.	張潔	翠玉 その一	祖母緑	福地桂子	長崎総合大学紀要 第29 巻第1号		1988年9月
197.	艾克拝爾・ 米吉提 (ア バル・メジツ)	筏	木筏	牧田英二	季刊中国現代小説 7	蒼蒼社	1988年10月
198.	残雪	枯れた浮雲	蒼老的浮雲	近藤直子	季刊中国現代小説 7	蒼蒼社	1988年10月
199.	従維熙	らくだひきの男	牽駱駝的人	田畑佐和子	季刊中国現代小説 7	蒼蒼社	1988年10月
200.	汪曾祺	安樂亭	安樂居	市川宏	季刊中国現代小説 7	蒼蒼社	1988年10月
201.	李銳	「厚土」より 偽婚	厚土―呂梁山 印象之三 假 婚	大石智良	季刊中国現代小説 7	蒼蒼社	1988年10月
202.	烏熱爾図 (ウ ルト)	愛	愛		中国少数民族文学 3 特集 東北・内モンゴル	島根大学中国 文学研究室	1988年10月
203.	烏熱爾図 (ウ ルト)	琥珀色の篝火	琥珀色的篝火	梶田理絵 他	中国少数民族文学 3 特集 東北・内モンゴル	島根大学中国 文学研究室	1988年10月
204.	関沫南	スオウとカエデ	紫花與紅葉	梶田理絵 他	中国少数民族文学 3 特集 東北・内モンゴル	島根大学中国 文学研究室	1988年10月
205.	鄭世峰	胸の中に押さえて いた言葉	壓在心底的話	梅津幸子	中国少数民族文学 3 特集 東北・内モンゴル	島根大学中国 文学研究室	1988年10月
206.	馬拉沁夫 (マ チンフ)	ある活き仏の話	活佛的故事	明本典子 他	中国少数民族文学 3 特集 東北・内モンゴル	島根大学中国 文学研究室	1988年10月
207.	馬拉沁夫 (マ チンフ)	大地	大地	岩崎ますみ 他	中国少数民族文学 3 特集 東北・内モンゴル	島根大学中国 文学研究室	1988年10月

208.	林元春	親戚どうし	親戚之間		中国少数民族文学 3 特集 東北・内モンゴル		島根大学中国 文学研究室	1988年10月
209.	馬中駿・賈 鴻源	街で流行りの赤い スカート	街上流行紅裙 子	瀬戸宏	長崎総合科学大学紀要 29 —2			1988年11月
210.	馮驥才	三寸金蓮(てんそく ものがたり)	三寸金蓮	納村公子			亜紀書房	1988年12月
211.	劉心武	ぼくはきみの友だ ちだ	我是你的朋友	石田稔・永沢 まこと			福武書店	1988年12月
212.	何立偉	水庫 (ダム)	水庫	井口晃	季刊中国現代小説 8		蒼蒼社	1989年1月
213.	徐曉鶴	院長と彼のきちが いたち	院長和他的瘋 子們	近藤直子	季刊中国現代小説 8		蒼蒼社	1989年1月
214.	辺玲玲	白ツツジ	白杜鵑	牧田英二	季刊中国現代小説 8		蒼蒼社	1989年1月
215.	李銳	「厚土」より 古老 峪	厚土—呂梁山 印象 古老峪	大石智良	季刊中国現代小説 8		蒼蒼社	1989年1月
216.	李銳	「厚土」より 水を 飲めえ!	喝水!	大石智良	季刊中国現代小説 8		蒼蒼社	1989年1月
217.	莫言	赤い高粱	紅高粱	井口晃	現代中国文学選集 6	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1989年4月
218.	王安憶	代役	B角	佐伯慶子	現代中国文学選集 7	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1989年5月
219.	王安憶	阿蹺略伝	阿蹺略傳	佐伯慶子	現代中国文学選集 7	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1989年5月
220.	王安憶	小鮑莊	小鮑莊	佐伯慶子	現代中国文学選集 7	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1989年5月
221.	阿城	中学教師	孩子王	立間祥介	現代中国文学選集 8	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1989年4月
222.	阿城	山の主	樹王	立間祥介	現代中国文学選集 8	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1989年4月

223.	阿城	チャンピオン	棋王	立間祥介	現代中国文学選集 8	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1989年4月
224.	扎西達娃 (ガシタリ)	世紀の招き	世紀之邀	牧田英二	季刊中国現代小説 9		蒼蒼社	1989年4月
225.	残雪	カッコウが鳴くあ の一瞬	布谷鳥叫的那 一瞬間	近藤直子	季刊中国現代小説 9		蒼蒼社	1989年4月
226.	朱曉平	金斗「桑樹坪での 出来事」より	桑樹坪の故 事・金斗	杉本達夫	季刊中国現代小説 9		蒼蒼社	1989年4月
227.	戴晴	ブーメラン	飛去来	田畑佐和子	季刊中国現代小説 9		蒼蒼社	1989年4月
228.	張平	村八分	血魂	井口晃	季刊中国現代小説 9		蒼蒼社	1989年4月
229.	航鷹	白衣の天使	白衣仙女	現代中国文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 5 六月の話題	南條純子	NGS	1989年6月
230.	譔容	回春条例	減去十歳	現代中国文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 5 六月の話題	南條純子	NGS	1989年6月
231.	陳吉蓉	シャンゼリゼ大通 りの家	香樹麗舎大街 的房子	現代中国文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 5 六月の話題	南條純子	NGS	1989年6月
232.	鉄凝	六月の話題	六月の話題	現代中国文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 5 六月の話題	南條純子	NGS	1989年6月
233.	苗月	男と男の間—新世 代の“三世同堂”	男人之間	中国現代文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 5 六月の話題	南條純子	NGS	1989年6月
234.	包川	素人のど自慢	唱	中国現代文学 翻訳研究会	80年代中国女流文学選 5 六月の話題	南條純子	NGS	1989年6月
235.	張潔	翠玉 その二	祖母縁	福地桂子	長崎総合大学紀要 第30 巻第1号			1989年6月
236.	残雪	わたしの、あの世界 でのこと一友へ	我在那个世界 里的事情	近藤直子	蒼老たる浮雲		河出書房新社	1989年7月
237.	残雪	天窓	天窓	近藤直子	蒼老たる浮雲		河出書房新社	1989年7月
238.	残雪	蒼老たる浮雲	蒼老的浮雲	近藤直子	蒼老たる浮雲		河出書房新社	1989年7月
239.	残雪	山の上の小屋	山上の小屋	近藤直子	蒼老たる浮雲		河出書房新社	1989年7月
240.	洪峰	湮滅	湮滅	岸陽子	季刊中国現代小説 10		蒼蒼社	1989年7月
241.	朱曉平	台地に麦実る時 「桑樹坪での出来 事」より	桑樹坪の故 事・桑原麦黄	杉本達夫	季刊中国現代小説 10		蒼蒼社	1989年7月

242.	張弦	未亡人	未亡人	千野拓政	季刊中国現代小説 10		蒼蒼社	1989年7月
243.	張平	婚事二題一五兒・花 花と茜茜	婚事二題	井口晃	季刊中国現代小説 10		蒼蒼社	1989年7月
244.	鮑昌	ラマの後裔	拉瑪的後裔	大石智良	季刊中国現代小説 10		蒼蒼社	1989年7月
245.	劉西鴻	チョコレートケー キ	黒森林	飯塚容	季刊中国現代小説 10		蒼蒼社	1989年7月
246.	蔣子龍	鍋釜交響楽	鍋碗瓢盆交響 曲	蘇琦	恒文社		恒文社	1989年8月
247.	張賢亮	緑化樹	緑化樹	野澤俊敬			響文社	1989年8月
248.	黄蓓佳	少女トゥーチャン	阿兔	石田稔	中国児童文学 8号	中国児童 文学研究 会		1989年8月
249.	全冀生	忘れられた国の住 人たち	被遺忘的国土 上の公民	中由美子	中国児童文学 8号	中国児童 文学研究 会		1989年8月
250.	烏熱爾図(ウ ルツ)	琥珀色のかがり火	琥珀色的篝火	川口孝夫	中国現代少数民族文学選	山川力	未来社	1989年9月
251.	烏熱爾図(ウ ルツ)	緑のじゅうたんの 川岸	緑茵茵的河岸	川口孝夫	中国現代少数民族文学選	山川力	未来社	1989年9月
252.	呉雪悩	牡豚の架けた喜び の橋	猪郎公架鵲橋	川口孝夫	中国現代少数民族文学選	山川力	未来社	1989年9月
253.	扎西達娃 (サシダリ)	酒売りの少女ナゼ ン	沈寂的正午	川口孝夫	中国現代少数民族文学選	山川力	未来社	1989年9月
254.	扎西達娃 (サシダリ)	江の向こう岸	江那邊	川口孝夫	中国現代少数民族文学選	山川力	未来社	1989年9月
255.	扎西達娃 (サシダリ)	ラサへの路	去拉薩的路上	川口孝夫	中国現代少数民族文学選	山川力	未来社	1989年9月
256.	石鋭	ロガンとナシャン	勒干和那霜	川口孝夫	中国現代少数民族文学選	山川力	未来社	1989年9月
257.	張長	最後の菩提樹	最後一棵菩提	川口孝夫	中国現代少数民族文学選	山川力	未来社	1989年9月
258.	李惠文	のろまの姉さん	肉嫂	川口孝夫	中国現代少数民族文学選	山川力	未来社	1989年9月
259.	王培公	WM・冬より—知識 青年の冬	WM〔第一章 冬〕	刈間文俊	火種 現代中国文芸アンソ ロジー	パーメ ー・ジェ レミー； ミンフォ	凱風社	1989年10月

						ード・ジョン		
260.	遇羅錦	汚れた心 [抄訳]	冬天的童話	白水紀子	火種 現代中国文芸アンソロジー	バーメー・ジェレミー； ミンフオード・ジョン	凱風社	1989年10月
261.	遇羅錦	新婚の夜 [抄訳]	冬天的童話	白水紀子	火種 現代中国文芸アンソロジー	バーメー・ジェレミー； ミンフオード・ジョン	凱風社	1989年10月
262.	江河	ここから始めよう	從這里開始	刈間文俊	火種 現代中国文芸アンソロジー	バーメー・ジェレミー； ミンフオード・ジョン	凱風社	1989年10月
263.	蘇明	消えぬ恐れ	可能發生在 2000年の悲劇	江上幸子	火種 現代中国文芸アンソロジー	バーメー・ジェレミー； ミンフオード・ジョン	凱風社	1989年10月
264.	戴厚英	浮浪者 何荊夫 [抄訳]	人啊、人！	白水紀子	火種 現代中国文芸アンソロジー	バーメー・ジェレミー； ミンフオード・ジョン	凱風社	1989年10月
265.	北島	幸福街十三番地	幸福大街十三号	刈間文俊	火種 現代中国文芸アンソロジー	バーメー・ジェレミー；	凱風社	1989年10月

						ミンフ ード・ジ ョン		
266.	劉心武	黒い壁	黒牆	白水紀子	火種 現代中国文芸アンソ ロジー	バーメ ー・ジェ レミー； ミンフオ ード・ジ ョン	凱風社	1989年10月
267.	張賢亮	馬の口から	男人的一半是 女人	白水紀子	火種 現代中国文芸アンソ ロジー	バーメ ー・ジェ レミー； ミンフオ ード・ジ ョン	凱風社	1989年10月
268.	史鉄生	陝北の思い出―「農 村下放物語」より	挿隊的故事	池上貞子	ユリイカ		青土社	1989年10月
269.	扎西達娃 (サシダワ)	ラサへの道にて	去拉薩的路上	池上貞子	ユリイカ		青土社	1989年10月
270.	残雪	広野にて	曠野里	近藤直子	ユリイカ		青土社	1989年10月
271.	莫言	秋の水	秋水	藤井省三	ユリイカ		青土社	1989年10月
272.	史鉄生	ある謎なぞのやさ しい当て方	一個謎語的幾 種簡單的猜法	井口晃	季刊中国現代小説 11		蒼蒼社	1989年10月
273.	残雪	天国の対話	天堂里的對話	近藤直子	季刊中国現代小説 11		蒼蒼社	1989年10月
274.	張賢亮	ジブシー	吉普賽人	高橋史雄	季刊中国現代小説 11		蒼蒼社	1989年10月
275.	鄭義	遠い村	遠村	大石智良	季刊中国現代小説 11・ 12・13		蒼蒼社	1989年10月 1990年1月・4 月
276.	蔣璞	何処から来たかは 聞かないで	不要問我哪里 来	久保田美年 子・松本みど り			白帝社	1989年10月
277.	蘇叔陽	故土	故土	馬場与志子			中国書店	1989年11月
278.	朱曉平	ひそやかに川は流 れる 「桑樹坪での	桑樹坪的故 事・漆水静静流	杉本達夫	季刊中国現代小説 12		蒼蒼社	1990年1月

		出来事」より						
279.	徐星	飢えたネズミ	飢餓的老鼠	飯塚容	季刊中国現代小説 12		蒼蒼社	1990年1月
280.	張平	妻を悼む	祭妻	井口晃	季刊中国現代小説 12		蒼蒼社	1990年1月
281.	鄭義	古井戸(抄)	老井	藤井省三	中国・危機の読み方		JICC 出版局	1990年1月
282.	鄭文光	太平洋人	太平洋人	池上正治	中国科学幻想小説事始		イザラ書房	1990年3月
283.	童恩正	雪山魔笛	雪山魔笛	池上正治	中国科学幻想小説事始		イザラ書房	1990年3月
284.	葉永烈・温 汴京	飛べ、冥王星へ	飛向冥王星の 人	池上正治	中国科学幻想小説事始		イザラ書房	1990年3月
285.	劉真	少しわかってきた ようだ	她好像明白了 一点点	田畑佐和子	季刊中国現代小説 13		蒼蒼社	1990年4月
286.	汪曾祺	小学同級	小学同学	市川宏	季刊中国現代小説 13		蒼蒼社	1990年4月
287.	劉心武	忘れ傘	黄傘	井口晃	季刊中国現代小説 13		蒼蒼社	1990年4月
288.	梁曉声	父	父親	杉本達夫	季刊中国現代小説 13		蒼蒼社	1990年4月
289.	扎西達娃 (ザシダガ)	夏の酸っぱい日々	夏天酸溜溜的 日子	牧田英二	季刊中国現代小説 14		蒼蒼社	1990年7月
290.	徐星	殉道者	殉道者	千野拓政	季刊中国現代小説 14		蒼蒼社	1990年7月
291.	王蒙	夢の中	我又夢見了你	井口晃	季刊中国現代小説 14		蒼蒼社	1990年7月
292.	皮皮	異邦	異邦	飯塚容	季刊中国現代小説 14		蒼蒼社	1990年7月
293.	陳丹燕	ある15歳の死	女中学生之死	中田美子	福武書店		福武書店	1990年8月
294.	陸文夫	美食家	美食家	松井博光	現代中国文学選集 9	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1990年9月
295.	陸文夫	畏	往後の日 子の ち圈套	松井博光	現代中国文学選集 9	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1990年9月
296.	陸文夫	塀	圍牆	松井博光	現代中国文学選集 9	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1990年9月
297.	劉心武	バスのアリア	公共汽車詠嘆 調	廣野行雄	現代中国文学選集 10	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1990年9月
298.	劉心武	五・一九クローズア ップ	五・一九長鏡頭	廣野行雄	現代中国文学選集 10	松井博 光・野間	徳間書店	1990年9月

						宏		
299.	劉心武	尋ね人	尋人	柴内秀司	現代中国文学選集 10	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1990年9月
300.	劉心武	王府井万華鏡	立体交叉橋	柴内秀司	現代中国文学選集 10	松井博 光・野間 宏	徳間書店	1990年9月
301.	曹文軒	弓	弓	渡邊晴夫	中国児童文学 9	中国児童 文学研究 会		1990年9月
302.	劉健屏	わたしが男だった ら		中由美子	中国児童文学 9	中国児童 文学研究 会		1990年9月
303.	葉永烈	ピョンピョン先生	蹦蹦跳先生	百田弥栄子	中国児童文学 9	中国児童 文学研究 会		1990年9月
304.	彭懿	みどり星はSOS	緑星 SOS	片桐園	中国児童文学 9	中国児童 文学研究 会		1990年9月
305.	王蒙	カナダの月	加拿大的月亮	杉本達夫	季刊中国現代小説 15		蒼蒼社	1990年10月
306.	韓春旭	天地人	天地人	大石智良	季刊中国現代小説 15		蒼蒼社	1990年10月
307.	残雪	素性の知れないふ たり	兩個身世不明 的人	近藤直子	季刊中国現代小説 15		蒼蒼社	1990年10月
308.	余華	十八歳の旅立ち	十八歳出門遠 行	飯塚容	季刊中国現代小説 15		蒼蒼社	1990年10月
309.	劉恒	シヨクリョウノヤ ローメ	狗日的糧食	市川宏	季刊中国現代小説 15		蒼蒼社	1990年10月
310.	阿城	専攻・炊煙・大風	專業・炊煙・大 風	井口晃	季刊中国現代小説 15		蒼蒼社	1990年10月
311.	鄭義	古井戸	老井	藤井省三	発見と冒険の中国文学 1 古井戸	藤井省 三・山口 守・宮尾 正樹	JICC 出版局	1990年10月
312.	莫言	赤い高粱 (続)	紅高粱家族	井口晃	現代中国文学選集 12	松井博	徳間書店	1990年10月

						光・野間 宏		
313.	莫言	秋の水	秋水	藤井省三	中国幻想小説傑作集		白水社	1990年11月
314.	阿城	リサイクル	周轉	田畑佐和子	季刊中国現代小説 16		蒼蒼社	1991年1月
315.	阿城	切り株	樹樁	田畑佐和子	季刊中国現代小説 16		蒼蒼社	1991年1月
316.	王蒙	海の夢	海的夢	杉本達夫	季刊中国現代小説 16		蒼蒼社	1991年1月
317.	何士光	旅立ち	離家	井口晃	季刊中国現代小説 16		蒼蒼社	1991年1月
318.	色波	円形の日	圓形的日子	牧田英二	季刊中国現代小説 16		蒼蒼社	1991年1月
319.	白樺	ああ、古い航路	啊！古老的航 道	竹内良雄	季刊中国現代小説 16		蒼蒼社	1991年1月
320.	池莉	生きていくのは (上) (下)	煩惱人生	市川宏	季刊中国現代小説 16・17		蒼蒼社	1991年1月 1991年4月
321.	蔡測海	死の黒洞をぬけて	穿過死亡的黒 洞	牧田英二	季刊中国現代小説 17		蒼蒼社	1991年4月
322.	蘇童	ユイ（楡）走る	狂奔	井口晃	季刊中国現代小説 17		蒼蒼社	1991年4月
323.	余華	四月三日の事件	四月三日事件	飯塚容	季刊中国現代小説 17		蒼蒼社	1991年4月
324.	劉恒	坂道	陡坡	市川宏	季刊中国現代小説 17		蒼蒼社	1991年4月
325.	莫言	金髪の子ちゃん	金髮嬰兒	藤井省三	発見と冒険の中国文学 2 中国の村から—莫言短篇集	藤井省 三・山口 守・宮尾 正樹	JICC 出版局	1991年4月
326.	莫言	わたしの「墓」	我的墓	長堀祐造	発見と冒険の中国文学 2 中国の村から—莫言短篇集	藤井省 三・山口 守・宮尾 正樹	JICC 出版局	1991年4月
327.	莫言	秋の水	秋水	藤井省三	発見と冒険の中国文学 2 中国の村から—莫言短篇集	藤井省 三・山口 守・宮尾 正樹	JICC 出版局	1991年4月
328.	莫言	白い犬とブランコ	白狗秋千架	藤井省三	発見と冒険の中国文学 2 中国の村から—莫言短篇集	藤井省 三・山口 守・宮尾 正樹	JICC 出版局	1991年4月
329.	莫言	古い銃	古槍	長堀祐造	発見と冒険の中国文学 2	藤井省	JICC 出版局	1991年4月

					中国の村から—莫言短篇集	三・山口 守・宮尾 正樹		
330.	莫言	片手	断手	長堀祐造	発見と冒険の中国文学 2 中国の村から—莫言短篇集	藤井省 三・山口 守・宮尾 正樹	JICC 出版局	1991 年 4 月
331.	残雪	阿梅、ある太陽の日の愁い	阿梅在一个太陽天里的愁思	近藤直子	カッコウが鳴くあの一瞬		河出書房新社	1991 年 6 月
332.	残雪	雄牛	公牛	近藤直子	カッコウが鳴くあの一瞬		河出書房新社	1991 年 6 月
333.	残雪	カッコウが鳴くあの一瞬	布谷鳥叫的那一瞬間	近藤直子	カッコウが鳴くあの一瞬		河出書房新社	1991 年 6 月
334.	残雪	天国の対話	天堂里的對話	近藤直子	カッコウが鳴くあの一瞬		河出書房新社	1991 年 6 月
335.	残雪	曠野の中	曠野里	近藤直子	カッコウが鳴くあの一瞬		河出書房新社	1991 年 6 月
336.	残雪	素性の知れないふたり	兩個身世不明的人	近藤直子	カッコウが鳴くあの一瞬		河出書房新社	1991 年 6 月
337.	残雪	毒蛇を飼う者	飼養毒蛇的小孩	近藤直子	カッコウが鳴くあの一瞬		河出書房新社	1991 年 6 月
338.	残雪	霧	霧	近藤直子	カッコウが鳴くあの一瞬		河出書房新社	1991 年 6 月
339.	残雪	刺繍靴および袁四ばあさんの煩惱	綉花靴及袁四老娘的煩惱	近藤直子	カッコウが鳴くあの一瞬		河出書房新社	1991 年 6 月
340.	鄭義	楓	楓	市川宏	季刊中国現代小説 18		蒼蒼社	1991 年 7 月
341.	柯雲路	夢、夢に非ず—他一篇	夢非夢冷房子	大石智良	季刊中国現代小説 18		蒼蒼社	1991 年 7 月
342.	王安憶	妙妙 (ミャオミャオ)	妙妙	井口晃	季刊中国現代小説 18		蒼蒼社	1991 年 7 月
343.	残雪	黄泥街 (一)、(二)、(三)	黄泥街	近藤直子	季刊中国現代小説 18		蒼蒼社	1991 年 7 月
344.	扎西達娃 (サシダワ)	星のない夜	没有星光的夜	牧田英二	発見と冒険の中国文学 8 風馬の輝き—新しいチベット文学	藤井省 三・山口 守・宮尾 正樹	JICC 出版局	1991 年 8 月
345.	扎西達娃 (サシダワ)	古い館	古宅	牧田英二	発見と冒険の中国文学 8 風馬の輝き—新しいチベット文学	藤井省 三・山口	JICC 出版局	1991 年 8 月

					ト文学	守・宮尾 正樹		
346.	扎西達娃 (ザシダリ)	世紀の招き	世紀之邀	牧田英二	発見と冒険の中国文学 8 風馬の輝き—新しいチベット文学	藤井省 三・山口 守・宮尾 正樹	JICC 出版局	1991 年 8 月
347.	扎西達娃 (ザシダリ)	ラサへの道	去拉薩的路上	牧田英二	発見と冒険の中国文学 8 風馬の輝き—新しいチベット文学	藤井省 三・山口 守・宮尾 正樹	JICC 出版局	1991 年 8 月
348.	扎西達娃 (ザシダリ)	風馬の耀き	風馬之耀	牧田英二	発見と冒険の中国文学 8 風馬の輝き—新しいチベット文学	藤井省 三・山口 守・宮尾 正樹	JICC 出版局	1991 年 8 月
349.	扎西達娃 (ザシダリ)	巡礼	朝佛	牧田英二	発見と冒険の中国文学 8 風馬の輝き—新しいチベット文学	藤井省 三・山口 守・宮尾 正樹	JICC 出版局	1991 年 8 月
350.	扎西達娃 (ザシダリ)	チベット、皮紐の結び目につながれた魂	系在皮繩扣上的魂	牧田英二	発見と冒険の中国文学 8 風馬の輝き—新しいチベット文学	藤井省 三・山口 守・宮尾 正樹	JICC 出版局	1991 年 8 月
351.	色波	円形の日	圓形的日子	牧田英二	発見と冒険の中国文学 8 風馬の輝き—新しいチベット文学	藤井省 三・山口 守・宮尾 正樹	JICC 出版局	1991 年 8 月
352.	色波	ここから船に乗る	在這里上船	牧田英二	発見と冒険の中国文学 8 風馬の輝き—新しいチベット文学	藤井省 三・山口 守・宮尾 正樹	JICC 出版局	1991 年 8 月
353.	色波	幻鳴	幻鳴	牧田英二	発見と冒険の中国文学 8 風馬の輝き—新しいチベット文学	藤井省 三・山口 守・宮尾 正樹	JICC 出版局	1991 年 8 月
354.	色波	竹笛、啜り泣き、そ	竹笛、啜泣和夢	牧田英二	発見と冒険の中国文学 8	藤井省	JICC 出版局	1991 年 8 月

		して夢			風馬の輝き—新しいチベット文学	三・山口守・宮尾正樹		
355.	刘宾雁	第二種の忠誠	第二种忠诚	陳逸雄	第二種の忠誠		学生社	1991年8月
356.	刘宾雁	人妖の間	人妖之间	陳逸雄	第二種の忠誠		学生社	1991年8月
357.	刘宾雁	ある人とその影	一个人和他的影子	陳逸雄	第二種の忠誠		学生社	1991年8月
358.	残雪	汚水に浮かんだ石鹸の泡	汚水上的肥皂泡	鷺巣益美	夏天 創刊準備号		「夏天」の会	1991年9月
359.	于強	李海天の書法	翰墨情縁	柯森耀			情報企画出版	1991年10月
360.	劉紹棠	青藤横町ものがたり	青藤巷挿曲	杉本達夫	季刊中国現代小説 19		蒼蒼社	1991年10月
361.	賈平凹	王滿堂一過ぎ去りし日の物語 その一	王滿堂一流逝的故事之一	岸陽子	季刊中国現代小説 19		蒼蒼社	1991年10月
362.	韓少功	壊死する町	空城	井口晃	季刊中国現代小説 19		蒼蒼社	1991年10月
363.	張大年	西三旗	西三旗	牧田英二	季刊中国現代小説 19		蒼蒼社	1991年10月
364.	尹明	飢餓	飢餓	大西陽子	発見と冒険の中国文学 7 紙の上の月—中国の地下文学	宮尾正樹	JICC 出版局	1991年10月
365.	万之	雪—遠い風景	遠方—雪	阪本ちづみ	発見と冒険の中国文学 7 紙の上の月—中国の地下文学	宮尾正樹	JICC 出版局	1991年10月
366.	葉曙明	悲しき六月	如泣的六月	宮尾正樹	発見と冒険の中国文学 7 紙の上の月—中国の地下文学	宮尾正樹	JICC 出版局	1991年10月
367.	劉索拉	多国籍アパート	人堆人	西野由希子	発見と冒険の中国文学 7 紙の上の月—中国の地下文学	宮尾正樹	JICC 出版局	1991年10月
368.	史鉄生	僕たちの夏	没有太陽的角落	栗山千香子	発見と冒険の中国文学 7 紙の上の月—中国の地下文学	宮尾正樹	JICC 出版局	1991年10月
369.	蘇童	妻妾成群 紅夢	妻妾成群	千野拓政	季刊中国現代小説 20		蒼蒼社	1992年1月
370.	馬原	ヒマラヤ古歌	喜馬拉雅古歌	飯塚容	季刊中国現代小説 20		蒼蒼社	1992年1月
371.	李曉	大洪山	大洪山	井口晃	季刊中国現代小説 20		蒼蒼社	1992年1月

372.	王蒙	硬いお粥	堅硬的稀粥	菅谷音	文學界 46(3)		文藝春秋	1992年3月
373.	残雪	帰り道	歸途	近藤直子	文學界 46(3)		文藝春秋	1992年3月
374.	葉蔚林	五人の娘と一本の縄	五個女子和一根繩子	林久之	中国怪談集	中野美代子、武田雅哉	河出書房新社	1992年3月
375.	李曉	天の橋	天橋	近藤直子	文學界 1992年3月号		文藝春秋	1992年3月
376.	韓少功	雷禍	雷禍	井口晃	季刊中国現代小説 21		蒼蒼社	1992年4月
377.	梁曉声	母	母親	杉本達夫	季刊中国現代小説 21		蒼蒼社	1992年4月
378.	阿城	松茸	磨姑	牧田英二	季刊中国現代小説 21		蒼蒼社	1992年4月
379.	高旭帆	血族—ジンギスカンの末裔	古老的謀殺	和田武司	季刊中国現代小説 21		蒼蒼社	1992年4月
380.	張承志	紅衛兵の時代	紅衛兵的时代	小島晋治・田所竹彦	岩波新書		岩波書店	1992年4月
381.	莫言	蠅・前歯	蒼蠅・門牙	藤井省三	中国ユーモア文学傑作選 笑いの共和国		白水社	1992年6月
382.	葉文福	將軍、それはなりませぬ	將軍、不能這樣做	長堀祐造	中国ユーモア文学傑作選 笑いの共和国		白水社	1992年6月
383.	楊絳	林ばあさん	林奶奶	桜庭ゆみ子	中国ユーモア文学傑作選 笑いの共和国		白水社	1992年6月
384.	楊絳	林ばあさん	林奶奶	桜庭ゆみ子	ユリイカ		青土社	1992年6月
385.	馮驥才	陰陽八卦	陰陽八卦	納村公子			亜紀書房	1992年6月
386.	茹志鵬	ときを往く	跟上、跟上	井口晃	季刊中国現代小説 22		蒼蒼社	1992年7月
387.	池莉	愛なんて	不談愛情	市川宏	季刊中国現代小説 22		蒼蒼社	1992年7月
388.	馮驥才	早春の日に	在早春的日子里	竹内良雄	季刊中国現代小説 22		蒼蒼社	1992年7月
389.	劉震雲	鶏の毛いっぱい	一地鷄毛	井口晃	季刊中国現代小説 22		蒼蒼社	1992年7月
390.	烏熱爾図(ウルト)	雪	雪	牧田英二	季刊中国現代小説 23		蒼蒼社	1992年10月
391.	王兆軍	落鳳坡の人々	落鳳坡人物	田畑佐和子	季刊中国現代小説 23		蒼蒼社	1992年10月
392.	張承志	晩潮	晩潮	近藤直子	季刊中国現代小説 23		蒼蒼社	1992年10月
393.	范小青	酔余	酒話	井口晃	季刊中国現代小説 23		蒼蒼社	1992年10月
394.	王蒙	応報 [むくい]	活動變人形	林芳			白帝社	1992年10月
395.	鉄凝	四季の歌	四季歌	宇野木洋	グリオ Vol・4			1992年10月

396.	莫言	透明な人参	透明的紅蘿蔔	藤井省三	花束を抱く女		JICC 出版局	1992 年 10 月
397.	莫言	花束を抱く女	懷抱鮮花的女人	藤井省三	花束を抱く女		JICC 出版局	1992 年 10 月
398.	楊絳	風呂	洗澡	中島みどり			みすず書房	1992 年 10 月
399.	劉心武	長い髪の女	她有一頭披肩髮	石黒やすえ 他 5 名共訳	中国現代短編小説		中国現代文学 北浜読書会	1992 年 10 月
400.	王安憶	終着駅・上海	本次列車終点	石黒やすえ・ ほか 5 名共訳	中国現代短編小説選		中国現代文学 北浜読書会	1992 年 10 月
401.	残雪	美しい南国の夏の日	美丽南方之夏日	近藤直子	中央公論 文芸特集 1992 年 冬季号		中央公論社	1992 年 12 月
402.	残雪	黄菊の花によせる 遐かな想い	關於黄菊花的 遐想	近藤直子	中央公論 文芸特集 1992 年 冬季号		中央公論社	1992 年 12 月
403.	陸文夫	ワントン屋始末記	小販世家	釜屋修	消えた万元戸		日本アジア文 学協会・めこん 社	1992 年 12 月
404.	陸文夫	消えた万元戸	万元戸	釜屋修	消えた万元戸		日本アジア文 学協会・めこん 社	1992 年 12 月
405.	陸文夫	路地の奥深く	小巷深處	釜屋修	消えた万元戸		日本アジア文 学協会・めこん 社	1992 年 12 月
406.	陸文夫	不平者	不平者	釜屋修	消えた万元戸		日本アジア文 学協会・めこん 社	1992 年 12 月
407.	残雪	逢引	约会	近藤直子	季刊中国現代小説 24		蒼蒼社	1993 年 1 月
408.	韓少功	靴	鞋癖	井口晃	季刊中国現代小説 24		蒼蒼社	1993 年 1 月
409.	少鴻	黒い吠え鹿	烏麀	井口晃	季刊中国現代小説 24		蒼蒼社	1993 年 1 月
410.	王蒙	逍遙遊 (上) (下)	逍遙遊	市川宏	季刊中国現代小説 24		蒼蒼社	1993 年 1 月 1993 年 4 月
411.	劉心武	北京下町物語	鐘鼓楼	蘇琦			恒文社	1993 年 2 月
412.	張賢亮	土牢情話	土牢情話	大里浩秋	土牢情話		日本アジア文 学協会・めこん 社	1993 年 3 月
413.	張賢亮	靈魂と肉体	靈與肉	大里浩秋	土牢情話		日本アジア文	1993 年 3 月

							学協会・めこん社	
414.	張賢亮	邢じいと犬	邢老漢和狗的故事	大里浩秋	土牢情話		日本アジア文学協会・めこん社	1993年3月
415.	趙本夫	小説三題	小説三題	井口晃	季刊中国現代小説 25		蒼蒼社	1993年4月
416.	陳建功	轆轤把(ルルバ)胡同9号	轆轤把胡同九号一談天說地之三	岸陽子	新しい中国文学 1 棺を蓋いて		早稲田大学出版部	1993年4月
417.	陳建功	鳳凰の目	丹鳳眼一談天說地之二	岸陽子	新しい中国文学 1 棺を蓋いて		早稲田大学出版部	1993年4月
418.	陳建功	棺を蓋いて	蓋棺一談天說地之一	岸陽子	新しい中国文学 1 棺を蓋いて		早稲田大学出版部	1993年4月
419.	陳建功	飛び去ったスカーフ	飄逝の花頭巾	斉藤泰治	新しい中国文学 1 棺を蓋いて		早稲田大学出版部	1993年4月
420.	李唯	青海から来た男	遠方来的青海客	田畑佐和子	季刊中国現代小説 25		蒼蒼社	1993年4月
421.	趙本夫	小説三題	小説三題	井口晃	季刊中国現代小説 25		蒼蒼社	1993年4月
422.	烏熱爾図(ウルト)	琥珀色のかがり火	琥珀色的篝火	牧田英二	新しい中国文学 2 琥珀色のかがり火		早稲田大学出版部	1993年5月
423.	烏熱爾図(ウルト)	朝まだきに火がたちをぼる	清晨升起一堆火	牧田英二	新しい中国文学 2 琥珀色のかがり火		早稲田大学出版部	1993年5月
424.	烏熱爾図(ウルト)	胎	胎	牧田英二	新しい中国文学 2 琥珀色のかがり火		早稲田大学出版部	1993年5月
425.	烏熱爾図(ウルト)	老人と鹿	老人和鹿	牧田英二	新しい中国文学 2 琥珀色のかがり火		早稲田大学出版部	1993年5月
426.	烏熱爾図(ウルト)	七叉角の雄鹿	七叉犄角的公鹿	牧田英二	新しい中国文学 2 琥珀色のかがり火		早稲田大学出版部	1993年5月
427.	烏熱爾図(ウルト)	露のしたたる朝まだき	綴着露珠的清晨	牧田英二	新しい中国文学 2 琥珀色のかがり火		早稲田大学出版部	1993年5月
428.	烏熱爾図(ウルト)	クーポ川を越える	越過克波河	牧田英二	新しい中国文学 2 琥珀色のかがり火		早稲田大学出版部	1993年5月
429.	烏熱爾図(ウルト)	静かに待つ	静静的等待	牧田英二	新しい中国文学 2 琥珀色のかがり火		早稲田大学出版部	1993年5月

430.	烏熱爾図(カ ポルト)	マーロよ、マーロ	瑪魯呀、瑪魯	牧田英二	新しい中国文学 2 琥珀色 のかがり火		早稲田大学出 版部	1993年5月
431.	烏熱爾図(カ ポルト)	ウオクとシンピー ク	沃克和泌利格	牧田英二	新しい中国文学 2 琥珀色 のかがり火		早稲田大学出 版部	1993年5月
432.	汪曾祺	橋辺小説三篇	橋邊小説三篇	市川宏	季刊中国現代小説 26		蒼蒼社	1993年7月
433.	韓東	同級生—モーモと リン・ホン	同窗共読	井口晃	季刊中国現代小説 26		蒼蒼社	1993年7月
434.	范小青	楊湾港を船出して	船出楊湾港	井口晃	季刊中国現代小説 26		蒼蒼社	1993年7月
435.	余華	世事は煙の如し (上)、(下)	世事如煙	飯塚容	季刊中国現代小説 26		蒼蒼社	1993年7月 1993年10月
436.	烏熱爾図	どこに署名するん だ	在哪儿簽上我 的名	牧田英二	季刊中国現代小説 27		蒼蒼社	1993年10月
437.	雷建政	孤城	孤城	杉本達夫	季刊中国現代小説 27		蒼蒼社	1993年10月
438.	李佩甫	「豌豆偷樹」—豌豆 の蔓が樹にからむ	豌豆偷樹	井口晃	季刊中国現代小説 27		蒼蒼社	1993年10月
439.	王蒙	刻舟求劍	刻舟求劍	中山文	火鍋子 10号		翠書房	1993年10月
440.	王蒙	朝三暮四	朝三暮四	中山文	火鍋子 11号		翠書房	1993年12月
441.	史鉄生	老人	老人	井口晃	季刊中国現代小説 28		蒼蒼社	1994年1月
442.	馮驥才	背たか女とちび亭 主	高女人和她的 矮丈夫	井口晃	季刊中国現代小説 28		蒼蒼社	1994年1月
443.	烏熱爾図	わしを川に流して くれ	你讓我順水漂 流	牧田英二	季刊中国現代小説 28		蒼蒼社	1994年1月
444.	劉醒竜	夕べの勤行	暮時課誦	和田武司	季刊中国現代小説 28		蒼蒼社	1994年1月
445.	王蒙	守株待兔	守株待兔	中山文	火鍋子 12号		翠書房	1994年2月
446.	高陽	西太后 第1巻 熱河の対決 第2巻 覇者と敗者 第3巻 皇帝の恋 第4巻 深宮の毒 第5巻 清宮の光と 影 第6巻 戦火と屈辱 第7巻 母子君臣 第8巻 義和団の嵐	慈禧全傳	鈴木隆康・永 沢道雄			朝日ソノラマ	1994年2月 1994年2月 1994年4月 1994年6月 1994年8月 1994年10月 1994年12月 1995年2月 1995年4月 1995年6月

		第9巻 怨み尽きず 第10巻 新政への道 第11巻 紫禁城の落日						1995年8月
447.	張承志	緑夜	緑夜	岸陽子	新しい中国文学 4 黒駿馬		早稲田大学出版部	1994年2月
448.	張承志	黒駿馬	黒駿馬	岸陽子	新しい中国文学 4 黒駿馬		早稲田大学出版部	1994年2月
449.	張承志	三叉戈壁	三叉戈壁	岸陽子	新しい中国文学 4 黒駿馬		早稲田大学出版部	1994年2月
450.	褚同慶	新・水滸伝—「水滸新伝」より 第1巻、第2巻、第3巻、第4巻、第5巻	水滸新傳	今戸栄一	歴史外伝シリーズ		光荣	1994年3月 1994年10月 1995年3月 1995年8月 1996年3月
451.	王蒙	高山流水	高山流水	中山文	火鍋子 13号		翠書房	1994年4月
452.	池莉	初恋	勇者如斯	田畑佐和子	新しい中国文学 5 初恋		早稲田大学出版部	1994年4月
453.	池莉	太陽誕生	太陽出世	田畑佐和子	新しい中国文学 5 初恋		早稲田大学出版部	1994年4月
454.	問彬	母を悼む	心祭	田畑佐和子	季刊中国現代小説 29		蒼蒼社	1994年4月
455.	葉兆言	桃花源記	桃花源記	飯塚容	季刊中国現代小説 29		蒼蒼社	1994年4月
456.	李国文	孤独	孤独	杉本達夫	季刊中国現代小説 29		蒼蒼社	1994年4月
457.	陸文夫	しあわせ—『市井の人』の二十二	享福	井口晃	季刊中国現代小説 29		蒼蒼社	1994年4月
458.	朱曉平	縛られた村	桑樹坪紀事	杉本達夫	新しい中国文学 6 縛られた村		早稲田大学出版部	1994年5月
459.	王蒙	魚目混珠	魚目混珠	中山文	火鍋子 14号		翠書房	1994年6月
460.	謔容	マイナス十歳!	減去十歳	西野由希子	婦人之友7月号		婦人之友社	1994年6月
461.	于強	異国未了情—夫よ日本の何処に	異国未了情	中村竜夫・上村ゆう美		木下博民	日中出版	1994年7月
462.	王蒙	好漢イスマール—系列小説<イリに	好漢子依斯麻爾 在伊犁之	市川宏	季刊中国現代小説 30		蒼蒼社	1994年7月

		て>その三	三					
463.	史鉄生	毒藥	毒藥	千野拓政	季刊中国現代小説 30		蒼蒼社	1994年7月
464.	王祥夫	鳥の巢	鳥巢	井口晃	季刊中国現代小説 30		蒼蒼社	1994年7月
465.	魯羊	身体のなかのチョコレート	身体里的巧克力	井口晃	季刊中国現代小説 30		蒼蒼社	1994年7月
466.	王蒙	縁木求魚	縁木求魚	中山文	火鍋子 15号		翠書房	1994年8月
467.	史鉄生	車椅子の神様	車神	山口守	遙かなる大地		宝島社	1994年8月
468.	張弦	運命の赤い糸	掙不断的紅絲線	西野由希子	婦人之友 8・9月号		婦人之友社	1994年6月、7月
469.	高曉声	李順大の家造り	李順大造屋	天野節	渡し舟—現代中国の農民文学		図書出版	1994年9月
470.	高曉声	陳奐生—油繩売り	陳奐生上城	天野節	渡し舟—現代中国の農民文学		図書出版	1994年9月
471.	高曉声	陳奐生—転業	陳奐生轉業	天野節	渡し舟—現代中国の農民文学		図書出版	1994年9月
472.	高曉声	陳奐生—独立	陳奐生包産	天野節	渡し舟—現代中国の農民文学		図書出版	1994年9月
473.	高曉声	陳奐生—潰百姓	“漏斗戸”主	天野節	渡し舟—現代中国の農民文学		図書出版	1994年9月
474.	高曉声	瑣事	極其簡單的故事	天野節	渡し舟—現代中国の農民文学		図書出版	1994年9月
475.	高曉声	絆	系心帶	天野節	渡し舟—現代中国の農民文学		図書出版	1994年9月
476.	高曉声	真珠	揀珍珠	天野節	渡し舟—現代中国の農民文学		図書出版	1994年9月
477.	高曉声	水は東に流れる	水東流	天野節	渡し舟—現代中国の農民文学		図書出版	1994年9月
478.	宗璞	面影	朱顔長好	西野由希子	婦人之友 10月号		婦人之友社	1994年9月
479.	曹乃謙	甕の肩には銅のひしゃく、鉄のひしゃく	温家窑風景二題	井口晃	季刊中国現代小説 31		蒼蒼社	1994年10月
480.	張冀雪	息子	牧羊人全根老爹和他的宝贝兒子	杉本達夫	季刊中国現代小説 31		蒼蒼社	1994年10月

481.	陳染	虚ろな人、誕生	空心人誕生	飯塚容	季刊中国現代小説 31		蒼蒼社	1994年10月
482.	方方	やがて哀しき	一唱三嘆	渡辺新一	季刊中国現代小説 31		蒼蒼社	1994年10月
483.	劉恒	牛を飼いたい!	種牛	西野由希子	婦人之友 11・12月号		婦人之友社	1994年10月、 11月
484.	王蒙	焦頭爛額	焦頭爛額	中山文	火鍋子 17号		翠書房	1994年12月
485.	劉西鴻	あなたは私を変え られない	你不可改變我	西野由希子	婦人之友 1月号、2月号		婦人之友社	1994年12月 1995年1月
486.	北島	波動	波動	是永駿	中国語 420号~422号	中国語友 の会	内山書店	1995年1月、2 月、3月
487.	張宇	ワーワユイ	啊魚	田畑佐和子	季刊中国現代小説 32		蒼蒼社	1995年1月
488.	梁曉声	黒いボタン	黒紐扣	杉本達夫	季刊中国現代小説 32		蒼蒼社	1995年1月
489.	韓少功	昨日の友よ	昨天再会	井口晃	季刊中国現代小説 32		蒼蒼社	1995年1月
490.	陳丹燕	庭園	花園	和田武司	季刊中国現代小説 32		蒼蒼社	1995年1月
491.	王蒙	三人行、必有吾師	三人行、必有吾師	中山文	火鍋子 18号		翠書房	1995年2月
492.	王朔	北京無頼一純情篇	玩主	石川郁	北京無頼		学習研究社	1995年3月
493.	王朔	北京無頼一遊撃篇	一点正經没有	石川郁	北京無頼		学習研究社	1995年3月
494.	王蒙	十室之内、必有忠信	十室之内、必有忠信	中山文	火鍋子 19号		翠書房	1995年4月
495.	方方	紙婚の年	紙婚年	西野由希子	婦人之友 5月号		婦人之友社	1995年4月
496.	孫甘露	請女人猜謎	女の解く謎	飯塚容	季刊中国現代小説 33		蒼蒼社	1995年4月
497.	蔣子龍	浄火	浄火	竹内良雄	季刊中国現代小説 33		蒼蒼社	1995年4月
498.	梁曉声	黒紐扣	黒いボタン	杉本達夫	季刊中国現代小説 33		蒼蒼社	1995年4月
499.	丹珠昂奔	白雪山紅雪山	白雪山紅雪山 (上)、(下)	牧田英二	季刊中国現代小説 33		蒼蒼社	1995年4月 1995年7月
500.	汪曾祺	尻尾	尾巴	渡邊晴夫	二十一世紀文学 Vol. 1		吟遊社	1995年5月
501.	航鷹	絨毯	地毯	渡邊晴夫	二十一世紀文学 Vol. 1		吟遊社	1995年5月
502.	吳若増	ネックレス	項鍊	渡邊晴夫	二十一世紀文学 Vol. 1		吟遊社	1995年5月
503.	王蒙	座井觀天	坐井觀天	中山文	火鍋子 20号		翠書房	1995年6月
504.	陳村	一天	一日	飯塚容	季刊中国現代小説 34		蒼蒼社	1995年7月
505.	陳建功	放生一よもやま 話・その六	放生一談天説 地之六	杉本達夫	季刊中国現代小説 34		蒼蒼社	1995年7月
506.	王蒙	狐假虎威	狐假虎威	中山文	火鍋子 21号		翠書房	1995年8月

507.	鉄凝	意外	意外	池沢実芳	第八曜日を下さい		近江文芸社	1995年8月
508.	鉄凝	妊婦と牛	孕婦和牛	池沢実芳	第八曜日を下さい		近江文芸社	1995年8月
509.	鉄凝	カマドの物語	竈火的故事	池沢実芳	第八曜日を下さい		近江文芸社	1995年8月
510.	鉄凝	彼が笑った	色變	池沢実芳	第八曜日を下さい		近江文芸社	1995年8月
511.	鉄凝	第八曜日を下さい	遭遇礼拝八	池沢実芳	第八曜日を下さい		近江文芸社	1995年8月
512.	鉄凝	草の指輪	草戒指	池沢実芳	第八曜日を下さい		近江文芸社	1995年8月
513.	鉄凝	綿花の山に寝転んで	村路带我回家	池沢実芳	第八曜日を下さい		近江文芸社	1995年8月
514.	鉄凝	おお、香雪	哦、香雪	池沢実芳	第八曜日を下さい		近江文芸社	1995年8月
515.	鉄凝	胭脂湖(上)、(下)	胭脂湖	片山義郎	上海經濟交流 41号、42号		大阪府日中經濟交流協会	1995年9月、12月
516.	邱華棟	ファッション・モデル	時裝人	金子わこ	季刊中国現代小説 35		蒼蒼社	1995年10月
517.	方方	風景	風景	渡辺新一	季刊中国現代小説 35		蒼蒼社	1995年10月
518.	残雪	汚水の上の石鹸の泡	汚水上的肥皂泡	近藤直子	廊下に植えた林檎の木		河出書房新社	1995年11月
519.	残雪	黄菊の花によせる 退かな想い	關於黄菊花 的遐想	近藤直子	廊下に植えた林檎の木		河出書房新社	1995年11月
520.	残雪	逢引	约会	近藤直子	廊下に植えた林檎の木		河出書房新社	1995年11月
521.	汪曾祺	七里茶坊	七里茶坊	市川宏	季刊中国現代小説 36号		蒼蒼社	1996年2月
522.	汪曾祺	受戒	受戒	徳間佳信	県立浦和西高校研究集録 18集			1996年3月
523.	鉄凝	妊婦と牛	孕婦和牛	片山義郎	上海經濟交流 43号		大阪府日中經濟交流協会	1996年3月
524.	方方	風景	風景	渡辺新一	季刊中国現代小説 35		蒼蒼社	1996年3月
525.	張涛之	中華人民共和国演義 1 毛沢東の登場 2 朝鮮戦争 3 肅清の始まり 4 文化大革命 5 林彪の挫折 6 毛沢東時代の終焉	中華人民共和国演義	伏見茂・陳榮芳		海江田万里	冒險社	1996年5月 1996年6月 1996年10月 1996年10月 1996年12月 1997年2月

526.	鉄凝	二日酔いの正月	酔年	片山義郎	上海経済交流 44号		大阪府日中経済交流協会	1996年6月
527.	陳村	死	死	飯塚容	季刊中国現代小説 36		蒼蒼社	1996年6月
528.	李鷺鵬	看不見的牆	見えない壁	田畑佐和子	季刊中国現代小説 36		蒼蒼社	1996年6月
529.	馮驥才	他在人間	あの人は生きている	竹内良雄	季刊中国現代小説 36		蒼蒼社	1996年6月
530.	鉄凝	六月の話題(上)、(下)	六月的話題	片山義郎	上海経済交流 45号		大阪府日中経済交流協会	1996年9月、12月
531.	張煒	挖掘	挖掘	小林ニ男	NHK ラジオ中国語講座	NHK	日本放送出版協会	1996年10、11
532.	陳忠実	白鹿原	白鹿原	林芳	中央公論社		中央公論社	1996年10月
533.	莫言	酒国一特捜検事丁 鉤兇の冒険	酒国	藤井省三			岩波書店	1996年10月
534.	史鉄生	我與地壇	わたしと地壇	千野拓政	季刊中国現代小説 37		蒼蒼社	1996年10月
535.	蘇童	西窗	西窓	堀内利恵	季刊中国現代小説 37		蒼蒼社	1996年10月
536.	莫言	女郎遊び	神嫖	藤井省三	世界文学のフロンティア 4 ノスタルジア	今福龍 太、沼野 充義、四 方田犬彦	岩波書店	1996年11月
537.	格非	迷舟	迷舟	桑島道夫	文學界 1997年1号		文藝春秋	1997年1月
538.	晋川	マーケットの恋の 物語	女老板和小警察	武信彰	NHK ラジオ中国語講座	NHK	日本放送出版協会	1997年1、2、3
539.	陳染	空的窓	誰もいない窓	鷺巣益美	季刊中国現代小説 38		蒼蒼社	1997年1月
540.	魯羊	銀色老虎	銀色の虎	金子わこ	季刊中国現代小説 38		蒼蒼社	1997年1月
541.	柯雲路	空を駆ける人― 気功師「堯白」の奇跡	大氣功師	加藤正敏			緑書房	1997年2月
542.	格非	オルガン	風琴	関根謙	現代中国の小説―時間を渡 る鳥たち	村松 暎	新潮社	1997年2月
543.	格非	愚か者の詩	傻瓜的詩篇	関根謙	現代中国の小説―時間を渡 る鳥たち	村松 暎	新潮社	1997年2月
544.	格非	時間を渡る鳥たち	褐色鳥群	関根謙	現代中国の小説―時間を渡 る鳥たち	村松 暎	新潮社	1997年2月

545.	格非	夜郎にて	夜郎之行	関根謙	現代中国の小説—時間を渡る鳥たち	村松 暎	新潮社	1997年2月
546.	劉索拉	君にはほかの選択はない	你別無選擇	新谷雅樹	現代中国の小説—君にはほかの選択はない	村松 暎	新潮社	1997年2月
547.	劉索拉	スカイ・オブ・ブルーシー・オブ・グリーン	藍天綠海	新谷雅樹	現代中国の小説—君にはほかの選択はない	村松 暎	新潮社	1997年2月
548.	劉索拉	よけいものの歌	多余的な故事	新谷雅樹	現代中国の小説—君にはほかの選択はない	村松 暎	新潮社	1997年2月
549.	王蒙	靈氣	靈氣	中山文	火鍋子 30号	谷川毅	翠書房	1997年3月
550.	梁曉声	チョウザメ狩	捕鯉	渋谷誉一郎	現代中国の小説—秋の葬送	村松暎	新潮社	1997年3月
551.	梁曉声	秋の葬送	秋之殯	渋谷誉一郎	現代中国の小説—秋の葬送	村松暎	新潮社	1997年3月
552.	梁曉声	滅頂	灭頂	渋谷誉一郎	現代中国の小説—秋の葬送	村松暎	新潮社	1997年3月
553.	祝子平	濡れた煙草	一把烟丝	片山義郎	上海經濟交流 47号		大阪府日中經濟交流協會	1997年6月
554.	張宇	死魚・狄家の父子・裏切り	死魚・狄氏父子・叛徒	田畑佐和子	季刊中国現代小説 40		蒼蒼社	1997年7月
555.	戴厚英	老女	老女人	大石智良	季刊中国現代小説 40		蒼蒼社	1997年7月
556.	王蒙	孝子	孝子	中山文	火鍋子 32号	谷川毅	翠書房	1997年7月
557.	莫言	良医	良医	藤井省三	群像 52(7)		講談社	1997年7月
558.	莫言	お下げ髪	辮髪	藤井省三	群像 52(7)		講談社	1997年7月
559.	王蒙	奇才譜	奇才譜	中山文	火鍋子 33号	谷川毅	翠書房	1997年9月
560.	残雪	突圍表演	突圍表演	近藤直子			文藝春秋	1997年9月
561.	述平	これでいいんだ	我看這樣挺好	鷲巢益美	季刊中国現代小説 41		蒼蒼社	1997年10月
562.	汪曾祺	猫いじめ	虐猫	市川宏	季刊中国現代小説 41		蒼蒼社	1997年10月
563.	史鉄生	ねむのき	合歡樹	久米井敦子	季刊中国現代小説 41		蒼蒼社	1997年10月
564.	蘇童	悲しみのステップ	傷心的舞蹈	堀内利恵	季刊中国現代小説 41		蒼蒼社	1997年10月
565.	王蒙	馬小六	馬小六	中山文	火鍋子 34号	谷川毅	翠書房	1997年11月
566.	張承志	北方の河	北方的河	磯部祐子			露満堂	1997年11月
567.	王蒙	良縁	良縁	中山文	火鍋子 35号	谷川毅	翠書房	1998年1月
568.	程乃珊	ふしぎな急須	供春變色壺	渡辺新一	季刊中国現代小説 42		蒼蒼社	1998年1月
569.	辺玲玲	トプターリ	徳布達理	牧田英二	季刊中国現代小説 42		蒼蒼社	1998年1月
570.	程玮	今夜、今夜	今夜だけ	堀内利恵	季刊中国現代小説 43		蒼蒼社	1998年4月

571.	北村	傷逝	傷逝	大石智良	季刊中国現代小説 43		蒼蒼社	1998年4月
572.	王蒙	無底先生	無底先生	中山文	火鍋子 36号	谷川毅	翠書房	1998年3月
573.	格非	迷い舟	迷舟	桑島道夫	現代中国短編集	藤井省三	平凡社	1998年3月
574.	韓少功	爸爸爸	爸爸爸	加藤三由紀	現代中国短編集		平凡社	1998年3月
575.	余華	アクシデント	偶然事件	飯塚容	現代中国短編集		平凡社	1998年3月
576.	張宇	關島	玩鳥	田畑佐和子	季刊中国現代小説 45		蒼蒼社	1998年10月
577.	徐坤	屁主 (へなぬし)	屁主	栗山千香子	季刊中国現代小説 45		蒼蒼社	1998年10月
578.	残雪	匿名者	匿名者	鷺巣益美	季刊中国現代小説 45		蒼蒼社	1998年10月
579.	朱文	もういいかい	可以開始了嗎	堀内利恵	季刊中国現代小説 45		蒼蒼社	1998年10月
580.	李馮	ドミノ・ガール	多米諾女孩	飯塚容	季刊中国現代小説 45		蒼蒼社	1998年10月
581.	謹容	人、老年に到る	人到老年	高梨公江			創英社	1998年12月
582.	畢淑敏	助太刀	捉刀	堀内利恵	季刊中国現代小説 45		蒼蒼社	1999年1月
583.	史鉄生	境界	辺縁	関根謙	季刊中国現代小説 45		蒼蒼社	1999年1月
584.	范小青	晩景	晩景	田畑佐和子	季刊中国現代小説 45		蒼蒼社	1999年1月
585.	汪曾祺	鑑賞家	鑑賞家	土屋肇枝	季刊中国現代小説 48		蒼蒼社	1999年7月
586.	史鉄生	第一人称	第一人称	久米井敦子	季刊中国現代小説 48		蒼蒼社	1999年7月
587.	馮驥才	市井の人々	市井人物	立松昇一	季刊中国現代小説 48		蒼蒼社	1999年7月
588.	林白	回廊の椅子	回廊之椅	伊禮智香子	季刊中国現代小説 48		蒼蒼社	1999年7月
589.	張煒	池	一潭清水	杉本達夫	季刊中国現代小説 49		蒼蒼社	1999年10月
590.	裘山山	お隣どうしじゃないですか	們是隣居	宮入いづみ	季刊中国現代小説 49		蒼蒼社	1999年10月
591.	王安憶	叔父さんの物語	叔叔的故事	田畑佐和子	季刊中国現代小説 49		蒼蒼社	1999年10月
592.	史鉄生	法学教授とその夫人	法学教授及其夫人	久米井敦子	季刊中国現代小説 50		蒼蒼社	2000年1月
593.	周而復	長城万里図 1 南京陥落・平和への祈り 上 1 南京陥落・平和への祈り 下 2 長江一正義と勇氣の大海へ 上 2 長江一正義と勇氣の大海へ 下	長城万里圖	日中 21世紀 翻訳会	長城万里図	竹内実	晃洋書房	1.2000年2月 2000年5月 2.2002年3月 2003年4月 3.2003年11月 2004年5月 4.2006年7月 2009年11月 5.2010年8月

		3 逆流と暗流 上 3 逆流と暗流 下 4 太平洋の夜明け 上 4 太平洋の夜明け 下 5 黎明 上 5 黎明 下 6 霧の重慶 上						2011年5月 6.2012年10月
594.	高曉声	陳奐生 戦術	陳奐生戦術	天野節	渡し舟—現代中国農民文学 2		図書出版	2000年3月
595.	高曉声	大百姓	種田大戸	天野節	渡し舟—現代中国農民文学 2		図書出版	2000年3月
596.	莫言	天上の花	天花乱墜	中山文・南條 竹則	別冊文藝春秋 2000 春 (231 号)		文藝春秋	2000年4月
597.	史鉄生	鐘聲	鐘声	栗山千香子	季刊中国現代小説 51		蒼蒼社	2000年4月
598.	汪曾祺	李三一〈故里雜記 (李三 榆の木 魚)〉より 榆の木 魚	李三一〈故里雜 記(李三 榆樹 魚)〉	市川宏	季刊中国現代小説 51、53、 56		蒼蒼社	2000年4月、 10月 2001年7月
599.	魯羊	青い模様のちりれ んげ	青花小匙	金子わこ	季刊中国現代小説 53		蒼蒼社	2000年10月
600.	史鉄生	赤いミニカー	玩具	横川澄枝	中国語	中国語友 の会	内山書店	2000年8月
601.	蘇童	火傷	燒傷	飯塚容	季刊中国現代小説 54		蒼蒼社	2001年1月
602.	朱文	やっぱり帰ろうよ	我們還是回家 吧	櫻庭ゆみ子	季刊中国現代小説 54		蒼蒼社	2001年1月
603.	彭見明	山の郵便配達	那山 那人 那 狗	大木康	山の郵便配達		集英社	2001年3月
604.	裘山山	寂しい高原	寂寞高原	宮入いずみ	季刊中国現代小説 55		蒼蒼社	2001年4月
605.	林希	滄浪の水澄めば	滄浪之水	井口晃	中国語	中国語友 の会	内山書店	2001年4、5月
606.	林希	さいはての二人	同是天涯	井口晃	中国語	中国語友	内山書店	2001年6月

						の会		
607.	遅子建	ナミダ	逝川	杉本達夫	季刊中国現代小説 56		蒼蒼社	2001年7月
608.	張抗抗	斜塔	斜厦	田畑佐和子	季刊中国現代小説 56		蒼蒼社	2001年7月
609.	残雪	弟	弟弟	近藤直子	現代中国女性文学傑作選 1	田畑佐和子・原善	鼎書房	2001年9月
	鬼子	古弄	山道での遭遇	鷺巣益美	季刊中国現代小説 57		蒼蒼社	2001年9月
610.	遅子建	原風景 上部 灰色の家で 起きた出来事 下部 百里四方	原始風景	土屋肇枝	季刊中国現代小説 57、58		蒼蒼社	2001年9月 2002年1月
611.	高纓	薛瑪姑娘	薛瑪姑娘	田中須磨子	薛瑪姑娘—草原に吹く風のように駆け抜けた恋	王敏	インターワーク出版	2002年1月
612.	遅子建	清水洗塵	年越し風呂	栗山千香子	季刊中国現代小説 58		蒼蒼社	2002年1月
613.	陳染	唇の中の陽光	嘴唇里的陽光	伊禮智香子	季刊中国現代小説 58		蒼蒼社	2002年1月
614.	趙本夫	狐仙女の婿えらび	狐仙擇偶記	永倉百合子	砕けた瓦		勉誠出版	2002年3月
615.	趙本夫	五元の得	多得了五元錢	永倉百合子	砕けた瓦		勉誠出版	2002年3月
616.	趙本夫	ロバを売る	賣驢	永倉百合子	砕けた瓦		勉誠出版	2002年3月
617.	阿来	アクトンパ	阿古頓巴	牧田英二	季刊中国現代小説 59		蒼蒼社	2002年4月
618.	劉震雲	温故一九四二	温故一九四二	神道美映子	藍・Blue6期	『藍・Blue』文学会	『藍・Blue』文学会	2002年4月
619.	鉄凝	赤い服の少女	沒有鈕扣的紅襯衫	池沢実芳	赤い服の少女		近代文芸社	2002年6月
620.	鉄凝	小酸棗	小酸棗	池沢実芳	赤い服の少女		近代文芸社	2002年6月
621.	鉄凝	葬式	喪事	池沢実芳	赤い服の少女		近代文芸社	2002年6月
622.	鉄凝	東山下の風景	東山下的風景	池沢実芳	赤い服の少女		近代文芸社	2002年6月
623.	鉄凝	ゆっくり帰ろう	漸漸歸去	池沢実芳	赤い服の少女		近代文芸社	2002年6月
624.	鉄凝	夜道	夜路	池沢実芳	赤い服の少女		近代文芸社	2002年6月
625.	喻金良	中国赫哲族の物語		高雲山、竹中良二		邢志强	日本僑報社	2002年6月
626.	孟志東	中国達斡爾族物語		珠榮嘎・竹中良二		邢志强	日本僑報社	2002年8月
627.	史鉄生	他者	別人	栗山千香子	季刊中国現代小説 61		蒼蒼社	2002年9月

628.	莫言	飛蝗	蝗虫奇談	吉田富夫	至福のとき—莫言中短編集		平凡社	2002年9月
629.	孟淑珍	中国鄂倫春族物語		高雲山・竹中良二		邢志強	日本僑報社	2002年9月
630.	趙永銑 他	中国蒙古族の物語	蒙古民間故事選	珠榮嘎・竹中良二		邢志強	日本僑報社	2002年11月
631.	扎西達娃 (ザンダワ)	冥	冥	牧田英二	季刊中国現代小説 62		蒼蒼社	2003年1月
632.	林白	瓶の中の水	瓶中之水	伊禮智香子	季刊中国現代小説 62		蒼蒼社	2003年1月
633.	莫言	愛情	愛情故事	吉田富夫	白い犬とブランコ—莫言自選短編集		日本放送出版協会	2003年10月
634.	莫言	涸れた河	枯河	吉田富夫	白い犬とブランコ—莫言自選短編集		日本放送出版協会	2003年10月
635.	莫言	奇遇	奇遇	吉田富夫	白い犬とブランコ—莫言自選短編集		日本放送出版協会	2003年10月
636.	莫言	奇人と女郎	神標	吉田富夫	白い犬とブランコ—莫言自選短編集		日本放送出版協会	2003年10月
637.	莫言	洪水	大水	吉田富夫	白い犬とブランコ—莫言自選短編集		日本放送出版協会	2003年10月
638.	莫言	白い犬とブランコ	白狗秋千架	吉田富夫	白い犬とブランコ—莫言自選短編集		日本放送出版協会	2003年10月
639.	莫言	戦争の記憶断片	凌乱戦争印象	吉田富夫	白い犬とブランコ—莫言自選短編集		日本放送出版協会	2003年10月
640.	莫言	竜巻	大風	吉田富夫	白い犬とブランコ—莫言自選短編集		日本放送出版協会	2003年10月
641.	莫言	蠅と歯	蒼蠅・門牙	吉田富夫	白い犬とブランコ—莫言自選短編集		日本放送出版協会	2003年10月
642.	莫言	初恋	初恋	吉田富夫	白い犬とブランコ—莫言自選短編集		日本放送出版協会	2003年10月
643.	莫言	秘剣	姑媽的宝刀	吉田富夫	白い犬とブランコ—莫言自選短編集		日本放送出版協会	2003年10月
644.	莫言	豚肉売りの娘	屠戶的女兒	吉田富夫	白い犬とブランコ—莫言自選短編集		日本放送出版協会	2003年10月
645.	莫言	夜の漁	夜漁	吉田富夫	白い犬とブランコ—莫言自選短編集		日本放送出版協会	2003年10月

646.	莫言	獵銃	老槍	吉田富夫	白い犬とブランコー莫言自選短編集		日本放送出版協会	2003年10月
647.	鉄凝	麦積み	麥楷塚	池沢実芳	棉積み		近代文芸社	2003年11月
648.	鉄凝	棉積み	棉花塚	池沢実芳	棉積み		近代文芸社	2003年11月
649.	莫言	赤い高粱	紅高粱家族	井口晃	岩波現代文庫		岩波書店	2003年12月
650.	池莉	ションヤンの酒家(みせ)	生活秀	市川宏 池上貞子 久米井敦子	小学館文庫		小学館	2004年3月
651.	孔捷生	黒白の道(上)、(下)	黒白之道	大石智良	季刊中国現代小説 67、68		蒼蒼社	2004年4月、7月
652.	賈平凹	太白山記(抄)	太白山記	塩旗伸一郎	同時代の中国文学 ミステリーインチャイナ	釜屋修	東方書店	2006年3月
653.	張煒	冬景色	冬景	田井みず	火鍋子 68号	谷川毅	翠書房	2006年10月
654.	路遥	姉	姐姐	安本実	路遥作品集		中国書店	2009年12月
655.	路遥	月下	月下	安本実	路遥作品集		中国書店	2009年12月
656.	路遥	困難な日々に在りて	在困難的日子里	安本実	路遥作品集		中国書店	2009年12月
657.	路遥	人生	人生	安本実	路遥作品集		中国書店	2009年12月
658.	路遥	痛苦	痛苦	安本実	路遥作品集		中国書店	2009年12月
659.	莫言	鉄の子	鉄孩兒	藤井省三	透明な人参：莫言珠玉集		朝日出版社	2013年2月